舅屋敷

――長野県塩尻市舅屋敷遺跡発掘調査報告書――

1982

長野県塩尻市教育委員会

比較文化論研究室

舅屋敷

——長野県塩尻市舅屋敷遺跡発掘調査報告書——

1982

長野県塩尻市教育委員会

序　文

舅屋敷遺跡は塩尻市大字片丘北熊井にあり、筑摩山地山麓の小舌状台地に位置し、以前より縄文時代前期の遺跡として知られていました。この度、山寺沢地区基盤整備工事に伴い遺跡が破壊されることになったため、工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は大久保知己先生を団長に、調査員には中信考古学会の先生方にお願いし、昭和56年５月～７月にかけて実施しました。この調査によって舅屋敷遺跡は縄文時代前期から平安時代にかけての大集落遺跡であることが確認されました。また出土した多量の土器、石器類は松本平南部地域の該期研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供したといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては、山寺沢土地改良事業共同施行体委員長小松一志氏をはじめとする多数の地元の方々の深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては、調査団長をはじめとして多数の方々の御尽力によるものであり、重ねて謝意を表するものであります。

昭和57年３月

塩尻市教育委員会
教育長　小　口　利　兵　衛

例　言

1　本書は塩尻市大字片丘北熊井山寺沢地区における、昭和56年度新農業（農村地域）構造改善事業に伴う舅屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、舅屋敷遺跡発掘調査団（団長　大久保知己氏）に委託し、現場での調査は昭和56年５月20日から７月５日まで行った。

3　遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和56年７月から昭和57年２月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。分担は次のとおり。

遺構…整理、トレース…込山、篠宮、山本、小林。拓本…調査員、調査補助員。
縄文土器…実測…島田、鳥羽、宮城。…トレース…小林。
土師器、須恵器、灰釉陶器…実測…篠宮、田中、直井。…トレース…直井。
鉄器…実測、トレース…直井。石器…実測…田中、永井、中野、宮城、小林。…トレース…小林。図版組み…大竹、込山、鳥羽、直井、山本、小林。（敬称略）

4　本書の編集は小林、直井が行い、大久保知己団長が校閲した。

5　炭化材、炭化種子の鑑定は県立大町高等学校教諭森　義直氏、石器の石材の鑑定は鳥羽嘉彦氏にお願いした。銘記して感謝申し上げたい。

6　調査に当り、山寺沢土地改良事業共同施行体委員長小松一志氏ならびに委員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

7　凡　例

焼　土　炭化物

なお遺物出土状態図中のドットは次のとおりである。

○土器　□一括土器　▲石鏃　●石匙　■石斧　▼石錐　×不定形石器　凹凹石　◓磨石　◆尖頭状石器（鉄器および特別な場合は、その都度注記してある。）

出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

9　表紙題字は平出遺跡考古博物館館長　花村　格氏による。

目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査の経過
第１節　調査に至るまでの経過 ……1
第２節　調査日誌 ……2
第Ⅱ章　遺跡の位置とその環境
第１節　遺跡の立地および自然環境 ……3
第２節　歴史的環境 ……7
第Ⅲ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要 ……10
第２節　遺構と遺物の分布 ……10
第３節　過去の調査の概要 ……17
第Ⅳ章　遺構と遺物
第１節　縄文時代
(1)第１号住居址 ……21
(2)第２号住居址 ……27
(3)第３号住居址 ……46
(4)第４号住居址 ……53
(5)第11号住居址 ……57
(6)第13号住居址 ……78
(7)小竪穴 ……83
(8)集　石 ……95
(9)土器集中地区および遺構外 ……96
第２節　平安時代
(1)第５号住居址 ……106
(2)第６号住居址 ……111
(3)第７号住居址 ……115
(4)第８号住居址 ……116
(5)第９号住居址 ……122

(6)第10号住居址 ……125
(7)第12号住居址 ……135
(8)平安時代住居址内出土石器 ……138
第Ⅴ章　調査のまとめ
第1節　縄文時代の遺構と遺物
(1)集　落 ……140
(2)土　器 ……142
(3)彩色土器 ……148
(4)石　器 ……148
(5)舅屋敷遺跡出土の石材 ……151
第2節　平安時代
(1)住　居 ……154
(2)火災住居検出の炭化材・炭化種子 ……157
(3)土　器 ……158
第Ⅵ　結　語 ……164

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

昭和56年度新農業（農村地域）構造改善事業は、塩尻市大字片丘北熊井山寺沢地区において基盤整備工事を実施することになった。この地区内には以前から縄文時代前期の集落址として知られている舅屋敷遺跡が存在しているため、工事施工前に発掘調査を行ない、記録保存することとなり、山寺沢土地改良事業共同施工体からの委託を受けて塩尻市教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施することになった。

発掘調査にあたっては舅屋敷遺跡発掘調査団を組織し、調査団長に大久保知己先生をお願いし、調査員には中信考古学会の諸先生方を、また調査補助員には信州大学考古学研究会の諸氏にお願いした。調査員、調査補助員の諸先生方にはそれぞれ本務の仕事及び他の調査等極めて多忙の中で発掘調査を実施し、しかも煩雑な整理、報告書作成と、大変御無理をお願いした。特に発掘中は梅雨時の長雨の中で御苦労を願い、整理においては厳寒時短時間のうちに諸資料の整理、図版作成、原稿執筆と御無理をお願いした。この御苦労に対して心から感謝申し上げる次第である。

また、山寺沢土地改良事業共同施工体委員長小松一志氏ならびに委員の方々、および地元の方々には調査期間中種々の御指導、御援助をいただき、発掘調査が無事終了することができましたことに対し、厚く感謝申し上げる次第である。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

団長：大久保知己

調査員、調査補助員：

三村　肇・山本紀之・直井雅尚・宮城孝之・小島秀典・深井幸人・大竹庄司・込山秀一奥山元彦・上野山恭和・山中悟・田中正治郎・松山浩・今井俊樹・石渡俊一・中山照久関武登・山田千津子・佐藤保久・永井ちひろ・山口秀和・篠宮正

高校生、一般：

小松彦門・小松晴美・小松吉算・小松一志・代田重竹・南沢利広・小松みよ子・南沢はつ子・南沢みや子・小松千鶴代・小松喜志子・南沢みい子・小松あさ江・丸山敬明・桜井義治・竹原学・上條謙治・百瀬敦・中野成治・鳥羽嘉彦・中野実佐雄・島田哲男・小柳みぎわ・

事務局：小口利兵衛（教育長）石原久男（総合文化センター所長）一ノ瀬政和（文化・教養担当主幹）塩原俊治（前社会教育課長）荻上純正（前社会教育課長補佐）小沢努（文化・教養担当副主幹）小林康男（平出遺跡考古博物館）

第2節　調査日誌

5月20日　現場に午前9時集合・調査団長挨拶・調査方法説明後、直ちに調査に入る。北側地区の遺構検出を行う。

5月21日～24日、調査地区内での遺構検出作業。

5月25日、第5号住居址の掘り下げ開始。5月26日、第5号・6号住居址の掘り下げ。5月27日、第5号・6号・7号・8号住居址の掘り下げおよび一部セクション図作成。5月28日、第5号・6号・7号住居址の床面精査。第8号住居址の掘り下げ。5月29日、第5号・6号・7号住居址の平面図作成。第8号住居址のセクション図作成。第9号住居址の掘り下げ開始。5月30日、第8号・9号・10号住居址の掘り下げ。5月31日、第8号・9号・10号および2号・4号住居址の掘り下げ。6月1日、第2号・4号・8号～12号住居址の掘り下げと平面図の作図。6月2日、第2号住居址の掘り下げおよび第8号・9号住居址の床面精査。6月3日、第2号・4号・10号住居址の掘り下げと9号住居址の平面図作成。6月4日、第1号住居址の検出、2号・4号・10号住居址の掘り下げ。6月5日、第2号・4号・10号住居址の図面取り。6月6日、第2号～4号・10・11号住居址の掘り下げ。6月8日、第2号住居址の精査、6月9日、第2号・10号住居址の精査、第1号小竪穴の作図。6月10日、第3号・10・11号住居址の掘り下げ。6月11日、第10・11号住居址の掘り下げ。6月14日、第3号・4号・10号・11号住居址の掘り下げと小竪穴の検出。6月16日、第3号・4号住居址の精査と小竪穴の掘り下げ。6月17日、第3号・4号住居址の平面図作成。第10号・11号住居址の掘り下げ。6月19日、第1号・10号・11号住居址の掘り下げ。6月20日、第10号・11号の作図、1号住居址の掘り下げ。6月21日、第1号・11号・13号住居址の掘り下げ。6月22日、第1号住居上面集石作図、11号住居址床面精査。6月24日、第1号・11号住居址の作図、小竪穴の掘り下げ。6月25日、第1号住居址床面検出、13号住居址の掘り下げ。6月26日、第1号住居址の床面精査、第13号住居址セクション図作成。6月27日、中央部集石の精査、小竪穴の掘り下げ。6月28日、博物館にて整理。6月29日、第13号住居址精査、作図。小竪穴のセクション図作成。6月30日、集石の平面図作成、小竪穴のセクション、平面図作成。7月1日、小竪穴の掘り下げと平面図作成。7月2日～3日、博物館で整理。7月4日、小竪穴の掘り下げ、精査、セクション図作成。7月5日、小竪穴の精査、平面図作成。

7月11日～2月、平出遺跡考古博物館にて出土遺物の洗浄、注記・復元作業を行う一方、実測図の整理、製図、遺物の実測、拓本を行う。また報告書の原稿執筆を行う。　（事務局）

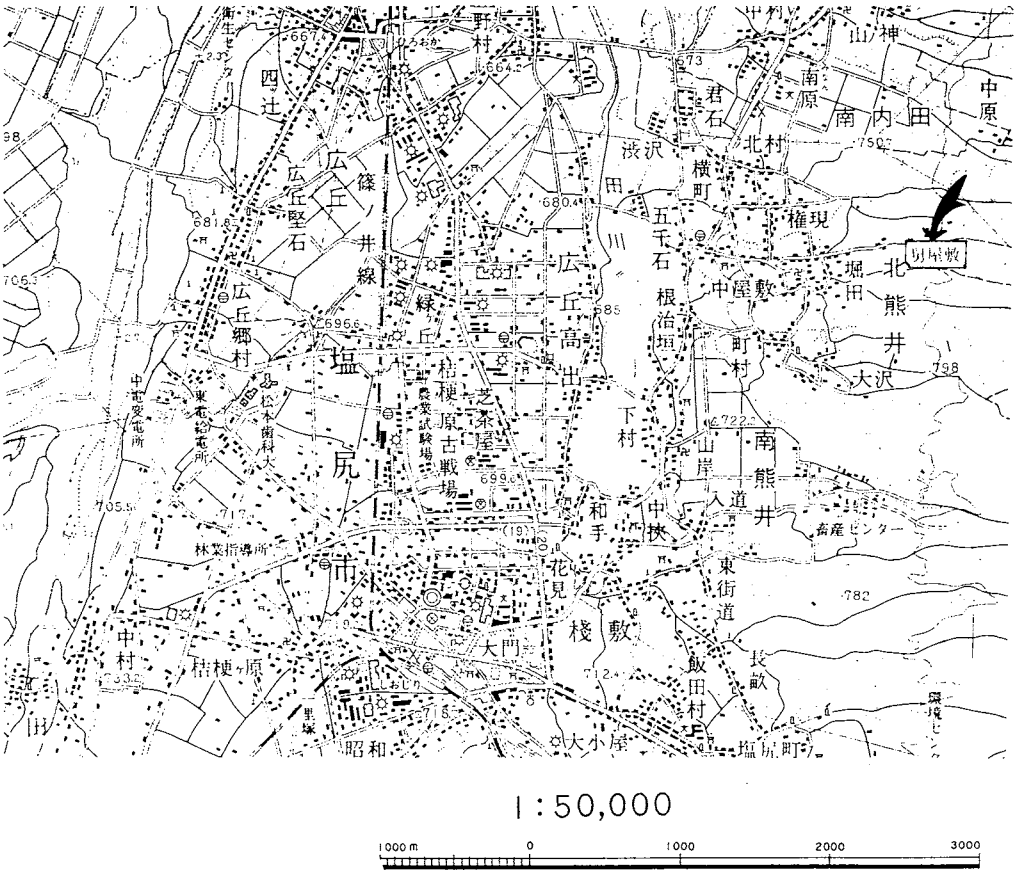
第II章　遺跡の位置とその環境

第１節　遺跡の立地および自然環境

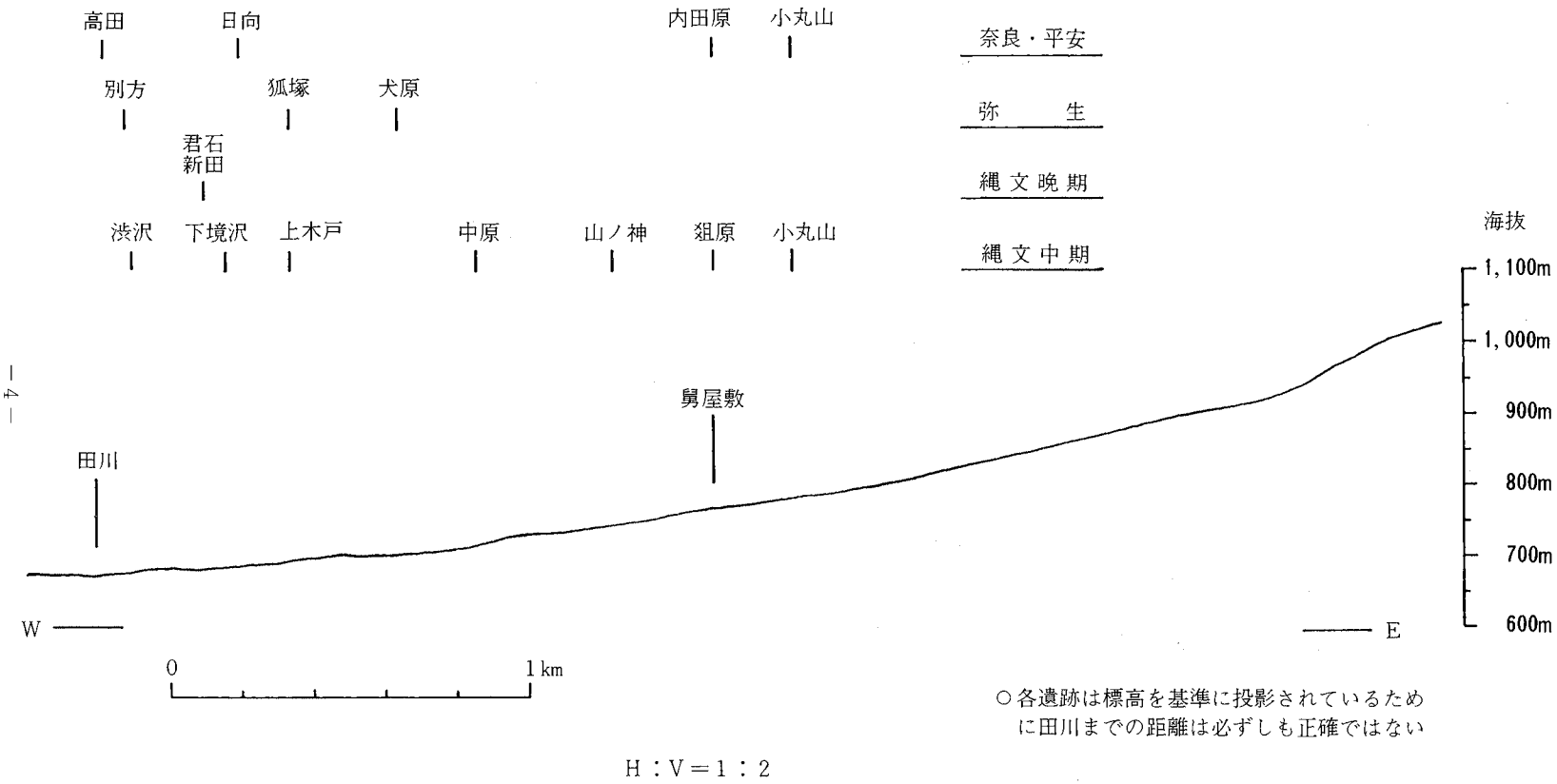
(1)　遺跡の位置と周辺の地形

舅屋敷遺跡は、松本平の東南部にあたる塩尻市の東方、片丘北熊井地区に位置する（第１図)。

高ボッチ（1665m)、鉢伏山（1928m)、美ケ原（2034m）などから構成される筑摩山地は、長野県のほぼ中央に南北に横たわり、幻年期の鈍頂地形を形成しているが、片丘地区は、この高ボッチ山麓から西方へ緩やかに傾斜して松本盆地に至るまでの地域で、その名の如くに片側に傾斜した丘陵の形態をとっている（第２図)。



第１図　舅屋敷遺跡位置図



○各遺跡は標高を基準に投影されているために田川までの距離は必ずしも正確ではない

H：V＝1：2

第２図　遺跡を通る東西地形断面および時代別近隣遺跡分布図

この丘陵は、山麓斜面に沿って発達する崖錐性のもので、塩尻市街地の東方、小坂田付近から松本市の寿付近まで、2km前後の幅を維持しながら約10kmにわたって延びているものである。

松本平の西方、山麓ぎわに発達する大小の旧期扇状地とともに一括されることがあるが、両者は、その成因の違いから構成物を異にし、また外観的にも勾配の緩急によって明瞭に区別されるため一括し難い。平均勾配は、約6°と急傾斜をなしているために、山麓から流下する群小の河川による開折は著しい。これらはすべて、塩尻峠にその源を発し、丘陵直下を北流する田川にほぼ直角に流れ込んでいる。

遺跡は、この丘陵のほぼ中高度にあたる海抜760m付近で、北熊井堀田の部落から山ぎわまで続く段々畑上に広がる。

北側を権現沢川に、南側を松葉沢川によってそれぞれ深く開折されているために、ちょうどテラス状になり、北アルプスの峻嶺の連なりと松本平が眼下に一望される。

(2) 遺跡周辺の地質 (第3図)

崖錐性の礫層は、フォッサ・マグナ西縁の断層崖に伴うもので、この付近の基盤である古生層および洪積世前期の塩嶺累層を不整合に被覆し、層厚は約30m、盆地へ向って緩傾斜をなしている。片丘礫層、赤木山礫層といった名称で呼ばれるもので、一般に両者は岩相的に類似しているために判別は難しく一括されている。角礫～亜角礫層で淘汰が悪く、基質は火山灰質の褐色シルトである。礫種は、古生層起源の硬砂岩、粘板岩、珪質頁岩、新第三系の砂岩、凝灰岩、貫入の閃緑岩類、第四系塩嶺累層の安山岩など多種に富み、これらは遺構の礫種や石器の母材に反映している。

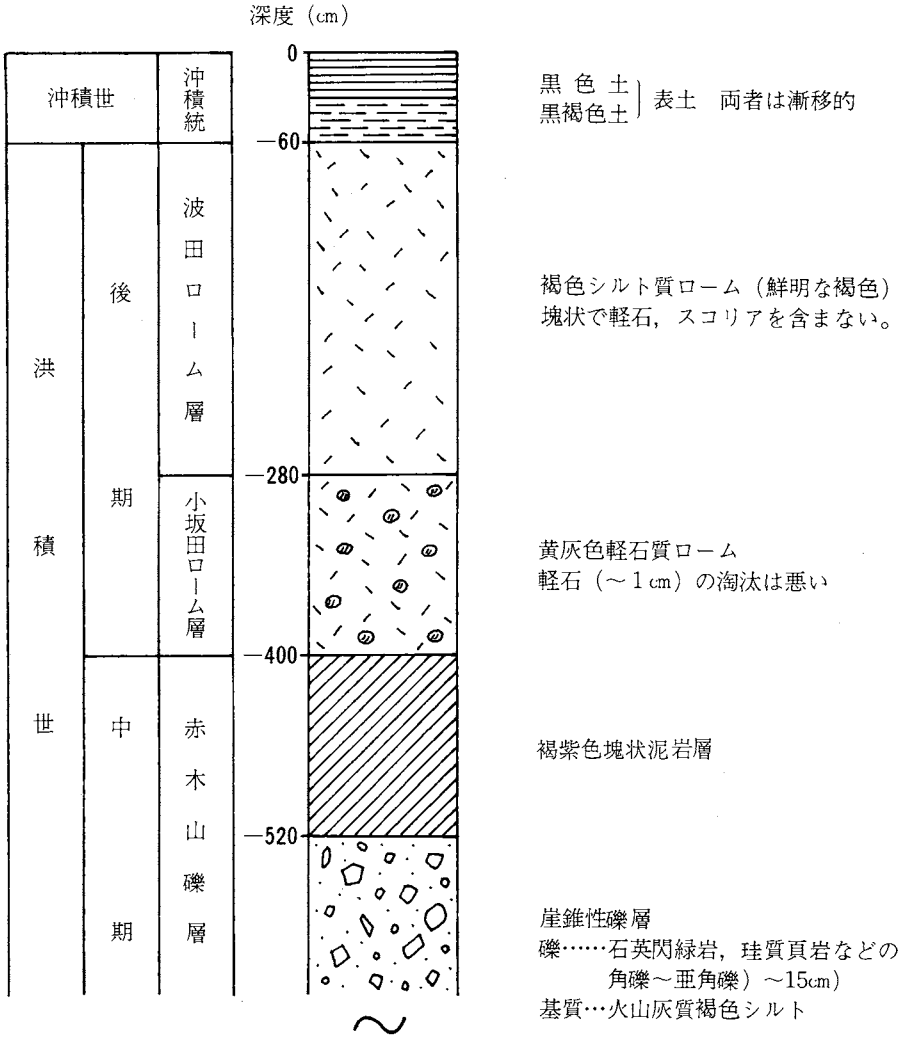
最上部には、厚さ120cmの褐紫色泥岩層が発達しており、これは薄層にもかかわらず分布が広いため鍵層とされている古土壌である。

ロームは340cmを測るが、2相に識別される。下層は黄灰色の軽石質ロームであり、これは軽石の淘汰が悪く、風成の小坂田ローム (Pm−IA) と考えられる。上層はシルト質の波田ロームで、鮮明な褐色を呈し、軽石、スコリアは含まない。概して軟質であるが、最下部は堅く締っており乾くと柱状にクラックする。

厚さ約60cmの表土は、黒色土と遺物包含層の黒褐色土に識別される。

付近は傾斜地であるため、特に土壌浸食、再堆積が著しく、遺跡の土壌もこういった背後の岩層の浸食、風化などによって堆積した崩積土を起源とする埴壌土であるが、周辺の地域に見られるロームブロックの散在が見られないところから大規模な層内変動は起っていないと推測される。

このため、縄文期の住居址は、ローム最上面の層位に、また土師期の住居址は、ローム面よりわずかに直上の黒褐色土層中に設けられているが、比較的安定な状態に保たれていた。



第3図　遺跡付近の層序断面図

(3) 環境

本遺跡の立地条件を検討していくうえで最も影響力のあったと考えられる要素は、その丘陵斜面に立地しているという条件と捉えてよいだろう。古代人の食糧や飲用水、あるいは天災などすべてにわたってそれは関与しており、生活範囲や生活条件を限定している。

第2図には、同丘陵上に分布する近隣遺跡群が、立地場所と同じ等高線上に投影されている。縄文中期の遺跡は、ほぼ均等に分散されているが、縄文晩期・弥生期になると低地に集中してお

り、土師期では再び高地に上がり、本遺跡や小丸山遺跡のように複合遺跡を形成するような現象が生じている。これは時代とともに遺跡が下り、土師期になると再び高地へ上がっていくという通例のパターンにほぼ合致しているが、おもしろいことにここでは縄文中期の遺跡が高度に関係なく分散しているという現象が見られ、単に高地のほうが住みやすいということには当地域があてはまらないことを示唆しているものと考えられる。高度に左右されない局地的な有利点という条件も無視できないが、しかしここで注意したいことは、とかくこのような地形環境においては、その後の河川の浸食や氾濫、あるいは地辷りや山崩れ、さらには人為的な改変により地表景観のみから当時の微地形や自然環境を推定することは容易ではないということである。例えば本遺跡の立地する台地のすぐ南側を流下する松葉沢川は、現在4～8mの比高で開折しているが、流速および急勾配に伴う出水などによる浸食を考慮すると、当時は現在よりも河床が相対的に高かったはずであり、絶えず洪水の危険にさらされていた。しかし反面、第3図の層序断面図から判読されるように、この付近は地下水位が低く、1#（径300mm）の揚水量は、桔梗ケ原高地と同様500m³/day以下の地域にあたり、従って湧水および揚水は自然的にも技術的にも期待しにくいため、遺跡の水理としては、やはりこの河川に多大に依存していたと考えて差しつかえない。

以上のことから古代においては、集落の立地条件として半永久的な好条件を選ばずに、その時々の河川の流路、あるいは山崩れなどの不安を考慮して、より住みやすい居住地を求めて、同丘陵内で廃絶、転居を繰り返していったのではないだろうか。

第6図の遺構全体図では、ほぼ中央に東西方向の低地帯が走り馬蹄形の等高線が描かれている。後章で述べるように、この低地帯には平安期の住居址が、北側の微高地には縄文期の住居址がそれぞれ分布している。都合によりこの低地帯では平安期の住居址面より下方へは掘り下げが行なわれず、残念ながら地表流水の形跡は確認できなかった。しかし、前述の河床との相対関係や覆土に縄文土器の包含が極めて僅少であったことなどを考慮すると、縄文期にはやはり河道、あるいは古河川の残留低湿地帯のような状態におかれていたと考えてよいだろう。

（鳥羽嘉彦）

第2節　歴史的環境

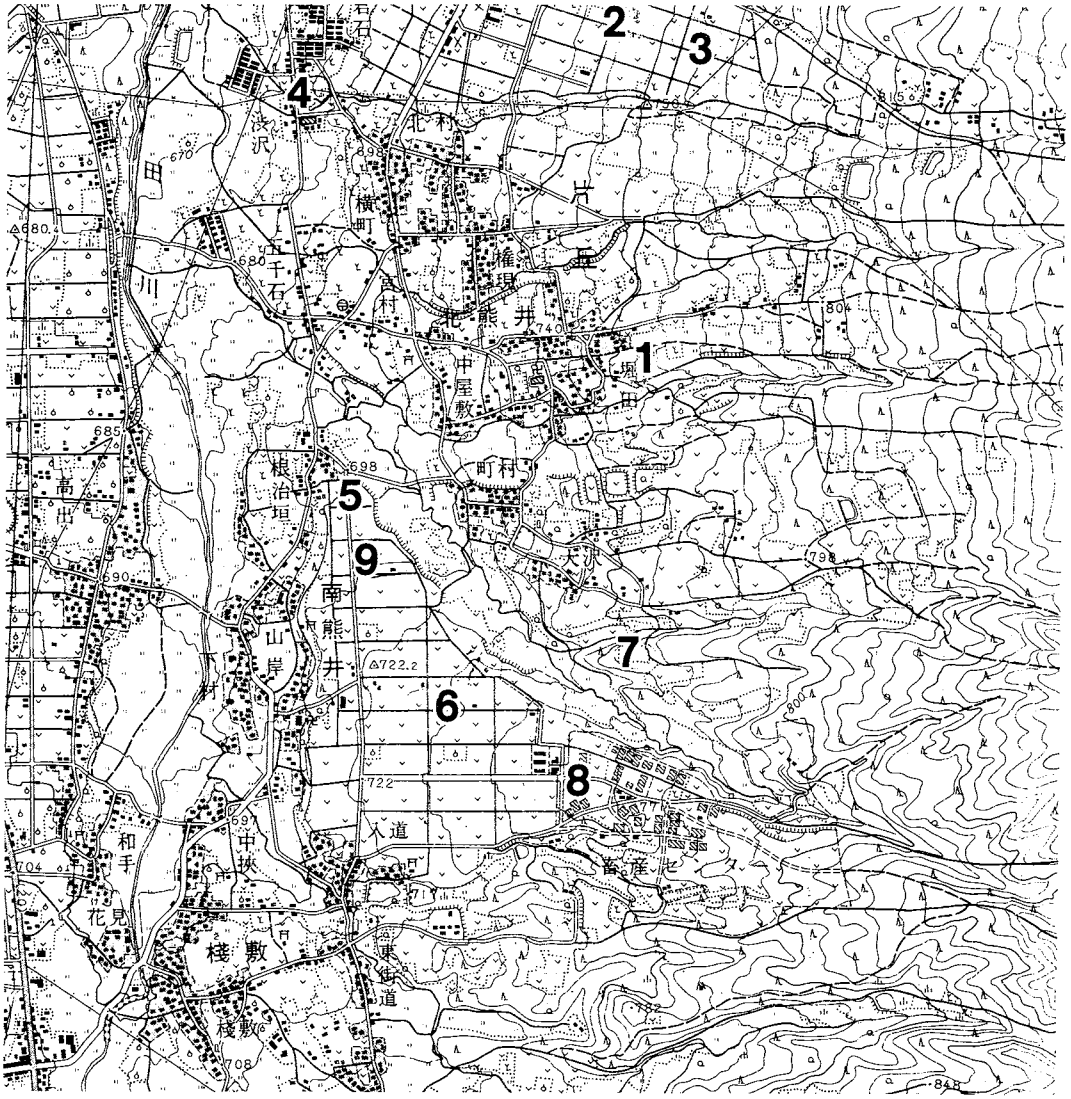
舅屋敷遺跡が所在する塩尻市片丘地区は、松本平の東南に位置し、多くの遺跡が知られている。（第4図）。

先土器時代：南内田小丸山遺跡で尖頭器が出ているのみで、他に遺物の出土はない。

縄文時代早期：南熊井竜神遺跡より押型文土器が採集されている。

縄文時代前期：北熊井女夫山ノ神遺跡が発掘調査されており、4軒の住居址が検出されている。他に南内田小丸山、北熊井境沢、富士塚立石、俎原、南熊井福木沢遺跡で遺物の散布がある。

縄文時代中期：中期になると遺跡数は増大する。現在までに南内田小丸山、北熊井中原、女夫



1、舅屋敷　2、内田原　3、小丸山　4、下境沢　5、上木戸
6、中原　7、狙原　8、山ノ神　9、犬原

第4図　舅屋敷遺跡分布図

山ノ神、俎原、南熊井山ノ神遺跡で発掘調査されている。小丸山遺跡は集落址の一部の調査であったが、中葉から後葉の住居址26軒と小竪穴を検出した。中原遺跡は中葉から後葉の住居址4軒を検出した。女夫山ノ神遺跡は住居址1軒、俎原遺跡では初頭から後葉に至る住居址8軒と小竪穴、土器だまりが検出された。山ノ神遺跡では住居址2軒が検出された。他に南内田大宮林、久保在家、鍛治屋敷・古屋敷・上手村・二本木・松座屋敷・中部南・北熊井下境沢・境沢・長者清水、鳶沢・立石・大沢・竹ノ花・菖蒲沢・牛売沢・南熊井上木戸、入道遺跡で遺物の散布がみられる。

縄文時代後期：後期になると遺跡数は激減する。南内田古屋敷・小丸山・中部南・北熊井渋沢・南熊井上木戸で遺物が散布する程度となる。

縄文時代晩期：北熊井下境沢・新田遺跡の僅が2遺跡で遺物が散布している。

弥生時代：中期の遺跡は余り多くないが後期になると遺跡数は増加する。しかし今までに発掘調査した例は僅か犬原遺跡の1例のみであり、後期の住居址が2軒検出されている。他に南内田久保在家、鍛治屋敷、北熊井下境沢、狐塚、渋沢、横町中原、女夫山ノ神、別方、南熊井上木戸、中挾遺跡で遺物が散布している。

古墳時代：古墳時代の遺跡は少ない。古墳は山伏塚古墳があるだけである。集落は北熊井狐塚、新田、南熊井上木戸遺跡のみである。

奈良・平安時代：平安時代になると「和名類聚鈔」により、筑摩郡吉田郷に含まれ遺跡数も増加する。奈良時代の遺跡は極めて少ない。今までに南内田内田原、小丸山、北熊井女夫山ノ神遺跡で発掘調査されている。内田原遺跡は集落の一部を調査しただけであるが住居址18軒、柱穴群が検出された。小丸山、女夫山ノ神遺跡は住居址1軒ずつが検出されている。他に、南内田矢口、久保在家、鍛治屋敷、別当原、二本木、松座屋敷、中部南、南原、桜林、北熊井今泉、中原、俎原、宮村、五千石、狐塚、下境沢、渋沢、で遺物が散布している。

中世以降：北熊井城址、中屋敷、竹原、南熊井城址で遺物が散布している。

このように縄文時代中期と平安時代に集中していることは特異なことであるが、塩尻市ひいては中部高地に通有の現象である。

（篠宮　正）

第Ⅲ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

今回の舅屋敷遺跡の調査は、発掘総面積3080m²に及び、東西に延びる細長い舌状台地の中央部を約40ｍ幅で南北に横断する形となった。（第５・６図）

この結果、竪穴住居址13軒、小竪穴42個、集石１ヶ所、土器集中箇所１ヶ所が検出された。またこれに伴う大量の土器・石器及び土製品・石製品・鉄製品が出土した。詳しい内訳は次の様である。

縄文時代の遺構・遺物は前期を主体とし、中期・後期の遺物の散布がみられた。検出された遺構は住居址６・小竪穴42・集石があり、全て前期に含まれるものであった。住居址は中葉の神ノ木式に比定される第２号住居址、有尾式の第１・11号住居址、後半諸磯ａ式の第４・13号住居址、諸磯ｂ式の第３号住居址の６軒で、台地の縁辺部周辺に展開しており、端部に近いものは一部が流失している。42個の小竪穴は、諸磯ｂ式及び諸磯ｃ式から十三菩提式期にわたると思われるものが主体となっており、調査区北西部と中央部東側に集中している。集石は調査区のほぼ中央にあり、わずかではあるが諸磯ａ式の土器を伴っていた。これら縄文前期の遺構に伴う遺物は、大量の土器及び石器があり、石器には石鏃・石匙・石錐・磨製石斧・尖頭状石器・磨石等、石製品に玦状耳飾・玉類が得られ、土製品に匙形土製品・土製円板がある。縄文時代中期では遺構は検出されなかったが、主として調査区内南側から少量の土器と石皿・打製石斧が出土した。縄文時代後期では、第10号住居址東方に土器集中箇所があり、後期前半の堀之内式を主体とした土器を出土している。

平安時代の遺構・遺物としては、11世紀代に比定される第６～10・12号住居址、11世紀後半から12世紀代と考えられる第５号住居址の計７軒の竪穴住居址、それらに伴う土器・鉄器とがある。住居址はすべて方形プランで、調査区の西側に中央部の低地から南半にかけて散在する。土器は土師器・須恵器・灰釉陶器があり、器種としては坏・皿・埦・甕・小形甕・四耳壺がみとめられ、鉄器には刀子・鏃・紡錘車・火打ち金具・釘等がある。

以上のように、舅屋敷遺跡は縄文時代前期と平安時代を中心とした集落址であることが判明し、今後の松本平における該期研究に貴重な一資料を提供することとなった。　（直井雅尚）

第２節　遺構と遺物の分布

(1)　表面採集の目的

従来行われている「遺跡」の認定方法は、古墳のように地上にその形を現わしているものを除けば、普通地表面に散布している遺物の有無によって行われている。そしてこのような方法で認

定された遺跡は、地表面に散布している遺物の種類から、それに関係した遺構や遺物が埋蔵されているのではないかと推定される。実際に、発掘調査によってもこの推定が全く間違っている場合は少なく、逆に、今までに行われた多数の発掘調査によって、その妥当性は裏付けられていると言ってよいであろう。

そこで我々は、この推定をもう一歩進めて、遺物の散布状態をさらに詳しく調査すれば、地下に埋蔵されている遺構の位置を、およそ推定することができるのではないかと考えた。

しかし、これには詳しい地表面の遺物調査を行った後に発掘によって事前に行った推定を検証される必要があった。

たまたま舅屋敷遺跡では、この調査による推定と発掘調査による検証が前後して行えるよい機会を得ることができた。

以下にその結果を述べていこう。

(2) 地形、地目と調査の方法

調査区域は、東西に走る舌状台地の中ほどの部分で、両側を農道で切られてはいるが、南北をほぼ完全に占る一枚の畑であ った。

この詳しい表面採集による調査と前後して、付近の畑の表面採集も行ったが、他地域の散布状態は、黒曜石の破片がわずかに得られる程度で、土器の散布はほとんどなく、当地の散布度の高さが確められている。

当初から、散布遺物によって縄文時代の遺跡であろうと思われたが、我々は、前項の目的を追求すべく、発掘予定区域のほぼ全面を精査した。１辺５ｍのグリットを、14（南北）×９（東西）の計126グリットを設定し、(但し、最北端の14列のＦ～Ｉ４つのグリットは５ｍ×３ｍである。）土器、石器及び黒曜石片の採集を行った。土器及び黒曜石片については、大破片も極めて小さい小破片も、１個として数え、ドットを落し、その集計を試みた。その結果は（第７～９図）の通りである。

当地は、一面に耕作され、農機具による攪乱は、ローム層以下に及んでいたが、全体的に耕作は斉一的に行われている。地形的には東から西へ傾斜しているが、畑をならしているため、表土の状態も東から西に厚くなっている。

(3) 調査の結果と考察（第７～９図）

1)全体的傾向

○縄文。グリット別で、０～76点というかなりの差がある。集中部をとりあげると

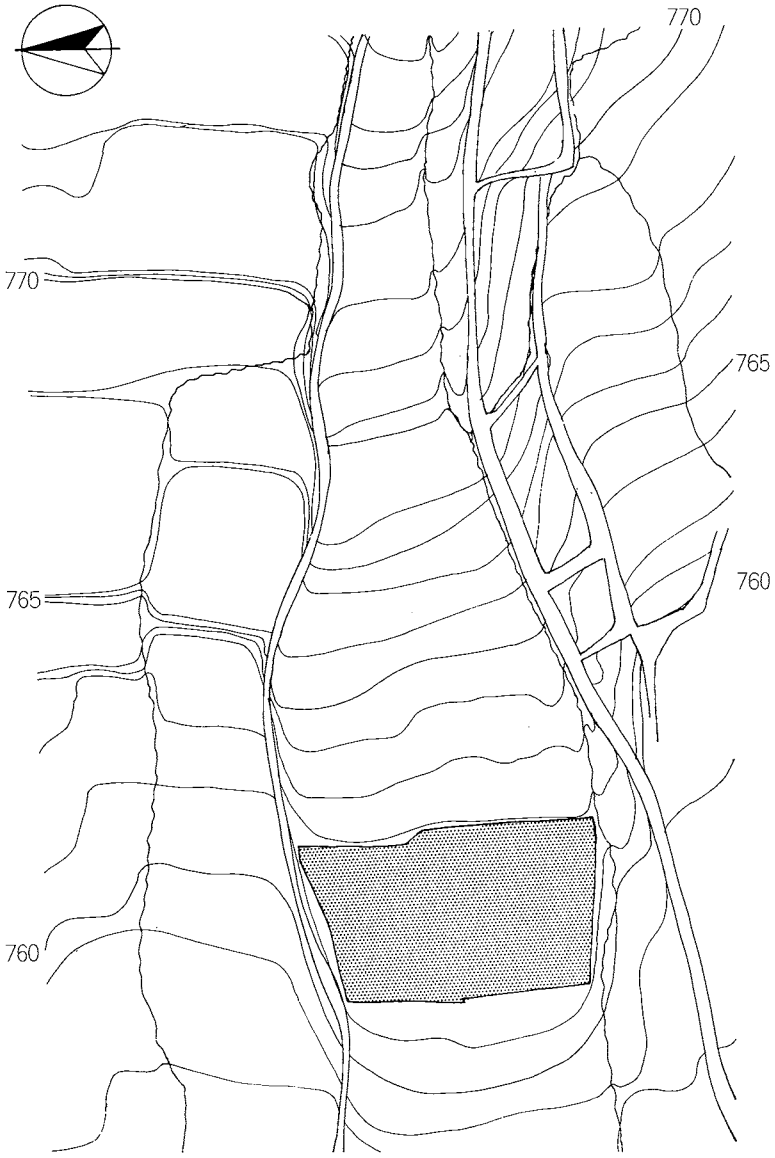
①北側の11～14列に多いことは、一見してわかる。

②Ｄ－５，６を中心とする部分

③西南隅のＦ，Ｇ，Ｈ，Ｉ－１，２の部分

の３ヵ所を把握できる。

○土師、須恵、灰釉。　これらは、平安時代の遺物としてまとめられ、点数が非常に少ない(最も



第５図　舅屋敷遺跡発掘調査地区図

多いグリットで合計13片）ので一括して取り扱い、全体的な傾向を見ると、南西部に多い。

①南端のE，G－１，２

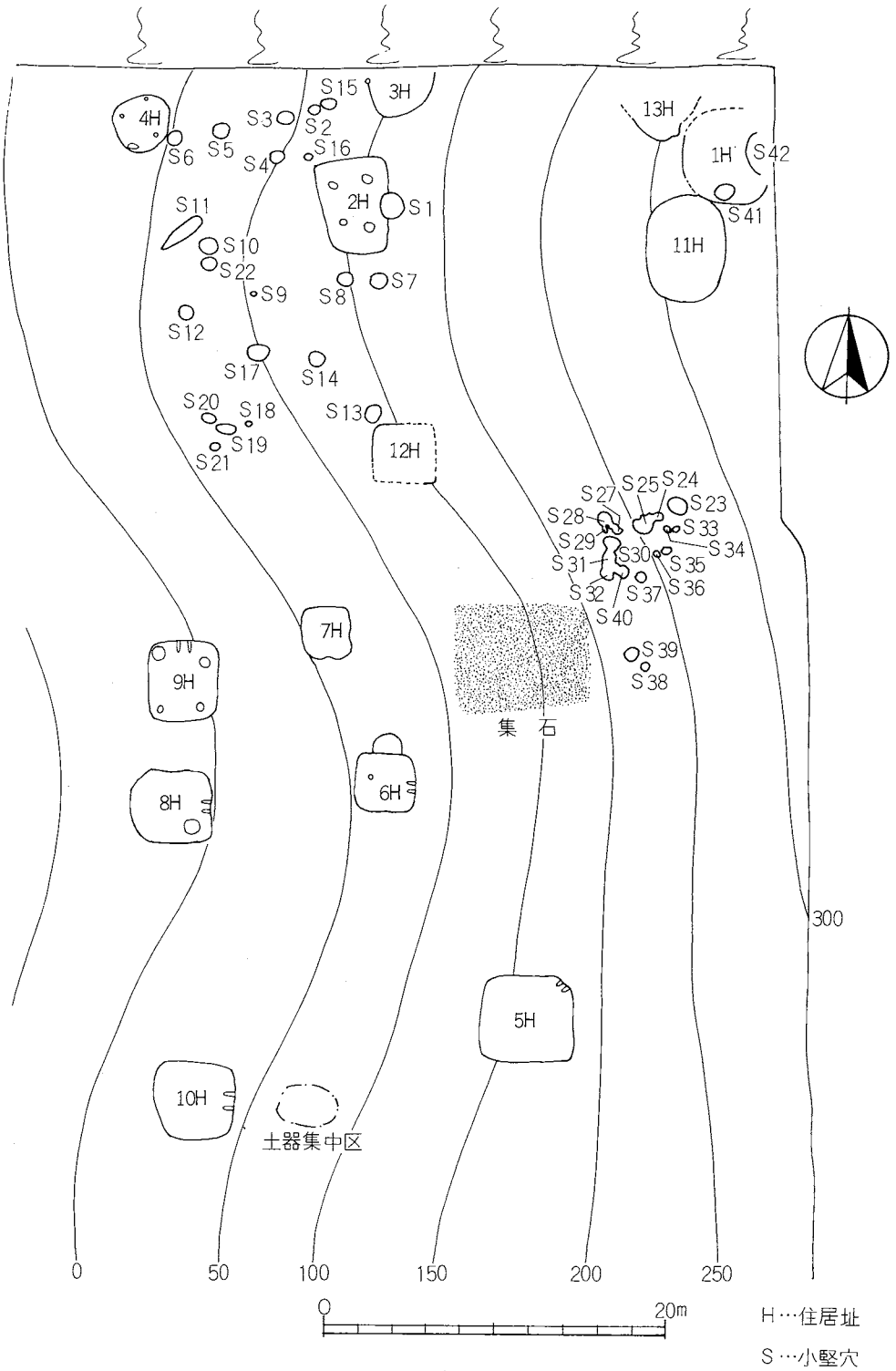
②やや中央よりのC～G－５，F－６

③西端のH，I－２～７

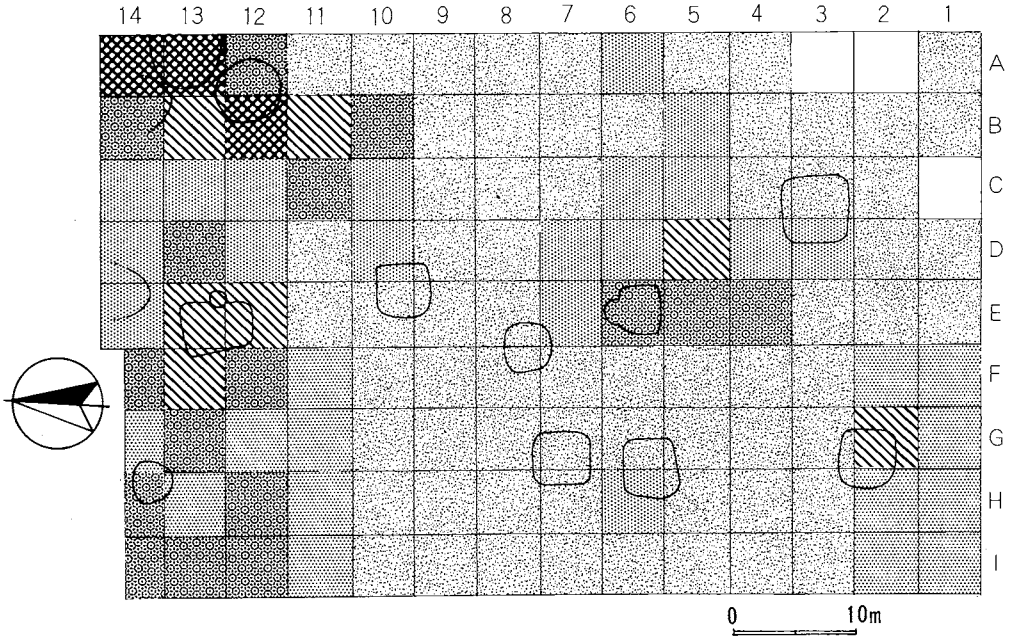
○黒曜石。全体的には、北半分に集中するが、

①北西部

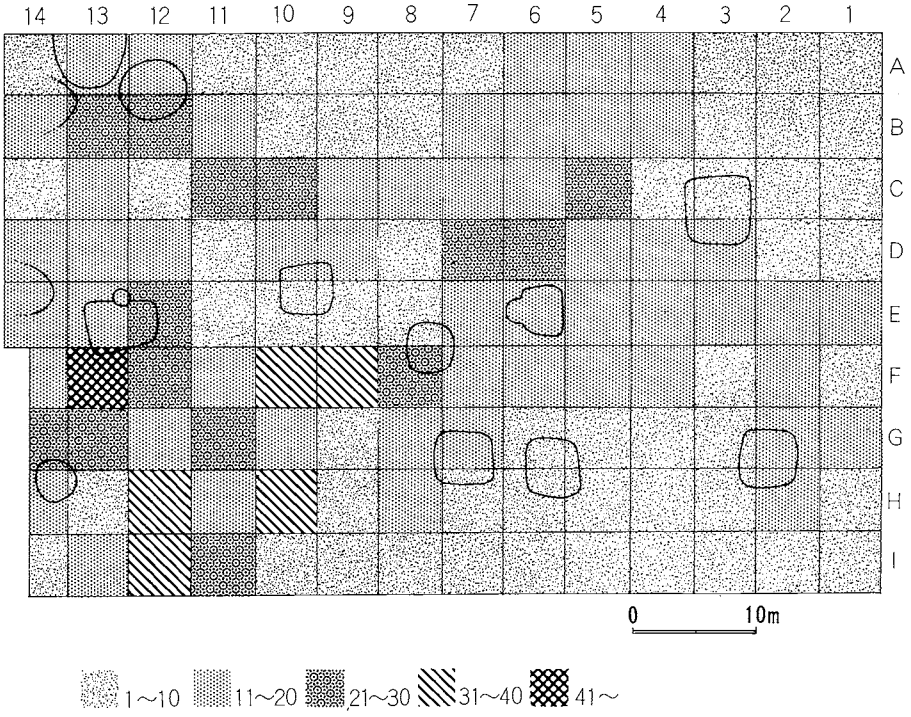
②北東隅の部分


4H
S6
S5
S3
S15
S2
S16
S4
3H
2H
S1
S11
S10
S22
S9
S8
S7
S12
S17
S14
S20
S18
S19
S21
S13
12H
13H
1H
S42
S41
11H
S27
S25
S24
S23
S28
S33
S29
S34
S31
S30
S35
S32
S37
S36
S40
S39
S38
集　石
7H
9H
6H
8H
5H
10H
土器集中区
300
0
50
100
150
200
250
0
20m
H…住居址
S…小堅穴

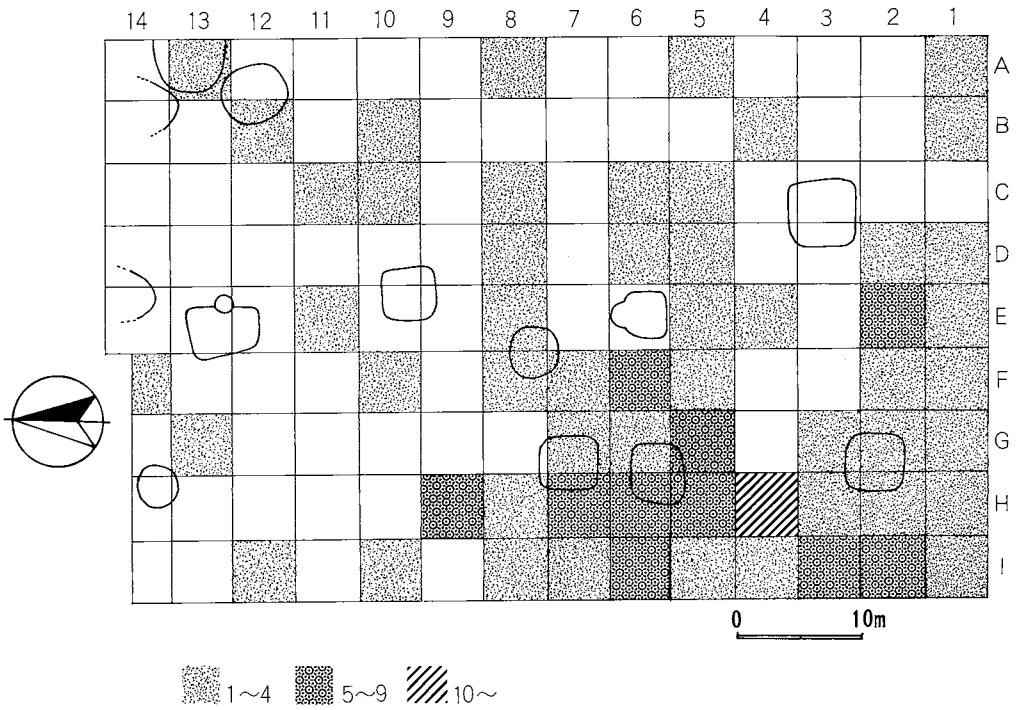
第6図　遺構全体図



第７図　表面採集　縄文土器分布図　S＝1 /600



第8図　表面採集　黒曜石片分布図　S＝1 /600



第９図　表面採集　土師器，須恵器，灰釉陶器分布図　Ｓ＝１/600

③中央よりやや西によったＤ－６

④南端の一角Ｇ－１

2)遺構との関係

○縄文・縄文時代の遺構のうち、住居址は６軒確認された。これらすべては、北端の12～14列に集中する。これは前述したｉの①に符合する。これについて詳述すれば、

◎Ｂ－12を中心とする部分

⬌11号住（この住居は土器が多量に出土した。）

◎Ａ－13、⬌１号住

◎Ａ－14，Ｂ－13，14 ⬌13号住

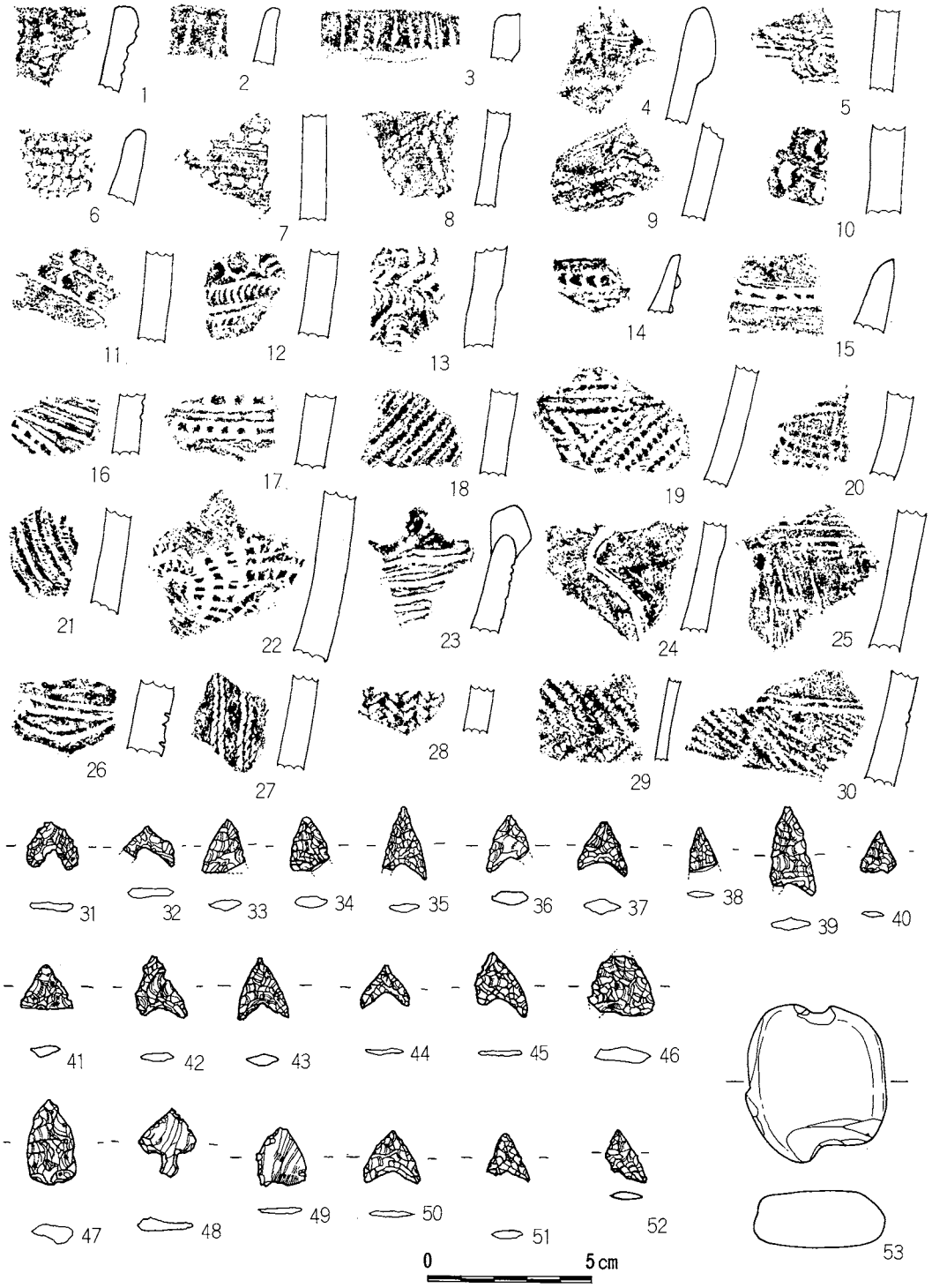
◎Ｅ－12，13，Ｆ－13 ⬌２号住（土器多量に出土）

○Ｇ－13，Ｈ－14 ⬌４号住

△３号住は土器の出土量も少なく、北半が流出しており、表土の状態も遺構を正確に反映せず、散布遺物との関連も薄いと考えられる。

以上のように全体としての傾向も合致し、その上、住居址との関連もかなり明確に把握できる。

黒曜石片でみても全体としての一致は良い。北西部に集中するのは、土器片と比べてもその破片は極めて小さく流されている可能性が考えられるであろう。



第10図　分布調査時表面採集遺物

しかしながら部分的に見ると、２つの問題点がある。

①発掘で確認されたＣ－８を中心とする集石部（ここでは前期の彩色土器が出土した。）及びＥ－２付近の性格不明の土器集中部において、表採ではそれを反映する結果が表われていないこと。これは、埋蔵されていた下部の土器量自体がそれほど多くなかったことが影響していると思われる。

② ①とは逆に、表採ではかなりの数を示したＤ－５を中心とする部分、及びＧ－２の部分には、それに対応する遺構が存在しないこと。後者については、黒曜石にもその傾向があるが、表採も、発掘も行われなかったＡ列以南の部分に縄文の遺構が存在した可能性は大である。前者についても、黒曜石が同傾向を示しており、発掘において確認はできなかったが、遺構が存在した可能性がある。

○平安。当期の住居は南半に７軒確認されている。表採の点数が非常に少ないため、速断はできないが、全体として、表採の結果はかなり裏付けられると言ってよいであろう。図で見るかぎり、住居址との関連は、８号址、９号址の対応が良い他は明確ではない。しかし、農機具がローム下まで攪乱し、畑の地ならしをしており、また流された可能性を考慮すると、驚くほど一致は良くなる。

3)表面採集について

縄文については、表採による点数と、埋蔵されている土器量の関係の高いことは今回の調査でも指摘できるが、平安時代など、かなり新しい時期の遺構において、当地では、ローム下までの攪乱のため、表面に表われたものと思われる。(そのため表採遺物数は少ない。)攪乱がなかったり、耕作も薄くしか行われていない遺跡では、表面に散布している遺物がほとんどなくとも、本遺跡の８号址、10号址のように多量の遺物を持つ遺構が存在する可能性があることに注意されたい。

今回の調査は１つの試論であったが、今後このような調査が数多く行われるならば、普遍的な傾向が明らかにされるであろう。　　（信州大学考古学研究会）

第３節　過去の調査の概要

中信地方における数すくない縄文前期相当の遺跡の中で、塩尻市北熊井の舅屋敷遺跡は、諸者間でかねてより注目され、その規模、物量共に屈指の存在として認められていた。そんなところから、松本深志高校地歴考古クラブは、松本博物館の援助を受けて、松本平の東南部に位置する塩尻市片丘地区の、縄文および弥生文化を、五ケ年計画により総合的に調査研究する目的をもって、去る昭和39年３月その手はじめの第１期調査として、舅屋敷遺跡の発掘調査を行っている。期間はまだ肌寒い３月15日より同19日までの５日間である。この短かい日時に明らかにされた遺物、遺構等の内容は、正式な発掘調査報告書としては世に出されなかったが、深志高校の機関誌であ

る「あぜみち(昭和39年刊第14号）に、その略報ともいうべき考古班の記録として「舅屋敷遺跡」が掲載されている。この資料によれば、検出された遺物、遺構等は、おおむね下記の如くである。

遺物　石器　石鏃75（内有柄８）、打製石斧1、磨製石斧11、石錐５、石匙20（横形大部分）、玦状耳飾４（滑石、ロウ石）、凹石12、磨石5、敲石５、以上の如くで石鏃、石匙、磨製石斧の出土が目立ち、前期特有の遺物である玦状耳飾が比較的多く発見され、又、凹石の多出した点は、当時の生活を知る上で注意される。

土器　この調査によって出土した土器は、前期土器形式のほとんどすべてが出土したといわれ、又、中期初頭の三角文の土器底部も出土した模様である。そしてこの概報によれば、時代的な土器型式名として、花積下層式、関山式、黒浜式、諸磯ａ、ｂ、ｃ式相当のものが出土したとされる。以上の他関西系土器群の出土も若干あり、時代的には北白川下層式相当と思われるものらしい。

その他の遺物としては、植物のドングリの実の炭化物が若干得られた模様である。

遺構　住居址　住居址としては１号から４号までの、竪穴式居址が検出されている。この内、１号住居址は、住居址の西側部分が一部未掘部分にかかっているため、完掘はされていないが、ほぼそのプランが明らかにされている。それによると円形を示すその規模は、径が約5.5mとなり、柱穴、炉跡、周溝、壁等が明確に検出され（柱穴より尖底土器が出土し）ており、調査者はこの住居址につき、次の如く意義づけている。「前略。この住居址は柱穴から尖底土器が発見されたことからほぼ木島式（花積下層式）と推定される。この木島式の住居が発見されたのは、松本平では初めてであり、いままでに前例のないもので、特筆すべきものである。」としている。２号より４号までの住居址は、詳述不明ながら、同一箇所に複合状態を示したもので、複雑な切合関係があり、址内諸施設遺構の所属も、いずれもものか明確ではない。又、その前後関係もはっきりしないが、２号、３号は木島式、関山式期との仮説もあり、４号はほぼ諸磯期の住居址と思われるとしている。

火所　この発掘においてあまり類例の知られない、「火所」遺構と思われるものが発見されたといわれる。関係文を抜書すると、「火所とは肉をあぶる為に用いられた遺構ではないかと思われ、地面に小竪穴を掘り、敷石を敷いて多くの石を積み上げ、その焼石の間に肉を挾み焼いて食べたのではないかと想像される。」とし、県内の僅かな事例があげられ、更に遺構の所在と規模にていて報じ、貴重な稀少資料と意義づけている。以上が過去における深志高校の、舅屋敷遺跡調査のあらましである。同遺跡については、以上の他、今回における調査以外に、発掘調査の経歴をもたない。

（大久保知巳）

第1表 表面採集遺物一覧表

遺物 / グリッド	縄文																	縄文計	平安			平安時代土器計	土器計	黒耀石	総計
	型式不明																								
	袖ノ木	有磯尾	諸磯B	諸磯b	黒浜	北白川	縄文a	撚糸文a′	沈線文b	半載竹管押引c	半載竹管刺突d	条痕文e	浮線文f	絡縄体圧痕文g	三角陰刻文h	櫛状工具刺突i	無文	不明		土師器	須恵器	灰釉陶器			
A－1																	1		1	1			12	2	1	3
2																			0				0	0	5	5
3																			0				0	0	9	9
4							1	1	3								2		7				0	7	16	23
5				1					2								2		5	1			1	6	20	26
6									4								8		12				0	12	12	24
7																	2		2				0	2	10	12
8							1				1						2		4	1			1	5	2	7
9									2							1	3		6				0	6	1	7
10							3	1									5		9				0	9	1	10
11	1		1				2										5		9				0	9	5	14
12		1		1			15	1	3	1							8		30				0	30	11	41
13		2	3	1			21		9		(a＋d1)						19		56	2			2	58	16	74
14			6				10		9	2	1						13		41				0	41	17	58
B－1							1												1	1			1	2	6	8
2									1								1	1	3				0	3	8	12
3									2								3		5				0	5	9	14
4		1																	1	2			2	3	15	18
5						1	2		3	1							10		17				0	17	12	29
6											(棒状工具刺突1)						2		3				0	3	11	14
7									1								1		2				0	2	17	19
8							1										2		3				0	3	2	5
9									1		(棒状工具刺突1)						4		6				0	6	6	12
10							4	1	6				1			1	14		28	1			1	29	2	31
11							17		2								16		35				0	35	16	51
12		2					33		1		1	(b＋i1)	(f＋i1)			1	36		76	1			1	77	23	100
13		1		1			16		3		1						18		40				0	40	24	64
14							7		2		1						12		22				0	22	13	35
C－1																			0				0	0	5	5
2							1		1								5		7				0	7	8	15
3																	2		2				0	2	2	4
4							1		1								5		7				0	7	10	17
5									7	1							6		14	4			4	18	23	41
6									3	1	(棒状工具刺突1)						6		11	1			1	12	14	26
7				1			2		2								4		9				0	9	14	23
8							2	1									2		5	1			1	6	17	23
9							4		1								3	1	9				0	9	15	24
10							1				1	1					8		12	1			1	13	22	35
11			1				8		4								10		22	1			1	23	21	44
12							8										7		15				0	15	10	25
13		1		1			4		3		1						10		20				0	20	18	38
14							4										7	1	12				0	12	8	20
D－1																	7	2	9	2			2	11	7	18
2											(c＋i1)								1	1			1	2	6	8
3							1		1								8	1	11				0	11	11	22
4							1		2								9		12				0	12	12	24
5		1					2		9								28		40	2			2	42	17	59
6									5								12	1	18	2			2	20	28	48
7									1								5	5	11				0	11	23	34
8							1		3	1							4		9	1			1	10	7	17
9							3		1								2		6				0	6	11	17
10							4		2						1		5		12				0	12	16	28
11							4		1								4		9				0	9	5	14
12				1			5		1			1	2				9		19				0	19	14	33
13	1	1		1			7										13		23				0	23	11	34
14							4		1								7		12				0	12	10	31

E－1							1		3								3		7	1			1	8	14	22
2							1		1								7		9	7			7	16	14	30
3							1										9		10				0	10	16	26
4							3		2								15		21	1			1	22	17	39
5							2		3	1		1					19		26	1			1	27	12	30
6							3		3								15		21				0	21	13	34
7							1		2			1	1				9		14				0	14	16	30
8							2										2		4	1			1	5	4	0
9							1						1				1		3				0	3	10	13
10									1								5		6				0	6	6	12
11		1					4										1		6	1			1	7	7	14
12							14	3									18	1	36				0	36	22	58
13	2	3	1				17		1			1					13		38				0	38	13	51
14	1	1					5	1	1								8		17				0	17	13	30
F－1							1		3								15		19	4			4	23	8	31
2							2		2			(棒状工具刺突1)					12		17	3			3	20	18	38
3							2										7		9				0	9	8	17
4							1		1								7		9				0	9	12	21
5									1								8		9	2	2		4	13	12	25
6									1								2		3	3	2	1	6	19	11	30
7		1							1								6		8	1			1	9	20	29
8							1										1		2	1			1	3	24	27
9			1				3										2		6				0	6	33	39
10							1										2		3		1		1	4	33	37
11							2		2	1							11		16				0	16	19	35
12							7	2		1							16		26				0	26	24	50
13			2				11	1	2	1							15		32				0	32	47	79
14		1					5		2		2 (把手1)						15		26	1			1	27	14	41
G－1							1		3								16		20	3			3	23	20	43
2							1		5		1 (a+b1)						26	1	35	3			3	38	15	53
3							1						1				6		8	1			1	9	4	13
4							1										1		2				0	2	5	7
5									1			(b+i1)					2		4	4	2		6	10	5	15
6																	2		2	1			1	3	5	8
7									1			(b+f1)					2		4	3			3	7	11	18
8							1										1		2				0	2	16	28
9				1			1										5		7				0	7	9	16
10			1				1		1								6		9				0	9	20	29
11							3		1								12		16				0	16	27	43
12							6		2	1	1 (棒状工具刺突1)						9		20				0	20	14	34
13							7		1			(a+b1)					12	1	22	1			1	23	28	51
14							4		2		1						9		16				0	16	23	39
H－1				2			1		3								14		20	1			1	21	4	26
2									3	1							13		17	1			1	18	14	32
3									1								1		2	3			3	5	10	15
4																	6		6	8	3	2	13	19	4	23
5									1			1					2		4	5			5	9	2	11
6									4								11		15	5	2		7	22	4	26
7																	2	1	3	9			9	12	4	16
8									2								4		6	1			1	7	11	18
9							2		1								3		6		3	2	5	11	9	20
10							2					(棒状工具刺突1)					7		10				0	10	34	44
11							3					(a+b1)					11		15				0	15	20	35
12							8		4								17		29				0	29	32	61
13		1					8		2			(a+i1)					6		18				0	18	10	28
14	1	2				1	7		1			(a+f1)(c+i1)(f+i1)					8		23				0	23	18	41
I－1			1				3		4								11		19	1			1	20	6	26
2									4			1					10		15	4		1	5	20	6	26
3									5								5		10	5		1	6	16	3	19
4																	4		4	3			3	7	4	11
5																	4	1	5	4			4	9	3	12
6																	6		6	6		1	7	13	9	22
7																	6		7	2			2	9	3	12
8									2			(a+c1)					6		8		1		1	9	8	17
9					1		1		1										3				0	3	10	13
10							2										3		5	1			1	6	10	16
11		1					6	2	2			(a+i1)		1			4		17				0	17	24	41
12					1		8					(a+b2)					19		30	2			2	32	33	65
13			1				9		6								13	1	30				0	30	16	46
14							4		1								17	1	23				0	23	8	31
	6	21	18	12	3	1	202	14	95	13	12	7	6	1	1	2	954	42	1,687	136	16	8	160	1,847	1,662	3,509

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代

(1)　第１号住居址

調査の経過　本址は調査区北東端、第11号住居址の北、第13号住居址の南東に位置し標高は最も高い。調査区北東端は分布調査においても縄文前期の遺物が集中し、住居址の存在が予想された。検出において北側は攪乱のため遺物を多量に含む黒色土があり明確ではなく、東側は土手のため完掘できなかったが、西側・南側に褐色土の落ち込みが確認され住居址の存在が明らかになった。まず、西側・南側から検出を始め、北東部にあった集石を残して床面検出を行なった。

集石は出土状態が東から西へゆるやかな傾斜をなしていることから、東からの流れ込みによるものと考えられる（第11図）。

位置関係については、第11号住居址とはわずかに壁が確認され重複はみられなかった。しかし、第13号住居址とは南西のコーナーで明確な重複がみられた。なお隣接する３つの住居址１号・11号・13号の新旧関係は、１・11号→13号であった。

遺構（第11図）　プランは北側の⅔以上および東側がはっきりしないが、西壁・南壁より隅丸の不整方形であり、東南のコーナーが確認されているので大きさは５×５ｍ程度のものであると考えられる。壁については、ほぼ垂直に掘り込まれており明確なものは南壁・西壁および北壁の一部にみられる。

床はロームを掘り込んでおり、ほぼ水平だが中央部は若干くぼみ、南西部はやや高くなっている。ほとんどが軟弱な床だが、南壁から１ｍの範囲および中央やや北の110×80cmの部分は、よく踏み固められた床がある。

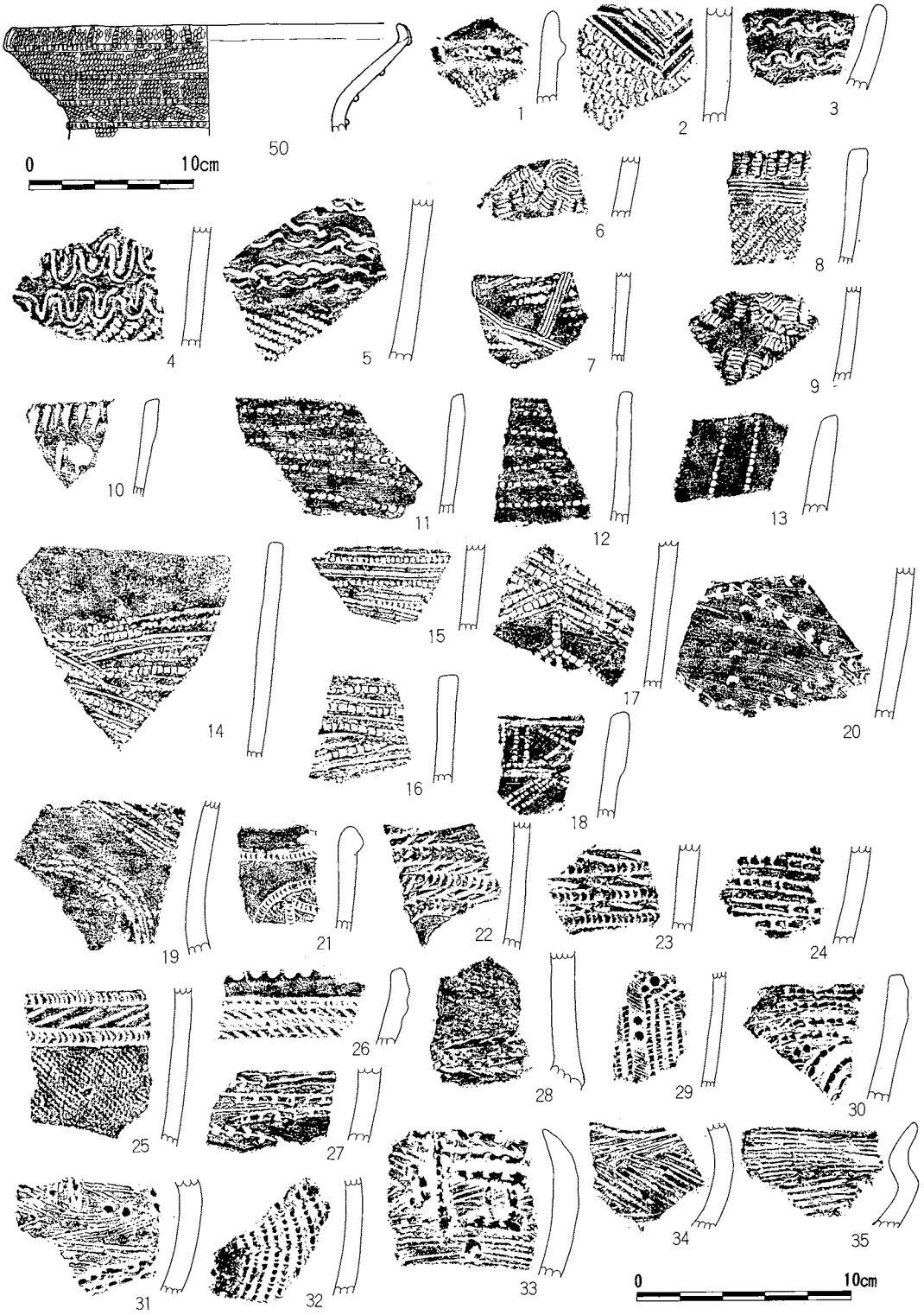
焼土は北壁より東と西にわずかにみられるがいずれも黒色土の中に焼土が少し混入しているにすぎず炉とは考えられない。ピットについては、P_1～P_9まであるが主柱穴ははっきりしない。なおP_8は攪乱によるもので、わずかに遺物が混入していた。

また、遺物についてはP_2付近で玦状耳飾１点（第14図）が発見された。その他、石鏃・石錐・石匙、打製石斧、磨石・凹石など石器が多いのに比して一括土器は全くなかった。土器には流れ込みによるものが多く時期決定は困難であったが、本址は有尾式期のものと考えられる。

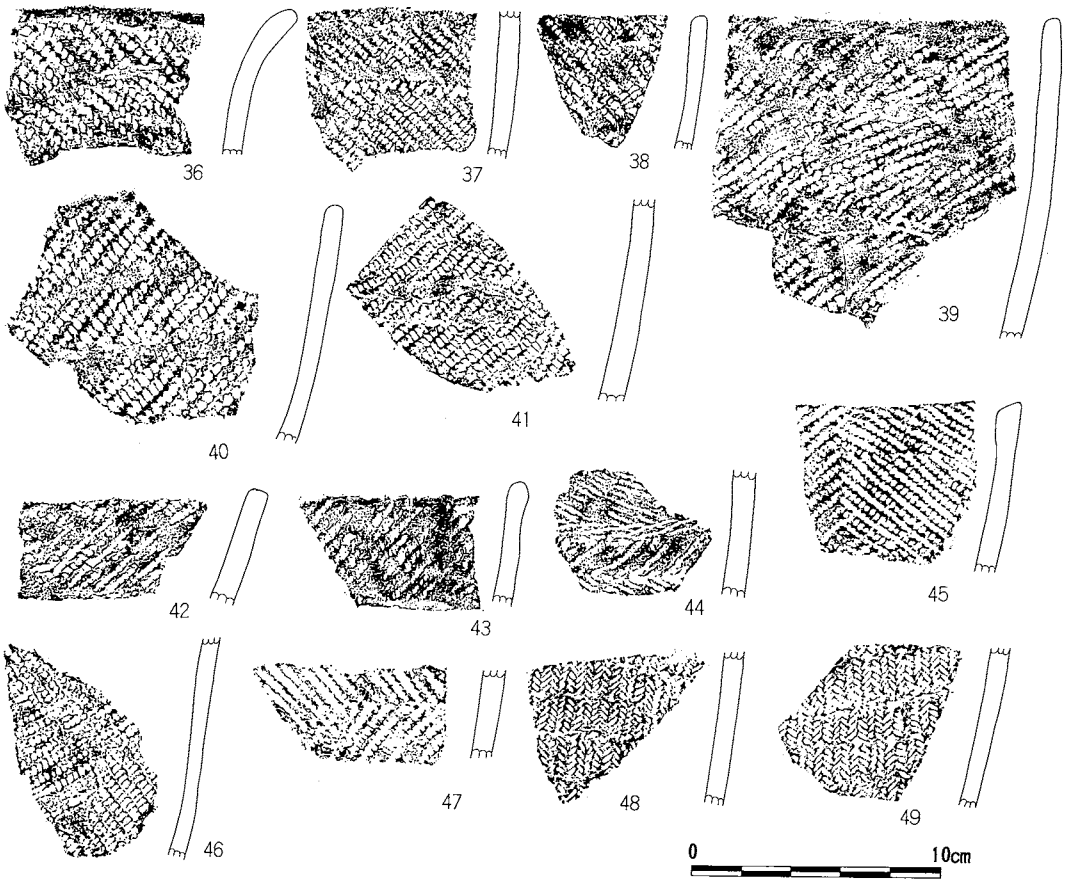
第14号小竪穴は南壁際中央に垂直に掘り込まれており、さらにその中央に直径20cmの落ち込みがみられる。底は水平で遺物が多数出土しているが一括土器はない。第１号住居との新旧関係は遺物から判断して、小竪穴が新しいと考えられる。　（大竹庄司）

遺物　土器（第12、13図）本址は掘り込みもはっきりせず、不明瞭な住居址であったが、覆土中から多くの土器片が出土した。しかし器形をうかがうことのできるものはなく、小片がそ

第11図　第１号住居址



第12図　第１号住居址出土土器



第13図　第１号住居址出土土器

の大半を占めている。

１～５は器壁に繊維を含む土器である。１は山形口縁部の破片で、口縁下に降帯を貼付し、以下に縄文を施文する。花積下層式に属するものであろう。２は平行沈線文を施した関山式土器、３～５はコンパス文と縄文とによって構成された黒浜式土器である。２は赤褐色を、３～６は黒褐色を呈し、焼成は良い。

６～10は櫛状工具による刺突文および同一工具による条線文、円形文を施すもので神ノ木式にあたる。一般に薄手で焼成は良い。色調は茶褐色のものが大半である。11～19は櫛歯状工具による列点状刺突文を施文した土器で、11、12は口辺に横に、13は縦に施文されている。14は口辺に無文部を置いて列点状刺突文を菱形に施文するもので、16～18も菱形をモチーフとした文様によって構成されている。19は列点状刺突文が円形、菱形に組み合わされて施されるものである。14～17、19は平行沈線文を施文しその中に刺突文が加えられており、11～13、18は刺突文のみによ

って文様を構成している。20は竹管による刺突文で菱形を描くもので、黒浜式の影響がみとめられるものである。この11～20は有尾式に相当するものである。

21は爪形文で木ノ葉状区画を行ない、磨消縄文を併用する。22～27は爪形文を主体とし、28は浮線文土器である。ともに暗褐色を呈し、焼成は良い。21は諸磯ａ式に、22～28は諸磯ｂ式に比定される。

29～32は結節状浮線文を中心に、29、31はボタン状突起を貼付する。33はボタン状突起に紐状突起を併用し、地文に綾杉状沈線文を有する。34、35は沈線文土器で、34は綾杉状沈線を、35は平行沈線文を施文する。35は口辺部で強くくびれる小形深鉢形土器の形態を呈する。これらは諸磯ｃ式に属する。

50は口径25cm、頸部でくびれ、口辺にかけて大きく開き、口唇部でやや内屈する形状を示す。縄文ＬＲを地文に、口縁部には縦に、更に頸部にかけて４条の粘土紐を貼付し、その上面に篦状工具による刻みを施す。胎土には長石、石英、雲母粒を多く含む。色調は茶褐色で焼成は良い。文様構成、胎土等に関西系土器の影響が認められる。

36～49は縄文施文の土器である。36～38はＲＬ、39～43はＬＲ、44～47はＲＬ＋ＬＲの羽状縄文、48、49は束の縄文を施文したものである。大半は黒浜式ないし有尾式に伴うものと思われるが、48、49は神ノ木式に伴出するものであろう。

石器（第14図）　本址出土の石器は石鏃16、尖頭状石器１、石匙４、石錐５、スクレイパー２、玦状耳飾２、打製石斧２、磨石３の計35点が得られている。

石鏃は16点中、完形７、欠損品９点で、底辺への抉り込みの深い１～５、浅い６～９、わずかに抉り込みの痕跡がある10～14の各形状を呈する。１・６のように脚部が円形に張り出す特異な形態を示すものもある。作りは全般的に精巧、鋭利である。

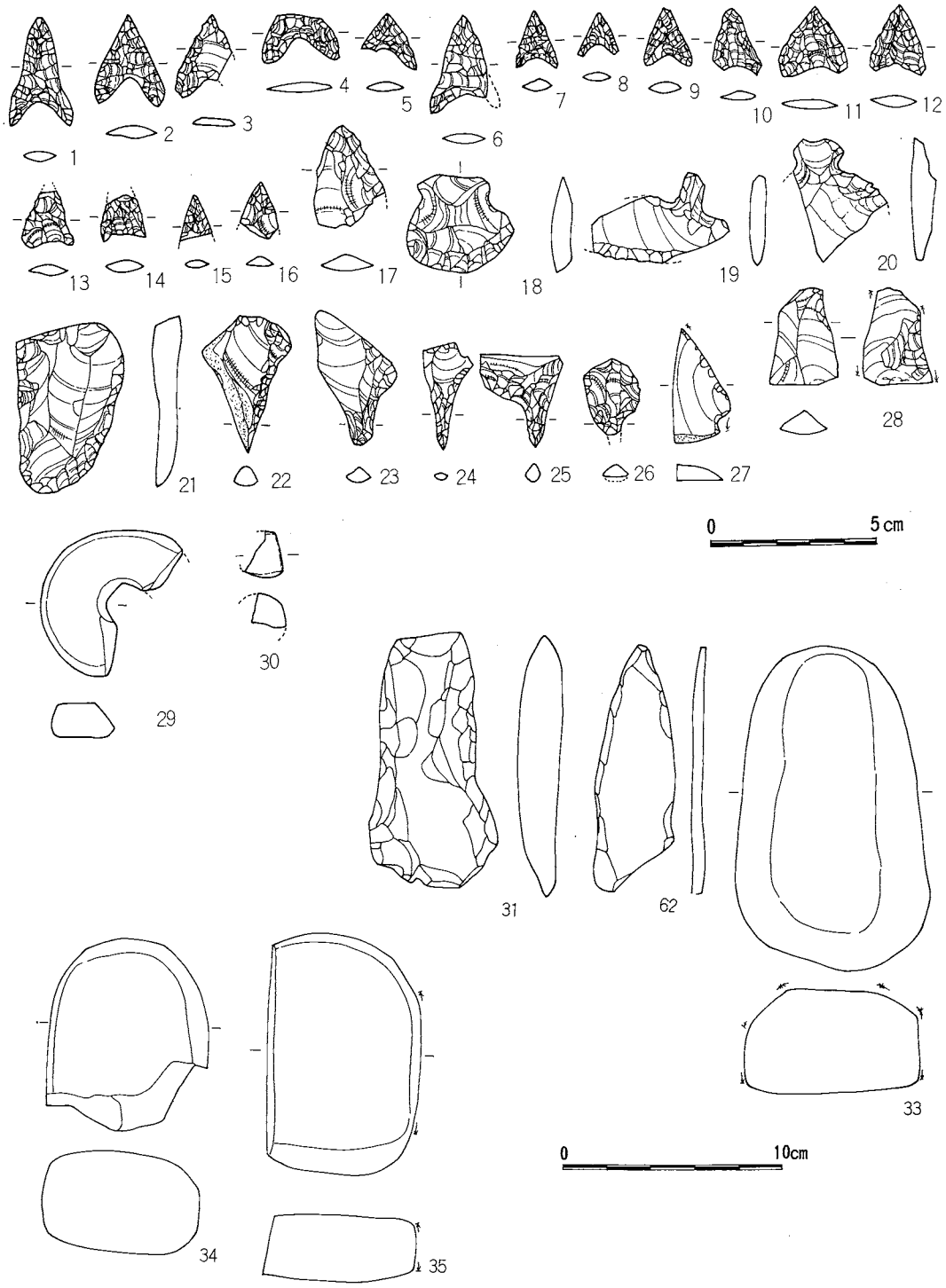
尖頭状石器17は基部を欠くが、部厚い剥片に粗雑な加工を施し、尖頭部を作出している。石匙18は円刃を有し、つまみ作出のために両肩にわずかな抉りを施している。19は横長剥片を用いた横型の石匙で先端および刃部の一部を欠いている。20は刃部の大半を欠失している。21はつまみはないが縦型の石匙の一種と思われる。

石錐は全て柄部を有するが、錐部はやや幅広で短かい22、23と、幅が狭く、長い24、25との２種類がある。26は錐部を欠いている。スクレイパー27、28は直線状の長さ2.5cmの刃部を有する。

玦状耳飾29は遺構検出面から出土したもので、直径4.5cmほどの大きさで右半分を失なっている。部厚く、丁寧な作りの優品である。30は装飾品の破損品であろう。

打製石斧31は撥形を呈し、胴部で一たんくびれ、刃部でやや開く部厚いもの。32は尖頭形の頭部で、薄手の剥片を用いている。磨石33、35は側面に研磨痕があり、34は全面に研磨痕が認められる。

（小林康男）



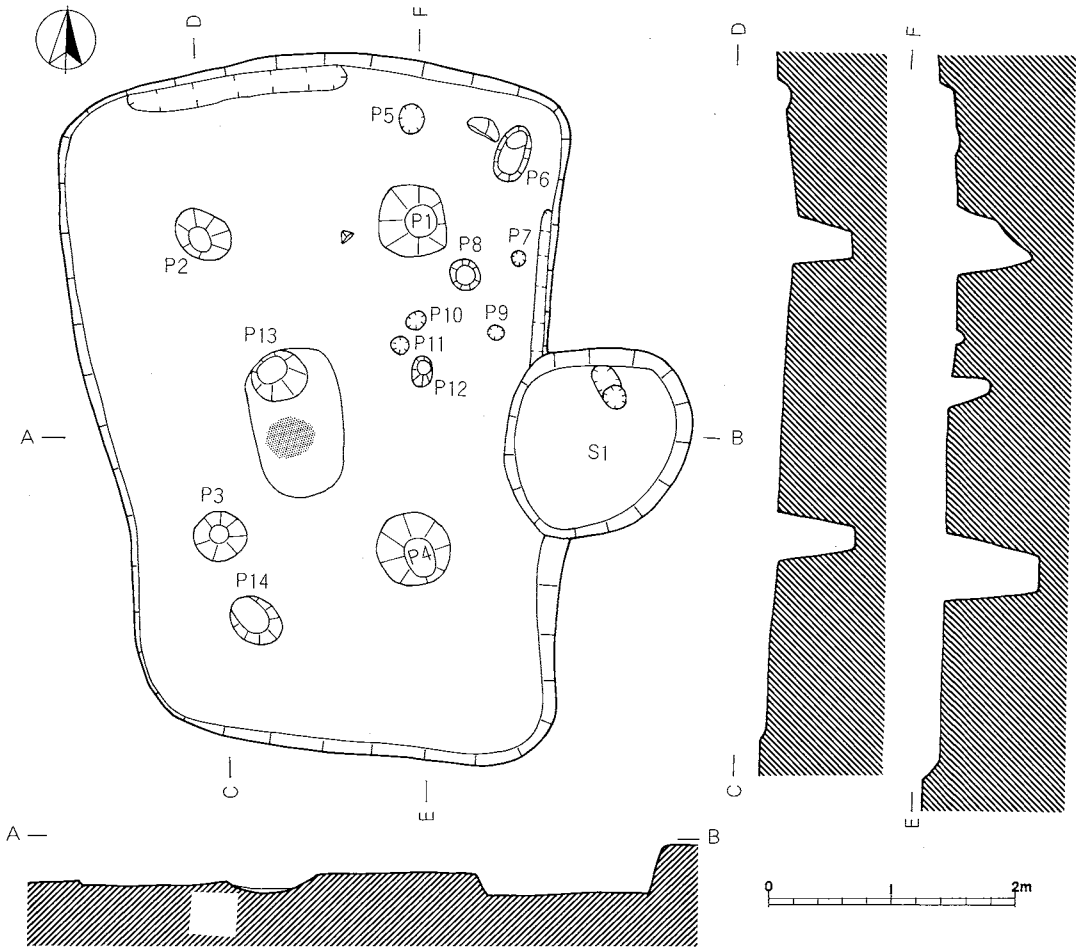
第14図　第１号住居址出土石器・石製品

第２号住居址

調査経過　今回の調査によって検出された、第２号住居址は、発掘地域の中でも北部にあたる、丘陵上の頂部に構築されていた。その址内床面上や僅かな堆積の覆土中より検出された土器類は、縄文前期初頭よりその結末に及ぶ、前期全般を通じての各形式土器類が得られたが、床面上より主体的に得られたものは、いわゆる神ノ木式相当土器片であった。

遺構　（第15図）

第２号住居址の規模は、東西方向の上面径が3.5～４ｍ、下面径が3.2～3.35ｍ。南北方向は上面径が5.36～5.6ｍ、下面径5.15～5.4ｍを示し、南北方向に長い隅丸方形の竪穴を形成していた。壁はほぼ垂直におりており、壁高は丘陵上の山寄高所にあたる東側は、当然のことながら切り込みを深くしており、－10～－22cmを記録し、西側は－６～－７cm、南壁、北壁は－８～－16cmを示していた。床面は若干の凹凸がみられるものの、ほぼ平坦に近く、北部と南部に特に堅緻な仕



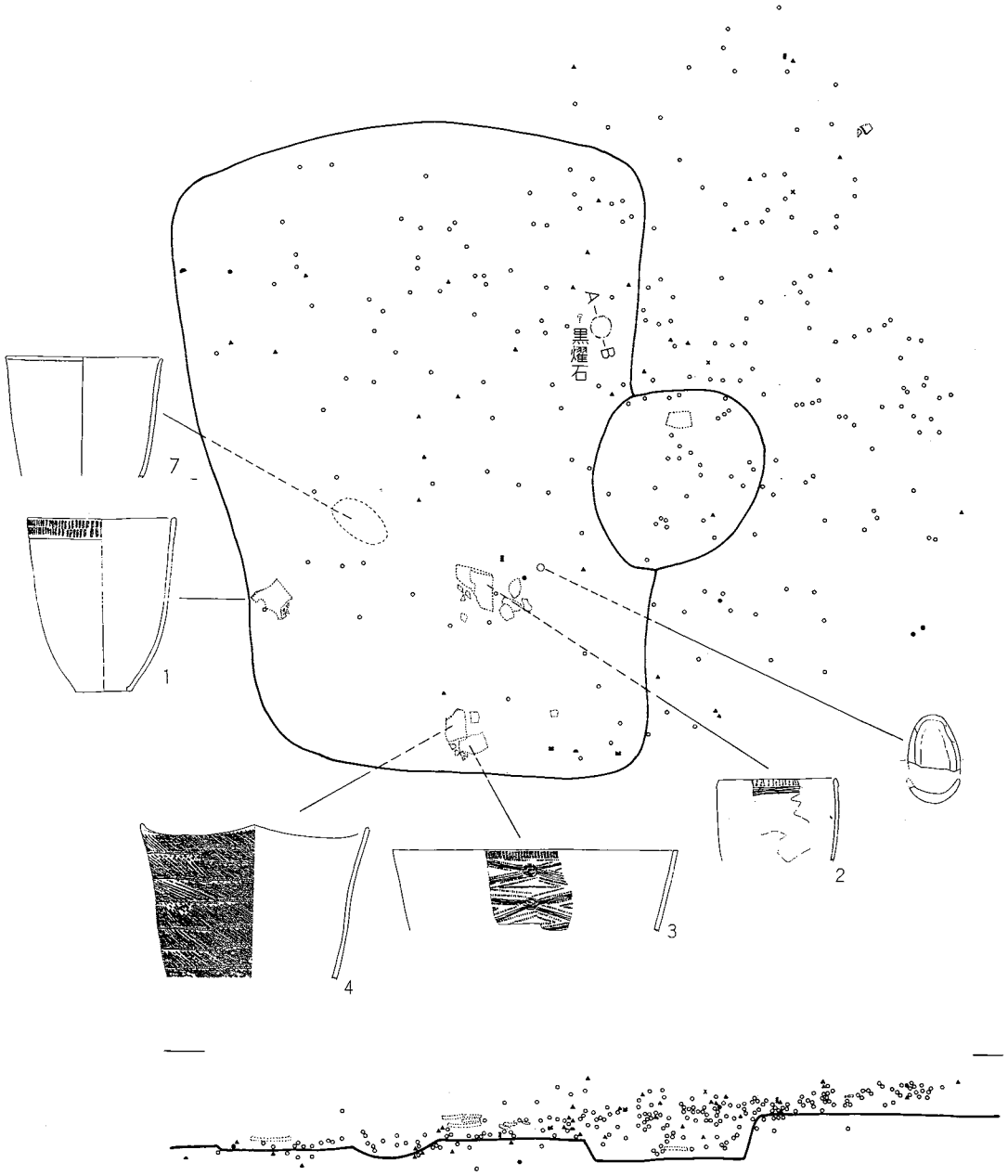
第15図　第２号住居址・第１号小竪穴

上げをなしているところがあって、概してよい方であった。主柱穴は址内に配置よく、4箇所に認められた。それぞれの規模は、P_1が上面径35×48cm、下面径16×23cm、深さ50cmであり、P_2は上面径56cm円径、下面径は25×26cm、－45～－62cm。P_3は上面径55×60cm、下面径21×32cm、－75～－78cm。P_4は上面径40cm円形、下面径15cm円形、－65～－66cmを記録する。これらの柱穴類は上面径を広くしており、一段さがって棚をおく様にして、更に深くなる形状をとっている。以上主柱穴の他に、東北部に集中してP_5～P_{12}までの小ピット群が分布し、中央部と南部に柱穴状のピットを認めた。これらのピットの規模は、P_5が20×23cm、－18cm。P_6は上面径28×46、下面径18×25cm、－26～－38cm。P_7は12×12cm、－4cm。P_8は25cm円形、－28cm。P_9は12cm円形、－5cm。P_{10}は15×18cm、－10cm。P_{11}は15cm円形、－9cm。P_{12}は上面径15×25cm、下面径10cm円形、－34cm、P_{13}は上面径40×45cm、下面径20×25cm、－23cm、P_{14}は上面径36×45cm、下面径20×35cm、－49cmとなる。址の中央部分に70×120cmの楕円状に、－12cmの浅い落ち込みを認め、その内部に地床炉とみられる30×40cm円形に僅かな焼土の分布堆積を認める。又、これに接する如くP_{13}が所在した。相互に関連をもつ施設かとも思われるが、はっきりはしない。土器片が僅かに得られる。周溝と思われるものが2箇所に出現する。その1は北壁に沿ったもので巾17cm、長さ180cm、床面下5cm程度であり、他のものは東壁沿いの巾10cm、長さ130cm僅かに凹む程度のものである。

2号住居址出土遺物は、南部の床面より神の木式類似土器の大形片が得られたが、－6cmから深いところで約20cmの竪穴内覆土中より、前記の如き多数の各種土器片と、下記の如き石器類を得た。石器としては、石鏃54を中心として尖頭状石器、石錐等の他、別項記述の如き土製品も検出されている。

遺物　第2号住居址の床面及びその覆土中より検出された遺物は、縄文前期土器片とこれに伴う石器類であった。出土土器は完形品はなく、破片が主であるが、1部欠損してはいるものの図上復元可能のものも若干あり、資料的には豊富であった。縄文前期初頭のいわゆる花積下層式、神ノ木式類似土器等をはじめとして、黒浜式、有尾式、諸磯a（南大原）式、諸磯b（上原式、諸磯c（下島）式、前期終末の下島直後形式（晴ケ峰）各類似土器等、前期全般を通じての土器片が得られ、多種多彩であった。中でも神ノ木式類似土器は数量的にも多く、床面上における在り方から、本址を位置づける資料ともなり得る。これらの本址出土土器類を編年に従い、型式別に分類・整理し、1部欠損や大形片で図上復元できるものと、できない破片とにまとめ、それぞれの整図中の資料に、一連番号を付して報告に便ならしめた。又、石器としては石鏃、尖頭状石器、石匙、石錐、スクレイパー、玦状耳飾、打製石斧、磨石、凹石が検出されており、更に土製品として、土製円盤、匙形土製品が各1個づつ出土している。

土器　第1類土器　（第19図4、16、29～34、第20図106、107、第23図206）本類は、縄文前期初頭の花積下層式相当土器である。焼成は概してよく、黄褐色系をとるものが多いが、暗褐色を呈するものもある。4、16、29、31には胎土に砂粒を含み、34には繊維の含有がある。4は平縁の複合口縁部で、複合上を含む器面に斜縄文が施される。器厚0.7cmで口唇が尖る。16は器厚

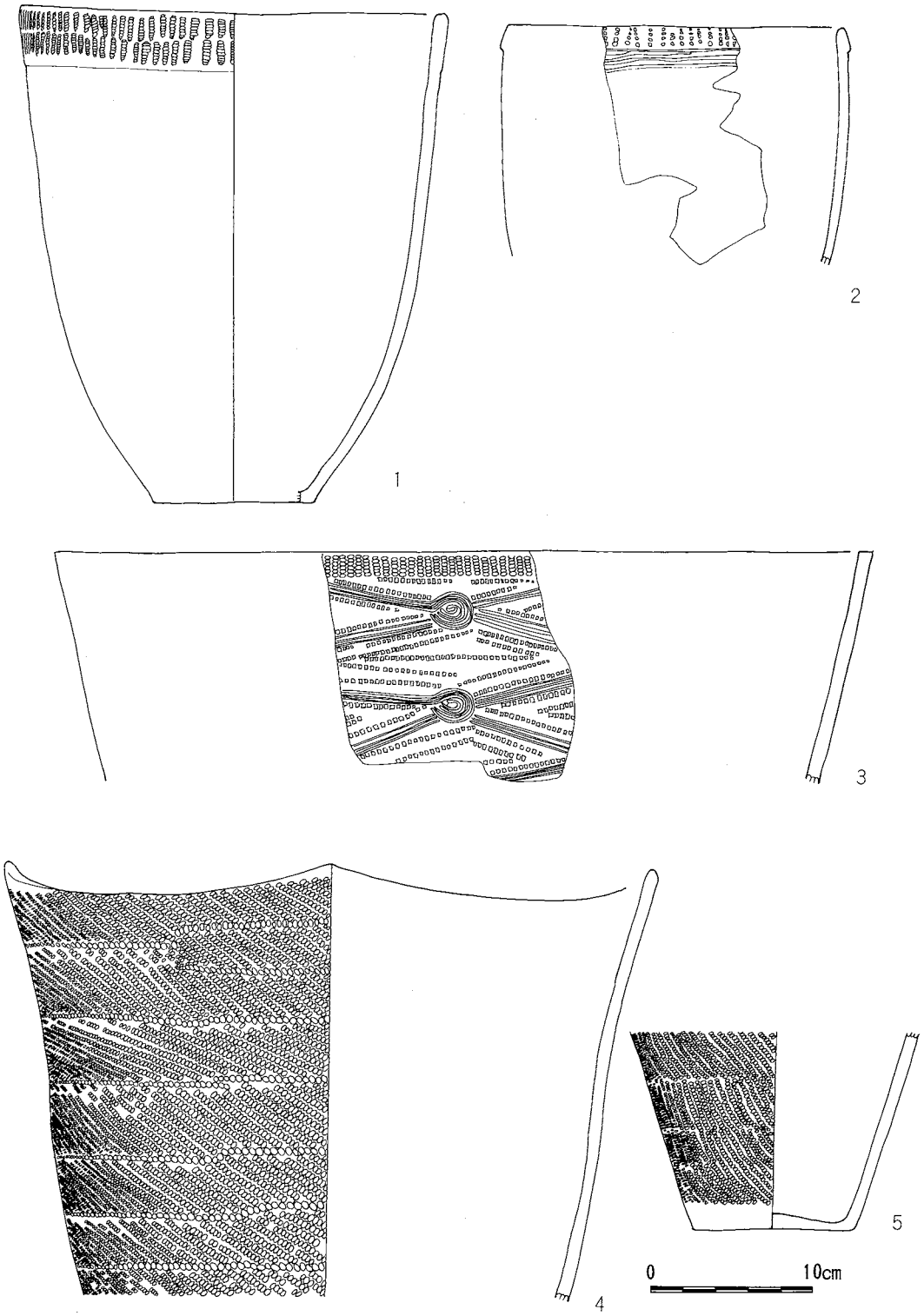


第16図　第２号住居址および周辺遺物状態

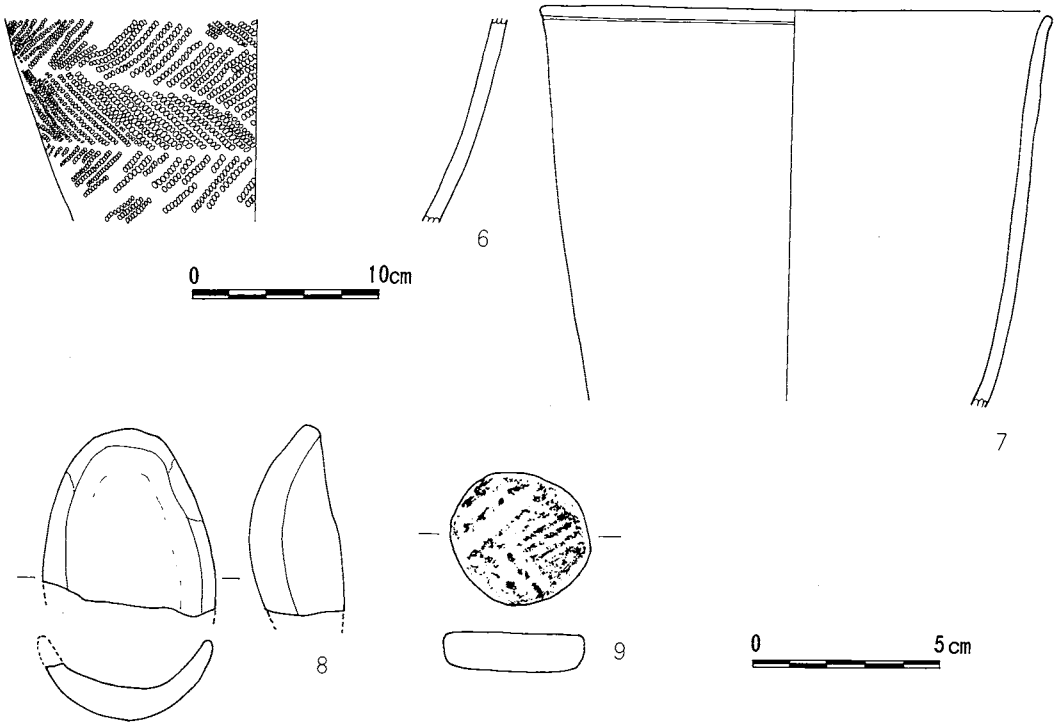
0.7cmの口唇部を欠いた複合口縁部で、複合上とその下部に左傾、右傾する縄文を施している。29は器厚0.8cm、頸部の破片とみられるものである。３条１単位の撚糸文をもって、器面全体を密に幾重にも菱形施文している。器の内面は調整が悪く凹凸激しく、横位に顕著な調整擦痕を残している。30は品厚0.7cmの胴部で、２条１単位の斜行する撚糸文が、細かな無文帯と交互に施文される。31は器厚１cmとやや厚く、２条１単位の撚糸文で、29と同様の密な菱形文をとるらしい。32は器厚0.5cmとうすく、斜行する撚糸文と同様に斜行する特殊刺突文帯が交互に密に施文される。33は中厚手の胴部破片であり、34とほぼ同様の短い無節縄文を右傾、左傾させ、複雑な施文を残す。内壁に調整擦痕がある。34は口唇に0.7cmの面取りをもつ厚手土器の平縁口縁部で、外面黒褐色、内面茶褐色となる。106、107は撚糸文施文土器で、器厚は0.6cmとうすく、焼成よく黄褐色となる。いずれも胴部破片で、106は撚糸が同方向に整然と平行し、107は２条１単位の撚糸文が、細片のため全体をうかがえないが、羽状を構成している。206は炉内出土で、器厚は0.8cmの胴部破片、暗褐色を呈し、撚糸文が施される。

第２類土器　（第17図１～２、４～５、第18図６、第19図１～３、５～15、17～28、第23図205、210）　本類は縄文前期初頭の神ノ木式類似土器を一括した。図上復元により、土器の全体像を知ることができる第17図１や、口縁部あるいは胴部、底部などの部分的な器形をうかがい知る、第17図２・４～５の文形破片も得られたが、総じて小破片が主体をしめる。本類としては比較的豊富な活用資料に恵まれたが、施文の在り方からａ～ｄ類に整理可能である。

ａ類　（第17図１、２、第19図１～３、５～15、17～23）　総じて焼成はよく、黄褐色及至暗褐色を呈する。壁調整は良好で、胎土に微量の砂粒を含むものがあり、器厚は0.5～0.6cm及至0.8cm前後を示す。いずれも櫛状工具により、横位の連続刺突文を残す類で、浅い平行沈線、あるいは斜縄文が併用されるものが多い。第17図１は、３分１程欠損しており完形ではない。然し図上復元により全体像を知り得るものである。単純な鉢形を示し、器の大きさは、口径25cm、高さ29.5cm、底部径約10cmとなり、器厚0.8cmを記録する。底部より器は円滑な立ち上りをみせて、そのまま素直に開口する。口唇に面取をもつ平縁の口縁部をやや肥厚させ、その外器面に櫛状工具により、上下２段に縦位の押圧押引状文を連続並列させ、器を囲繞させている。原体の櫛歯は９本が１単位で、長さは約1.5cm程度である。口縁部以下底部までは無文となり、外器面の壁調整は非常によいものの、内壁の調整は粗となりあらい。この土器は同図２と共に頸部以下底部にいたるまで無文となり、本類の他の資料とは、施文のあり方を大きく異にする。本類の中にあっても先行するものではないかと考えられるが、類例少く、その位置づけは今後の資料まちとしたい。２は平縁の口縁部で、鉢形を示し、口径約23cm、器厚は0.6cmとなる。口縁部帯を肥厚させた後、口唇に向けて外そぎとし、１単位が４本となる櫛歯工具を縦位に押圧して、横に連続囲繞させている。肥厚部の直下に平行沈線が横走する他、底部にかけては無文となる。第19図１～３、５～11は平縁の口縁部、12は波状口縁部であり、共に口唇上に0.5～0.9cmの面取をもつ。又、１～３、５～７は複合口縁となり肥厚する。６、７には、口唇上に小突起物の加飾があり、１の口縁には



第17図　第２号住居址出土土器



第18図　第２号住居址出土土器

外壁より内へ通ずる穿孔がある。13～15、17～23は胴部破片で、15は口縁に近い部分である。施文具の櫛歯の数は２～９本を示すが、採用土器の例によれば、２本となるもの３例、３本が３、４本が５、５本が６、６本が１、７本が１、８本が１、９本が１で４～５本となるものが圧倒的に多い。

b 類　（24～27、205）　全般的に焼成よく黄褐色系となり、器厚は0.6cm前後の中厚手を示す。壁調整はよいものの24、25の内面には、調整の擦痕が部分的に残る。205は2号住居址の炉内出土遺物である。いずれも胴部破片であり、器の全面に連続ハの字状の複雑な特殊縄文が施される。

c 類　（第17図４・５、第18図６、第23図210）６を除きいずれも外器面に横位帯状の、整った斜縄文を何段にも重ねて全面施文するが、原体の末端線のはしりも、それぞれ明瞭である。４は、ゆるやかな小さな波頂部を相対的に４箇所にもつ、波状口縁部で、胴部から上の大きな破片である。器は開口度を増しながら立ちあがるが、頸部辺でやや集約の気配をみせて、再び外傾して無難に開く。口径は40cmを記す大形土器であるが、器厚は中厚手の0.8cmとなる。６は焼成よく茶褐色となり、胎土良好である。胴部破片で最大部の直径が26.5cmを記録し、器厚は0.8cmの中厚手を示す。羽状縄文が整然さをもちながらも、複雑に器の全面に施文される。５は底部のかなりまと

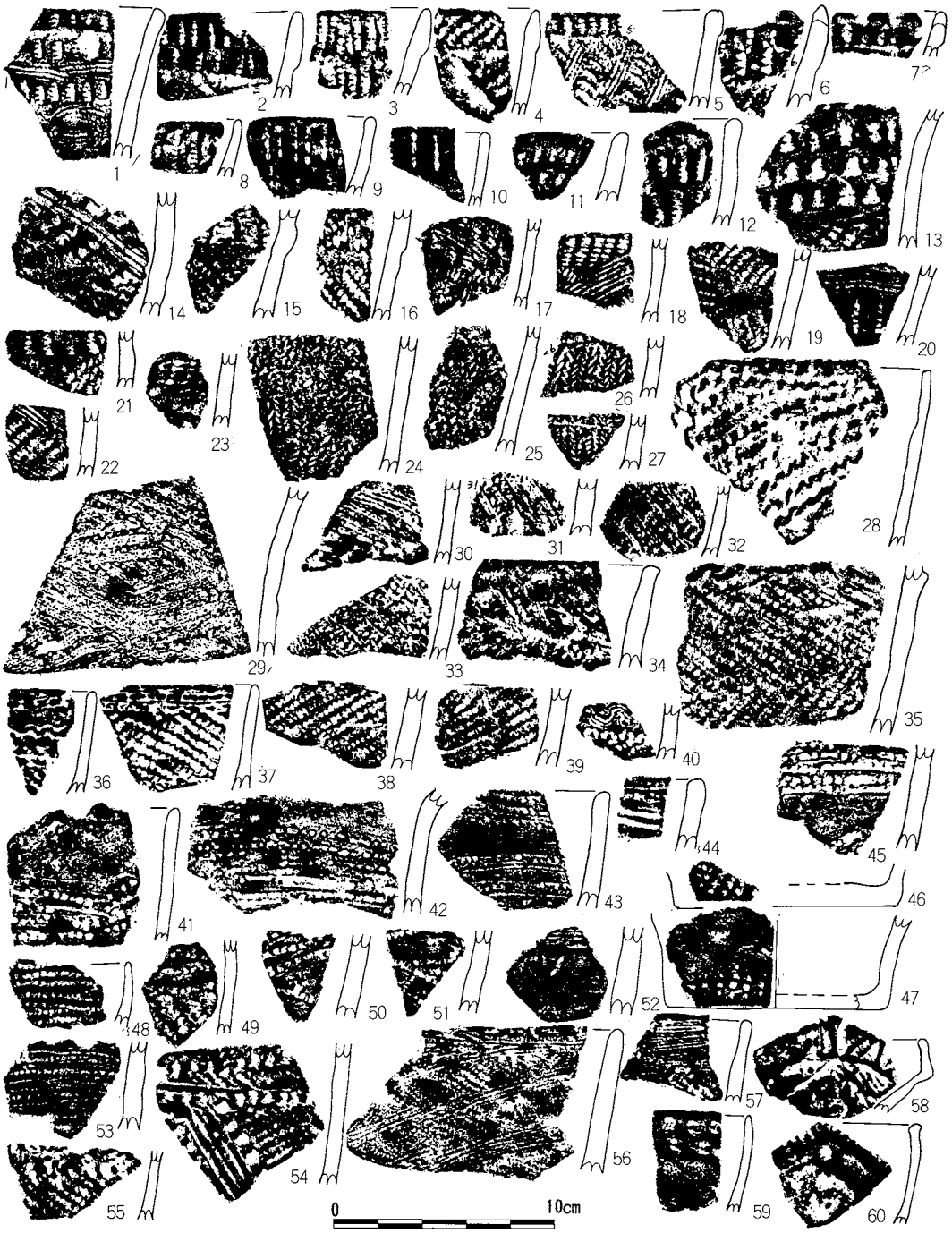
まった破片である。底部径は9.7cmとなり、内底の中央部分を肉厚とするが、他の器厚は0.8cmである。器は底部より、大きく開口する口縁に向い、直線的に立ちあがる器形を示す。210は炉内出土土器であり、黄褐色を呈する。器厚0.4cmの胴部破片である。本類は上記資料でうかがい知る如く、開口度の大きなゆるやかな波頂部をもつ平底の、器形に変化のない大形の鉢形土器を示すものらしい。

d類　28の1例のみである。あまり類例を知らないが、神ノ木式土器の中には同様粘土紐上に、連続する押圧痕を残すものもあり、d類としてその範疇に属さしめた。山形波状口縁部の破片で、暗褐色を呈し、口唇が0.2cmと直に細まり器厚は0.5cmと薄手である。平らたく細い粘土紐を、波状口縁に平行させて2条めぐらした後、器壁全般に同様粘土紐を密に幾段も平行横走させて貼付し、囲繞させ、その粘土紐上に巾広い斜めの押圧痕を附している。又、その粘土紐間のせまい無文部帯に、浅い爪形文を横に連続させている。壁面調整は概してよい。

第3類土器（第19図35～40）　黒浜式に対比さるべき1群の土器をまとめた。数量的に少なく、35～40が含まれる。総じて器厚は0.7～0.8cmの中厚手を示し、黄褐色及至暗褐色を呈し、35、38、39には胎土に繊維を含む。35は頸部にコンパス文とみられる痕が僅か残され、胴部に羽状縄文、内壁に横位、その後縦方向の調整痕がある。36は平縁の口縁部で横位の押引文とコンパス文を引き、頸部以下に縄文を施す。37も平縁口縁部で、横位の押引文を口唇直下に2条横走させ、以下整った羽状縄文を施すらしい。38、39は胴部破片で、中位の斜縄文が施される。39には内壁調整の擦痕が残る。40は頸部辺の破片とみられ、小破片であるがコンパス文様と、縄文結束の末端線の横走がみられる。

第4類土器（第17図3、第19図41～53）　いわゆる有尾式に平行する1群である。総じて焼成よく茶褐色及至は暗褐色となり、胎土に砂粒を含むものが多い。器厚は0.7～0.8の中厚手となるものが殆んどで、0.5cm程度のものは少ない。施文は口縁部に、当面が角状を呈する櫛歯状施文具により、連続刺突文を幾重にも平行させ、全体としては大きな三角形及至は菱形の構図をとるもので、胴部以下には斜縄文が施されるらしい。41は平縁の口唇上に、小突起2個が加飾されており、53にも付加される。42、45、49～52は頸部辺の破片とみられるものであり、内外面に調整の擦痕が残る。43、44、48、53は平縁口縁部で、43には口唇上に0.7cm、44には0.9cmの面取りがある。底部としては2例あげられ、46は底径9.8cm、47は10cmとなり、器の立ちあがりは、共に直立気味に若干立ちあがった後、ゆるやかに開口する形を示す。6は口径52cmの平縁口縁部の破片であり、器厚、口唇の面取り共に0.8cmである。器は底部より直線的に開く鉢形土器を示し、焼成はよく黄褐色を呈する。当面が角状を呈する櫛歯状工具による刺突文と、半截竹管工具による平行沈線文の組合せにより、全体としては器全面に菱形文を構成している。帯状の平行沈線文が集約して、同心円状文を残すのも特徴的である。

第5類土器（第19図54、55）　本類は54、55の2例である。共に平行沈線と連続刺突文が三角状区画をとり、その内部に縄文を施す。いずれも内面に調整の擦痕を残しており、暗褐色を呈し



第19図　第２号住居址出土土器

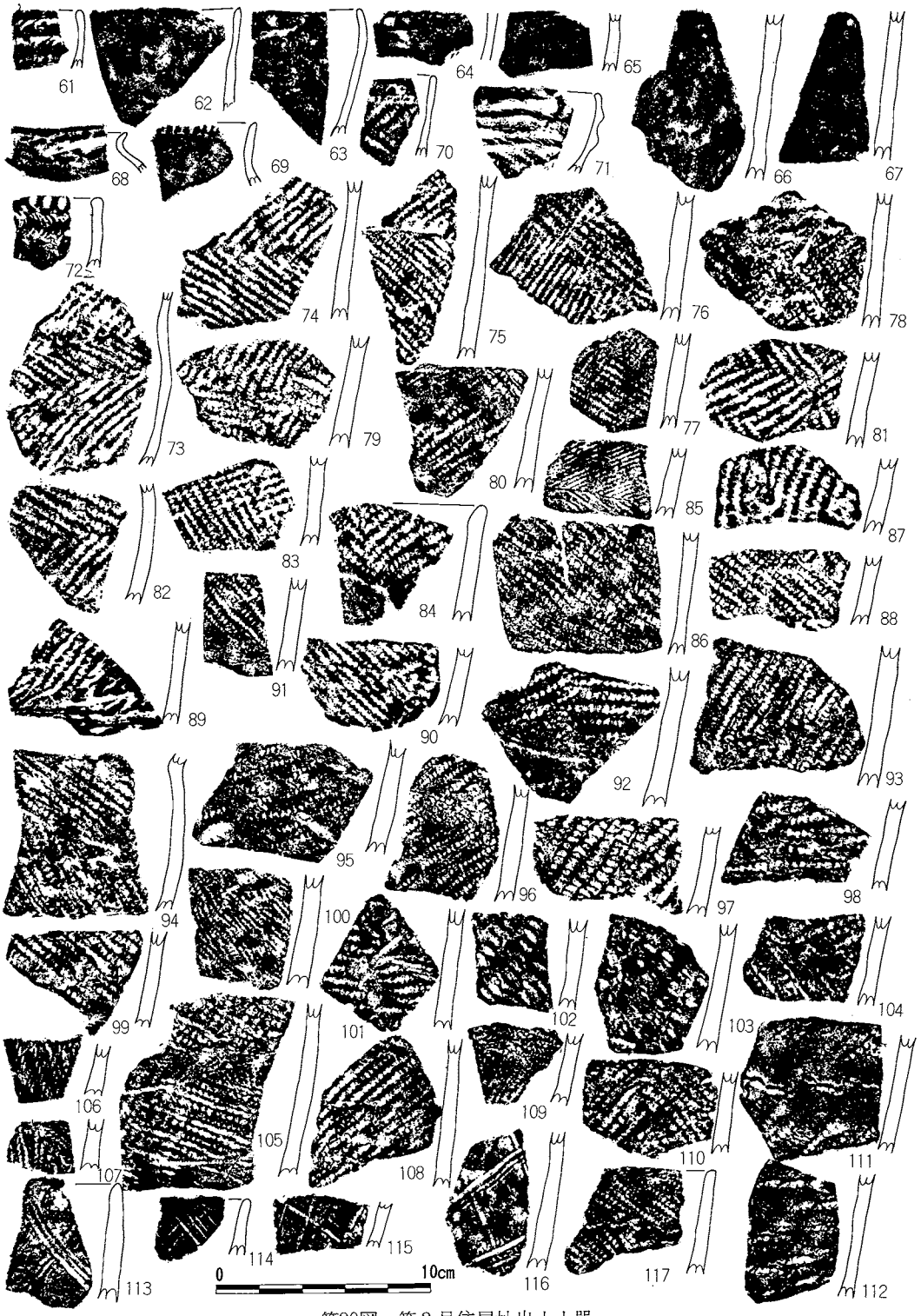
胎土に砂粒を含む。54は器厚0.7cmの頸部片の破片。55は器厚0.5cmの胴部破片である。

第6類土器（第19図56、57） 本類はあまり類例を知らない。56と57が含まれるが、56は平縁口縁部であり、口唇部の内側がうすく剝落しているものの、僅かな縁取りの意がうかがえる。口唇部0.8cm、器厚1cmとやや厚手であり、器の内側はていねいな仕上げ調整をしており、胎土に若干の砂粒を含み、暗褐色を呈する。器は底部に向い直行する鉢形を示しており、施文は縄文地文に、3条1単位の浅い整った平行沈線文が、一定の間隔をおいて、同方向に斜行している。57も平縁口縁部破片であり、口唇上に0.4cmの面取りがあり、器厚は0.7cmとなる。胎土に砂粒あり、暗褐色で内壁に部分的な擦痕を残す。やはり鉢形を示すものとみられるが、施文は縄文地文に、口唇に沿って浅い整った平行沈線文が何条も横走している。

第7類土器（第18図7、第19図58～60、第20図61～72、第23図196、197、199～202、208、209）

本類は東海、関西方面の文化流入や、その影響を強く受けた一群の土器類をまとめたものである。然し一括したものの、その内容は多分に編年的な時間差をもつものがあり、形式別にも分類整理されなければならないものであるので、これらをその特徴に従いa～d類に4分類し取扱ってみたい。大きな特徴としてはd類を除き、他はいずれも土器がうす手堅緻となる。

a類 58～65・68、69が含まれる。この中、58～65は、いわゆる木島式の特徴を備えるものである。58は器厚0.5cmとうすく、焼成はよいが暗灰色を呈する。波状口縁をとる小形の浅鉢で、口縁部が屈折して1cm程立ち上がり、横帯にめぐって器の縁どりを形成する。この屈折立ち上り部には、横位帯状の左傾する縄文が施され、口唇上にかけて、粘土紐による縦の短い微隆線が貼付されるが、頸部以下には右傾する縄文が施文される。59は器厚0.5cmの平縁口縁部で、内外暗褐色となり、やや内彎の傾向を示しながら立ち上がる。口唇直下の外面に竹管工具による横位の爪形状連続刺突文が施される。60は器厚0.4cmとうすく、焼成よく暗褐色となる。山形状を呈する口縁部で底部に向い直行しており、面取りの口唇上を、密な連続刻目文を付している。器の外面は1部剝落しているが、山形部に円形凹文を残し、微細な条線を引き内面には口縁に添い、連続爪形文をめぐらしている。61は器厚0.4cmで暗褐色となる。胎土に砂粒を含む平縁口縁部である。器の外面に横位の連続爪形文が2条めぐっている。東筑、山形村唐沢遺跡からも、類似土器が出土している。62～67はいずれも無文土器である。この内62～65器厚0.4cmのうす手土器で、焼成はよいが暗褐色となる。いわゆるオセンベ土器と呼ばれる類で、器の内外に指頭痕を残す。62は平縁口縁部で口唇が細まって尖り、底部に直行する鉢形を示す。内外壁に調整擦痕がある。63も平縁の口縁部で、口唇が細まるが器は内彎している。64、65は胴部破片である。68は69と共に、北白川下層1式に近似するものである。68は器厚0.3cmとうすく暗褐色となる。平縁の口縁部で58とは対照的な逆方向に屈折し、肩を張り出しており、小形の壺形土器を示すらしい。無文で頸部に径0.4cmの穿孔がある。外面の壁調整は良く入念であり、内壁に調整痕がある。69は器厚0.5cm、焼成よく暗褐色となる。頸部でしまり平縁の口唇が外反する口縁部で、口唇上に連続する刻目が付されている。内外無文で壁調整は良い。



第20図　第２号住居址出土土器

b類　70～72に該当する。これらは北白川下層II式に平行するものである。それぞれ施文のあり方を異にするが、70は器厚0.3cmで、平縁口縁が細まりながら直に立ち上がる。壁面調整をよくする鉢形土器の破片であり、口縁に平行して横走する、整った微細な連続爪形文が1条めぐり、その下部にやや太目の羽状縄文が施される。71は壁面調整をよくする、黄褐色のうす手土器である。平縁口縁の口唇上をやや広くして0.4cmの面取りがあり、内彎気味に立ち上る。口縁に平行して横走する2条の微隆線があり、その線上斜めの刻目を連続させている。その下部には斜縄文が残る。72は黄褐色を呈するうす手の平縁口縁部で、内外に調整痕を残す。0.5cmの面取りのある口唇上に、やや太目の刻目を連続させており、口唇直下に密な連続爪形文を横走させている。細片のため多くをうかがえない。

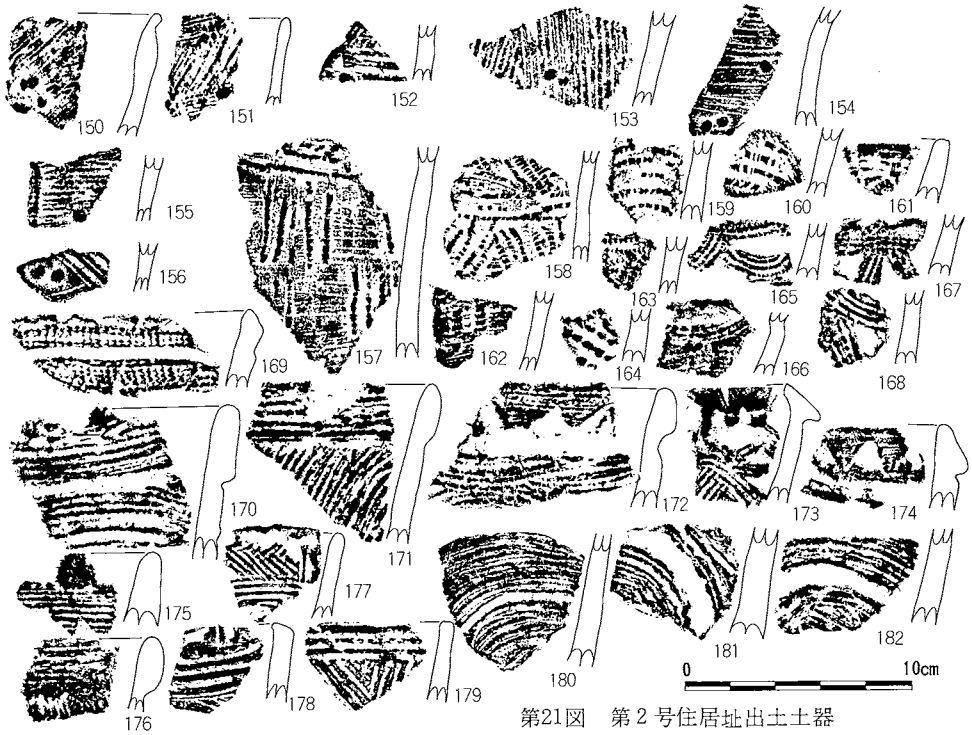
c類　196、197の僅か2例であるが、北白川下層III式に平行する土器である。焼成はよいものの暗褐色系をとり、器厚は0.5cmとうすい。共に羽状縄文を地文とし、細いソーメン状の粘土紐を曲、直線状に貼付しており、その上面にこまかな軽い刺突を加えている。196は頸部、197は胴部の破片である。

d類　第18図7と66、67、199～202、208、209が含まれる。無文土器でその無文のあり方は、a類の62～65によく似ており、a類に平行する1群かと思われる。7は暗褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含む。器壁の凹容いちぢるしく、壁面調整はあまりよくない。器厚は0.8cm、平縁の口径は27cmを記録し、器形に変化のない単純な鉢形土器を示している。本類の代表的な資料といえよう。66、67は器厚0.7cmの中厚手土器で、外面は黄褐色であるが、内面は黒褐色となる。あきらかに62～65とは異なるが、器に指頭圧痕を残す製成手法を同じくしている。関西系土器の手法をとり入れた在地産の土器といえよう。208、209は2号住居址の炉内出土で、199と共に平縁となる。器厚は共に0.5cmで口唇部はやや細まる。200は器厚0.7cmの平縁でいづれも内外壁面に指頭痕等顕著な凹凸を残す。201は平縁で壁調整は比較的よく、外壁に縦の短い調整痕を残す。202も平縁で内壁に横位の調整痕を残す。

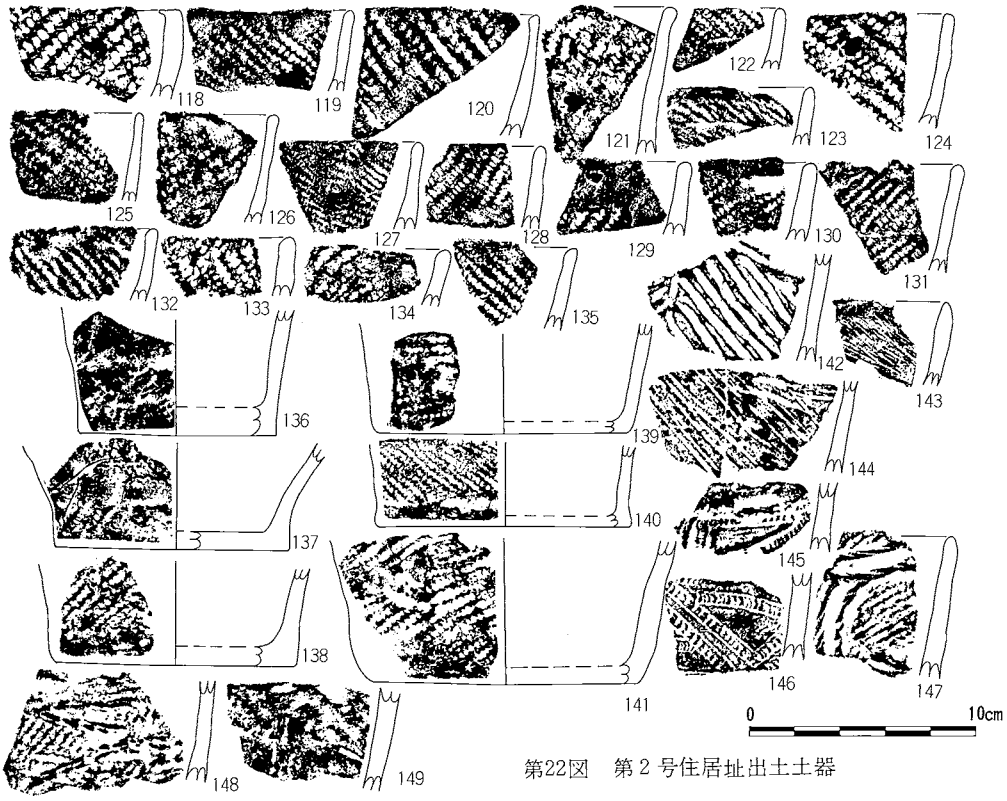
第8類土器（第20図73～105、108～112、第24図207、211～213）　本類は縄文施文土器を1括した。これらを更に施文のあり方により、a～cに3分類する。

a類　73～85、212の羽状縄文土器が含まれる。総じて焼成よく、黄褐色系をとるものが多い。器厚は0.6～0.8cmの中厚手土器を示し、胎土にいずれも砂粒を含んでいる。又、74には微量の繊維を含む。縄文は85を除きいずれも中位で、その節も条も比較的整っている。73は頸部の破片で、内彎しながら頸部で軽く集約し、外反しながら開口する器形を示している。内壁の調整仕上げは83と共に至極良好である。横位の羽状縄文が幾段にも重なって器をとり巻く。又、84は波状口縁部の破片で、その波状はゆるやかであり、縦位の羽状縄文が施される。他はいずれも胴部破片で、85の縄文は微細となり、74と共に内壁に調整の擦痕がある。212は炉内出土である。

b類　86～100、207、211、213が含まれる。いずれも斜縄文が施される1群で、器厚は0.6～0.7cmを示すものが多く、黄褐色及至は暗褐色を呈する。胎土に砂粒を含むものが殆んどで、繊維



第21図　第２号住居址出土土器



第22図　第２号住居址出土土器

は含まれない。縄文は100が微細となり、97、98が粗文となる他は中位を示している。94は頸部破片で73同様、内彎しながら立ちあがる器が、軽く集約して外反開口する形をとる。やはり内壁の調整仕上げがよい胴部破片が多いが、95、97には内壁に調整擦痕が残り、100はていねいな仕上げとなっている。207は炉内出土であり、器厚0.4cmとうすく、口唇に面取りをもつ平縁口縁部である。微細な縄文が残る。211、213も炉内出土であり、器厚0.7cm前後、暗褐色を呈し、斜縄文を施す胴部破片である。

c類　101～105、108～112が含まれる。あまり類例を知らない特殊な縄文を施文したものを1括した。101～103は共に黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む胴部破片である。器厚は0.7cm弱でややうす手となり、101には断続する縄文の圧痕が、102には同じく断続する無節の縄文圧痕が施される。壁調整はあまりよくないが、101には内壁に横位の擦痕が残る。103は趣を異にする特殊な断続縄文の圧痕が転載される。104、105は無節となり、105の内壁には指頭痕が残る。108、109はいずれも個体を別にするが、暗褐色となり器厚は0.7cmである。108は胎土に多量の砂粒を含み、斜縄文に原体の末端が横位に平行している。109は羽状縄文となり、その中心部に原体結束部の痕が横走する。110は羽状縄文をのこし、更にその上面に刺突による魚形らしきものを描くが、全体を知り得ない。内壁の調整はよい。110は器厚0.6cm、112と共に暗褐色を呈するが、焼成はよい。まばらな斜縄文に原体の末端線が横走する。112同様内外の壁調整はよく擦痕が残る。112は器厚0.5cmとうすく、間をおいた無節縄文が横走する。

第9類土器（第20図113～117、第21・22図118～144、第24図203、204）　本類は縄文前期後半のいわゆる諸磯a式に相当する1群である。信濃では南大原式とも呼ばれるものに特徴が類似する。施文のあり方に竹管工具によるもの、縄文施文のみのものなどあり、これらをa～cに分類して整理したい。

a類　113～116が含まれる。総じて黒褐色系をとり胎土にいずれも砂粒を含む。器厚は0.5cm位あるいは0.9cm位をとる2種があり、口唇部が器厚の半分位に細まって直に開口する鉢形を示す。壁調整はあまりよくなくやや粗製の感がある。施文は平行沈線あるいは単行沈線による、やや目の大きな斜格子状文が引かれる。113、114は平縁口縁部であり、115、116は胴部である。

b類　117～141、203、204が該当する。器の全面に中位及至は繊細な斜縄文のみが施される土器である。黄褐色、暗褐色を呈するもの多く、焼成は概してよい。胎土に殆んど砂粒を含み繊維の混入はない。内壁の調製は比較的よく、往々にして擦痕を残す。採用した土器の中、口縁部が117～135、底部が136～141、203、204である。口縁部は19例中、波状口縁となるものは121の僅か1例であり、他はすべて平縁である。完形土器の出土がなく、頸部、胴部の器形が明確につかみ得ないが、すなおに直行して開く鉢形を示すものが殆んどである。あるいは、南大原の模式土器からいえば、頸部で軽くしまり開口する器形をとるものかも知れない。口縁部の特徴的なつくりとしては、口唇上に平坦な面取りをもつものが圧倒的に多く、0.5cm巾位を主に118の如く0.9cm巾を形づくるものなどある。唯一の波状口縁となる121は、波頂上を若干押圧して凹ませてある。

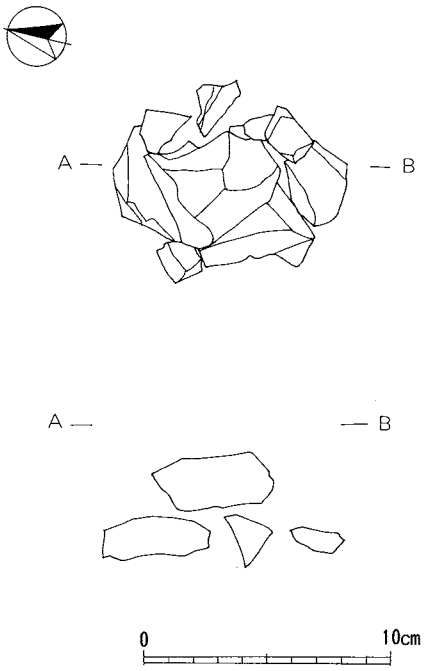
又、やや趣の異なるものとしては、131の口唇上に、竹管の背によると思われる、押圧痕の不揃な小波がある。117、127の斜縄文には、横位の綾絡文が連続しており、129、130には口唇に平行して僅かな無文帯がめぐる。底部は8例を数える。136は底部9cmとなり、外面に斜縄文を施した後、壁面補強の上塗がなされたために、器厚0.8cmとなり凹凸があり、縄文は僅かしか残されていない。然し内壁の調整仕上げはよい。137は底径10.4cmで器厚0.5cmとややうすいが、焼成よく堅緻である。外面に交叉部に無文帯をもつ羽状縄文が施文されており、底部に網代文が残る。内壁の調整仕上は至極よい。器は底部より1旦直立した後、大きく外傾して開く器形を示している。138は底径10.8cm、器厚0.7cmで器は底部よりゆるやかな開度で口縁に向い、直行する鉢形を示す。外面斜縄文、底部に網代文を残す。139は底径11.2cm、器厚0.6cmとなる。内壁に調整の刷毛目痕を残し、器形は138、141と類似する。140は底径11.2cm、器厚は底部肉共0.5cmとうす手づくりである。整った繊細な斜縄文が転載されており、底部の外周のみ補強のための粘土紐を帯状にめぐらしている。器は底部より直立してのびる筒形を想わせる。141は直径12cm、器厚0.7cmである。内壁に調整痕を残し、外面に原体の短い斜縄文が同方向に施される。203は底径7cmの小形土器で、基部で僅か直立した後、ゆるやかに外傾する器形を示している。器厚0.4cmとうすく、底面に痕跡的な網代痕が残る。204は底径が12.6cmと大きくなり、顕著は網代痕を残す。器厚0.8cmで底部より外傾しながら開口する。

c類　平行沈線文施文土器で142～144の3例があげられてい共に胎土に砂粒を含む。142は器厚0.8cm、黄褐色を呈する頸部辺の破片とみられるもので、やや太目の平行沈線が肋骨状をなすらしい。143は平縁の口縁が尖る器厚0.5cmの暗褐色土器で、斜行する細沈線が特徴である。144は器厚0.7cmの頸部辺の黒色土器で、平行沈線が三角状及至は菱形をとるのではないかとおもわれる。内壁を研磨しており、あるいは有尾式に類するものかも知れない。

第10類土器（第22図145～149）　本類は諸磯b式に対比されるものを1括した。145～149の僅か5例であり出土量はすくない。焼成はよいものの概して暗褐色系をとり、胎土に砂粒を混入しことに148には多量の輝霊母が含まれる。145は器厚1cm、146は0.8cmと厚く、内外の壁面調整を共によくする胴部破片である。いずれも平行沈線による三角状の区画をとり、区画内を無文とし、平行沈線内に連続爪形文を施す。又、146には尖端の鋭利な微細な刺突文が器面に残る。147～149は共に平縁の口縁部破片である。器厚は中厚手となり、口唇部が細まりながら集約するが、147は口唇が僅かに内彎し、148は僅かに外反する。いずれも斜縄文を地文とし、細い粘土紐を貼付して、その紐上に斜めあるいは直の刻目を付している。内壁の研磨仕上げをよくしている。149は器厚0.4cmのうす手無文の口縁部破片である。壁調整のよくない粗成土器で、底部に向い直行する鉢形土器を想わせる。

第11類土器（第22図150～164）　本類は諸磯c式平行土器である。これらは施文のあり方から、a、bの2分類が可能である。

a類　150～156が含まれる。共通していえることは、焼成は良くするものの暗褐色系の色調



第23図　第２号住居址床面出土黒曜石

をとるもの多く、胎土に砂粒を含む。又、１様に内壁面の調整仕上げをよくしている。器厚は0.6cmとややうすいもの、0.8cmと中厚手となるもの、そして稀に1.2cm前後の厚手となるものがある。施文は密な平行沈線文を地文とし、その上面に小さな釦状の貼付文をまばらに付加して器を装飾する。154は頸部辺の破片であるが、他はいずれも胴部破片である。

ｂ類　157～164が該当する。総じてa類と同様の焼成、色調、胎土を示し、器厚もほぼ同じくする。又、内壁の仕上は特に念入りにして良く研磨されており滑らかである。161は平縁口縁部で、口唇上に0.8cmの面取りがあり、他はいずれも胴部破片である。施文は平行沈線文を密に施し、その上面にソーメン状の細い粘土紐を、直、曲線状に貼付して浮線文となし、その紐上を結節状に押引いたり、刻んだりしている。163、164は平行沈線文の地文はない。以上いずれも破片のため全体の器形はうかがい得ない。

第12類土器（第22図165～182、第23図183～195）

本類は県内でひと頃、下島式直後型式と呼ばれた１群の土器に相当するものであり、その施文のあり方からａ～ｃの３分類が可能である。

ａ類　165～169が該当する。いずれも焼成よく暗褐色系をとり、胎土に砂粒を含む。器厚は0.8～１cm位の中厚手以上を示し。内壁は共に研磨されて仕上げはよい。施文は165～168が三角状及至半月状の特徴的な陰刻文が施され、細い半截竹管工具使用による、曲、直線状に何条も密接する平行沈線を引きながら、その沈線内に連続する結節状文を残している。165、168は胴部、166、167は頸部破片である。又、169は平縁の口縁部で細い半截竹管の背部を使用して器面にあて、165～168とは逆表現の押引状の結節状文を連続させている。前者の施文が陽ならば、後者は陰である。又、169は口縁に沿い太い凹帯が１条横走する。

ｂ類　170～192が含まれる。焼成はよいものの概して暗褐色系を呈し、壁面調整はよく、とくに内壁研磨されたものが多い。胎土にはいずれも砂粒を含み、器厚は0.7cm前後の中厚手となるもの、１cm前後の厚手となるものがある。又170～176は平縁の口縁がいずれも複合状となり、その肥厚度を増し、口唇部に0.5～２cmの面取りを形づくる。更に口唇上に山形突起を付加するものがあり、肥厚部に三角陰刻文を施すものがある。177、178は平縁口縁部で、178の口唇上には細い粘土紐貼付による加飾がある。179～184、190～192は胴部破片となる。本類の施文はいずれも細い半截竹管による。曲、直線文が器の全面に密接しながら施される。又172、180～182の如く太

い凹帯線が併用されるものもある。185～189は、本類土器の底部破片である。185は底径10.4cmを記し器厚1cmと厚い。器は187～189と共に内傾度を強くしながら立ちあがる。施文は半截竹管による平行沈線で、三角状の無文区画を残す。186は底径10.8cmとなり、底部より1旦直立した後、ゆるく開口する形を示し、斜行する平行沈線が施される。187は底径12.8cm、188、189は底径が共に15.6cmと大きくなる。施文は187が斜行沈線が交又し、188は縦位の、189は横位の平行沈線が、器の全面に施される。

c類　193～195の僅かに3例である。いずれも暗褐色系をとり、器厚は0.6cmとややうすい。193、194は平縁の口縁部で、複合状に肥厚させており、やや太い半截竹管の背で、刺突状の押引文を横に連続させている。195は胴部で地文の横位沈線文上に刺突している。

第13類土器（第24図198）　198の1例のみである。縄文前期終末の晴ケ峰式類似土器であり、焼成、壁面調整共によく褐褐色となる。波状口縁の頂部破片で、器厚1cmではあるが、口唇部は徐々に細まって直に集約する。沈線地文の上に方向を異にする極細の半截竹管を使用して、整った結節状の押引文を2～3条づつ並列施文し、全体としては三角状及至半円状の構図を残す。

（大久保知巳）

土製品（第18図8、9）　土製品をして匙形土製品と土製円盤が出土している。匙形土製品8は柄および匙の部分を若干欠損している。現存部分で幅4.5cm、長さ5cm、深さ2.4cmを計りこの種土製品の中ではやや大形の部類に属する。黒褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は良い。匙形土製品の初源は現在のところ神奈川県川崎市長尾台遺跡の関山期のものであるが、本址出土例はそれに次じものといえよう。前期中葉期のこの種遺物を考えるうえでの好資料といえよう（小林1981「縄文弥生の匙形土製品」信濃34－7）。土製円盤9は、直径3.7cm、厚さ1.0cmの完形品。結節状浮線文を有するところから諸磯c期のものといえる。

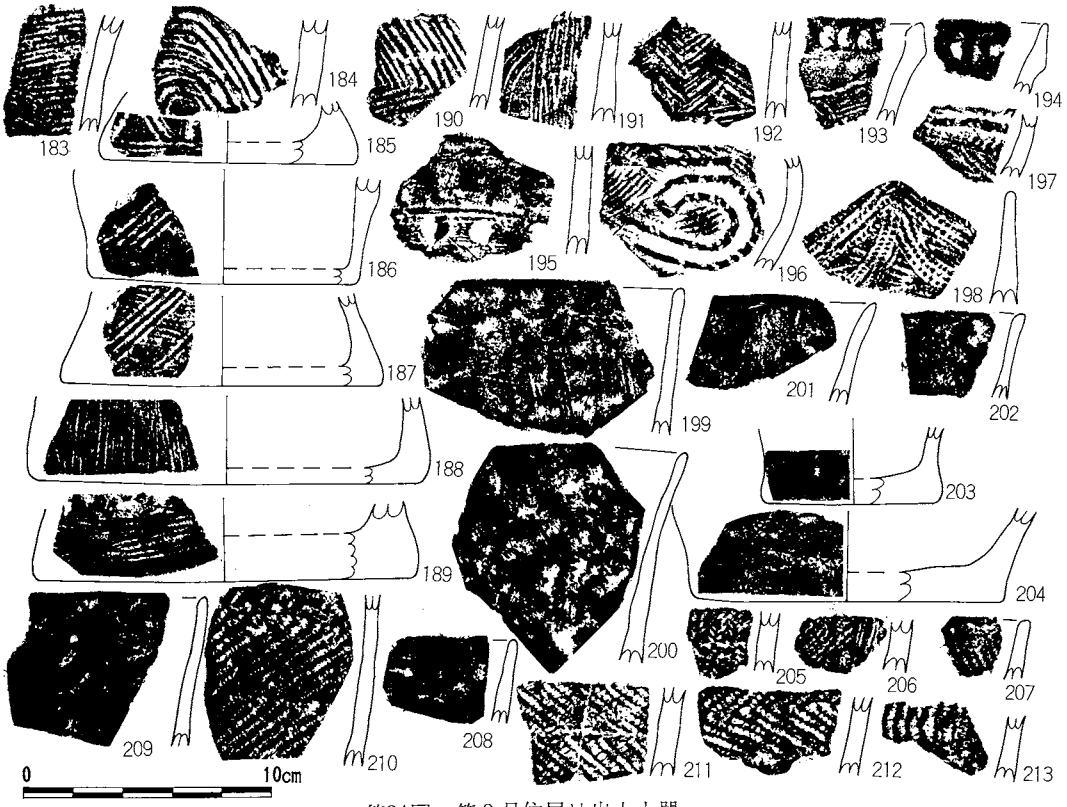
石器（第25、26図）　本址出土の石器は総計84点あり、その内訳は石鏃54、尖頭状石器7、石匙3、石錐3、スクレイパー10、玦状耳飾1、打製石斧3、磨石1、凹石2である。

石鏃は54点中完形25点、欠損34点で、他の住居址出土石鏃に比較してその欠損率は低といえる。1～12は底辺への抉り込みが深く、13～25は浅い。26～31は抉りがわずかに施されている。32～38は抉りがなく平基となるもの、39～44は凸基となるもの、45～49は柳葉形を呈するものである。抉り込みの少ないもの、あるいは全くないものが多いことが特徴として指適できよう。

尖頭状石器55～61は、石鏃に比較して大形で、製作は粗く、加工は主として尖頭部に集中し、他の部分の調整は余り行われていない。形態は石槍状を呈するもの55と、三角形を呈するもの56とがある。55、56、58、61のように概して部厚い剝片を用いることが多いが、57、59のように薄いものを用いる場合もある。

石匙62は先端を欠損しているが、つまみに対して刃部が斜めになり、刃部の作出は鋭利である。63はこの時期特有の三角形を呈する完形品、64は縦型の石匙で、刃部の大半を失なっている。

石錐65～67は大きな柄をもつが、錐部は0.5～1.0cmと短い。65、67は錐部と柄の部分が明確に



第24図　第２号住居址出土土器

区分できるが、66は柄と錐部との区分が不明瞭で、先端になるにつれて次第に細くなっている。

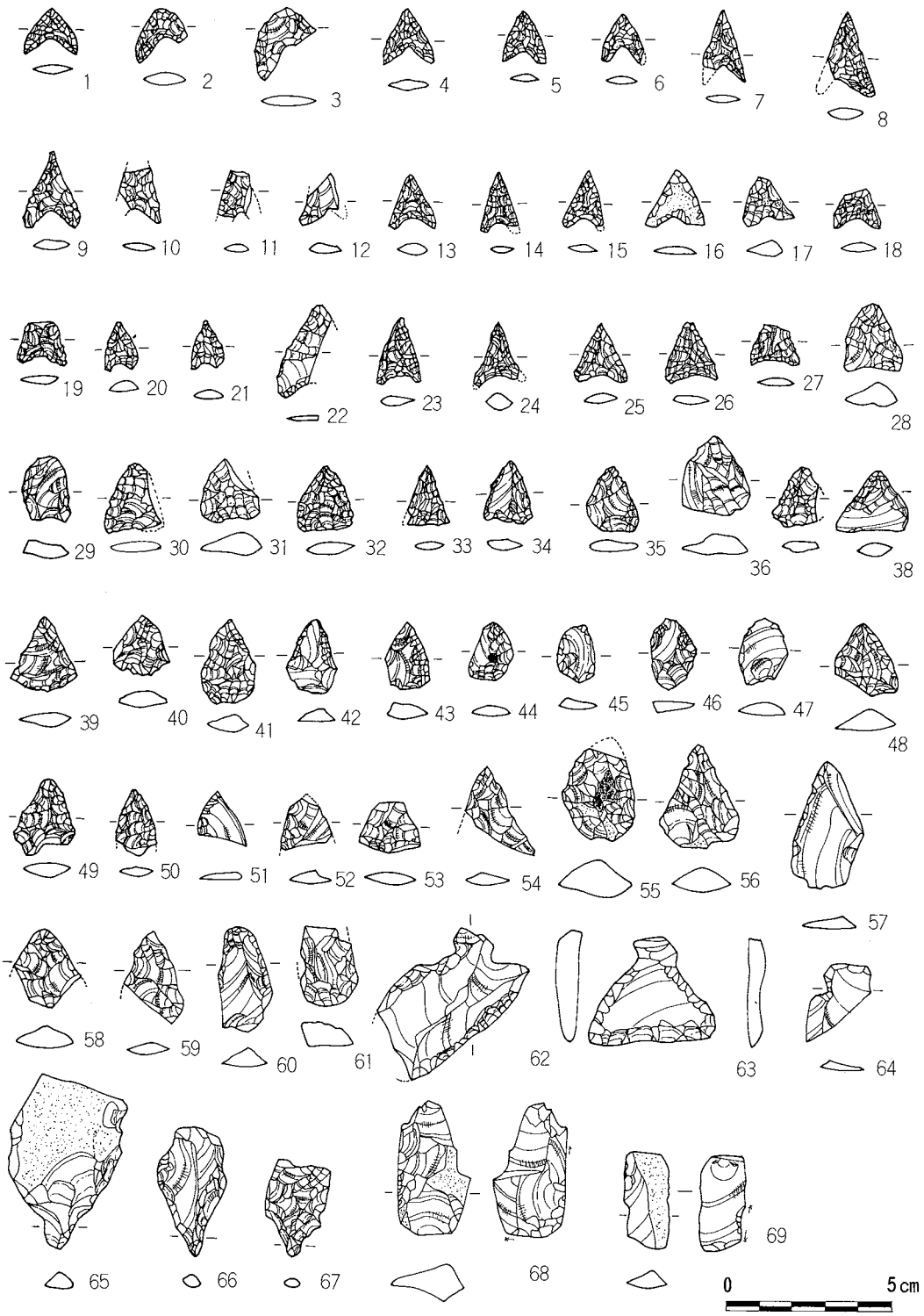
スクレイパー68、69は直刃を、70～75は円刃を、そして76はノッチ状の刃部を有する。比較的厚い剝片を使用している。

玦状耳飾は直径３cm、厚さ0.6cmで、右辺を欠損している。この欠損は当時なされたらしく、再利用すべく、中央部に擦り切りの痕跡が認められる。

打製石斧80は原石面を大きく残し、左辺に数回打撃を加えただけのもので、礫器的色彩の強いものである。81は薄手で、使用のためか刃部右側が極端に減っている。

磨石82は、裏面全面と右側面に研磨痕がみられ、右側面は幅1.5cm、長さ12cmの帯状の磨面となっている。凹石83は表面に２孔を有し、84は表面に深い明瞭な凹みとはならない打撃の集中した部分が認められるものである。

この他、本址からは東壁寄りの床面上から黒曜石の原石が集石された状態で発見されている（第24図）。４～５cm角の原石10個が２～３段に積み重ねられていた。原石の貯蔵と思われるが貯蔵のためのピット等特別の施設は見当らなかった。また本址に黒曜石の剝片が特別多く出土したようなこともなかったため、本址が石器製造のための場所であり、そのための原石を貯蔵したとも一概には言えそうにない。本遺跡から５kmほど離れた中島遺跡（縄文中期の集落址、1979年調



第25図　第２号住居址出土石器

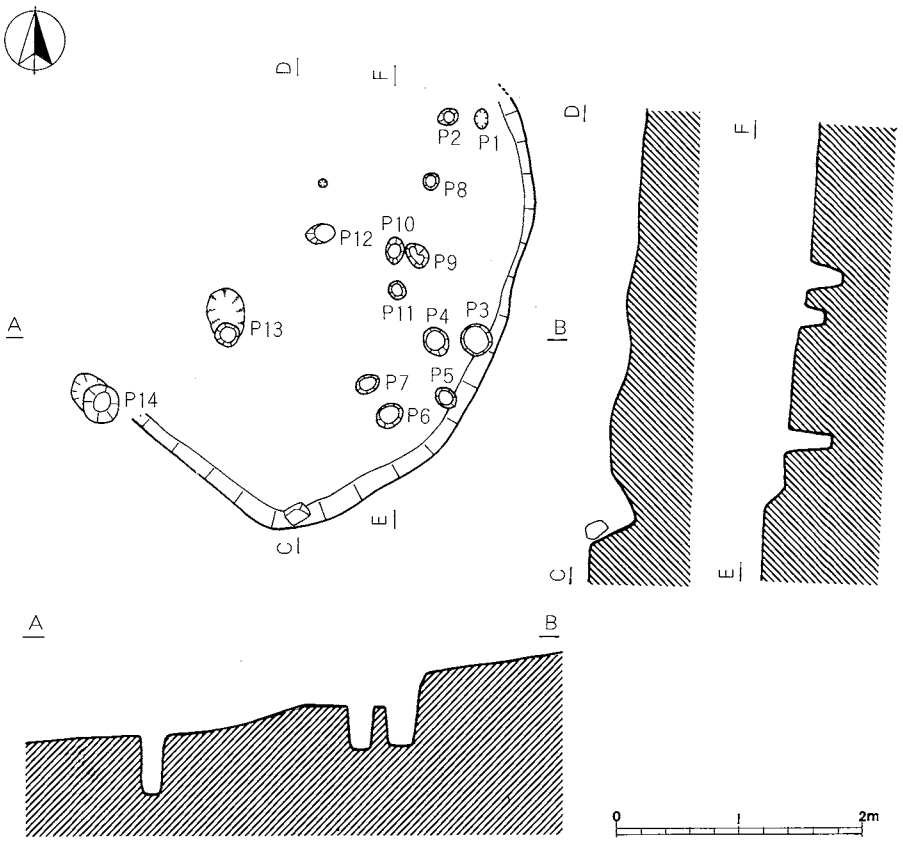
第26図　第２号住居址出土石器・石製品

査）の第19号住居址でも類似した黒曜石の集石が発見されている。石器石材としての黒曜石の交易を考えるうえで良好な資料となるであろう。　（小林康男）

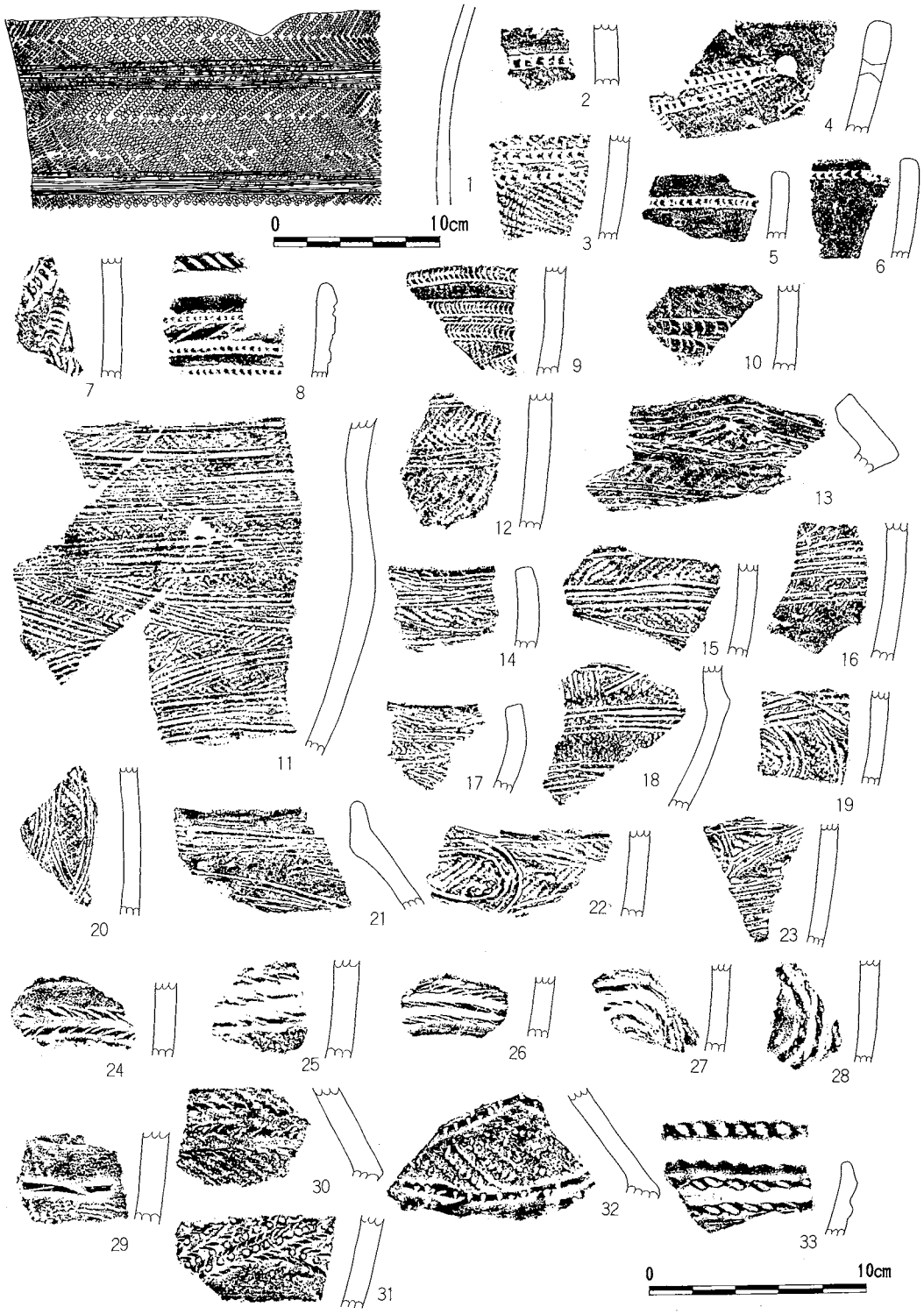
(3) 第3号住居址

調査経過 第3号住居址は今回の調査地域では最北端に位置し、高度的には西に向かって傾斜する傾斜面の中程の地区にあたる。住居址北側は急傾斜をもって下位の水田面に落ち込んでおり、このため住居址の大半は既に流失している。神ノ木式期の第2号住居址は南3mの距離にあり、諸磯a式期の第4号住居址は西方12m、同じく諸磯a式期の第13号住居址は東11mの場所に位置する。

本址はローム層への掘り込みに黒褐色土の覆土が堆積していたため検出は比較的容易であった。遺構掘り込み面の範囲を確認し、覆土の掘り下げを行なったところ、北に向かってやや傾斜する床面が現われた。床面までの掘り込みが浅いことも原因して覆土は層位的に分別することが不可能であった。床面を北側に追求していくと段差をもって若干低いもう一面の床が検出された。こ



第27図　第3号住居址



第28図　第２号住居址出土土器

の低い床面を更に北側に向かって追っていくと、地形が急傾斜に落ち込んでいることに伴って間もなく流失していることが判明した。床面を精査する段階で石製の装飾品（第31図）が発見された。床面の検出後、壁の精査を行ったが南壁がわずかな壁高をもって残存し、その壁面下を中心として幾つかのピットが検出された。

遺構（第27図）　住居址の北側$\frac{2}{3}$は流失し、南壁および床の一部が残存する。残存部分からみる限りやや隅丸方形状の不整円形を呈するようである。直径５ｍ前後の規模を有するものと推定される。床面は壁ぎわ80cmほどの部分は平滑で堅く踏み固められており、良好な状態であった。中央部は壁周辺の床面より５～10cm低い床となっている。この部分の床は北側に向かってやや傾斜し、床面の状態も脆く起伏が激しい。北側への土砂の流失のためこの部分の床面も影響を受けて低くなったのか、あるいは他の遺構との重複の結果か判然としない。

壁は南壁が検出され、ダラダラとした傾斜をなした掘り込みとなっている。壁高は15～30cmを計るが第２号住居址寄りの部分が比較的高く、北になるにつれて漸減している。柱穴と考えられるものは８本ある。P_1（－28cm）とP_2（－40）、P_3（－29）とP_4（－35）、P_6（－28）とP_7（－23）およびP_9（－30）とP_{10}（－24）とが各々対応して配置している。床面の高低の在り方とこの柱穴の配列とを考え合せるとあるいは住居址が重複していたとも考えられる。しかし、セクションの観察においては重複を肯定するような結果とはなっていない。また、出土土器の様相も住居址の重複を示唆するような資料は得られなかった。

なお、住居址の現存部分からは焼土等炉址と思われるものは検出されなかった。

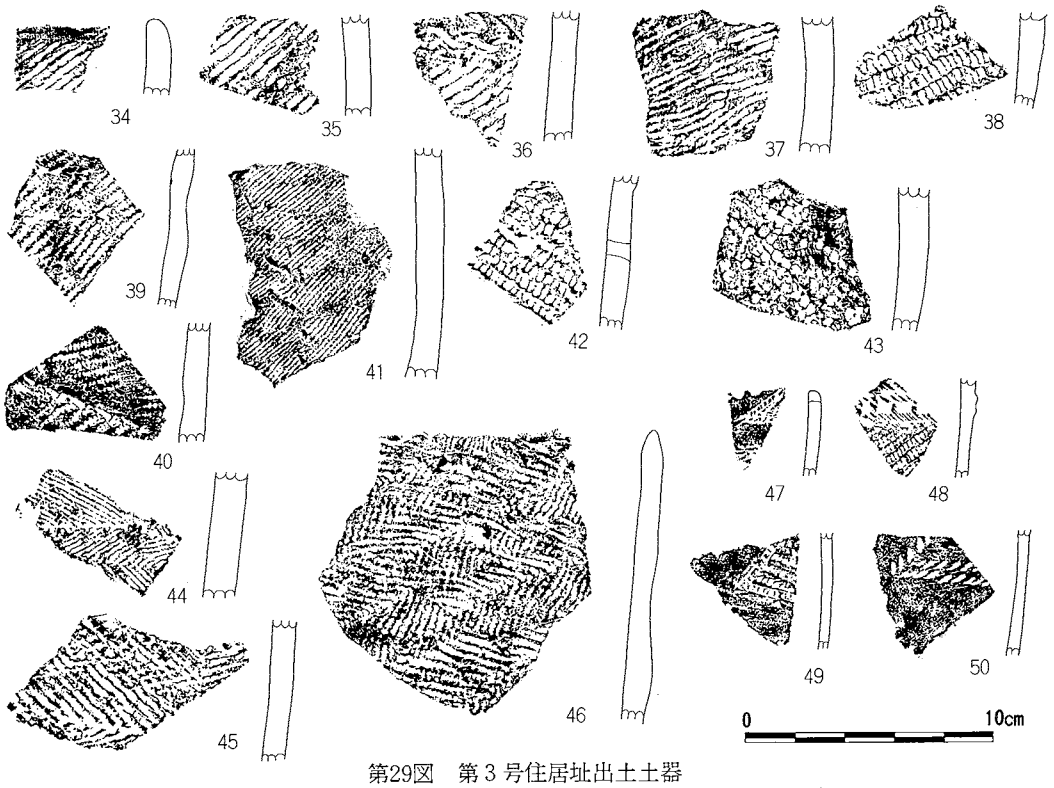
本址は出土土器の様相から諸磯ｂ式期の比較的新しい時期に属するものと思われる。

遺物　土器（第28、29図）本址は北側部分が流失していて不完全な住居址であったということと関連して他の縄文期の住居址に比較すると土器の出土は少量であった。遺物は南壁周辺を中心に、床よりやや浮いた状態で出土している。

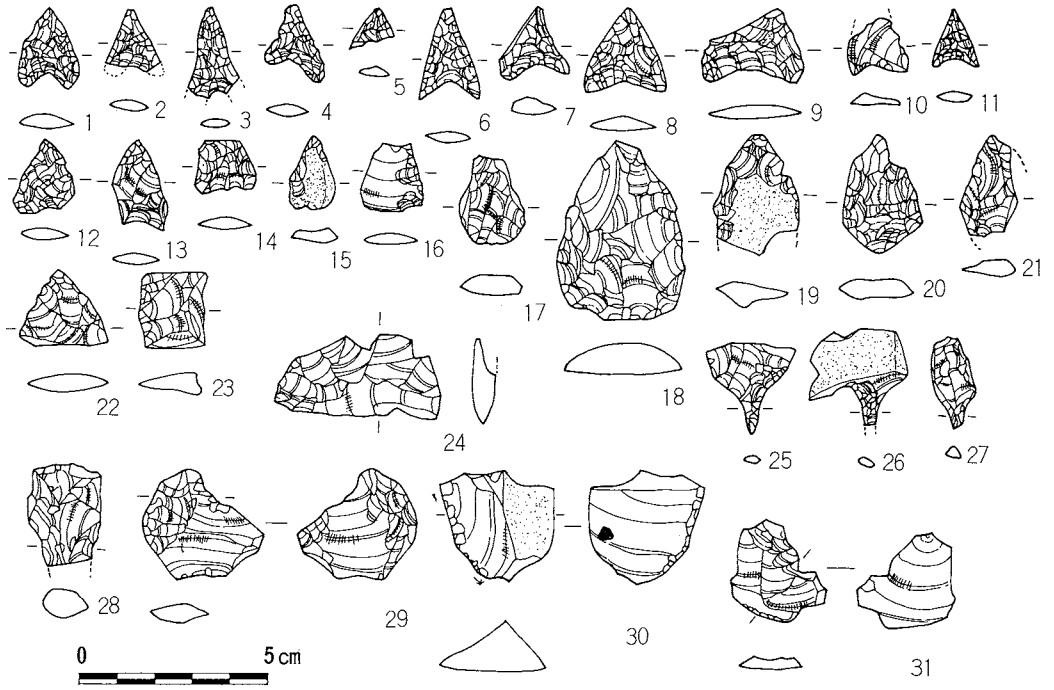
２～10は爪形文を主文様とするもので、４は木ノ葉状に、９、10は爪形文を複数列めぐらし、８は爪形文にはさまれた部分に斜めの沈線を施し、口唇部にも刻みをつけている。

１、11～23は沈線文を主として文様構成された土器群である。１、12は間隔を置いて横走する直線状に、11、15～17は綾杉状と直線状とを密接に、また19、22、23は入組状渦巻文が、そして13、20は孤状に平行沈線文が施文されている。１、15、18、22は地文に粗い羽状縄文を、他は斜縄文を地文としている。器形は13、21のように口辺部が強く内屈するものと、17のやや内屈気味のものとがある。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は余り良くない。

24～33は浮線文構成の土器である。24～31は断面かまぼこ状の浮線で、32、33は幅広で帯状の浮線文である。24～26、30は直線状に、27、28は渦文を描き、浮線上に刻み目を加えている。31は浮線文間に円形刺突文を加え、32は浮線文に刺突している。25、29～32は地文に粗い斜縄文を、24、26～28、33は無文である。赤褐色を呈し、胎土に微量の雲母、石英、長石粒を含む。焼成は極めて良く、非常に堅緻である。器形は口辺で強く内屈する深鉢形と、単純に外方に開く深鉢形



第29図　第３号住居址出土土器



第30図　第３号住居址出土石器

とがあるようである。

34～46は縄文施文の土器である。34～35は無節のＬ縄文。36～43は単節の斜行縄文で、36～41はLR、42～43はRL縄文施文。44～46は羽状縄文施文の土器。縄文施文の土器は一般に胎土には夾雑物が多く、色調は黒褐色で焼成は良くない。

以上の土器は縄文施文の一部を除き、ほぼ諸磯ｂ式に含まれるもので、該期型式の中でもやや後出の新しい段階に属するものである。

これらの土器に関西系統の土器片が若干伴出する。47～50がそれに相当し、極めて薄手である。47、49は爪形文と縄文とを併用し、器面は平滑で、47は全面に赤色彩色されている。48は突帯文と縄文を施文した土器で、突帯上に刻みを施している。47、49は北白川下層IIｂ式に、48は同IIｃ式に該当しよう。50は２段の同一方向と、それに斜交する突きさし文を有するもので清水ノ上II式に相当しよう。

石器（第30、31図）　本址からは石鏃17、尖頭状石器６、石匙１、石錐４、スクレイパー11、磨製石斧１、装飾品１、打製石斧２、磨石２、凹石３の計48点の石器が得られた。

石鏃は17点中、完形が６点、欠損11点で、欠損品が完形品の２倍ほどあり、欠損率は高い。形態は底辺への抉りの深いものは１～４の４点、抉りの少ないものは６～12の７点、平基が14、15の２点、凸基が16、17の２点で、その大半は抉り込みの浅いものが占めている。

尖頭状石器18は、長さ4.7cmの大形品で、加工も鋭くこの種石器の完好品である。19～21は欠損品である。薄手の剥片を用い、加工も比較的丁寧である。

石匙24は横型で、つまみが失なわれている。石錐25、26は横長の大きな柄に細長い錐部が作り出されている。27は縦長の柄に短い錐部が付されている。28も一応石錐に入れたが、あるいは尖頭状石器に属するものかもしれない。

スクレイパー30～33は直線状の刃部を、34～38は孤状の刃部をもつ。素材は30、37、38は部厚く、原石面を大きく残し、31～36は薄手の剥片を用いている。39もスクレイパーの一種であろうか。全周辺に加工を施しており、他の石器の製作途中とも考えられる。

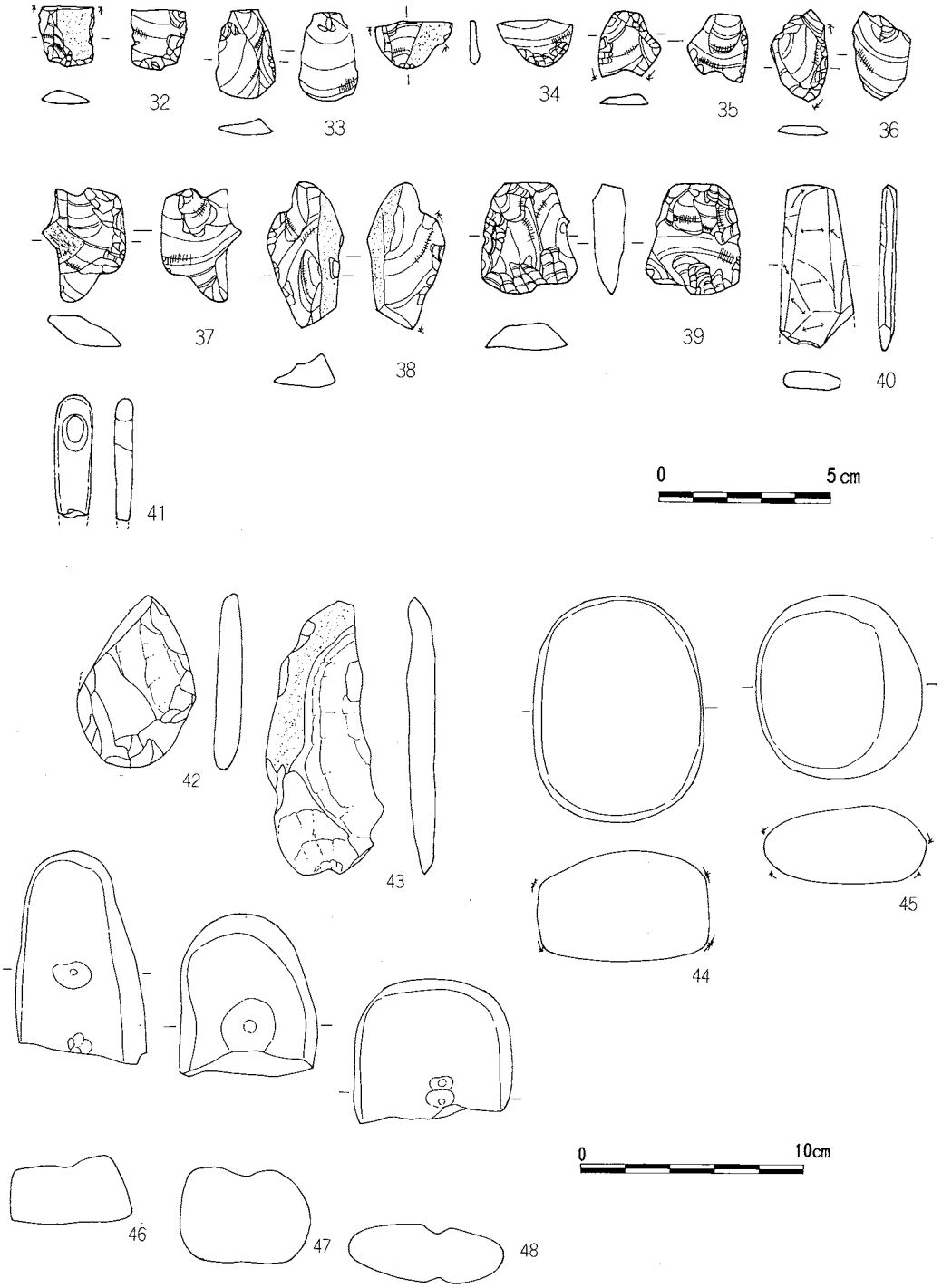
磨製石斧40は、現存長4.7cmで刃部を欠いている。研磨は両縁は斜めに、胴中央は横に、刃部も横になされている。刃部付近を左右に研磨することは他の磨製石斧でも観察され、刃部作出には上下の縦の研磨でなく左右の横の研磨によっていたことが分かる。

41は垂飾りの一種であろう。上部に大きな貫通孔を有し、極めて丁寧に研磨が施されている。

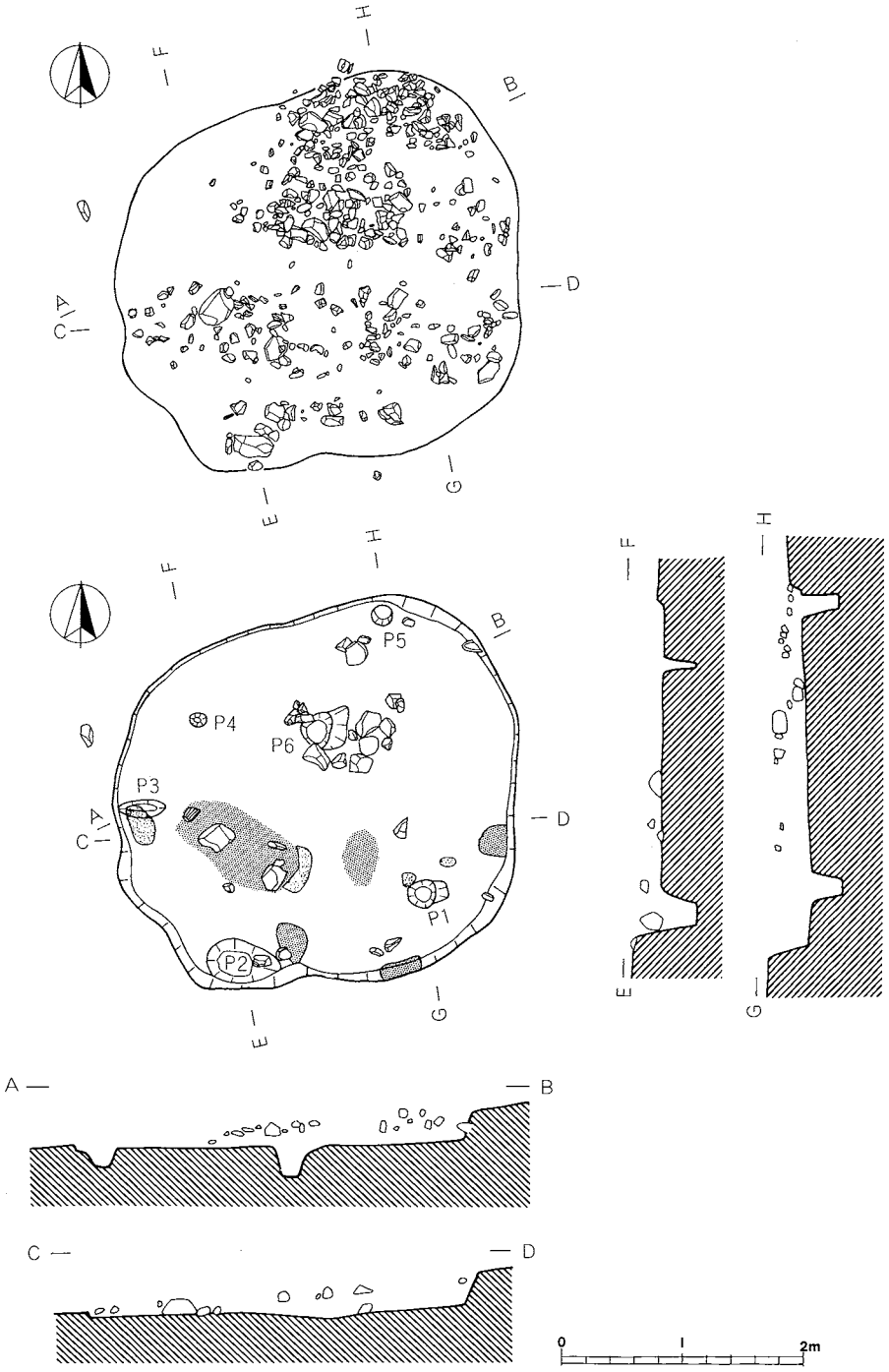
打製石斧42、43は第一次剥離面に余り加工を施さず、粗雑で、形態的にも定形化せず、中期のものとは大きな相違が看取される。

磨石44は全側面にまで研磨が行なわれ、45は表裏面に研磨痕が認められる。凹石46～48はともに半欠品であるが、擦りによって生じた凹みが、46は表面に、47、48は表面両面にある。

（小林康男）



第31図　第３号住居址出土石器（２）



第32図　第４号住居址

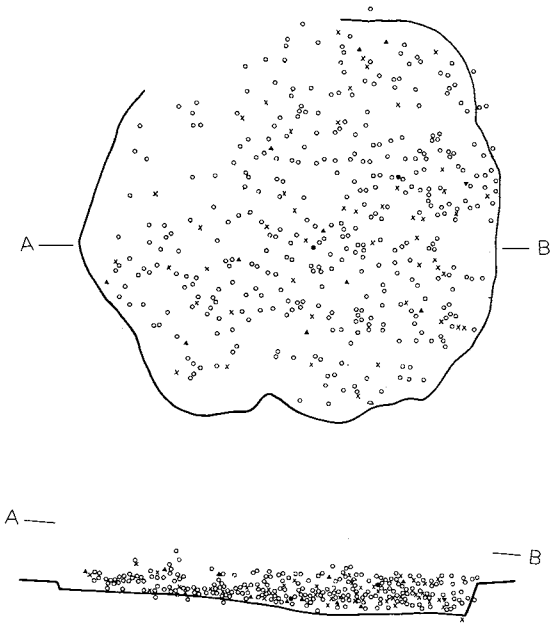
(4) 第4号住居址

調査の経過 本址は調査区北西端に位置し、標高は最も低い。北西部に攪乱があったが、ロームを掘り込んであるため黒色土の落ち込みが容易に確認できた。当初、覆土中より多量の礫が検出され遺物も極めて少ないことから集石あるいは焼石・炭化物の存在から集石炉ではないかと考えられた。しかし、礫を取り除き検出を進めた結果、柱穴等が確認され住居址であることが判明した。覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土、第2層は粘性がほとんどない茶褐色土、第3層がローム粒が混入し粘性の強い褐色土である（第32図)。

礫は全面にわたって検出されているが、特に北部に密集している傾向があり、礫と礫の間には遺物を含んだ覆土がはいりこんでいた。なお中央のベルト状に礫のないところは攪乱によるものである。礫は安山岩、砂岩が多く、破角礫がほとんどで円礫は極めて少なく、また、この住居に限って多量の礫が検出されたという特殊性から、流れ込みによる自然的なものではなく、住居址廃棄後に人為的に投げ込まれたものと考えられる。

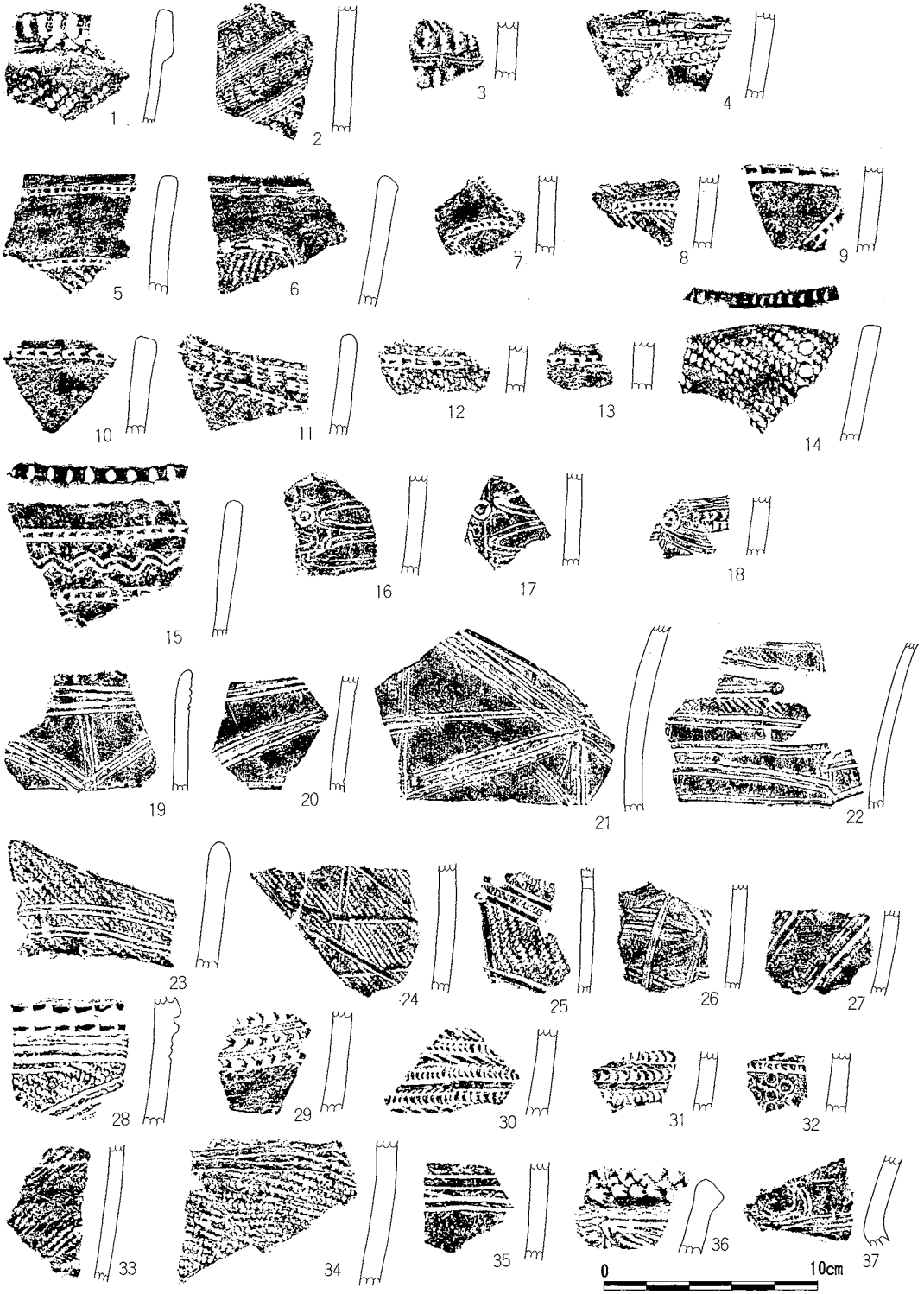
礫を観察してみると、最終的には総数1009点にも達し、うち焼石は80点で8％弱みられ、炉のある南部ではなく北部に比較的多く、特にP_5を中心に集中していたが、付近には炭化物・焼土は全くみられなかった。大きさについては、最大のものでも30cm程度であり、ほとんどが小さな角礫である。

遺構（第32図） 北西部の壁が不明確であったが、プランは直径3.4m程度の小形の円形である。床はロームの掘り込みによるもので、ほぼ水平であり全体的に比較的やわらかかったが、中央やや南東の160×50cmの部分はよく踏み固められていた。壁については全周囲垂直に掘り込まれており、東壁・南壁は良く掘り込みが残っているが西壁・北壁は、攪乱のため壁の上部がなく不明確であった。



第33図 第4号住居址遺物出土状態

炉は地焼炉で南東部の焼土を中心として炭化物の散乱している120×35cmの範囲である。中央西よりの2つの礫は焼土の中に埋っており炉に関係したものと考えることもできる。その他、焼土が確認された部分が3ヶ所ある。西壁中央南よりの黒色土をかなり含むものと、南壁中央付近および西よりの焼土粒・3～4cmのブロックを含むと

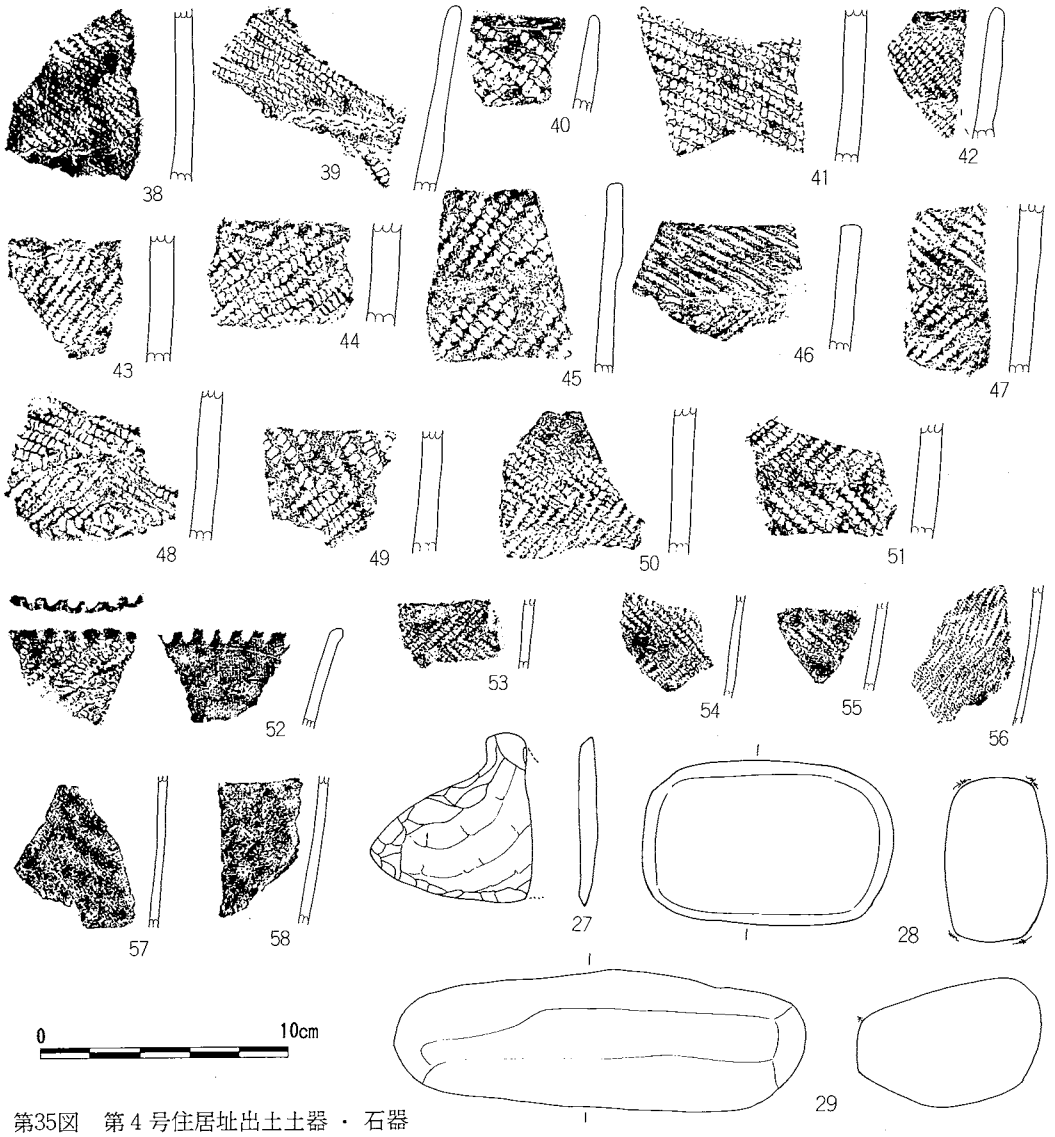


第34図　第４号住居址出土土器

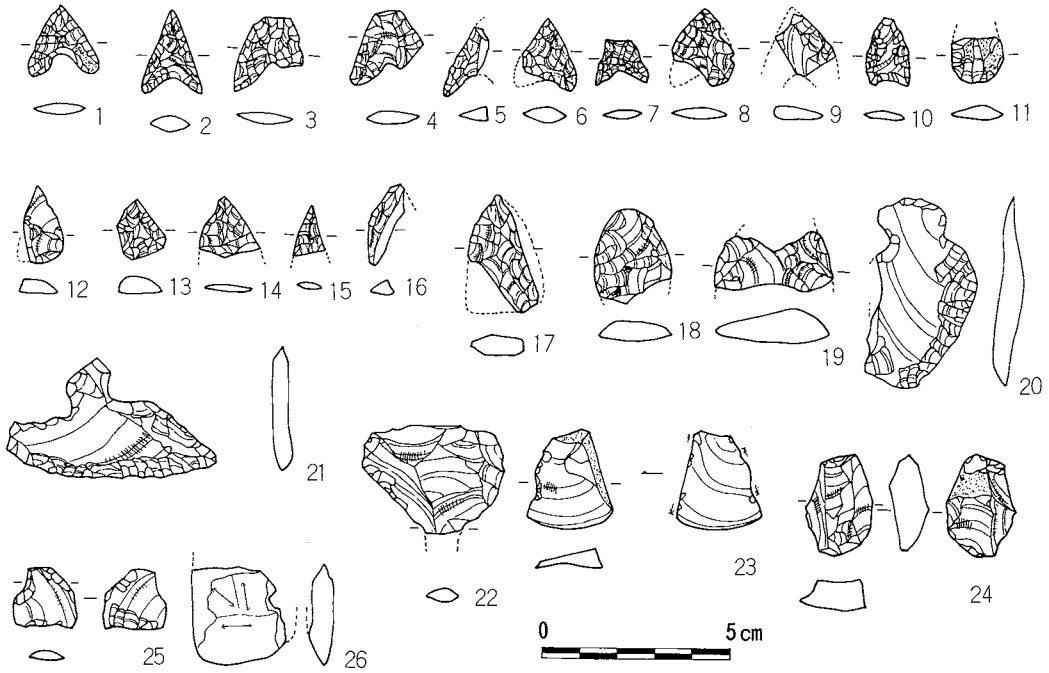
ころである。炭化物は南部において覆土の茶褐色土・褐色土からコンスタントに検出されたが、大きな境はみられなかった。

ピットはP_1～P_6が確認され、主柱穴はP_1・P_2・P_6の三本柱であると考えられる。P_1付近は比較的礫が少なく炭化物がみられ、P_2には30cm以上の角礫がはいっていた。P_6付近には多量の礫があったがP_6にはいりこんでいるものはなかった。

遺物は覆土中、全面的に出土したが量的には極めて少なく、また一括土器もみられず、すべて破片であり、床直上のものは、ほとんどなかった。石器についても、石鏃・石錐・石匙、磨製石斧、磨石・凹石と他の住居址に比べて少量であった。本址は諸磯ａ式期に属する。（大竹庄司）



第35図　第４号住居址出土土器・石器



第36図　第４号住居址出土石器

遺物　土器（第34、35図）　本址出土の遺物は、住居址上面を覆った礫の中から特別集中することもなく出土している。土器は全形をうかがえるものはなく、小破片が大半を占める（第33図）。

１～３は神ノ木式に属し、櫛状工具による刺突および同一工具による平行沈線文とが施される。１は有段口縁上に施文され、器厚は６㎜と薄手である。４は平行沈線文間に、列点状刺突文を施文する有尾式土器の胴部破片である。

５～13、15は爪形文を主文様とする土器である。５～８は爪形文による区画文と磨消縄文が併用され、11～13は斜縄文を地文とし、押引状の爪形を施している。これらの土器は赤褐色を呈し、胎土に雲母、石英粒を含み、焼成は堅緻である。15は爪形文間に平行沈線による波状文を配し、口唇部には刻みを施している。16～18、22、23は平行沈線による助骨文に円形竹管を押捺するもの。22、23は斜縄文を地文とし、18は爪形文を併用する。一般に薄手で、暗褐色を呈し、焼きは良い。19～21は平行沈線文のみによって構成され、助骨文の変化形と思われるもの。26、27もこの部類に属するものであろう。24、25は斜縄文を地文とし、格子状の平行沈線を施文するもの。以上は諸磯ａ式に属し、本址出土土器の主体を占めるものである。28～32は爪形文土器で、28は縄文、平行沈線文を、32は円形竹管文を併用する。33は縄文地文の浮線文施文の土器。34～37は縄文地文に半截竹管文で平行沈線による入組文を描くものである。以上は諸磯ｂ式に属する。

38～51は縄文施文の土器である。38～42はＲＬ縄文を、47～45はＬＲを、46～51は羽状縄文を施文する。１・２は綾絡文を伴う。ほぼ諸磯ａ式に伴出するものであろう。

52～58は関西系の土器である。52は口唇部および内部に刻み目を有し、表面には斜縄文を施文する。53、54は羽状縄文を、55、56は斜縄文を施し、57、58は無文の土器である。暗褐色を呈し、極めて薄手で堅緻である。

石器（第35・36図）本址からは石鏃16、尖頭状石器３、石匙３、石錐１、スクレイパー２、ピエスエスキーユ１、磨製石斧１、磨石２の計29点の石器が出土している。

石鏃は16点中、完形４点、欠損12点で、破損率はかなり高い。１～５は底辺への抉りが深いもので、６～８は浅いもの、10は抉りがほとんどなく、11～13は凸基のものである。形態は全体的にずんぐりしたものが多く、作りは概して粗雑で、４、９、11、12など第一次剥離の剥片にわずかな調整を施したものである。

尖頭状石器17～19は全形をうかがえるものはないが、柳葉形を呈するものと思われる。加工は17、18は丁寧に、19は雑になされている。

石匙20は左辺の一部を欠く縦型で、縦長の剥片の右辺に集中的に加工を加えている。21は横型で、刃部の加工は丹念である。27は大形石匙の破損品で、中期に伴出する粗製大形石匙に類似する。この石匙がこの４号址に確実に伴うものであるとすれば、この種の石匙が前期後葉まで遡ることになり注意される。しかし調査地区南側では中期の遺物が若干出土しているが、あるいは、この時期のものが混入したものかもしれず、確実に４号址に伴うものか若干疑問が残る。

石錐22は錐部を全く失った、大きな柄のみのもの。スクレイパー23は直線状の刃部を、25は孤状の刃部を有する。ピエスエスキーユ24は断面台形で、上下および左辺から剥離がなされる。
磨製石斧26は刃部の一部を残す残欠品で刃部付近は横に、胴部は上下に研磨が行なわれている。

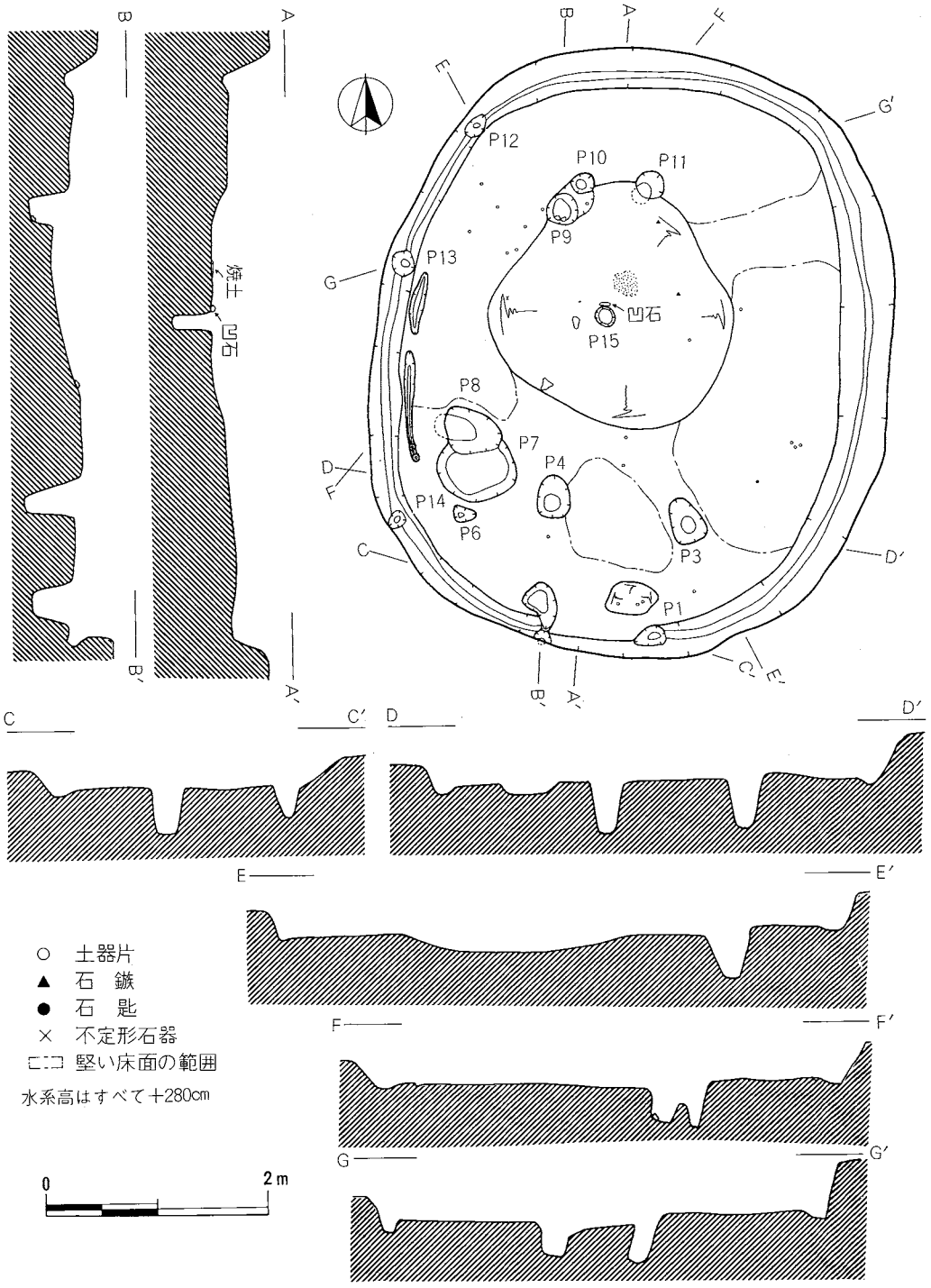
磨石28は、全面平担にきれいに研磨され、典型的な磨石である。29は礫の一頂頭面に縦長で幅の狭い磨面をもつもので、早期押型文土器に伴出するとされていた特殊磨石に類似する。最近の研究では使用時間がより幅広いことが確認されつつあるが、本址の例もその一証左といえよう。

（小林康男）

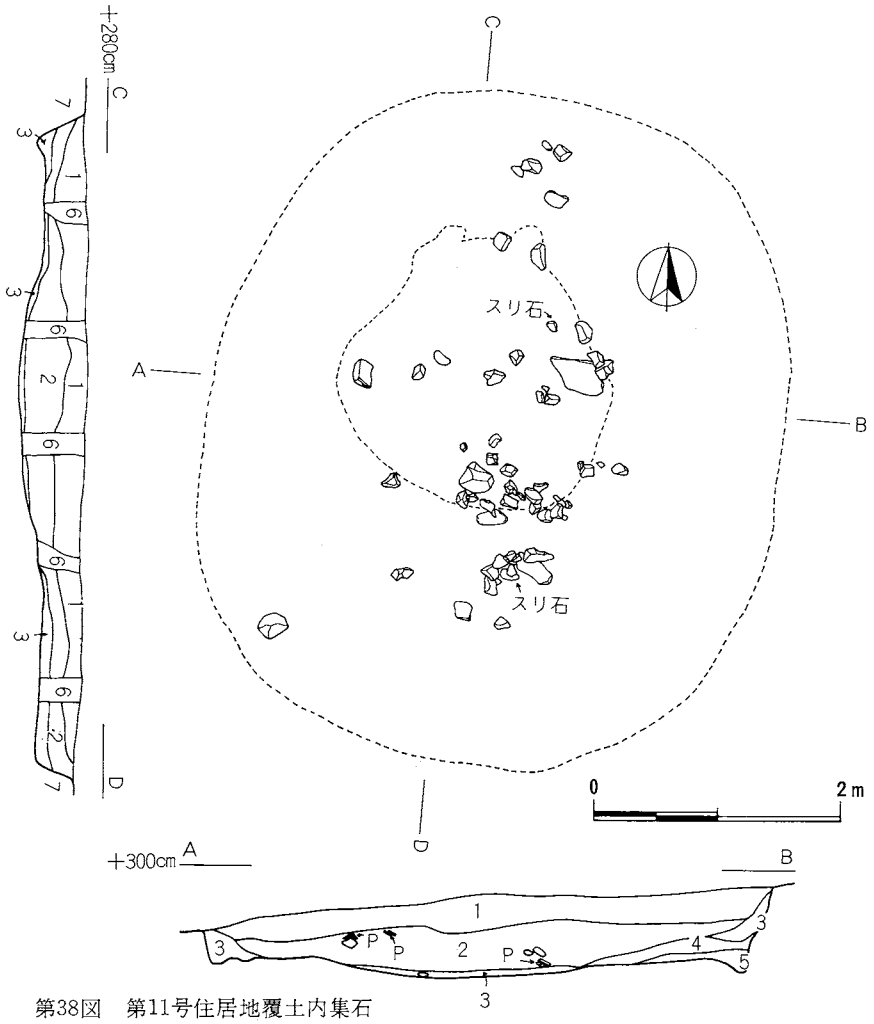
(5) 第11号住居址

調査の経過　本址は調査区域内の北東隅に近い、Ａ－12～13とＢ－12～13の四区にわたり検出調査された住居址である。第１号住居址に隣接するものの重複関係はない。また、遺構確認面（黄土層上面）が現地表下15～30cm前後と浅いのに対し、巾15～20cm前後の耕作による攪乱溝が東西方向に５本走っている程度で、残存状態は良好であった。住居平面形態は、長軸540cm・短軸470cmの隅丸方形に近い小判形を呈し、南壁中央部に推定入口施設・床面中央やや北寄りに220cm×220cm（最深部－15cm）の焼土をともなう落ち込みを有する。遺構確認面は、北東から南西にかけて傾斜しており、最高所の住居址北東隅標高＋286cm、最低所の南西隅標高＋242cm・西壁中央標高＋247cmと40cm前後の比高差がみられる。主軸方向Ｎ－10°－Ｅ。総床面積16.8m²。出土遺物から縄文前期有尾式期に属する住居と推定される。

遺構（第37図）　**覆土**：覆土は概して明黒色土で、自然堆積状態を示し、第38図に示すように



第37図　第11号住居址



第38図　第11号住居地覆土内集石

5層に分けることができた。第1層は硬くやや粘性をもった土で、直径1～2㎜の黄土粒と小石を含む。炭化物が全面にわたり多量に混入されている。第2層は覆土内集石（第38図）を含む層で、第1層とほとんど同じ土と思われたが、含まれる黄土粒の直径が1～5㎜と大きくなりかつ量も多くなるため、第1層と分離し第2層としたものである。第3層は黄土層との漸移層に似る明黒褐色土で、非常に硬い土であった。直径5㎜程の黄土粒が多量に含まれるが、炭化物の含有は認められなかった。第4層は黄色土と黒色土の割合が半々に混じる柔かい褐色土で、この層の下層に堆積する第5層が黄色土であることから、この層は第3層と第5層との漸移層ではないかと思われる。第5層は明黒色土粒をわずかに含む粘性の強い黄色土で、壁の状態からこの層は壁が崩れたことにより形成されたものと推定された。なお、図中の第6層は耕作による攪乱層、第7層は粘性の強い硬い黄色土（砂質ローム）層である。

床面：比高差3～6㎝位の若干の凹凸が見られるものの、良好な床面がピットの集中する南西

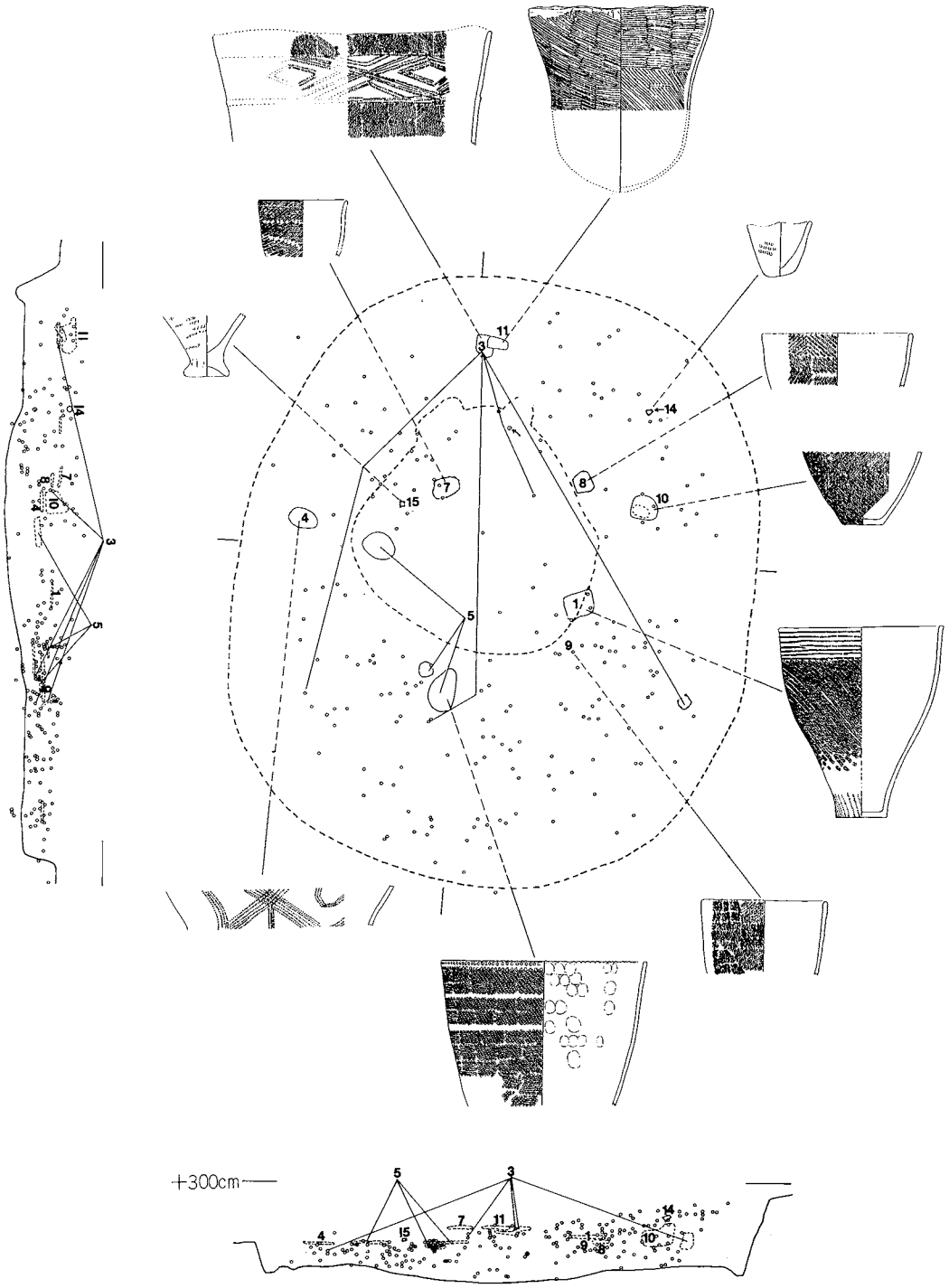
部の床面を除き、ほぼ全面に残されていた。床面の土は、黄色土層上面に黒色土と黄色土の混合土を薄く敷き、それを固めたものであった。壁溝（－5cm～－10cm）は、南壁中央部の入口施設と推定される部分を除き全周しており、P12・P13・P14の3つの柱穴が壁溝内に認められた。また、西辺中央壁溝ぎわに、長さ170cm・深さ－5cm前後の溝が検出されたが、この溝の南端にも小さなピットが2個検出された。この他、なだらかな傾斜をもった落ち込みが、床面中央やや北より（規模前述）と南壁中央壁ぎわ（50×35cm・最深部－7cm）の2ヶ所で検出されている。この2ヶ所の落ち込み以外の床面直上から、土器片17片・石匙1点が出土している。

落ち込み：前述前者の落ち込みは面積3.5m²と総床面積の20%近くを占める大きなもので、薄く焼土も分布しておりかつ中央部に落ち込み内床面からの深さ－35cmのP15を有している。炉もしくは何らかの施設を想像させたが、炉址にしては焼土分布が少なすぎ、かつ範囲がかなり広いこと等から、断定できうる要素がないため、この落ち込みの住居址内における居住者生活に供する役割は不明である。落ち込み内床面直上より、石鏃2点・凹石1点・不定形石器1点・土器片1片が出土している。後者は、推定入口部のそばにあり、覆土が黒色土でかつ黒曜石剥片が多量に出土した。位置的にみてP3・P4間にある堅い床面との関連性も充分考えられる。落ち込み内床面直上より土器片3片が出土している。

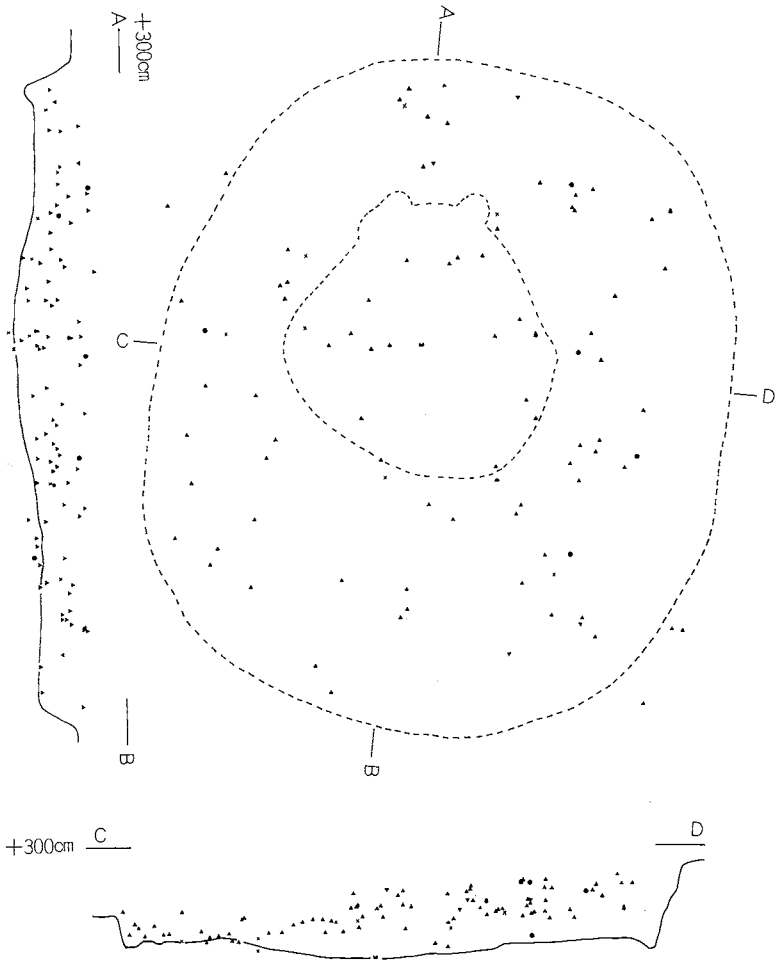
ピット：ピットは全部で17個検出されたが、P7が断面タライ状を示すのみで他はすべて柱穴形のピットであった。このうちP3・P4・P9の3個が主柱穴と考えられる。四本柱と推定して、柱穴が存在すると思われる床面部分をくまなく精査したが、何も発見することができなかった。これは、最初からなかったものか、あるいは攪乱溝により欠失したかのどちらかであろう。P15が主柱穴としての役割を果たしていたのかもしれない。P1・P2・P5の3個は入口部施設を構成するピットと考えられ、P7を除きその他のピットは支柱的役割を果たしていたものと思われる。これらのピットが住居址主軸線より主に西側に集中して検出されている点であるが、この遺跡の立地が、東方背後に山を抱え、西方に松本平を望むという地形的条件を持っているからではないかと思われ、当時の気候条件や住居址上屋構造・修築等を考える必要があろう。参考までにそれぞれのピットの深さは、P1－29、P2－38、P3－45、P4－43、P5－9、P6－11、P7－10、P8－49、P9－33、P10－41、P11－40、P12－10、P13－13、P14－18、P15－35cmであった。

壁：壁はほぼ垂直であったが、西壁のみなだらかな傾斜をもった凹凸が見られることから、崩れたものではないかと思われた。床面から遺構確認面までの各部壁高は、北東隅46、東中央61、南東隅28、南中央31、南西隅20、西中央21、北東隅21、北中央34cmであった。

覆土内集石：土層図第2層内において集石が検出された。住居址の中央部分に存在しているが、石の並び方には統一性はみられない。本址出土の大きな土器片あるいは復元可能な土器は、主にこの集石内か集石と同じレベルから出土している。すり石2点が含まれる。攪乱溝があるため、相当数の石がすでに抜かれているものと思われる。



第39図　第11号住居址土器出土状態



第40図　第11号住居址石器出土地点

遺物　今回の調査では、石器ならびに土器片の出土地点を実測図内に記入した。

土器については、大別して土器片１片の単独出土と複数出土（一括土器）の二通りの出土の仕方があげられるが、本址の場合、前者はほぼ全体に平均して出土しているものの住居址南半分に集中する傾向がみられ、後者はすべて床面より10cm以上浮いて出土するという特徴がみられた。また、一括土器はほとんどが土器内面を上にしての出土であった。

（山本紀之）

遺物　土器（第41、42、43、44、45、46、47、48図）本址における土器の出土状態は、検出面においては極めて少なく、覆土を10cm程掘り下げたあたりから出土量が多くなり、遺物出土層は約20cmほどの厚みをもって堆積していた。この土器が多量に出土した部分は床面より約10cm上位であった。器形、文様構成のはっきり分かる土器のほとんどがこの土器堆積層の上部に水平位の状態で出土しており、これらの土器が一括資料として使用可能なものであることを強く印象づけていた（第39図）。

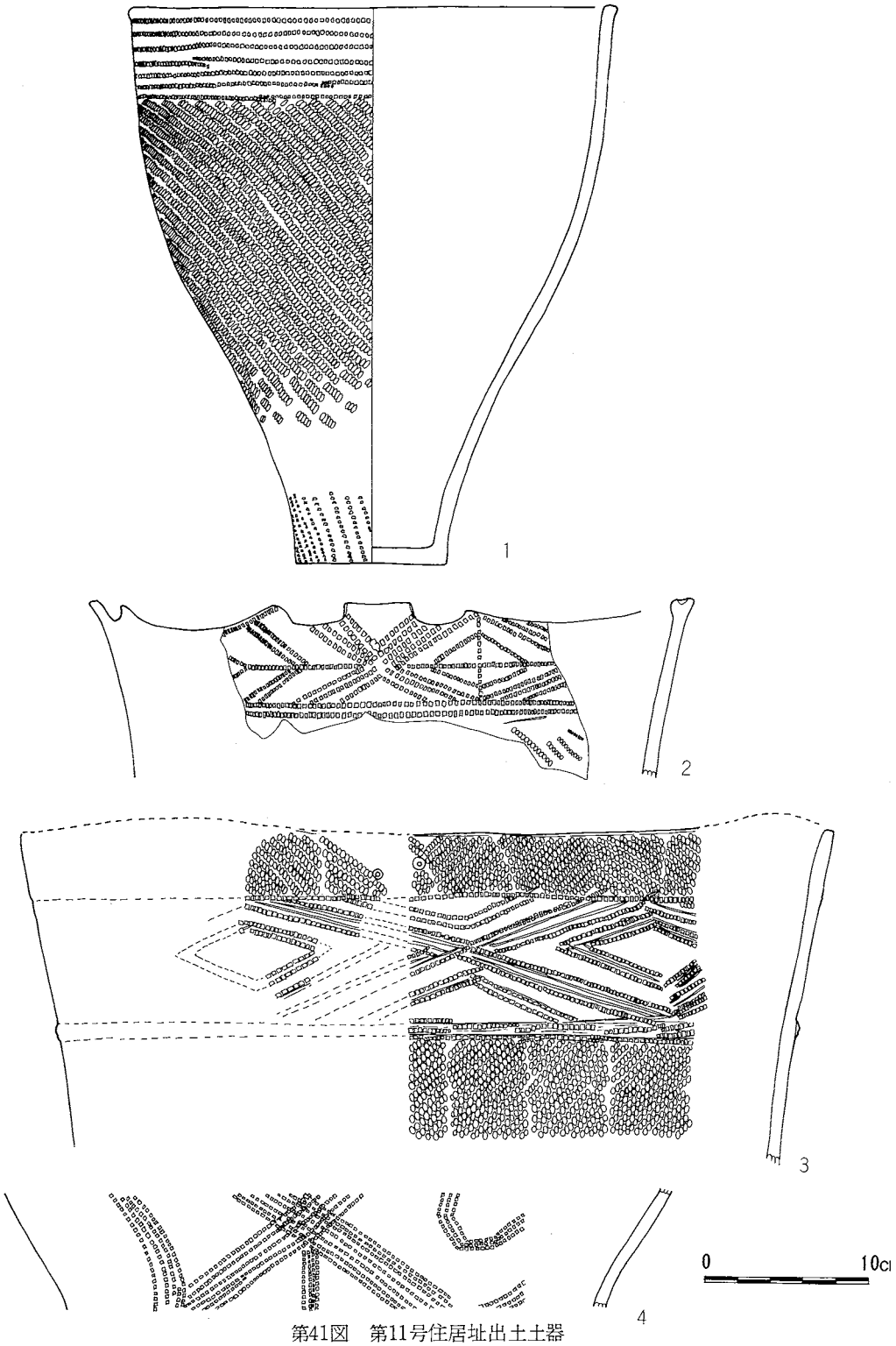
出土した土器はほぼ有尾式期の単一時期に限られるが、他にわずかに神ノ木式の破片が混入した状態で発見された。神ノ木式に相当する土器は特に集中して出土することもなく散在する状況での出土であった。神ノ木式に属するものは第41図１～27に図示したものが出土した全ての資料である。１～20は櫛歯状工具による刺突または同一工具による平行沈線文を施文したものである。口縁部は１、２、４～10が口唇部を平担にしているが、丸味をもたせているのは３のみであり、口唇部は平滑なものが一般的である。2･4は有段口縁である。１～７の口縁部文様は櫛歯状刺突文が縦に２段施文されている。施文は左回りに、また上の段から下の段にかけて行なわれ、施文工具を斜めに器面に当て、やや押引き状に文様を描出している。そのため刺突文はやや横長のものとなり、有尾式の刺突文とは異質な文様となっている。なお施文工具は歯数６本の櫛を用いている。８～９は口縁下に隆帯を貼付し、その上に刺突を一段加えている。また10は２本一組の刺突文で三角形状を構成し、それを更に沈線で囲んでいる。11～19は口辺部下の破片である。11・12は口縁部に施文された縦の櫛歯状刺突文と同じ文様が施文され、11は疎に、12は間隔のない程密になされている。13～14、17～18は斜位に沈線文と刺突文とを交互に施す。16は沈線文と刺突文とが併用されたもので、10と同様の文様構成をもつ。20は縦に一列刺突を加え、その両側は同一工具により平行沈線を描いている。これらの土器は、深鉢形を呈し、器厚は概して薄い。胎土には夾雑物が少なく、精選された胎土が用いられ、色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。

21～27は有段口縁で、口唇部は平担に整形されており有段上に箆状工具による刺突を縦に加えるものを主体とする。21・26は２段、27は不規則に、他は１段の刺突が施され、23・25は工具の先端がわずかに櫛状に加工されていたらしい。口縁下には21、24、25のように縄文を施文するものと、23のように沈線を加えるものとがある。これらは１～20の土器よりも薄手で、色調は暗褐色を呈し、文様、製作とも異質である。

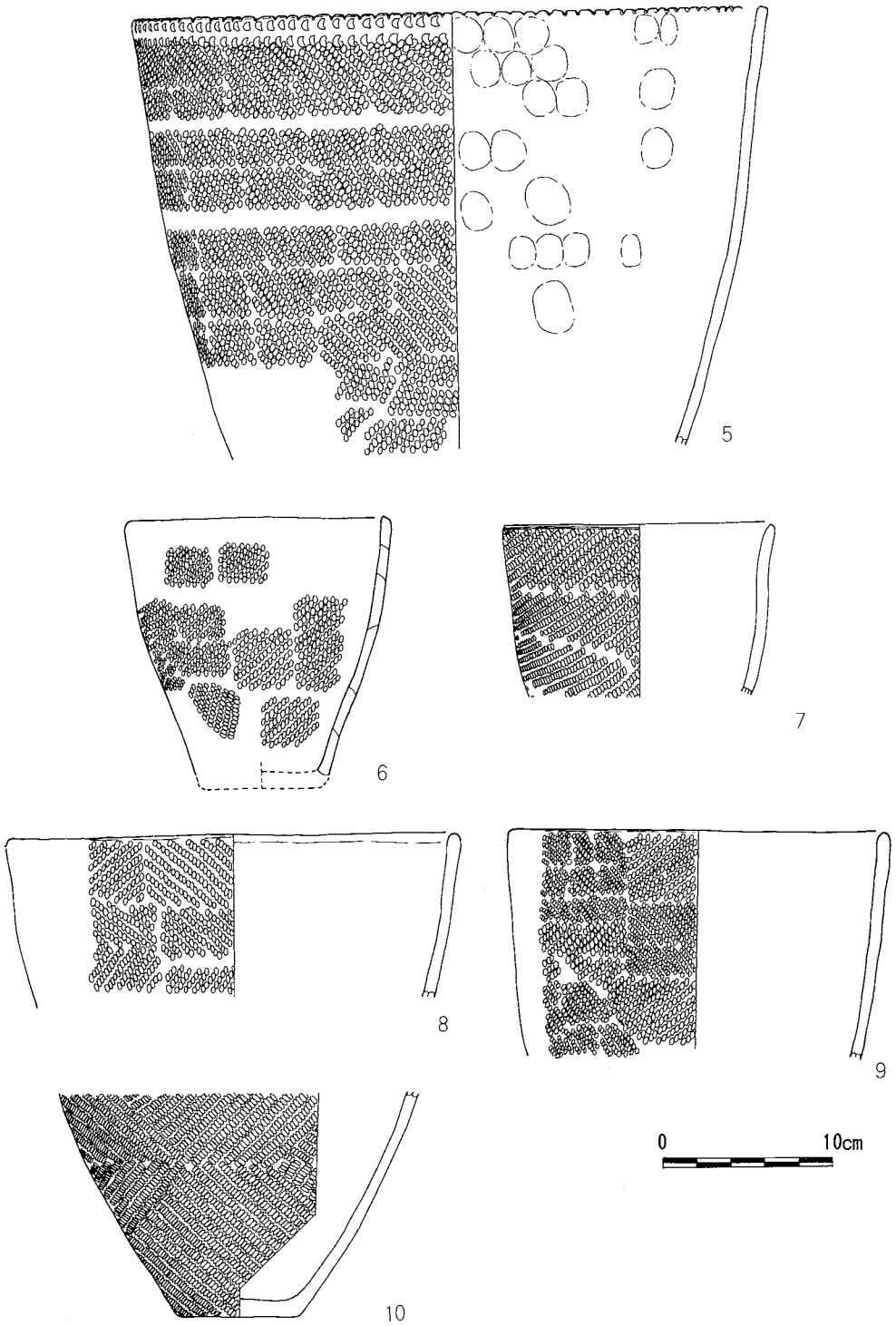
次に本址出土土器の主体を占める有尾式土器について概述する。

本址出土の有尾式土器は深鉢形を主とし、口縁部形態は平縁と山形とがあり、主文様帯が口辺部に施文されるものと、胴部上半部に施されるものとがある。口縁部形態と主文様帯との在り方によって幾つかの種類に分類される。

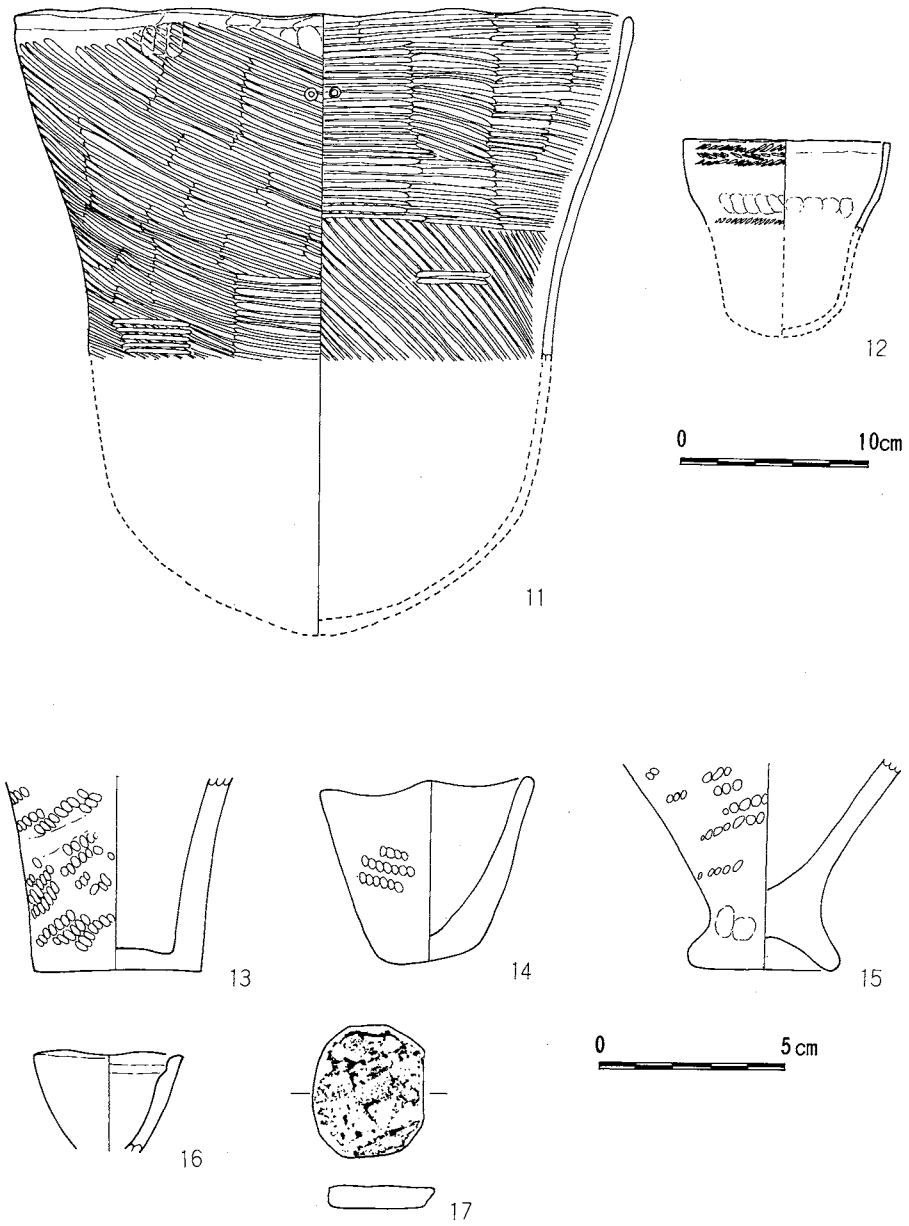
口縁平担で、口辺部に主文様帯のあるもの。これに属するものは第41図１、第44図28～36があげられる。１は全形が復元された唯一のもので、住居址中央やや東寄りの地区から出土した。口径29.6cm、底径９cm、器高33.2cmで、胴部がやや張り気味に口辺にかけて大きく開く深鉢形土器



第41図　第11号住居址出土土器



第42図　第11号住居址出土土器



第43図　第11号住居址出土土器(３)・土製品

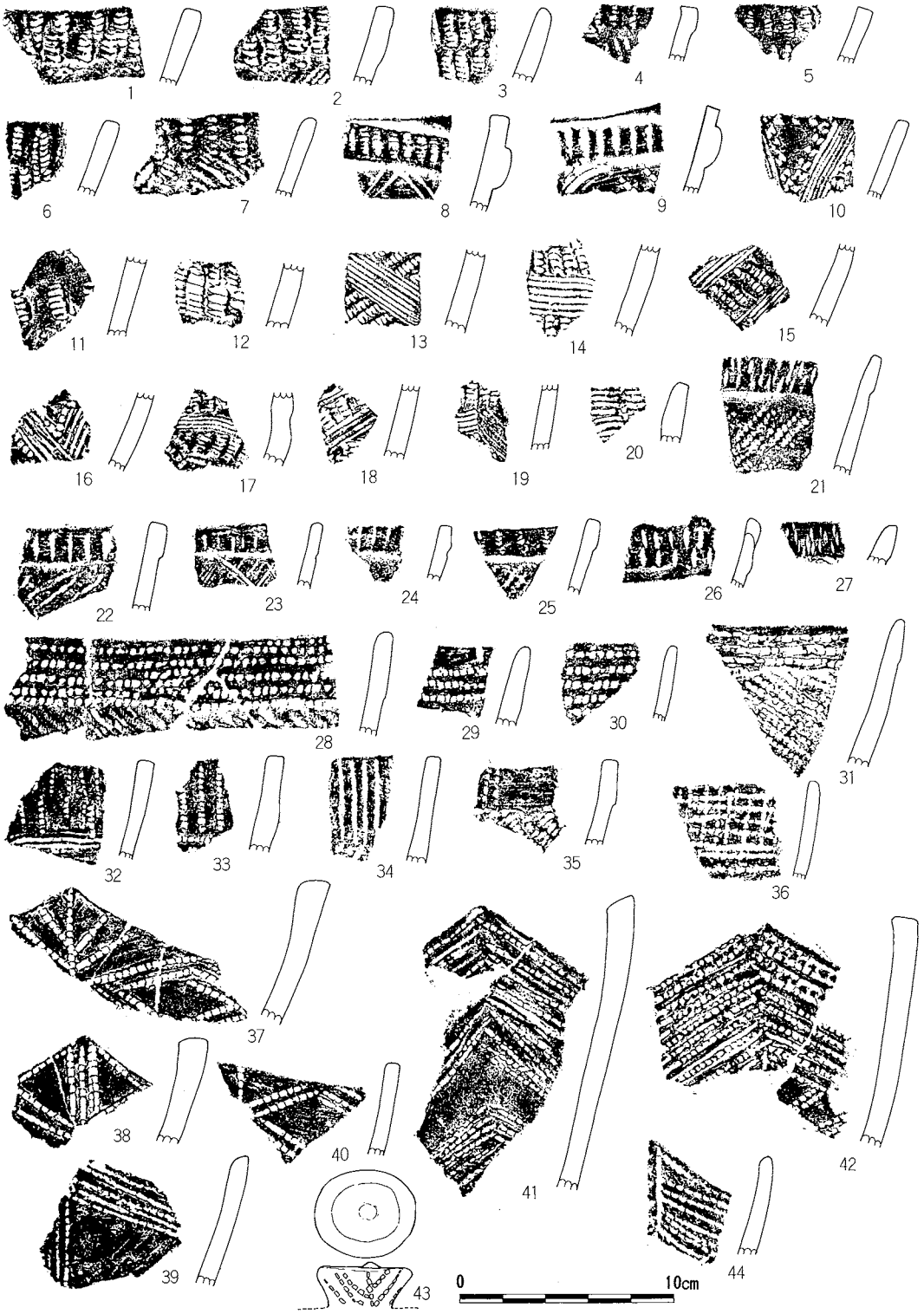
である。文様は口辺部に、列点状刺突文を0.5～1.0cmの間隔で横に７条施文した６cm幅の文様帯を主とし、胴部にはＲＬ縄文を密に施し、底部付近には口辺部文様と同一施文具による列点状刺突文を斜めに刺突している。列点状刺突文の施文は、一辺２～３mmの小さな四角い７本の櫛歯を器面に対して直角に刺突することによって描出されている。有尾式におけるこの種文様は全てこ

のような施文法によっており、前時期の神ノ木式の刺突文が器面に対して斜めに押引き気味に刺突されていることと対照的である。胎土は長石、砂粒を若干含むが混入物は少ない。色調は上半部が暗褐色、下半部が黄褐色で、器厚は薄く、焼成は良い。28～31も類似した文様構成をとるが、1より列点状刺突文は大きめで、文様帯は2～3cmと幅が狭い。32～35は列点状刺突文を縦に施文しているものである。また36は列点状刺突文を縦と横に重ね合わせて施文し、刺突文によって方形区画を作り出している。

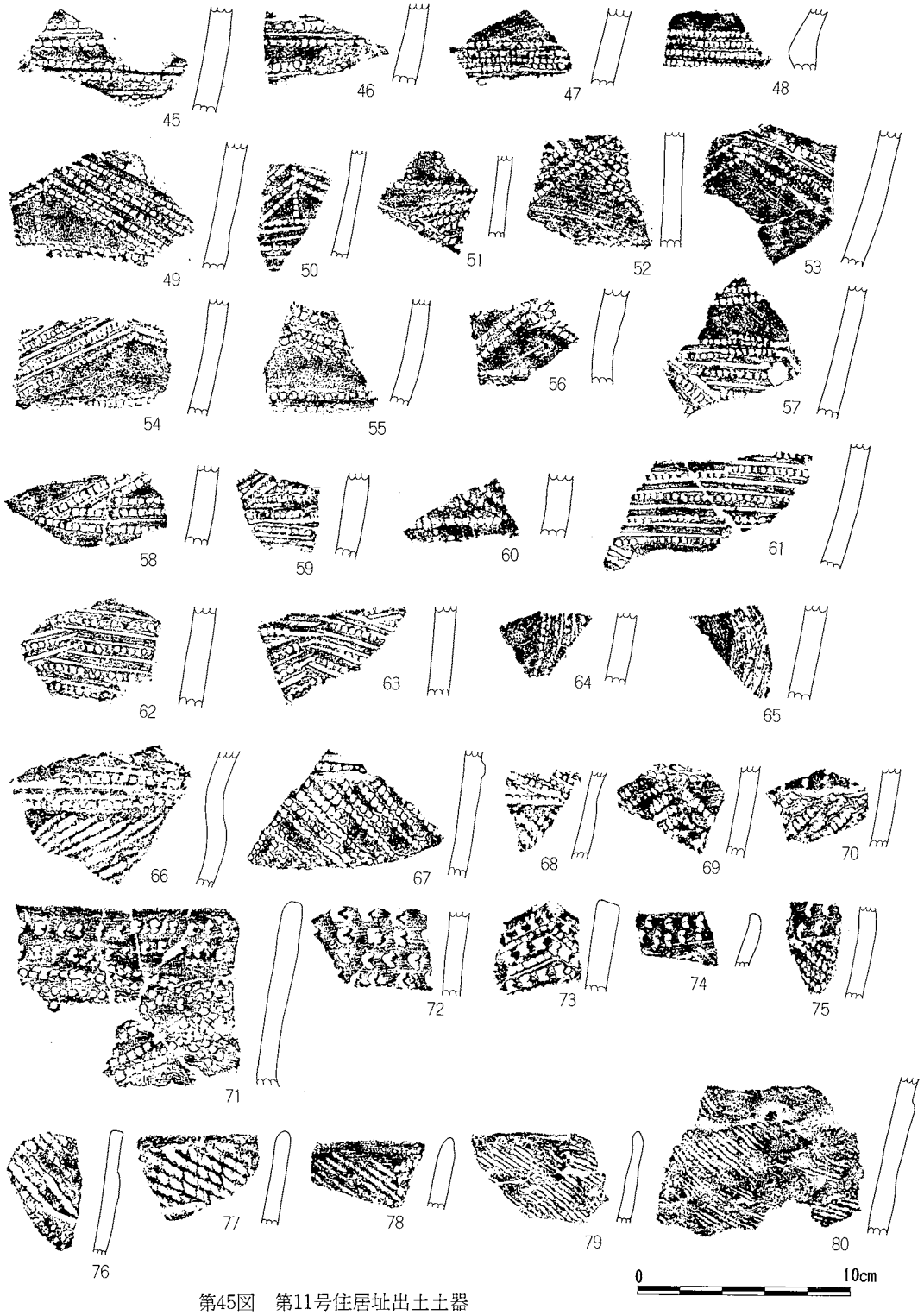
第41図2、第44図37～44は山形口縁を有する深鉢形で、口辺部に列点状刺突の文様帯を有するものである。山形口縁は37・38のように単純なものと、2のように変化に富んだものとがあり、更に口唇部に43のような円形突起を貼付する場合もある。2は口径38cmの大きな土器で、山形口縁上は皿状にやや凹ませ装飾効果を上げている。口辺部には列点状刺突による菱形および三角形のモチーフの文様帯が展開する。菱形は縦・横の刺突文によって更に4等分され、基本的には三角形の組み合わせによって文様が構成されている。胎土には砂粒をやや含むが夾雑物は少なく、色調は暗褐色を呈し、焼成は極めて良い。37～40も2と同様の文様構成をもち、列点状刺突文によって菱形ないしは三角形が描出されている。赤褐色で作りは良い。41～42は山形口縁に沿って幾重にも列点状刺突文を施文するもので、41は山形状を繰り返し、42は大きな菱形を呈するようである。列点状刺突文は平行沈線文内に刺突されている。

次に胴部上半部に主文様帯のあるものについてである。第41図3はこの種のもので器形、文様構成の分かる唯一の例である。北壁下および南壁寄りの4ヶ所から出土した土器片が接合したもので、口径49cmの大形深鉢形土器である。口縁はゆるやかな波状を呈し、口唇部は平担に整形されている。文様は口辺部に縄文施文の文様帯を、胴上半部には列点状刺突文による文様帯を配し、胴部以下には縄文を全面施文している。胴上半部文様帯は上下を列点状刺突文によって区切った中に同じ施文具で菱形を基本的モチーフとした文様を配している。口辺部、胴部施文の縄文はＲＬ・ＬＲによる羽状を呈する。口辺には穿孔が行なわれている。胎土は長石、石英、雲母を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。4は胴上半部の列点状刺突文による文様帯の部分で、西壁寄りの場所から出土した。現存径41cmの大きな深鉢形土器の胴部破片である。文様は斜交および円形状を呈し、3とは異なる。45～70も胴部破片で列点状刺突文を施文しているものである。45～48は平行に、49～63は菱形、三角形を描き、64、65は円形状の文様となっている。45～48、50、53～59、61～66、68は平行沈線文間に刺突を施し、67は隆帯上に刺突を加えている。ともにやや厚手で、赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。

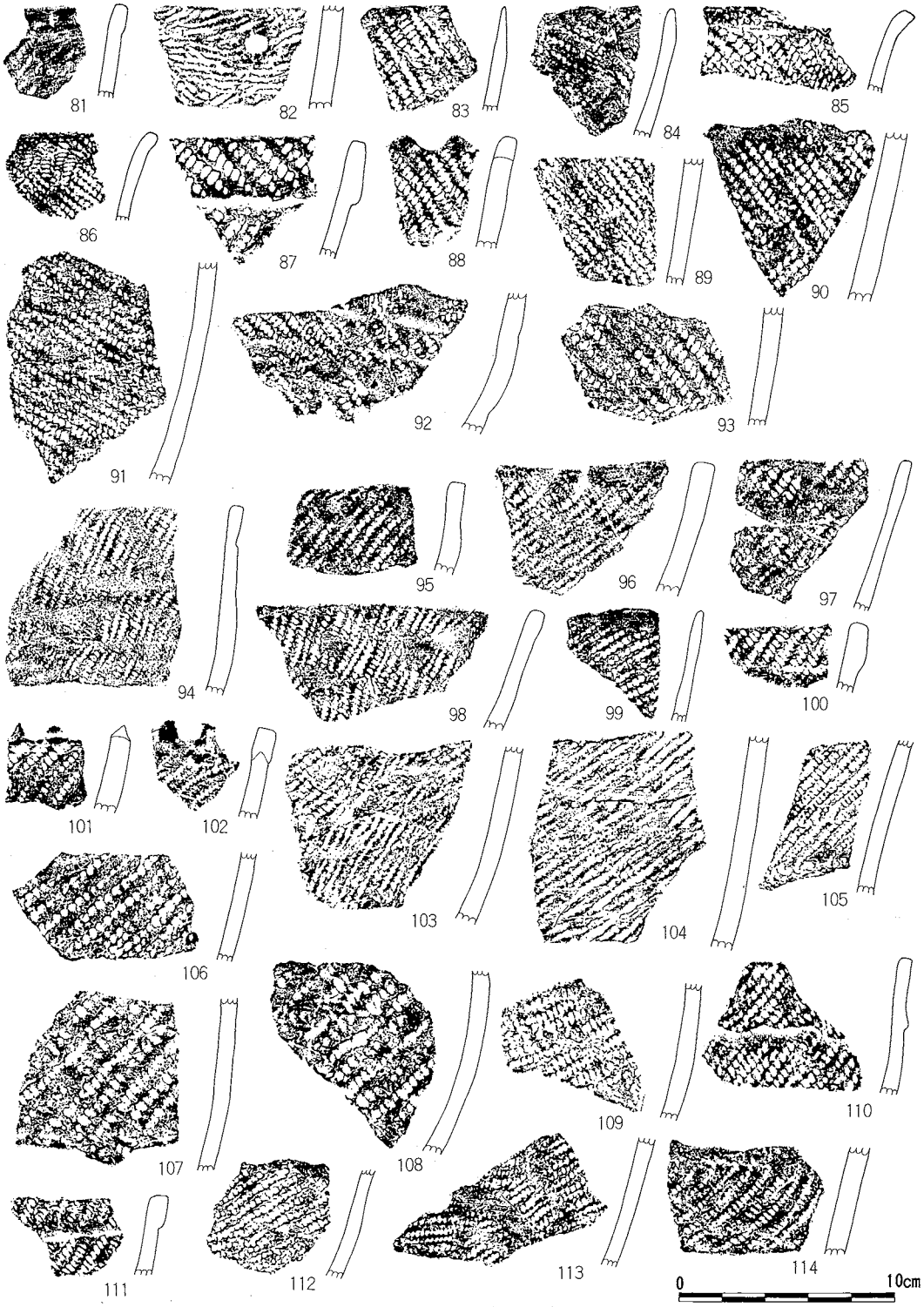
以上が列点状刺突文を主文様としたものであるが、この他に第42図5、第45図71～75に示した口縁に特殊な刺突文を施した土器群がある。5は住居址中央部の3ヶ所から出土した土器片によって復元されたもので、口径37cmを計り、単純に開く形状の大形深鉢形土器である。文様は口縁部に竹管による2条の刺突文を巡らし、以下上半部はＲＬの横位回転の、また下半部はＬＲの横位回転の縄文を全面に施している。口唇部には刻みを加え、内面は横ケズリ、横位ナデで整形し、



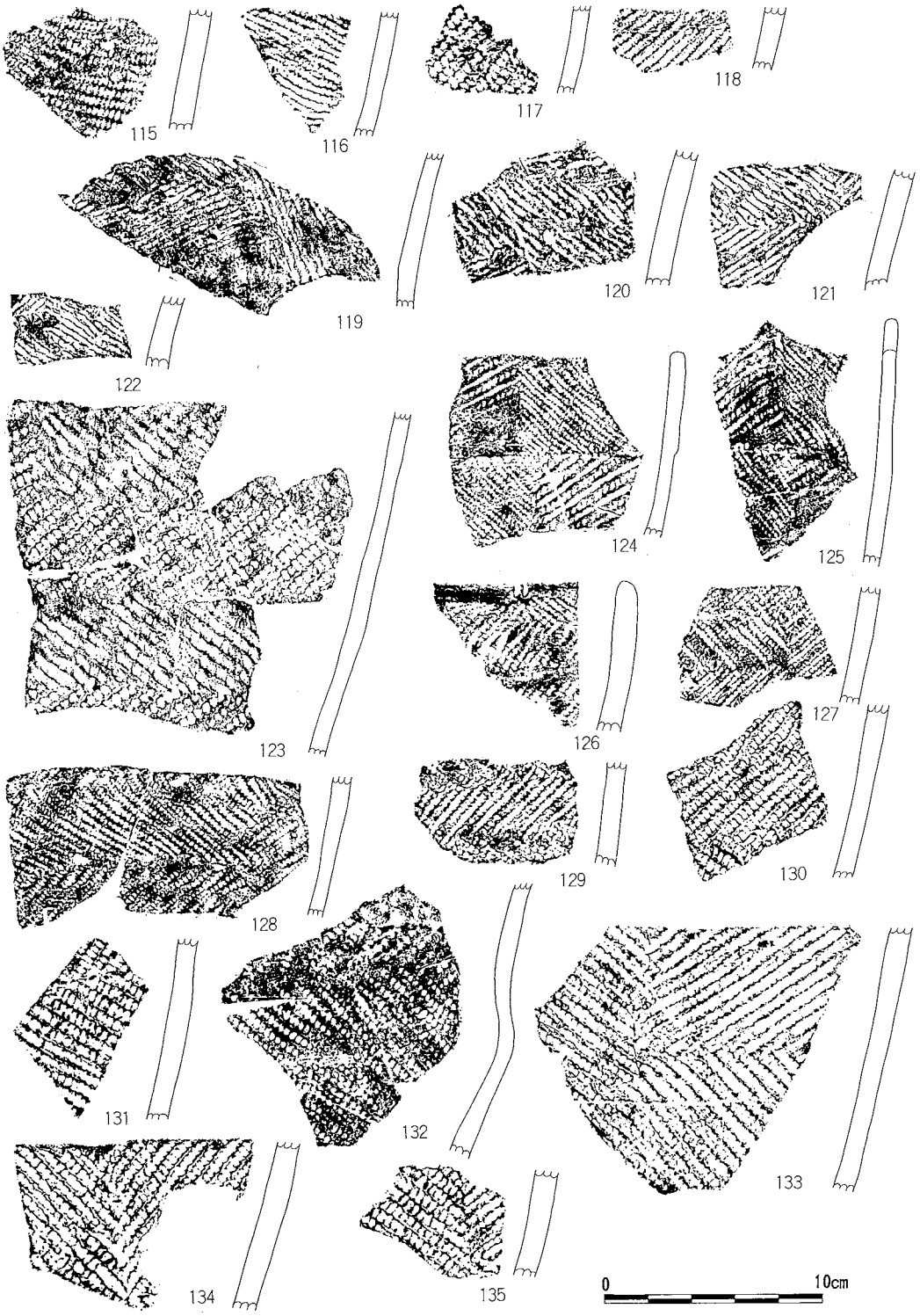
第44図　第11号住居址出土土器



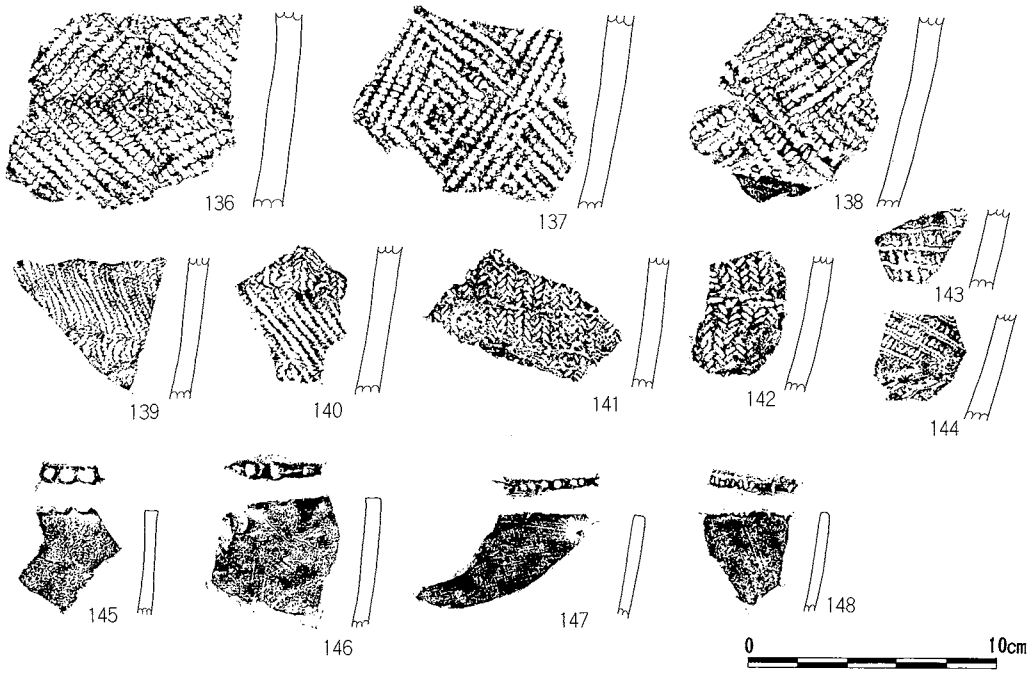
第45図　第11号住居址出土土器



第46図　第11号住居址出土土器



第47図　第11号住居址出土土器



第48図　第11号住居址出土土器

一部に指圧痕を疎に残している。器厚は６㎜前後と薄く、胎土に長石を多く含み、色調は暗褐色を呈する。焼成は堅緻である。71～75は口縁部文様帯に５と同類の施文具による刺突が加えられ、71は以下に列点状刺突文を、75は縄文を施文している。

第42図６～10、第45図76～第48図　は縄文施文の土器群で、全面に縄文を施すものと胴部以上に施すものとがある。76～80はＲ、81、82はＬの縄文を施文し、量的には少ない。83～93はＲＬの縄文で、83、84は平縁の単純な深鉢形を呈する。85・86は口辺部が外反し、87は有段口縁となり、88は山形口縁となっている。６、７、94～114はＬＲ縄文が施文される。６は口径15.5cm、器高16cm、推定底径7.2cmの小さな深鉢で、全面に疎らに縄文が施されている。外面上半部にススが付着し、内面は横位ナデの調整痕が認められる。胎土に長石、砂粒を含み、赤褐色で焼成は良い。７は住居址中央部から出土し、器形が推定される大形破片の土器群中レベル的に最も高い位置から出土している。口径16cmの小形深鉢で、口辺部でやや外反気味となる。口辺から全面に密に縄文が施文されている。なお101、102は角状の突起を口唇部に付し、100、111は有段口縁である。115～118は胎土に繊維を含んだＬＲ縄文施文の土器片。縄文施文土器中、繊維を含むものは極めて少量の出土であった。119～122はＲとＬとの縄文を併用した羽状縄文であり、少量の出土がみられた。123はＬとＲＬとの併用による羽状縄文。第42図８～10および124～138はＲＬ＋ＬＲによる羽状縄文施文の土器である。８は住居址中央部で出土し、口径25cmの深鉢形で、口辺から

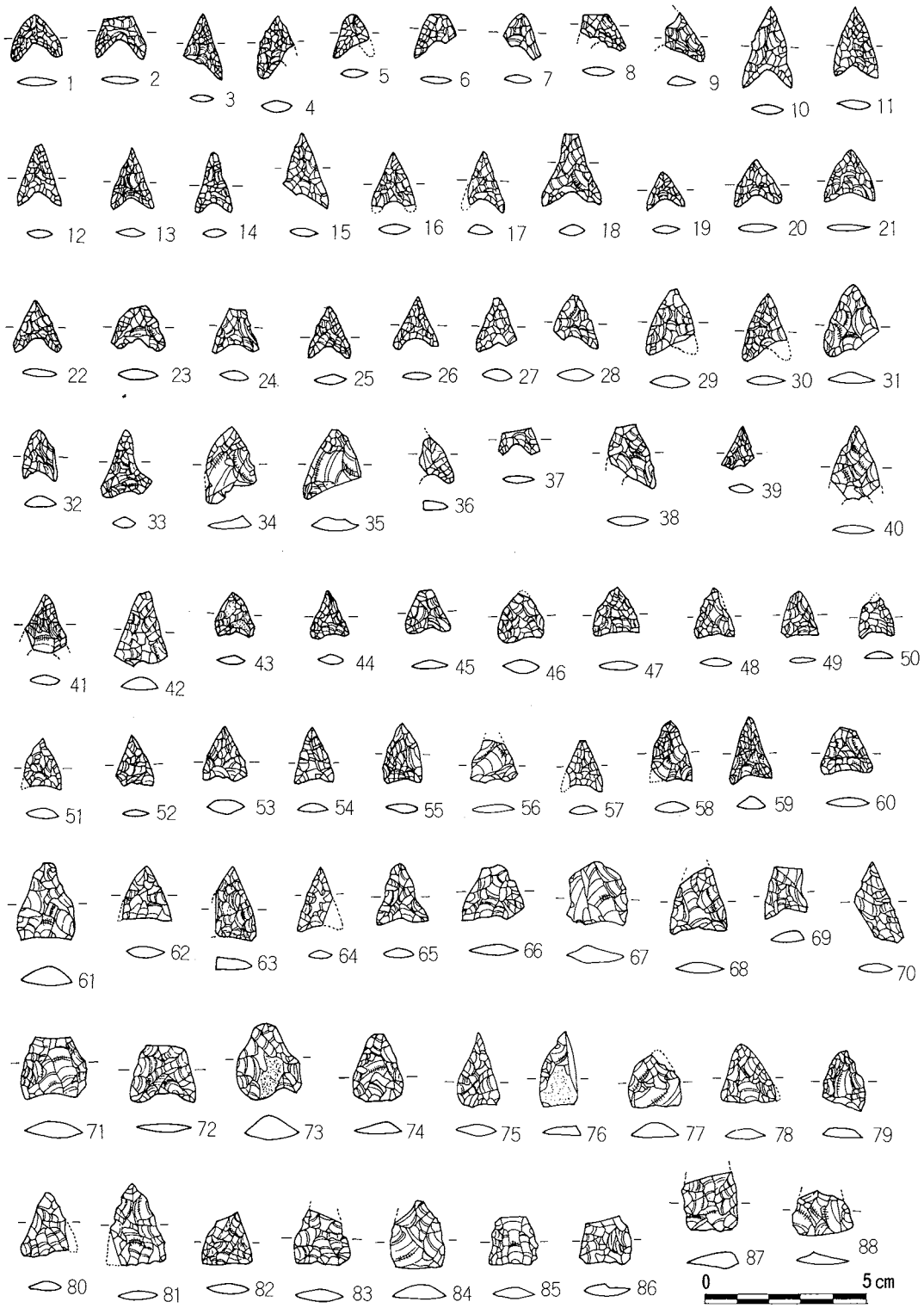
密に施文されている。内面には指圧痕がわずかに残り、胎土には長石、石英、砂粒を含み、色調は茶褐色である。９も住居址中央部、レベル的には８と同レベルから出土している。口径22.5cmの深鉢形で、口辺より密に施文している。内面は口辺付近は軽いケズリを、より内部は指圧痕を残す。胎土に長石、石英の細粒を含み、淡褐色で焼成は良い。10は東壁寄りに出土し、底径７cmの深鉢形土器の底部で、底部付近まで密接に施文されている。赤褐色で焼成は非常に良い。縄文施文の土器に関してはＬＲ旋文が最多で、ＲＬ＋ＬＲ施文のものがこれに次いで多かった。

このような縄文の他に、特異な縄文が施文されたものがわずかではあるが出土している。139はＬ＋Ｌ＋Ｌ＋ＬのＬ４本を束にしたもの、140は上半部はＲ＋Ｒ＋ＬとＲ２本とＬ１本を束にしたもの、141はＲ＋Ｌ＋Ｒ＋ＬのＲ２本とＬ２本とを束にしたもの、142はＲＬ＋ＬＲ＋ＲＬ＋ＬＲのＲＬ２本とＬＲ２本を束にしたものによる施文である。また143はＲＬ＋ｒの附加条、144はＲ$\left\{\begin{array}{l}L\\R\end{array}\right.\left\{\begin{array}{l}R\\R\\L\\L\end{array}\right.\begin{array}{l}\rightarrow\\\leftarrow\end{array}R\left\{\begin{array}{l}L\\R\end{array}\right.\left\{\begin{array}{l}R\\R\\L\\L\end{array}\right.$のものであった。これらは混入していた神ノ木式に属する可能性が強い。

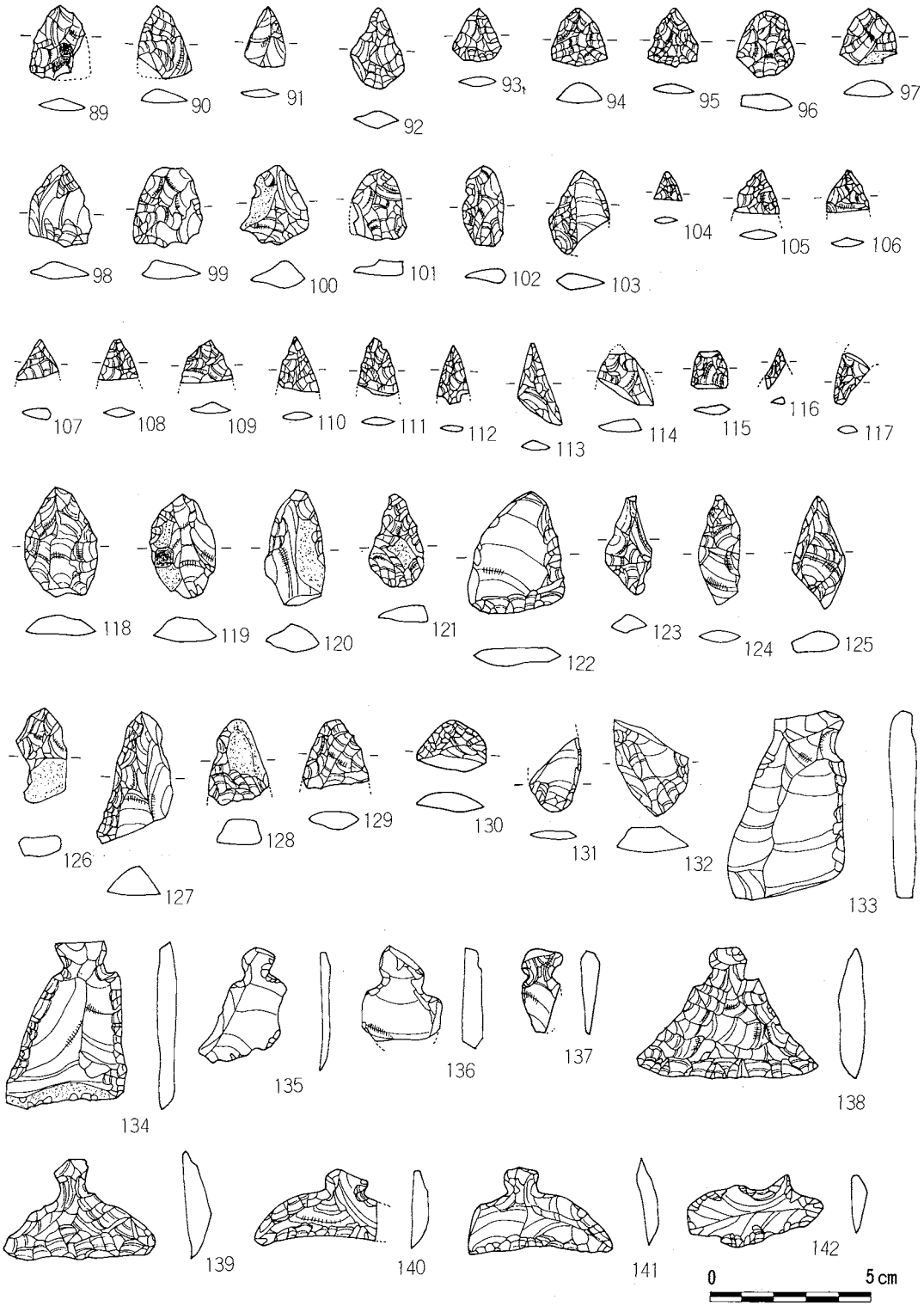
以上、多量に出土した有尾式土器に伴出する形で第43図11、12、第48図145～148の関西系の土器が出土している。11は、北壁寄りから出土した口径32.5cmの大形品で、鳥浜貝塚出土の例等から丸底を呈するものと推定され、胴部で一たんゆるくくびれ、口縁に向かって外反する形状を示している。全面に貝殻条痕文が残されている。表面上部は右下りに、胴部の一部は横に、内面上半部は横位に、下半部は右下りに条痕調整が施されている。表面には部分的に指圧痕が残され、口辺部には穿孔が行なわれている。また表面にはススが全面に付着している。器厚は４mm前後と極めて薄く、胎土には長石、石英、雲母が微量含まれ、色調は黒褐色を呈し、焼成は堅緻で極めて良い。12は床面直上から出土した口径12.4cmの小形深鉢で、口縁部でやや内屈する。清水ノ上貝塚の例から底部は丸底を呈するものと思われる。口縁部に爪形状の刺突文を三段めぐらし、一段ごとに傾きを変え、羽状を呈する。胴部にも同様の刺突を施している。外面および内面に指圧痕を残し、胎土に長石、石英、砂粒を微量含む。色調は黒色、部分的に淡白色を呈し、焼成は良い。145～148は無文土器で、口唇部に刻みを施す。11は北白川下層Ⅰ式、12は清水の上Ⅱ式に該当しよう。

石器（第49、50、51図）　本址からは覆土および床面上から夥しい量の石器が発見され、その多量さに目を見張らせられた。出土石器の総数は170点に達し、その内訳は石鏃117、尖頭状石器15、石匙10、石錐12、スクレパー９、打製石斧２、凹石２、磨石２、磨製石斧２であった。

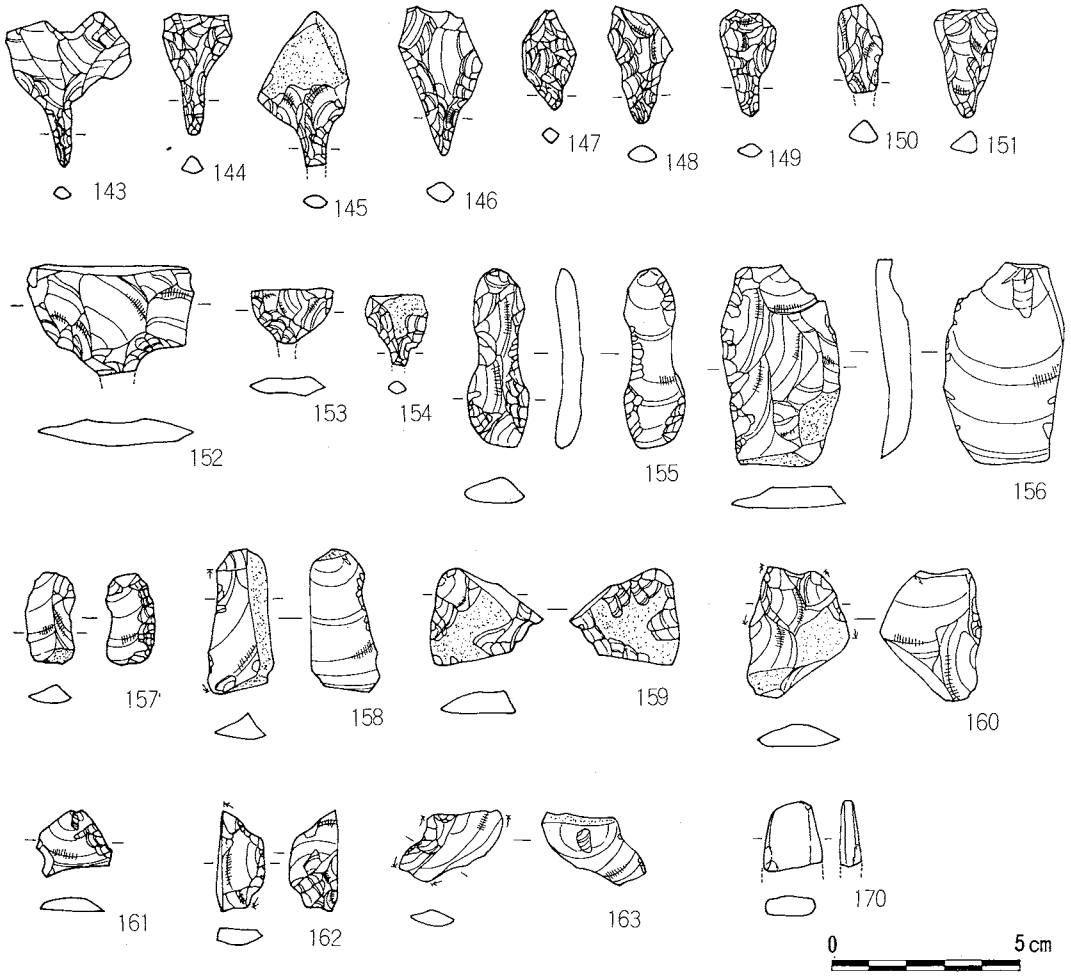
石鏃は117点と多量に出土したが、そのうち完形が39点、破損品は78点で、欠損率は高い。形状は、10、11、15のような長身のものは少なく、その大半がずんぐりとした短身のものである。１～41は底辺への抉りが施されているもので、１～６、10のように抉り込みが深いものと、21、23～28のように浅いものとがある。この抉り込みを有する石鏃は一般的に製作が丁寧で鋭利である。42～73は底辺への抉り込みが極めて浅く、わずかに凹状を呈するものである。この種の石鏃は抉り込みを有する石鏃よりも身が短かく、正三角形に近い形状を呈するものが多い。74～91は底辺

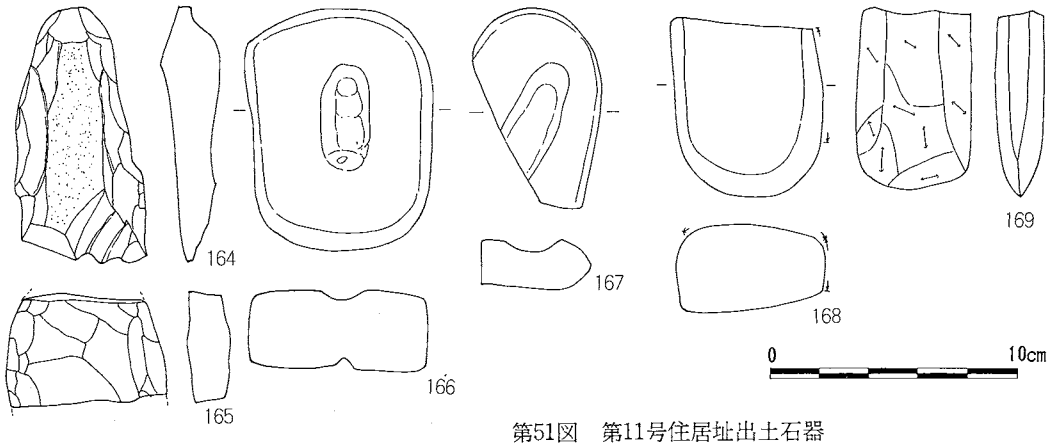


第49図　第11号住居址出土石器



第50図　第11号住居址出土石器





第51図　第11号住居址出土石器

に抉りをもたない平基のもので、三角形鏃とされているものである。原石から剝離された剝片に左右から調整を加えて形を整えるものが多く、作りは余り良くない。この種の石鏃の欠損部位をみると尖頭部の欠損率が高いようである。92～101は底辺が凸状を呈し、部厚い素材を用いるものが多く、そのためか破損品は比較的少ない。102は柳葉形を呈するもの。本址ではこの種のものはこの一点だけである。104～117は欠損品で、その大半が胴部下半を失なっている。

尖頭状石器118～132は、石鏃よりも大きく、重量も重い粗雑な石器である。その最も顕著な特徴は部厚い剝片を使用し、簡単な加工を施すことによって尖頭部を作出し、他の部位にはほとんど調整を加えていない点にある。118、119、120、125などをみると柳葉形を呈するものが一般的で、122のように三角形状を呈するものもわずかに認められる。

石匙133～137は縦形、138～142は横型に属する。133、134は縦長の剝片を加工した大形でみごとな石匙で、特に両側縁の刃部は鋭利である。135～137は小形で、刃部を欠失している。138は正三角形の頂点に抉り込みを加え、つまみを作出したもので、加工技術の優れた非常に美しい石器である。該時期の関西方面に多い形状である。139は部厚い剝片を用いた完好品。140、141は内弯気味の刃部をもつもの。142は小さなつまみを有し、刃部も不整である。あるいは143同様、つまみを錐部とした石錐であったとも考えられる。

石錐は大きな柄をもつ143～147、152～154と、ほとんど柄をもたない錐部だけの148～151の２種類に分けられる。柄を有するものは概してその錐部は細長く、柄と錐部との区分がはっきりしないものの錐部は太く短いものが多い。また欠損品は柄を有するものに多い。143は石匙の再利用品で、刃部の一部を錐部に再加工して使用している。同種のものが集石付近からも一例出土しており、石匙の欠損品の再利用に石錐に加工することが間々あったものと思われる。

155は両端に楕円形の作り出しを行なった特異な形態を示し、岐阜県村山、福井県鳥浜などこの時期には少量ながら伴出する石器である。製作は丁寧に行なわれている。

スクレイパー156～163は、直線状の刃物をもつ158～160と、孤状の刃部をもつ157、161～163との２種に分けられる。その多くが原石面を残す部厚い剝片を使用している。鋭利な縁辺を有する剝片を無作為的に取り出し、使用したものといえる。156は大形のスクレイパーで、柄は作出されていないが、縦形の石匙の一種かもしれない。

打製石斧164、165は、部厚く、剝離も雑で形態的にも、製作的にも中期のものとは異なる。凹石166は表裏面に数孔が一連となった凹みを有し、167は浅い凹みが連続してみられる。磨石168は表面および右側縁に研磨痕がみられる。

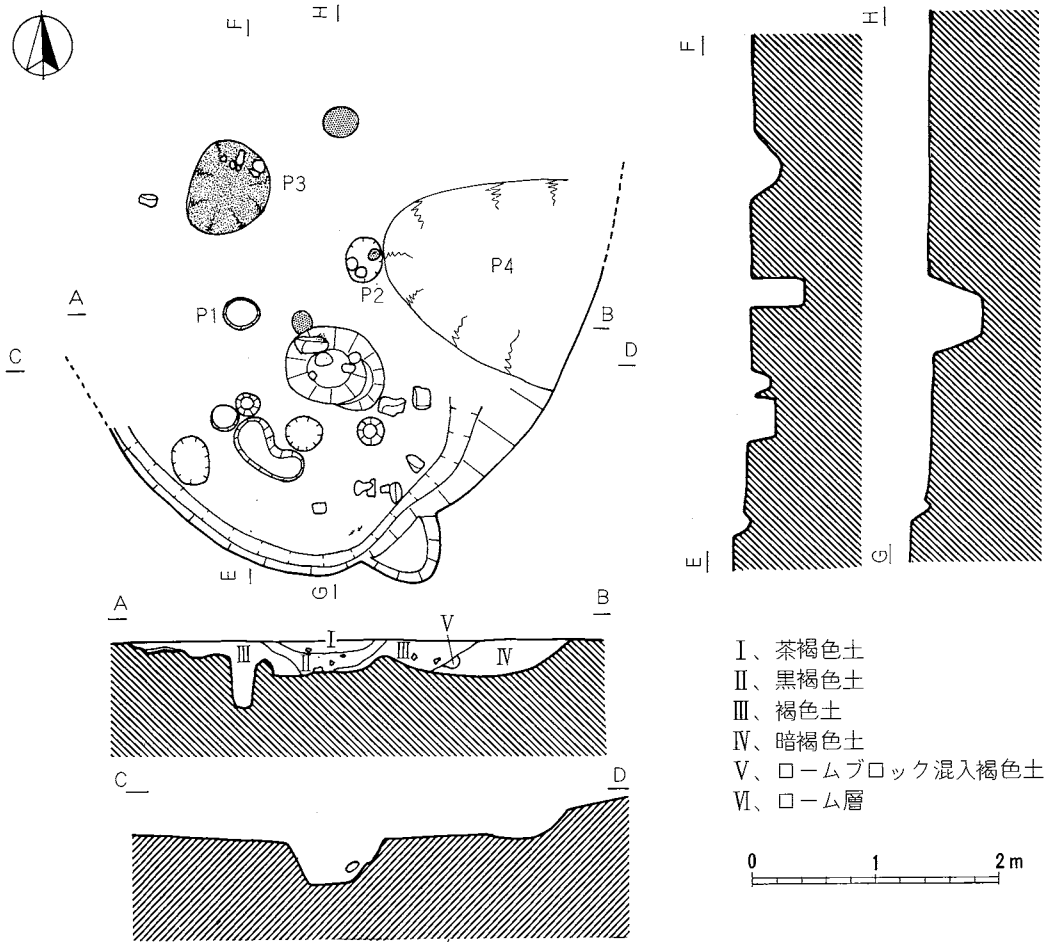
磨製石斧169は、定角式の刃部破片で、研磨は両縁は斜めに、胴中央は上下あるいは斜めに、そして刃部付近は横になされている。刃部が左右の研磨によって作出されていることは注意されよう。

（小林康男）

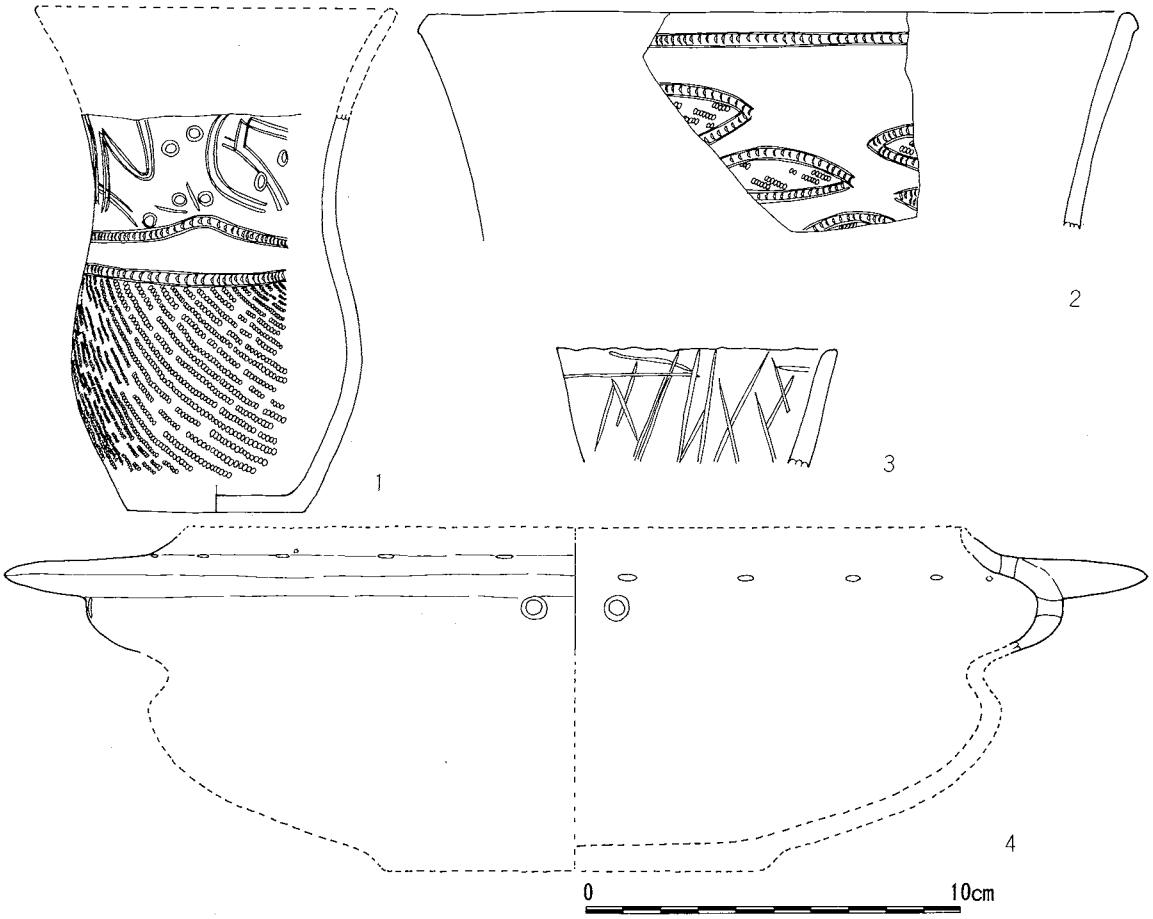
(6) 第13号住居址

調査経過　本址は、発堀区の北端で、第１号住居址の西側に発見された住居であり最も標高が高い一部である。発掘に先立って行なわれた試掘において、本址上面より、大口径の特殊浅鉢形土器（第53図４）の口縁部が出土し、床面と思われる部分が確認され、住居址となるものと予想された。重機による排土の後、遺構検出を行なったが、本址自体のプランも、第１号住居址との重複関係もはっきりしなかった。土器及び石器の量は多くなく、出土状態は、流れ込みがあるためか判然としないが、明確に本址に属すると思われる遺物は、第Ⅲ層に集中し、南壁ぎわと西壁付近の床面上に復原可能な土器が２個体、押し潰された状態で発見された。

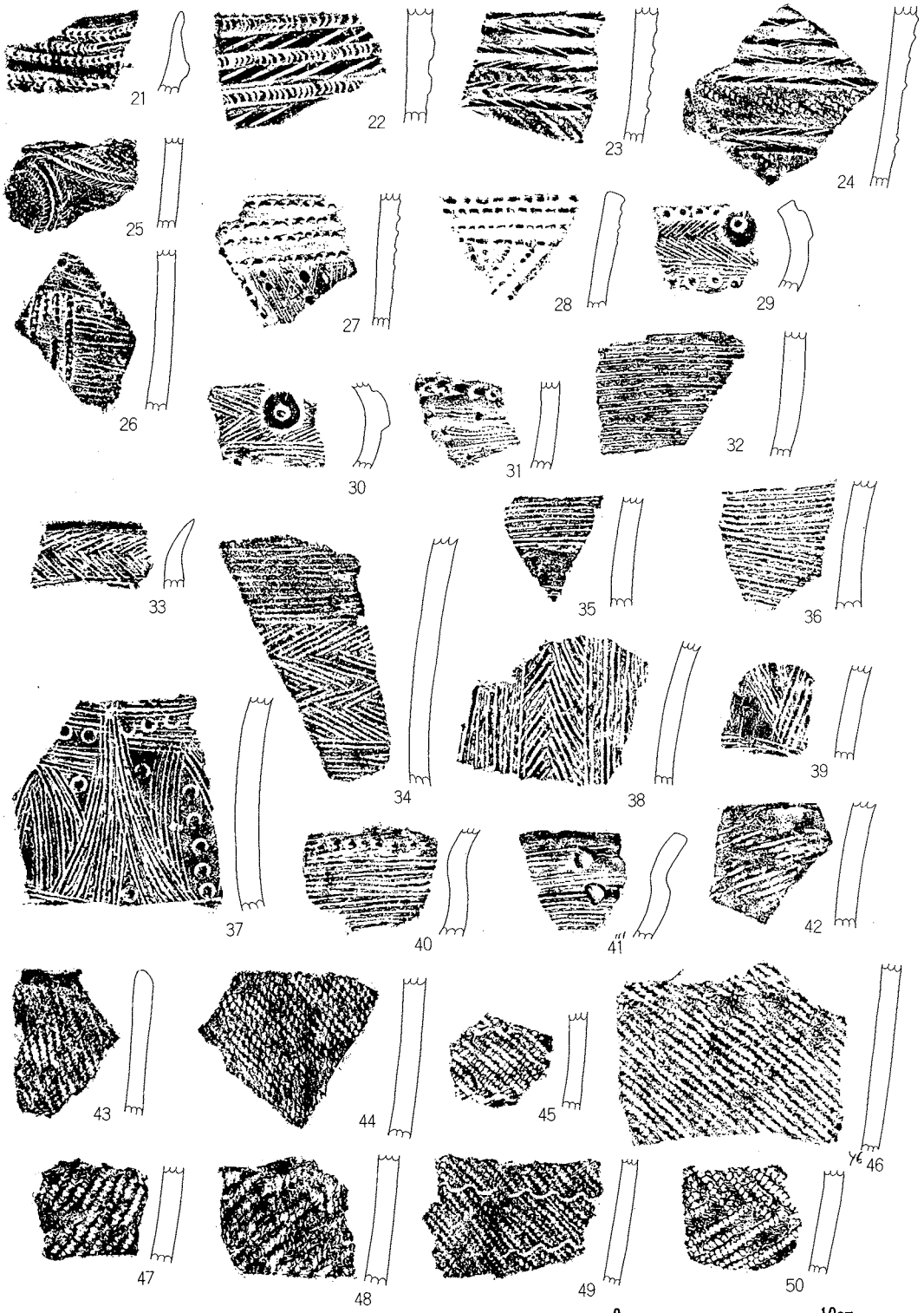
遺構（第52図）　本址は、舌状台地の端に立地するため、北半分は流出している。そのため、プランの確定はできないが、１辺５ｍ前後のやや角のある円形であると思われる。南東の隅に床



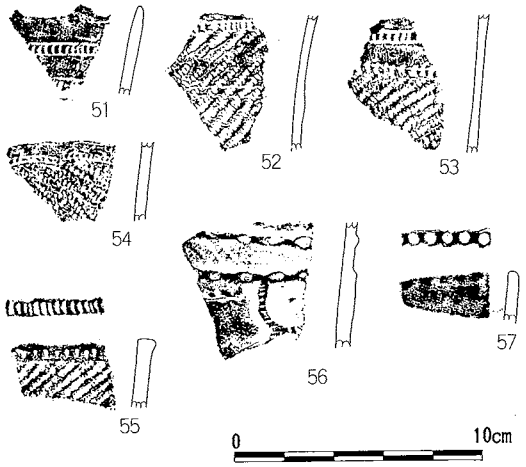
第52図　第13号住居址



第53図　第13号住居址出土土器



第54図　第13号住居址出土土器



第55図　第13号住居址出土土器

面から10cmほど高くなった突出部がある。壁はロームを掘り込んでいるが、南のみが残存し、壁高はその東側で20cmで、西側が3cmであり、西に向ってかなり低くなる。西壁は殆んど存在しなかったのかもしれない。西側は垂直に掘り込まれているが、東へ向うにつれ、なだらかに傾斜しており、全体的に軟弱である。周溝は壁が存在する部分では確認され、その幅は10cm～15cm、深さは2cm～6cmである。床は確認された部分ではロームであり、北に向いやや傾斜している。平担ではあるが、軟弱である。主柱穴と認められるものは1つのみであり(P_1)、26cmの円形、深さ55cm、垂直に掘り込まれている。その他のピットは、浅くダラダラと掘られている。炉は4ヵ所ある焼土の部分を想定しているが、炭化物の集中していた北側のダラダラとした落ち込み(P_2)、又は中央部の80cm×60cmの楕円形のピット(P_3)の可能性もある。東側の大きなピット(P_4)の性格は判然としないが、出土した遺物から、本址より新しいものと思われる。

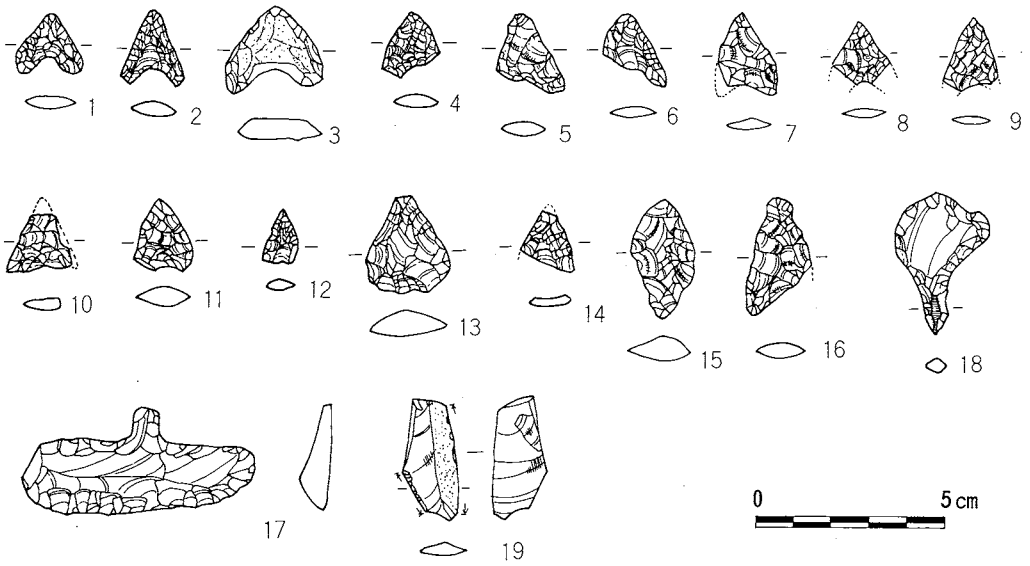
本址の時期は縄文前期諸磯a式期である。　（込山秀一）

遺物　土器　（第53、54、55図）本址はその北半が流失し、しかも崖端のため土器の出土状態にも混乱がみられた。しかし、遺構が比較的しっかりとしていた南壁周辺からはかなり遺存状態の良いまとまった土器の土器があった。

1は床面上より出土し、本址出土土器中その全形がうかがえる唯一のものである。ふくらみのある胴部をもち、胴上半部でいったんくびれ、口辺に向かって大きく開く深鉢状を呈し、底径9.4cm、現存高21cmを計る。主文様は胴上半部に集約され、半截竹管による平行沈線で木ノ葉文のくずれた文様が規則性もなく配され、空白部には円形竹管文が施されている。胴下半部には爪形文が横走して文様帯を区切り、それ以下は粗いRLの斜縄文が施されている。赤褐色で、焼成は良い。2は、1とともに南壁下床面上より出土したもので、推定口径38.2cmの大形深鉢の口辺部破片である。口唇部がやや張り出し、その直下に爪形文を、そして下部には木ノ葉状の爪形文区画による磨消線文を施文している。5、6、9、10も同類で、2は円形竹管文も併用されている。9、10は突帯上に刻み目を加えていることからやや後出になるものかもしれない。

11～15は平行沈線による肋骨文で、15は平行沈線の外側に刺突文を施文している。16～18は平行沈線文による格子目を形造るもので、15は地文に斜縄文を、16、17は無文地に描出されている。15は整然とした格子状を呈するが、13、14はややくずれたものとなっている。

21、22は直線状の爪形文が重畳するもので、21は密に、22はやや間隔を離して施文される。22



第 56 図　第 13 号 住 居 址 出 土 石 器

の爪形文帯間の低隆起帯には斜行する刻みをつけている。23～25は浮線文土器。

4は頸部に孔を有する特殊浅鉢形土器で、頸部の直径は61cmを計る。現存部分には文様はなく、頸部の上方および下方の2方向からの穿孔がみられる。

26～28は結節状浮線文の貼付された土器で、地文に条線文を有し、26、27はボタン状突起を併用する。29～30はボタン状突起を付し、29は円形竹管文を施文する。31～39は半截竹管による沈線文土器で、32、35は直線状を、33、34、38は綾杉状を、37は孤状を描き、37には空白部に円形竹管を施文する。

40、41は平行沈線文に刺突文を施するもので、21は変形爪形状の刺突を横位に、22は円形状の刺突を縦に粗く施している。42～50は縄文施文の土器である。

51～57は薄手で焼成堅緻の関西系の土器である。51～54は爪形文に縄文が施されるもので北白川IIb式に含まれ、56は縄文地文に爪形の刻みを付した突帯を貼付した北白川IIc式に該当しよう。

以上のように本址出土の土器は1、2、5～20を主体とした諸磯a式を中心に諸磯b、c式が伴出した状況を呈している。

石器（第56図）　本址はその大半が流失していることも関係し、しかも時期的な石器の在り方の特徴とも関連して出土した石器は本遺跡の縄文期住居址中最少であった。石鏃14、尖頭状石器2、石匙1、石錐1、スクレイパー1の計19点が得られたにすぎない。

石鏃1～14は、製作も粗雑で、形状は短身でずんぐりとし、鋭利さに欠けている。1～6は底辺に抉りを加え、7～12は抉りがほとんどなく、13は凸状を呈するものである。抉り込みはその

大半が浅い。

尖頭状石器15、16は柳葉形を呈し、尖頭状石器に属するものの中では比較的小形なものである。石匙17は横長の剥片に丹念な加工を施し、楕円状の身を作り出している。刃部は孤状を呈し、つまみは身に対してほぼ直交するように付けられている。

石錐18は、柄、錐部とも無欠の完好品で、錐部は幅0.5cm、厚さ0.4cmのほぼ円形を呈する。錐部には回転運動によって作り出された磨耗痕が顕著に認められ、錐としての役割を果した状態を明瞭に観察される。

スクレイパー17は直刃を両縁に有するものである。

（7） 小竪穴

今回の調査報告作製において、従来、土壙あるいはピットならびにピット群として識別報告されているものを一括して小竪穴として記述することにした。そのため、小竪穴としての呼称をもちいているものの、特別の概念は存在しない。

今次の調査で、小竪穴は全部で42個検出されたが、このうち住居址と重複しているのは、S1・S41・S42の3個のみであり、他はB－5区周辺とE・F・G・Hの0・1・2・3・4区にみられる、2ケ所の小竪穴群としてとらえられる。どちらも調査区の北地区にあり、南地区には検出されていない。

これらの小竪穴は、従来土壙として報告されている、平面形が楕円形もしくは長円形で断面がナベ底あるいはタライ状を呈するものと、柱穴形ピットの形態を示めすものの2形態に大別することができた。

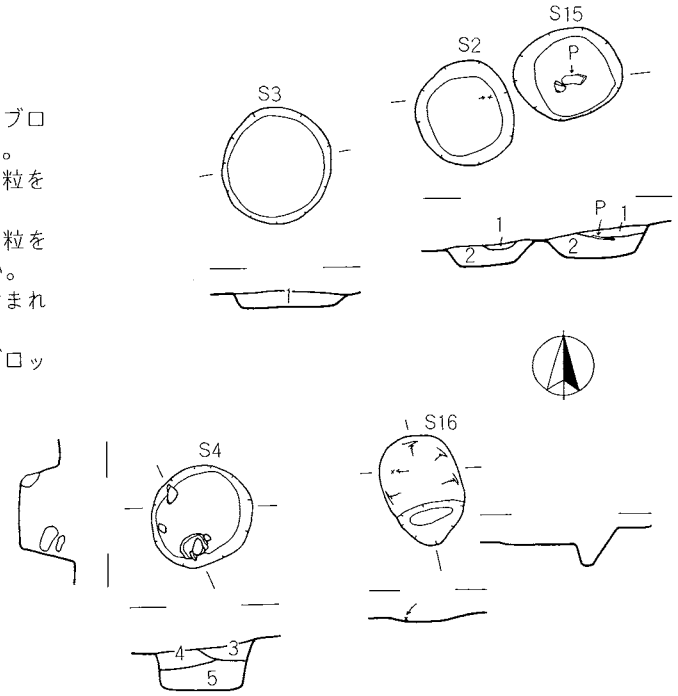
この2形態の中で特記すべきものは、前者では、S13とS14の2つで、S13は覆土に炭化物層を有している小竪穴で、底面に焼土がみられ、骨片も相当量含まれていることから、何らかの特殊遺構を想像させた。S14は今回の調査で検出された唯一の袋状（フラスコ型）小竪穴で、S13とS14が隣り合わせで検出されていることも意味があるのではなかろうかと思われる。

後者の場合、あきらかに柱穴痕が土層にみられるものが、S18・S21・S34の3個で、形態から柱穴と思われるものが、S33・S36・S40の3個であった。位置的にみて、S18とS21が一対になり直線を形成し、S33とS36とS40の3個が一直線に並んでいる。

しかし、これらはあくまでも直線であり、掘立建物址としての柱穴列の規則性は確認できなかった。

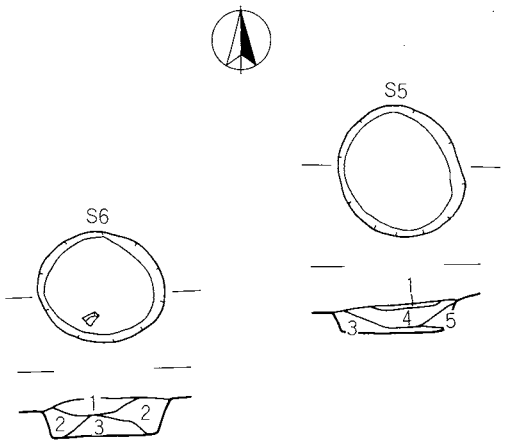
以上、今回の調査での小竪穴の概略を記したが、個々については一覧表を付した。一覧表内のカッコ付けの数値は他の遺構と重複しているため推定規模を表わし、断面形は、断面をとる位置により形が変化するので省略した。（山本紀之）

1.黒 色 土　0.5～3cmのローム ブロックを含む。柔かい。
2.明黒色土　0.5～1mmのローム粒を含む。柔かい。
3.黒 色 土　0.5～1mmのローム粒を含む。弱粘質，硬い。
4.黒 色 土　大粒のローム粒が含まれる。
5.茶黒色土　1～3cmのローム ブロックを含む。柔かい。

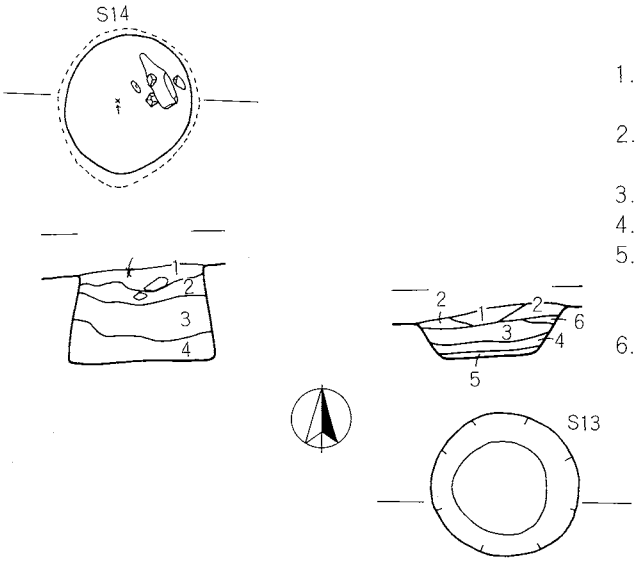


第57図　2号・3号・4号・15号・16号小竪穴

1.黒 色 土　0.5～2mmのローム粒を含む。弱粘質，柔かい。
2.明黒色土　1層に似る。ローム粒が目にみえて多くなる。
3.褐 色 土　粘性強く，硬い。
4.明黒色土　わずかにローム粒を含み，ごく少量の岩化物。骨片を含む。
5.黒 色 土　3～5mmの大粒のローム粒を含む，硬い。

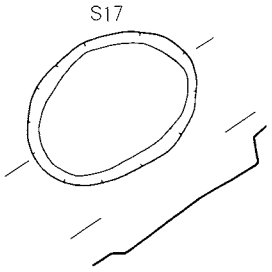


第58図　5号・6号小竪穴

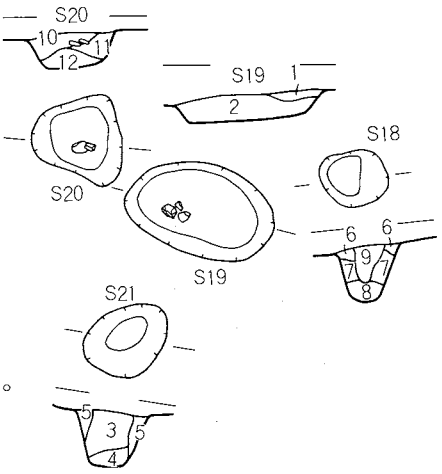


1.黒 色 土　5cm程のローム ブロックを含む。柔かい。
2.褐 色 土　砂質。1～5cmのローム粒・炭化物を全面に含む。
3.炭 化 物　大きさ 0.5～3cmの炭化物層。
4.褐 色 土　2層に似るが少ない。
5.炭 化 物　大きさ0.5～2cmの炭化物層。5cm以上のものも含まれる。底面の焼土もみられる。
6.明黒色土　炭化物・骨片が含まれる。

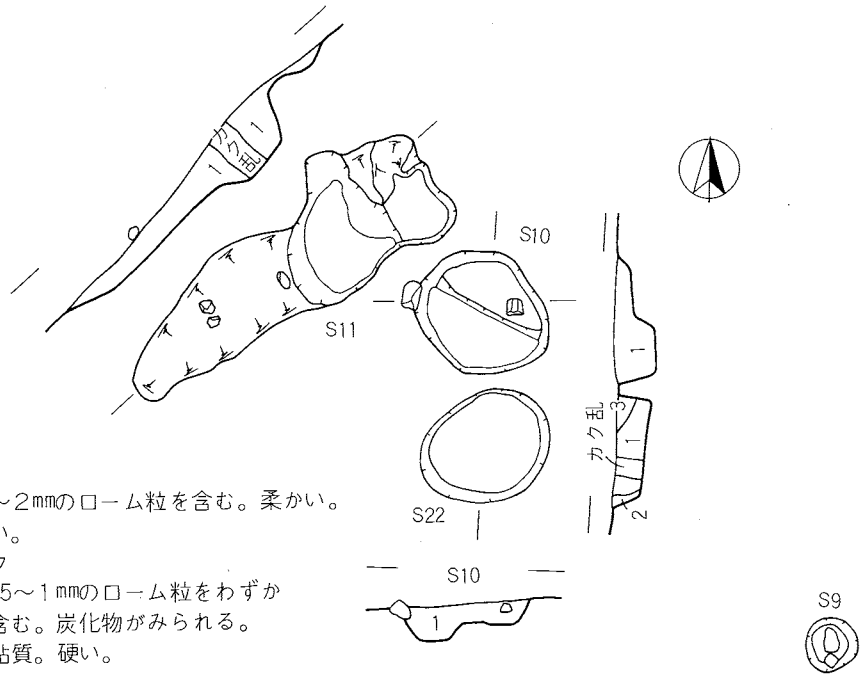
第60図　13号・14号小堅穴



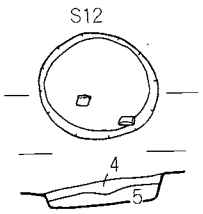
1.黄褐色土　1 ～3mmのローム粒を多量に含む。粘性が強い。
2.褐 色 土　0.5～3mmのローム粒を含む。やや硬い。。
3.明黒色土　弱粘質，やや硬い。
4.黒 色 土　弱粘質，やや硬い。ローム粒がやや含まれる。
5.黄褐色土　2～4cmのローム ブロックが含まれる。
6.明黒色土
7.黄褐色土　1 ～3cmのローム ブロックが多量に含まれる。
8.褐 色 土　ローム ブロックの量がかなり多くなる。粘性が強く，硬い。
9.明黒色土　0.5～2mmのローム粘をわずかに含む。
10.明黒色土　0.5～2mmのローム粒を含む。硬い。炭化物を含む。
11.明黒色土　2～5cmのローム ブロックを含む。
12.明黒色土　2cm程のローム ブロックを多量に含む。硬い。



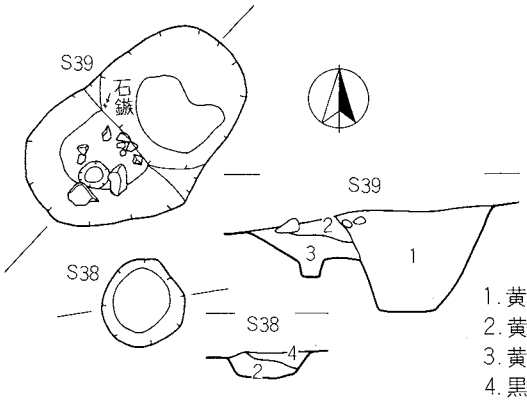
第61図　第17～21号小堅穴



1.黒 色 土　1～2mmのローム粒を含む。柔かい。
2.黄褐色土　硬い。
3.ロームブロック
4.黒 色 土　0.5～1mmのローム粒をわずかに含む。炭化物がみられる。
5.明黒色土　弱粘質。硬い。

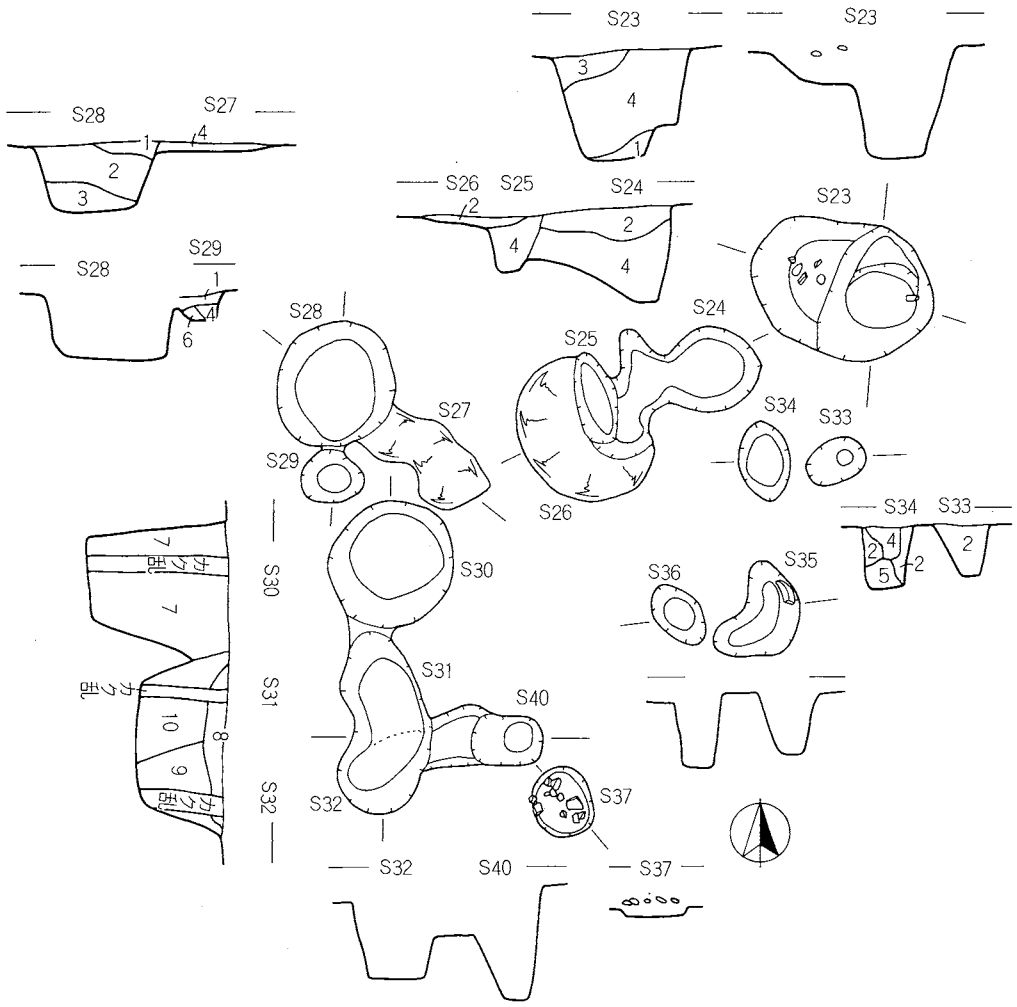


第62図　第10号・11号・12号・22号小堅穴



1.黄褐色土　弱粘質，硬い。
2.黄褐色土　ロームブロックを含む。柔かい。
3.黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。柔かい。
4.黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。柔かい。

第63図　第38号・39号小堅穴



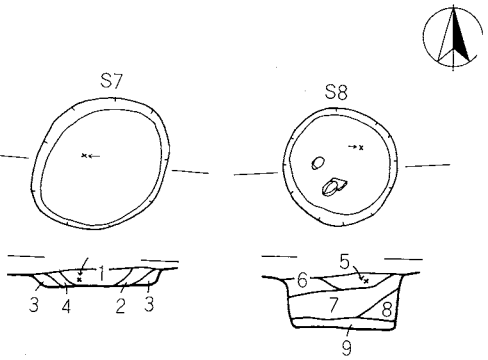
1.黒 色 土
2.黒 色 土　ローム粒混入が少ない。
3.ローム塊
4.褐 色 土　ローム粒混入が多い。
5.ロームに褐色土混入
6.ロームに黒色土混入
7.黒 色 土　下層部から神ノ木式土器出土。
8.黒 色 土
9.黄褐色土　ローム粒が多量に含まれる。柔かい。
10.黄褐色土　9層よりローム粒が少ない。

第64図　第23号～37号・40号小竪穴

第2表 小竪穴一覧表

No.	確認面規模	平面形	主軸方向	底部規模	底面	時期等
	備考・その他					
1	145×(150)	不整円形	N－40°－E	135×(130)	平坦	諸b
	第2号住居址と重複。底面にピット2ケ所あり。土器					
2	85×85　80×85	円形	N－2°－E	60×65	平坦	諸b
	石匙1点出土。土器出土					
3	85×90　85×90	円形	N－9°－E	75×80	平坦	十三菅提
	覆土黒色土。土器出土					
4	85×80	円集	N－47°－E	65×70	平坦	
	覆土内に集石あり					
5	110×95	楕円形	N－36°－W	95×80	平坦	諸b
	覆土内に炭化物が見られる。土器出土					
6	105×90	楕円形	N－58°－E	90×75	平坦	諸b～c
	S5と時期的に同じかと思われる。土器出土					
7	90×90	円形	N－7°－W	80×80	平坦	諸b
	覆土は自然堆積。土器					
8	120×100	長円形	N－43°－E	105×85	平坦	
	断面タライ状。人為堆積を思わせる。					
9	45×45	円形	N－－	30×30	ボール状	
	石2個が存在。					
10	120×100	長円形	N－122°－E	95×85	二段底	
	覆土は柔かい黒色土。					
11	290×110	不整形	N－58°－E	110×75	平坦・一部斜面	諸b
	覆土は柔かい黒色土。土器					
12	100×90	長円形	N－95°－E	85×75	平坦	諸c
	炭化物が覆土内に含まれる。土器					
13	120×115	円形	N－95°－E	75×75	平坦	
	特殊遺構。炭化物層・焼土・骨片が検出された。覆土は人為堆積状態を示めす。					
14	115×100	長円形	N－6°－E	130×75	平坦	十三菅提
	今回の調査で唯一の袋状ピット。覆土は人為堆積を示めす。覆土内に小集石あり。土器黒曜石					
15	90×75	円形	N－88°－W	60×15	平坦	諸c
	土器片出土。					
16	90×60	不整円形	N－16°－W	35×60	平坦・一部斜面	諸b
	石鏃1点出土。柱穴形のピットか。					
17	150×110	楕円形	N－67°－E	130×10	凹凸あり	
	断面、タライ状を呈する。土器					
18	55×55	不整円形	N－87°－W	25×90	ボール状	
	覆土に柱穴痕を残す。					
19	120×70	楕円形	N－76°－W	100×30	凹凸あり	
	覆土は黄褐色土。石4個あり。					
20	70×75	不整円形	N－94°－W	45×55	平坦やや傾斜	諸c
	覆土は明黒色土。石2個あり。土器					
21	70×55	不整円形	N－53°－E	40×50	平坦	諸b
	覆土に柱穴痕を残す。					
22	105×90	長円形	N－70°－E	90×20	平坦	諸b
	覆土は黒色土。					
23	150×110	楕円形	N－67°－W	105×80	三段底	諸b
	底面が三段にわかれている。あるいは3つのピットの重複か。土器					
24	65×(110)	不整円形	N－82°－E	55×60	傾斜	
	S25と重複する。土器					
25	85×(35)	長楕円形	N－23°－W	60×(90)	平坦	諸c～十三菅提
	覆土は褐色土。S24とS26に重複する。土器					
26	120×(90)	長円形	N－40°－W	不定	斜面	
	覆土は褐色土。S25と重複か。					
27	(100)×45	不整形	N－50°－W	不定	斜面	
	S28と重複。					
28	100×95	円形	N－1°－E	80 65	平坦	諸b
	覆土は北西方向からの堆積を示めす。土器			2		
29	50×40	長円形	N－75°－W	30 20	平坦	
	S28と重複する。					
30	100×(100)	円形	N－15°－E	70 70	平坦	諸b
	S31と重複。覆土内から土器出土。					
31	(70)×60	長円形	N－20°－W	(55) 40	平坦	諸b
	覆土は黄褐色土。S32と重複。土器					
32	(90)×65	長円形	N－44°－E	70 30	平坦	諸b
	覆土は黄褐色土。S31と重複。土器					
33	50×35	長円形	N－64°－E	10 10	平坦	諸b
	覆土は褐色土。柱穴か。					
34	60×40	楕円形	N－9°－W	40 30	平坦	
	覆土に柱穴痕を残す。					
35	80×50	不整円形	N－14°－E	55 15	平坦	
36	55×35	楕円形	N－45°－W	30 20	平坦	
	形態から柱穴ピットか。					
37	55×50	円形	N－30°－W	45 45	平坦	
	覆土内に集石あり。					
38	70×70	円形	N－14°－W	50 45	平坦	
39	190×110	長円形	N－54°－E	115 60	二段底	諸b
	土層ならびに底面の状態から2つのピットの重複とも考えられる。					
40	55×40	不整円形	N－90°－E	25 25	平坦	
	形態から柱穴ピットか。					
41	110×100	円形	N－15°－E	95 90	平坦	
	1号住居南床を掘り込む。					
42	(200×120)	楕円形	N－25°－W	不明	不明	諸a～十三菅提
	上面に集石。					

1.黒 色 土　弱粘質，やや硬い。
2.褐 色 土
3.黄褐色土
4.黒 色 土　0.5～1mmのローム粒を含む。硬い。
5.明黒色土　0.5mm程のローム粒を含む。柔かい。
6.明黒色土　ローム粒がまったくみられない。
7.明黒色土　0.5～2mmのローム粒を含む。硬い。
8.明黒色土　ローム粒をわずかに含む。柔かい。。
9.黒 色 土　ローム粒がまったくみられない。柔かい。



第59図　7号・8号小竪穴

遺物　土器（第65･66･67図）第1号小竪穴では1が覆土上層から出土している。口径36.2cmで、口辺が大きく外方に開く器形を呈する。表面には口唇直下に幅広の隆帯をめぐらし、その上面に刻みを付している。胴部以下は無文である。口縁内部には5cmほどの長さの隆帯を2条貼付している。おそらく4単位になされたものであろう。胎土は混入物がほとんどなく、焼成は極めて良く、赤褐色を呈する。

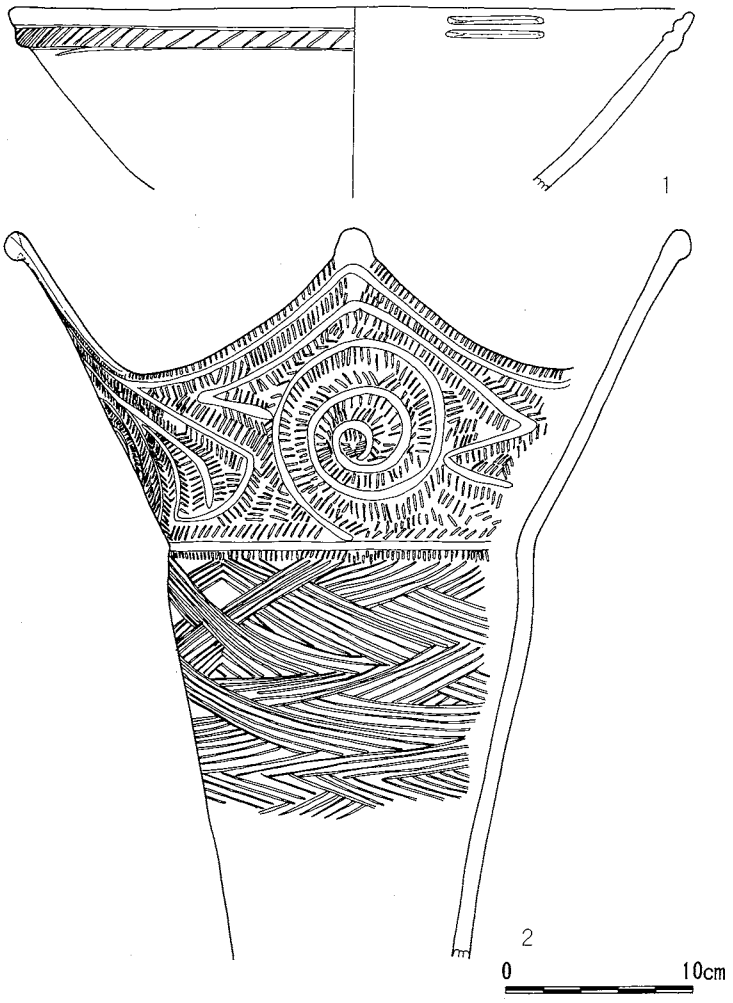
第2号小竪穴では爪形文の3、無文浅鉢形で口唇部に貫通孔を有する4とが出土した。第3号小竪穴では多量の土器が内包されていた。2は底面からやや浮いて横倒しの状態で発見された。口径36.4cm、器高40cmを越える大形土器で、底部から直線的に開き、いったん胴部でくびれ、再び大きく口辺に向かって開き、口縁は大きな山形を呈する。山形口縁直下に沈線文による渦巻文、菱形文を配し、空白部は沈刻文を充塡している。胴下半部は沈線による粗雑な綾杉文を施文する。色調は褐色を呈し、焼成は良い。他に6・7は渦巻の凹線文を、5は沈線文にボタン状突起を貼付してきる。

第5号小竪穴では単節斜縄文を施した10、束の縄文の9があり、他に諸磯b式・北白川下層式の小破片が得られている。第6号小竪穴では11～18が出土し、14～16は縄文地文に孤状の爪形文を、11・17は沈線文を主体に刻みのあるボタン状突起を付す。12・18は結節状浮線文を直線状に、あるいは孤状に配し、18はボタン状突起を併用する。

第7号小竪穴では粗い斜縄文上に浮線文を配した19、沈線文の20、大きな山形口縁部の破片の21などがある。第11号小竪穴では爪形文の23・24、縄文地文上に浮線文を併用する25、平行沈線文と綾杉文とによって構成されるが26がある。

第15号小竪穴では第3号小竪穴とともに多くの土器が出土した。28の大形破片は覆土上層から出土した。28～30は山形口線で大きく朝顔形に開く器形を呈し、半截竹管工具により器面全体に曲線文を密接に施文する。第16号小竪穴では爪形文・円形竹管文を組み合せた35が、また第17号小竪穴では縄文と沈線文とが併用されたのがある。第24号小竪穴では縄文施文の土器が出土した。

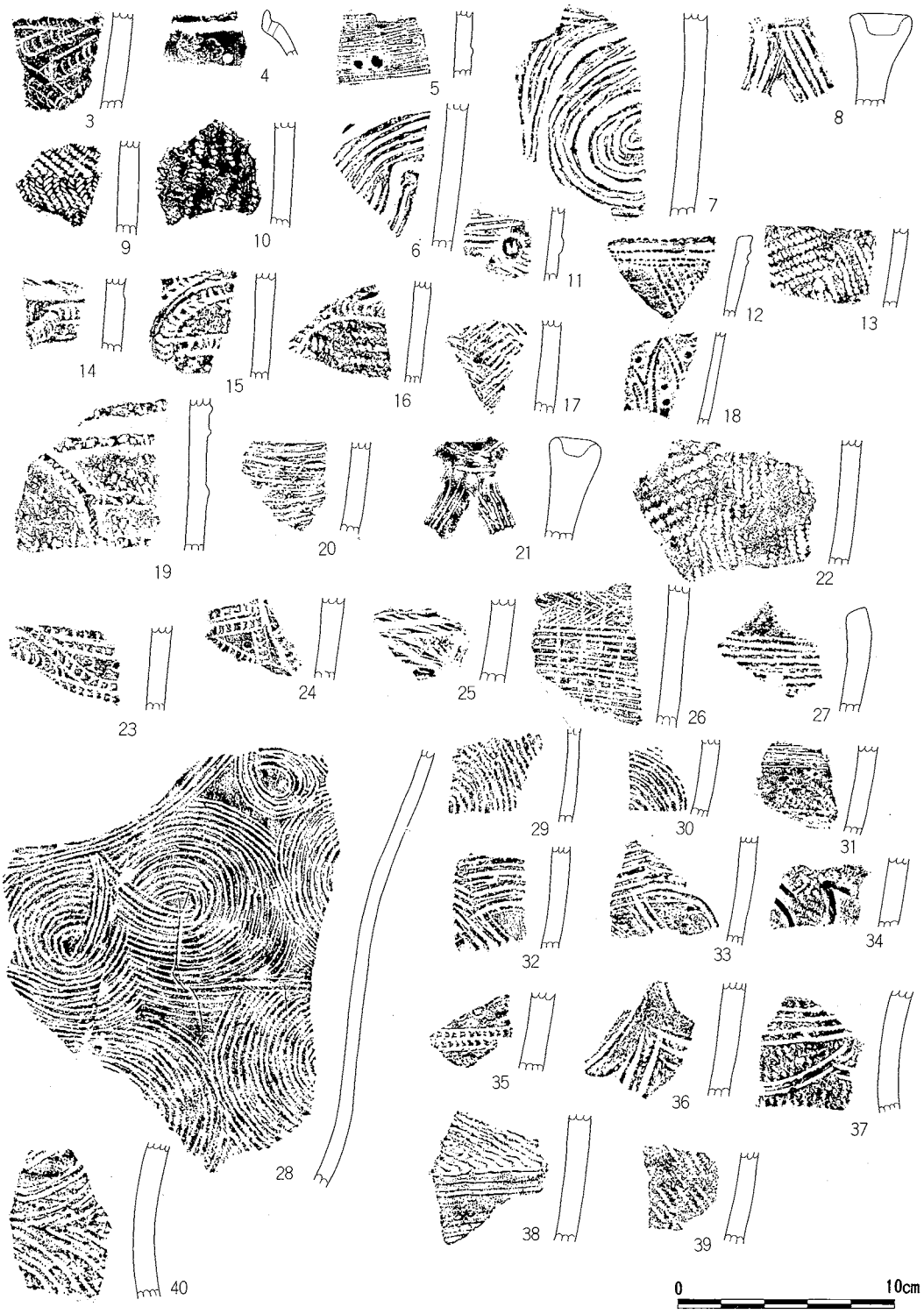
第25号小竪穴では、粗雑な縄文に平行沈線文を加えた41、箆切り浮線文を主体とした43～45が



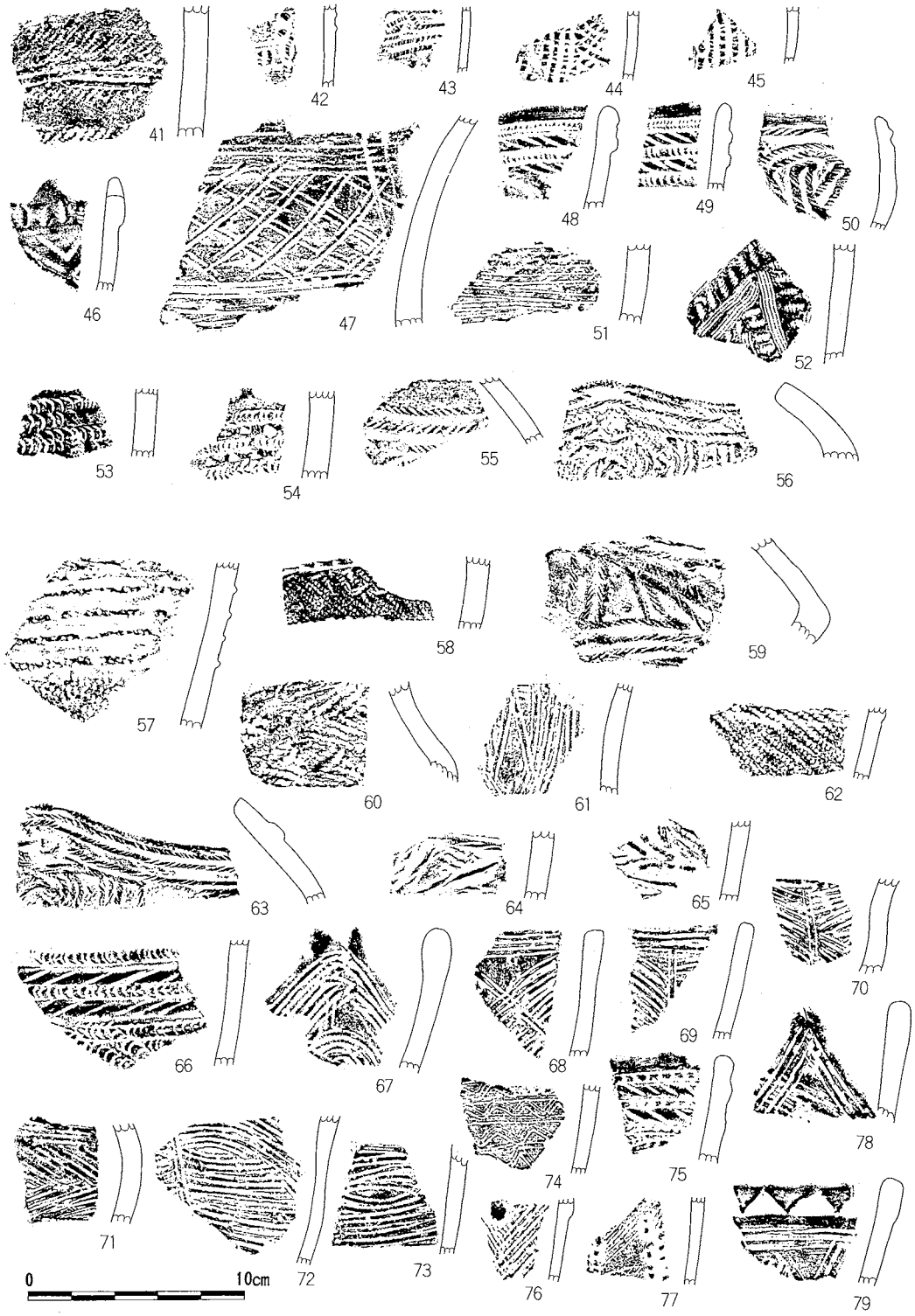
第65図　小竪穴出土土器

出土している。第28号小竪穴の46は刺突文を有する神ノ木式、47は平行沈線を格子状に施し、48・49は爪形文と浮線文を、また50は刻みをもつ浮線文を、51は縄文地に沈線文を併用したものである。

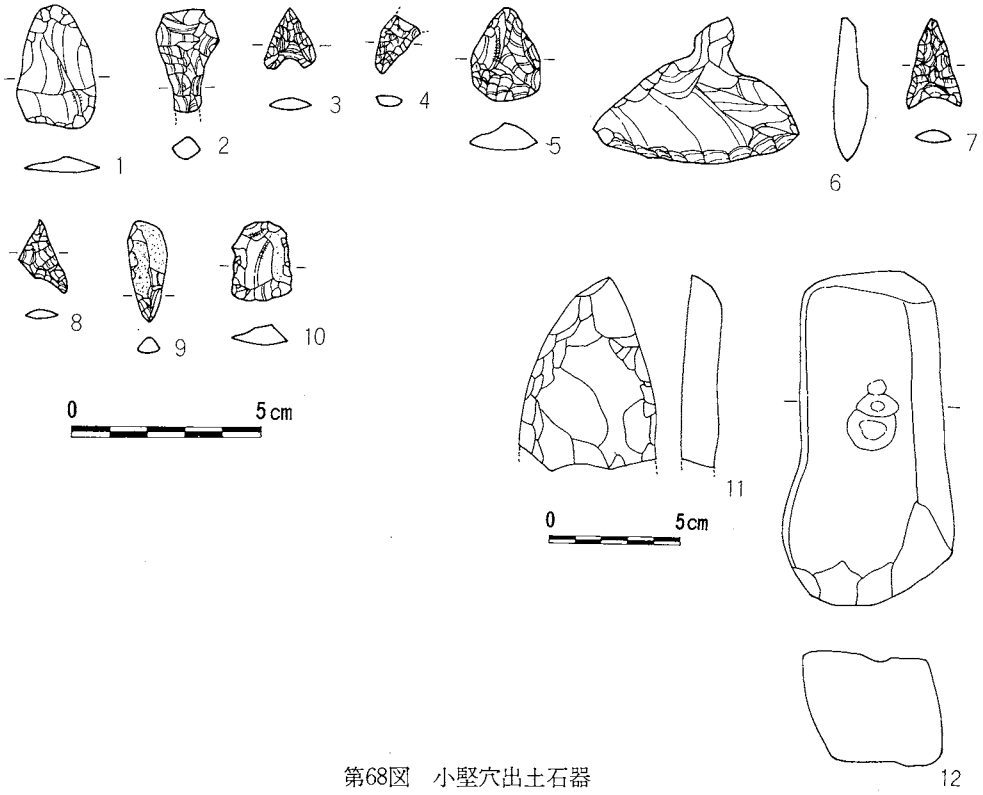
第30号～32号小竪穴では、櫛状工具による刺突文と平行沈線文が施された52の神ノ木式が、爪形文の53・54が、縄文地に浮線文を配した55～58があり、56は内側に大きく彎曲するキャリパー状の口縁である。第33号小竪穴の59・60ともキャリパー状口縁で、59は浮線文を、60は羽状縄文を有する。第39号小竪穴の61は縄文地に平行沈線を、62～65は沈線文を主体とし、63はキャリパー状口縁の破片で、波状を呈し、栓状突起を貼付する。



第66図　小堅穴出土土器



第67図　小堅穴出土土器



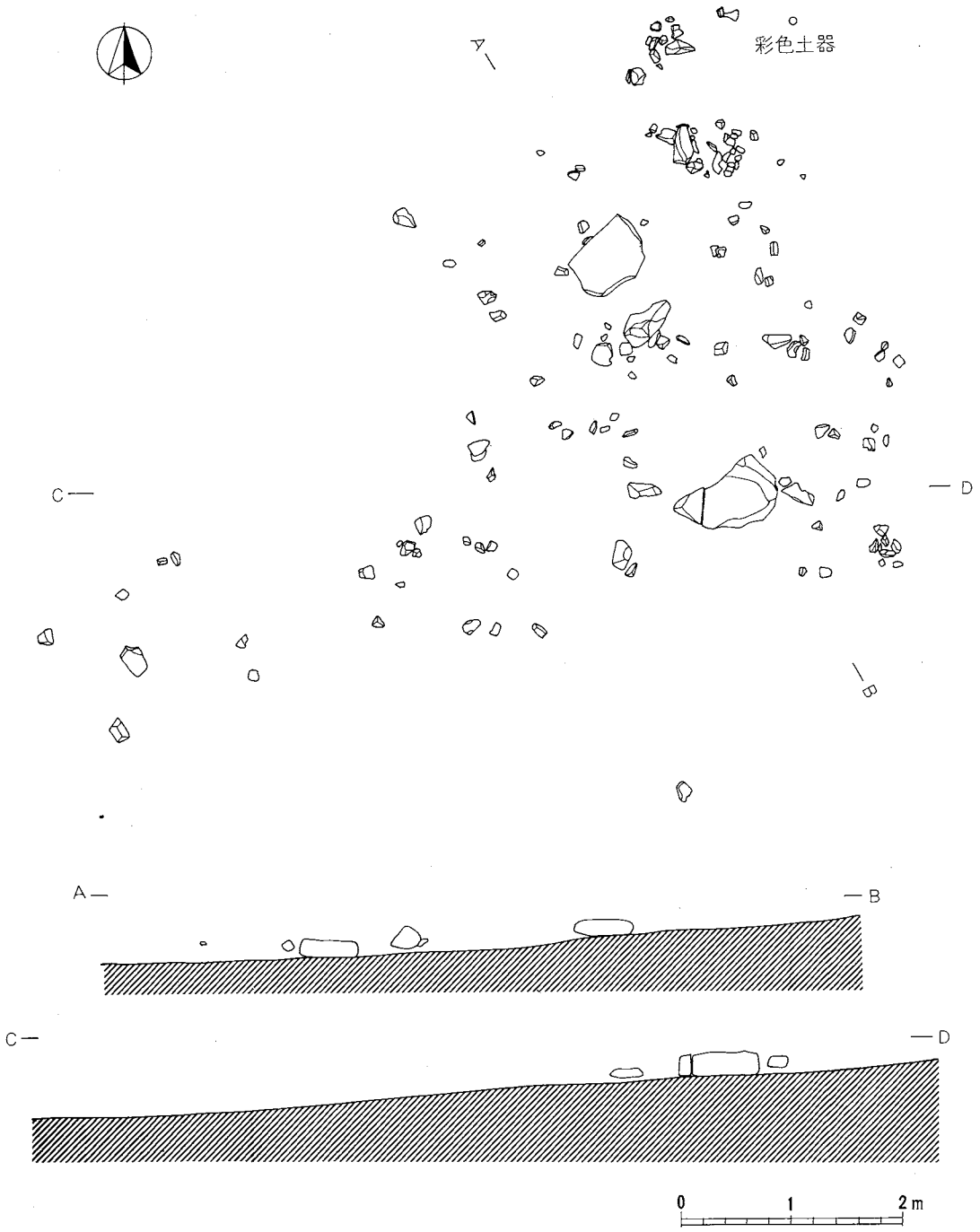
第68図　小竪穴出土石器

第41号小竪穴の66は斜行する沈線を地文に爪形文を施文し、67～73は平行沈線主体で、68～70は斜交文、71は綾杉文、72・73は孤線文の構成をとる。第42号小竪穴の74は平行沈線による波状文を、75は爪形文、76は沈線にボタン状突起を、79は平行状線文に三角陰刻文を併用する。

石器（第68図）　小竪穴出土の石器は総数12個で、8ヶ所の小竪穴から出土している。41ヶ所検出された小竪穴中石器が出土した小竪穴が8ヶ所であったという状況は、中期に発見される小竪穴からの石器出土状態と比較すると少ないといえる。

第7号小竪穴では打製石斧の頭部11が出土している。尖頭状を呈する。第11号小竪穴では石鏃と石錐が各1点得られている。石鏃1は素材の鋭利さを利用し、加工をほとんど施さない簡単なものであり、石錐は柄と錐部との区分が不明瞭な形態のもので、錐部の一端を欠いている。第14号小竪穴では表面に3孔を有する凹石12が出土している。第16号小竪穴では、抉り込みの浅い完形品の石鏃3が得られ、第17号小竪穴では石鏃の残欠品4が1個出土している。第22号小竪穴では凸状の底辺の石鏃5と横型の石匙6が各1個出土した。第23号小竪穴では抉り込みの少ない完形の石鏃7と左脚を欠いたもの8とが出土している。第34号小竪穴では原石にほんのわずか加工した石鏃9とスクレパー10がある。

以上のように、本遺跡の小竪穴出土の石器は、中期に属する小竪穴にしばしば伴出する打製石



第69図　集石遺構

斧、石皿、磨石、凹石などがほとんどなく、石鏃、石匙、石錐等の剥片使用の石器が主体を占めている。

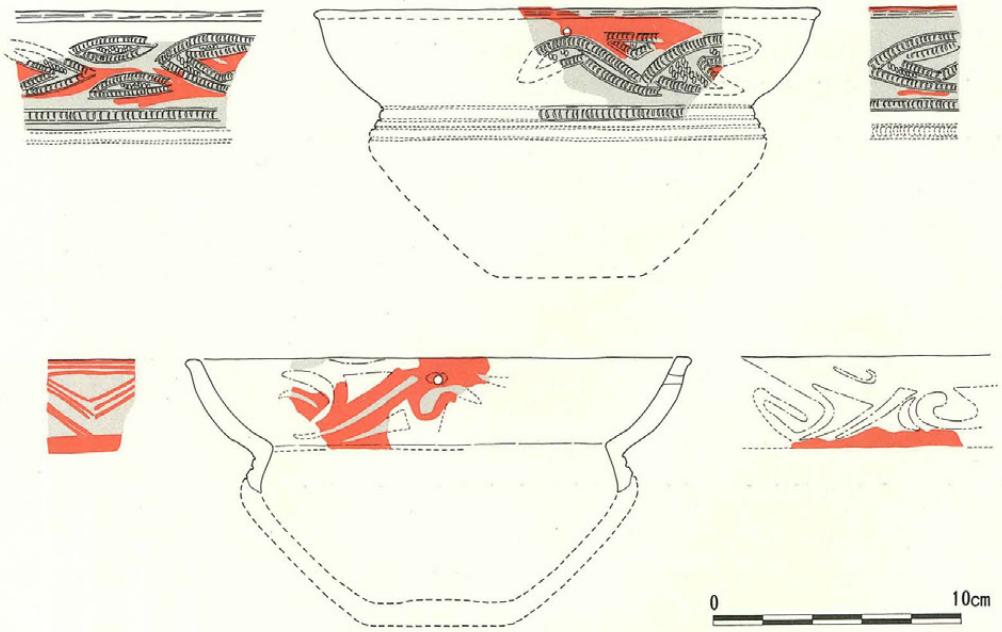
（小林康男）

（8） 集石

調査径過 集石は調査地区中央部、第23号～39号小竪穴のやや西で第６号、７号住居址の東側にある。集石の存在する場所を遺跡全体から見ると、平安時代住居址群が展開する低所を望むやや高い部分にあたり、縄文期の住居址群からは20ｍ前後離れた内奥の地域にある。この周辺は縄文時代の遺物の散布は希薄であった。

本遺構は、表土を重機によって削平する際、大きな石が検出され集石遺構の存在が予想されたため重機による表土削平を中止し、人力による作業に切り換え、集石の全容を明らかにすることにした。集石の底面まで掘り下げを行なったところ、集石は大きな石を中心にした小範囲に展開した小規模なものであることが判明した。集石およびその周辺からの遺物の出土は極めて少なく、わずかに諸磯ａ式の彩色土器（第69図）と小破片の前期に属する土器片、そして石器が出土したのみであった。

遺構（第69図）集石は東西８ｍ、南北７ｍの範囲にわたっており、特に石の集中する部分は東西５ｍ、南北２ｍ程の小範囲である。集石は傾斜面にあるため最高所の東側と低地の西側とでは約１ｍの高低差がある。集石は、70×50cmと100×60cmの上面平担な大きな２つの石を中心に人



第70図　集石出土彩色土器

頭大の石を集積して構築されている。集積状況にはこれといった計画性、規則性は認められない。 (小林康男)

遺物　土器（第69図）中央集石内北側から３片出土した。口径22.4cm（図上復元）、（推定器高10.8cm残高5.4cm）、器厚７mmの胴上半部が内側にくびれ、頸部で外側にくびれ口縁部が丸みをもって開く、諸磯ａ式期の新しい段階の浅鉢形土器である。いわゆる磨消縄文の木の葉文が施文されている。内面は丁寧にミガキで整形し、内外面に黒色、赤色塗料を塗っている。塗料は初めに黒色を全面に塗り、その上に赤色で文様を描きながら塗っている。赤色塗料は筆状のもので塗っているらしく２～３本の細い線が１本の線を構成しているのが観察され、モチーフは三叉文状や渦巻、三角形状の幾可学的な文様である。剝げ落ちた所にはうっすらとその痕跡が残っている。 (島田哲男)

石器（第73図）　集石およびその周辺からは計27点の石器が出土している。内訳は石鏃22、尖頭状石器１、石匙１、石錐２、スクレイパー１である。

石鏃22点中、完形品は５点のみで他は欠損品である。１～９・20は底辺への抉り込みが顕著なもので、１～３・20は特に深く抉られている。10～12は抉りがほとんどないものの13～16・40は平基で、15は底辺に近い部分でやや外に張り出す特異な形状を呈する。

尖頭状石器22は鈍角な尖頭部を作出し、基部は茎状にくびれをもつ。石匙23は、円形状の身をもち、右辺に調整痕を残す。石錐24は、石匙の再利用品で、石匙の一方の刃部を石錐として再加工したものである。第11号住居址でも同形のものが出土している。25は柄のないもの。スクレイパー26は縦長の大きな剝片を使用した直刃のものである。

集石およびその周辺からは打製石斧、磨石等の石器は１点の出土もなかった。　(小林康男)

（９）　土器集中地区および遺構外

遺構外出土土器　本遺跡の遺構外出土土器は、近接遺構第10号北より南東５ｍよりまとまって発見されたものである。出土層位は２層褐色土である。しかしながら、ローム層迄掘り下げ精査するも遺構及び何等の遺物の検出を見ない。出土地点は台地（本遺跡）の南はずれで、直ぐ下には道路が東西に走り、やゝ急崖状に削り取られ、今回出土の土器に関連すると思われる南側周辺に於いては最早や遺構、生活址の遺存は望むべくもない状態であった。

検出された土器はその大半が小破片で、縄文中期末葉加曽利ＥⅣ式～後期前半堀之内Ⅱ式に比定される土器群であった。その主体は後期初頭土器堀之内Ⅰ式であった。以下遺構外および土器集中地区より出土した土器をⅠ群～Ⅴ群に類別して記述したい。

第Ⅰ群、縄文中期末葉加曽利ＥⅣ式に平行するもの（第71図１～10）

Ａ類　浮線を地文とする楕円文土器群（第71図１）

１は、曽利Ⅴ式に属する深鉢形土器と思われる口縁部片で、消失した頸部の括れと弱い内彎ぎみに外反する口縁と嘴状に尖った口唇部を直立させ、更に口縁部上部に集約された文様帯にこの時期の特徴を見る。省略された太い沈線を区画内に内蔵する楕円文と渦巻文の組み合わせ文様構

第71図　土器集中地区および遺構外出土土器

成で、頸部より胴部にかけて粗雑な連続八の字文が施文されている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、内面の研磨は密で、胎土に雲母、白色不透明の砂粒を含む。

B類　縄文を地文とした微隆土器群（第71図２・３）

２は、かすかに縄文地文が残存し、上端に円形刺突が施こされた懸垂隆帯に、沈線を伴う列点状のキザミが附された横位微隆帯が連結された胴部小片で、研磨された内面には炭化滓が附着している。比較的厚手土器で、1.52cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土に小石・砂粒を含む。３は、ＲＬ縄文地文に平行する沈線を伴う懸垂微隆帯を垂下させる文様構成で、色調は赤褐色を呈し、焼成は普通で、胎土に雲母、小砂粒を含む。

C類　沈線によ つて区画された磨消縄文土器群（第71図４～８）

４～８は太い沈線によって区画される直・曲線的な磨消縄文帯を有する土器群で、施文工程は、縄文→沈線→無文帯研磨の順に行なわれ、内面は箆状工具により、ナデ研磨が施こされている。縄文原体は、いずれも単節ＲＬ横回転施文である。器形は小片の為不明であるが胴部片と思われる。６のみ括れが見られ、色調は４の光沢ある黒色で、他はすべて灰褐色を呈する。胎土に小石・砂粒を含み、風化の為ザラザラしている。

D類　曲沈線文土器群（第71図９）

９は、太い懸垂沈線に雑な曲沈線が施文されているが、文様は不明である。内面には箆状工具による横ナデ調整痕が残され、研磨不足で、色調は赤褐色を呈し、胎土に小石・砂粒を含む。

E類　結節沈線文土器群（第71図10）

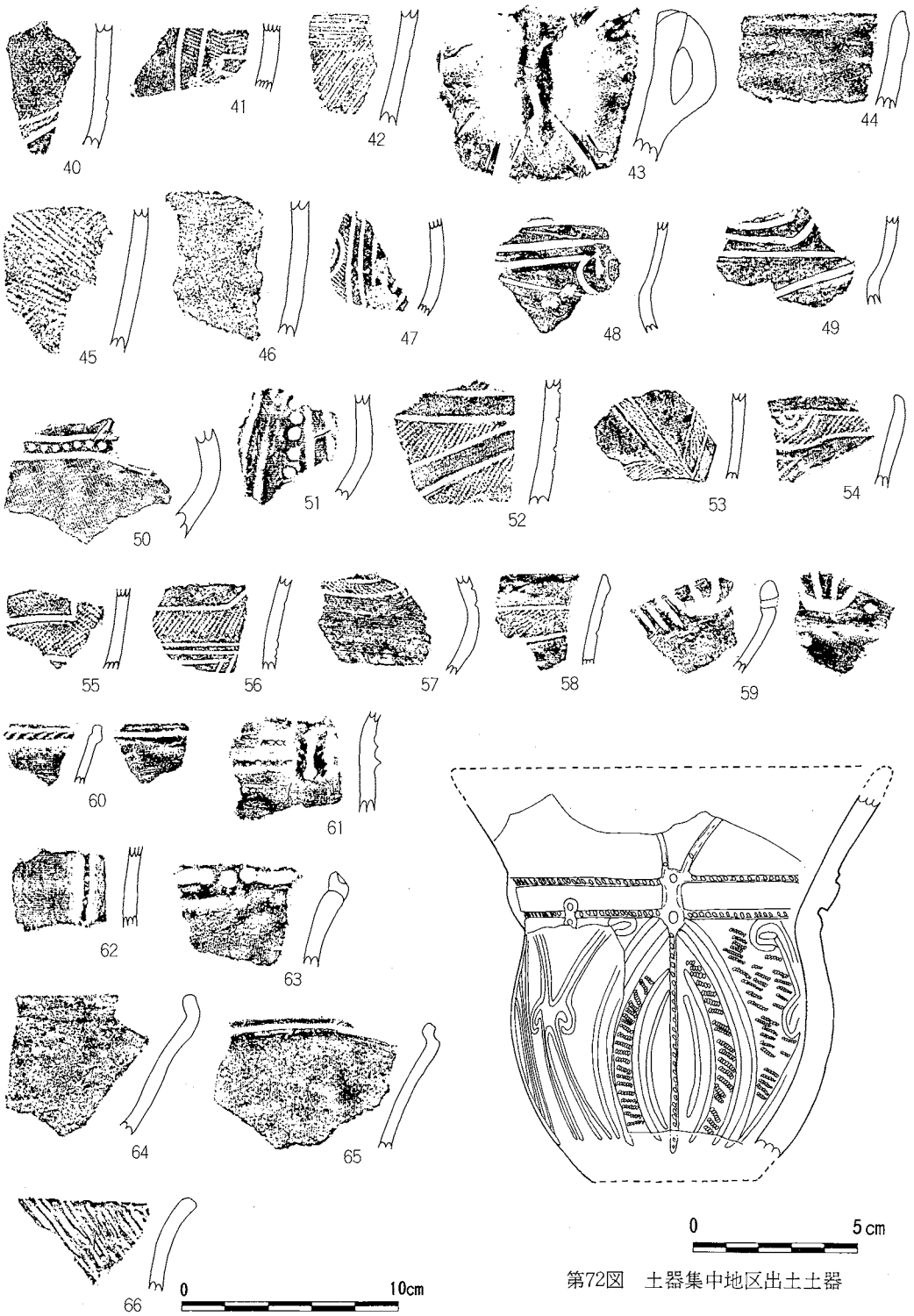
10は、直線的に外反する浅鉢形土器の口縁部片で、二重口縁を有し、口唇部は平坦で、1.35cm巾の貼り付け口縁部直下に半截竹管施文具によるやゝ雑というか、長い結節沈線（押し引き）手法が行なわれていて、以下は無文である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に阿玉台様式様の金雲母を含み、古い要素と新しい要素を兼ねそなえた土器であり、内面は丁寧に研磨されている。

第Ⅱ群土器　縄文後期初頭称名寺Ⅰ式に平行するもの（第71図11～14）

A類　磨消縄文を主体とした土器群（第71図11・12）

11は、頸部から胴上部片で、器形は胴中位に括れを有し、胴上半部から口縁部にかけて外反し、口縁部はやゝ内彎する深鉢形土器と思われる。頸部から上胴部にかけて平行する太い曲線的な沈線が施こされ、渦巻文と云えるネガティブ化された丁字状文が、恐らく二段に文様展開がなされるものと思われる様相が窺われる。縄文原体は単節ＬＲが沈線間に縦回転されている。内面は箆状工具の研磨が丁寧で、光沢を帯びている。色調は褐色を呈し、内面に焼成時の煤煙痕が残り、黒ずんでいる。胎土に白色不透明の砂粒を含む。12は、11と同類と思われるが、文様構成は小片の為定かではない。色調は淡い赤褐色を呈し、焼成は普通で、内面のナデ研磨は丁寧である。胎土に白色不透明の砂粒・小石を含む。

B類　条線文土器群（第71図13・14）



第72図　土器集中地区出土土器

第72図　土器集中地区および遺構外出土土器

13・14は、胴部片で、この期の深鉢形土器は、口縁部の外反及び胴部の括れは弱く、口縁部はかすかに内彎する特徴を有するが、13・14は、その様な器形を想定する事は不可能である。約4ないし5本単位の櫛状工具による櫛描条線文が無造作に縦に大きく波状を描いている。この土器は或いは粗製土器として把握しても良い土器かも知れない。内面にハケ状工具による調整痕が残され、仕上げはやゝ粗雑である。焼成はやゝ良で、胎土に白色不透明の砂粒・小石を含む。尚この土器は、口縁部から胴部にかけて全面に蛇行櫛描沈線が施こされる縄文中期末葉加曽利ＥⅣ式からの系譜を引くものと思われる。

第Ⅲ群土器　縄文後期初頭堀の内Ⅰ式に平行するもの（第71図）

Ａ類　口縁部に円形の刺突（列点文）が施文された土器群（第71図15・16）

15・16は棒状施文具によって口縁部上部に円形の列点文が深く刺突された口縁片で、ともに後期前半土器の普遍的な波状口縁で、15は、朝顔状に大きく開く口縁部に山形状の口唇部は称名寺式と類似している。16は、波状口縁部の頂上部を残存した土器片で、大きくカーブを描きながら外反する胴部を持ち、口唇部は直立する浅鉢形土器で、色調は15・16ともに茶褐色を呈し、焼成は良好で、研磨は密である。胎土に小石・砂粒を含み、16は、外面に煤煙炭化物が附着し、黒ずんでいる。

Ｂ類　縄文を地文とし、曲・直線を施文する土器群（第71図17～20第71図21～23第72図41）

17は、内彎ぎみに外反する器形の深鉢形土器の口縁部片と思われ、口唇部に隆帯めぐらし、口唇に丸みを持たせ、且つ平縁に仕上げ、口唇部直下は1cm巾に平担に整形している。しかも僅かながら括れを形づくる。口縁部は平行沈線をめぐらし、更に沈線により窓枠状のモチーフを配し、沈線内は磨消を行なっている。地文単節ＲＬ縄文内には蛇行する撚紐の結び目のループが見える。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で、指頭による調整痕が残されており、胎土に小石・砂粒を含む。18は、大形土器の胴部片で、平行する弧状沈線はナゾリがなされ、太く広くなっている。モチーフは不明である。内面の研磨は密で、色調は赤褐色を呈し、胎土に白色不透明の砂粒・小石を含む。縄文原体はＲＬ横回転施文であり、やゝ小形の鉢形土器の胴部片と思われ、器厚は0.71cmを測る。内面は研磨されているが、デコボコが著しい。胎土に小石・雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。20は、ＲＬ縄文に縦位の沈線と渦巻沈線が見える。色調は茶褐色を呈し、胎土に小石・砂粒を含む。21は、小片の為文様構成は不明、細い沈線区画等から或いはⅠ型式前後する土器かも知れない。色調は炭褐色を呈し、胎土に白色不透明の砂粒・小石を含む。22は、甕形土器の胴部片ではないかと思られる脹らみが見える。太い曲線的な弧状の沈線が縦・横位に配されているが、構図については不明である。縄文原体は単節ＬＲで、内面は箆状工具による横ナデ痕が見えるが、断面サンドイッチ状の焼成の為か、器面がザラザラしている。胎土に雲母を含む。色調は赤褐色を呈し、外面は煤煙が附着し、黒ずんでいる。23は、口縁部に近い頸部片と思われ、括れを持って大きく朝顔状に外反している。括れ部に2条の太い平行沈線をめぐらし、上部の無文帯と下部の縄文帯との区画を計っていて、更に平行沈線の一方下部の線はナゾリが見られ太くなっている。

色調は赤褐色を呈し、内・外面に研磨が見られ、胎土に雲母・小石を含む。上部が肥厚して1.03cmを測る。41は、小片の為モチーフは不明であるが、一応堀之内Ⅰ式としたが、或るいは称名寺期に属するものかも知れない。縄文地に曲・弧状沈線が見える。色調は茶褐色を呈し、胎土に白色不透明の砂粒・小石を含み、焼成は良好である。

C類　縄文地文に沈線と刺突（列点文）が施こされる土器群（第71図24～27）

24～27は、縦位の沈線を主体として曲･弧状沈線や刺突による列点文が施文されている一連土器で、いずれも胴部片と思われる。24は、括れが見られる小片で、25は、内彎ぎみに外反する器形である。26は、やゝ垂直ぎみに外反し、27はカーブを描きながら外反している。25の横位沈線は竹篦状工具によるナゾリが施こされ、太く深くなっている。刺突はそれぞれ尖端のやゝ丸く尖った棒状工具によって列点状に施文されているが、25の深い刺突以外は浅く細かい棒状施文具と思われる。全体のモチーフが不明なのが惜しまれる。色調は24の赤褐色を除いて他は茶褐色を呈し、研磨は24のみ内・外面ともに丁寧に行なわれて光沢がある以外はいずれも内面のみ横方向ナデ研磨が施こされている。胎土はそれぞれ砂粒を含み、26は米粒大の小石を噛んでいる。器厚は25が0.78cm、他はまだたい0.98cmを測った。施文工程は、縄文→沈線→刺突→無文部研磨の順と思われる。縄文原体はいずれもＲＬであった。

D類　縄文地文に沈線が配され、更に横位キザミ隆帯がめぐる土器群（第71図28～30）

28は、逆くの字様に強く括れた部分の小片で、ＲＬ縄文地に縦位沈線が数条描かれ、上部の無文帯を区画する平行する２条のキザミ附きの隆帯がめぐらされている。内・外面ともに尖端が細く薄い竹篦工具による横ナデ痕が顕著に残されている極めて保存の良い土器片で、焼成は固く焼き締まり、色調は暗褐色を呈し、両面に二次焼成痕が見られる。施文工程は、隆帯→縄文→沈線→刺突→無文部研磨の順と思われる。29・30は、口縁上部に一条の沈線がめぐり、すぐ下に弱い斜めのキザミを附した隆帯がめぐる土器で、24は、曲・弧状沈線によって区画された磨消縄文が美しい。口唇部はくの字状を呈し、内彎する口縁部上部は欠除している小片で、口縁部は肥厚し、胴部は薄手で、0.56cmを測る。色調は茶褐色を呈し、胎土に白色不透明の砂粒・小石を多量に含み、焼成は良好である。30は、口唇部がやゝ丸みを持って直立し、内面に0.72cm巾の稜を形づくり、縦位弧状沈線は平行して走っているが、モチーフは不明である。小形土器片と思われ、薄く0.6cmを測る。色調は茶褐色を呈し､胎土に砂粒・小石を多量に含む為､内面がザラザラしている。

E類　沈線文施文土器群（第71図31～40第71図42）

31・33・36は、縦位曲・直沈線が施文されている胴部片で、39は、雑な蛇行状曲沈線が一条施されている粗製土器的な深鉢形土器片と思われ、40は､平行する弧状沈線が見える胴部片であり、渦巻文が施文されている。34・35・37・38は、口縁部片で、外反する口縁部上部に一条の太い沈線をめぐらし、頸部から胴部にかけて無文となる甕形土器片と思われる。いずれも口唇部を丸く仕上げ、38は、胴上部より朝顔状に大きく外反する口縁部片で、口縁部上部は無文で頸部から胴部にかけて大柄な山形の波線を引き、更にハの字文の手法で山形を重ねている。尚この手法は後

期中葉加曽利Ｂ式に受けつがれて格子文と変化すると思われる。37は波状口縁の様相を見せ、研磨はそれぞれ緻密で、特に31・33・38は光沢がある。色調は31・33・40は赤褐色、34は褐色、他はいずれも茶褐色を呈し、39は内面が黒ずんでいる。焼成は良好で、胎土は32・38・39は特に砂粒を含み、器厚は38・39は1.12cmで厚く、40の0.7cmがもっとも薄手であった。42は、フの字状重ね沈線が描かれている胴部片と思われる。色調は褐色を呈し、胎土に細片雲母を含み、焼成は良好である。

Ｆ類　無文粗製土器群（第72図43～45）

43・45は、口縁部片で、43は波状波状口縁をなす深鉢形土器と思われ、棒状把手がついている。つくりはやゝ粗雑な成形で、内面には横方向のナデが観察されるが、胎土に大量の小石・砂粒を含む為デコボコが著しく、なんとなく他の土器と比べて違和感の覚える土器である。色調は褐色を呈する。45は、弱く内彎ぎみに外反する器形で、指頭による口唇部の押えが見られ、内・外面とも竹箆状工具による横方向ナデ痕が見える。外面は黒ずんだ光沢があり、色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。44は、胴部片と思われ、外面は粗雑であるが、内面は光沢ある研磨が丁寧に行なわれている。色調は褐色を呈し、外面には煤煙痕が残されている。胎土に小石・砂粒を含む。

Ｇ類　縄文のみ施文の粗製土器群（第72図46）

46は、縄文のみ施文の謂ゆる粗製土器と称される深鉢形土器の胴部片と思われるが、胴部に於いて僅かに脹らみを見せる器形と把握したい。ＲＬ横回転施文で、内面は全体に煤煙状炭化物により、炭素被膜処理が施こされたような錯覚をおぼえるように黒色化している。色調外面は暗褐色を呈し、焼成は普通で、胎土に大量の白色不透明の砂粒・小石を含んでいる為、薄手0.7cmを測ったが、Ⅲ群として捉えたものである。

Ｈ類　器形不明の小形土器群（第72図47～48）

47～49は、小形の器形不明の土器片であるが、或るいは注口土器が含まれているかも知れない。強く脹り出した脹らみが見られ、いずれも内・外面ともに丁寧に研磨されている。47はＲＬ縄文地に縦位の曲線及び弧状沈線が施文されている。48は、最大脹り出し部にナゾリの見える二条の平行する沈線をめぐらし、更にその間に細い棒状工具により刺突（連続列点文）を施こしている。49は、縦位の孤状沈線を引き、その間にやゝ深い列点文を連続させている。いずれも内・外面とも研磨が丁寧で、光沢が有り、外面はなめらかである。色調は47は赤褐色であるが全体に黒ずんでいる。48・49は、茶褐色を呈し、48のみ胎土に多量の白色不透明の砂粒を含み、内面壁がザラザラしている。器厚は47は0.69cm、48は0.82cm、49は0.76cmを測る。堀之内期の注口土器の胴部はソロバン玉状に強く括れる形態を示しているので、以上の47・48・49の小形土器片からは明確には摘出出来なかった。

第Ⅳ群土器　縄文後期前半堀之内Ⅱ式に平行するもの

Ａ類　横位の沈線施文の土器群（第72図50・51）

50・51は、横位の曲弧状沈続が自由自在に描かれているが、何等かのモチーフがあるに違い

ないが、不明である。垂直の頸部より大きく脹り出した胴部は、或いはソロバン玉状に鋭く括れて、注口土器となると思われる事が、注口や、把手部が欠けているので不明である。括れ部には内面に稜を持ち、内・外面とも丁寧に研磨が施こされ、光沢があり、胎土も緻密で、精選生地と思われる胴部片である。色調はやゝ暗い赤褐色を呈し、焼成は良好で、薄手土器として50は0.5cm、51は0.72cm、を測る。

B類　磨消縄文、主として三角文を文様構成した土器群（第72図52～57）

52～57は、胴部片で、54は、口縁部片である。いずれもネガ、ポヂティブ化された三角形モチーフで文様構成がされている。52の内面と53の外面は酸化鉄土処理がされているものと思われ、あざやかな暗赤色を呈している。いずれも精選生地で、内・外面の研磨は丁寧に施こされた精製土器であり、沈線はそれぞれ浅く細く次期加曽利Ｂ式への移行が窺えられる。色調は52の表面は茶褐色55・57はやゝ明るい褐色、56は暗い茶褐色を呈する。53は、カップ形土器片と思われる。54は、全体に黒ずんで、内面には炭化滓が一面に固形となって附着している。口縁部の形体は大きく外反し、口唇部を内側に折り曲げて、丸み口唇を形づくり堀之内Ⅱ式の特徴を見せている。器厚は52の0.8cmから53の0.47cmの間であり、全般に薄手小形土器片である。縄文原体は52・54・56はＬＲ、53・55・57はＲＬである。

Ｃ類　縄文地に沈線を施こし、更にキザミ隆帯を施文した土器群（第72図58）

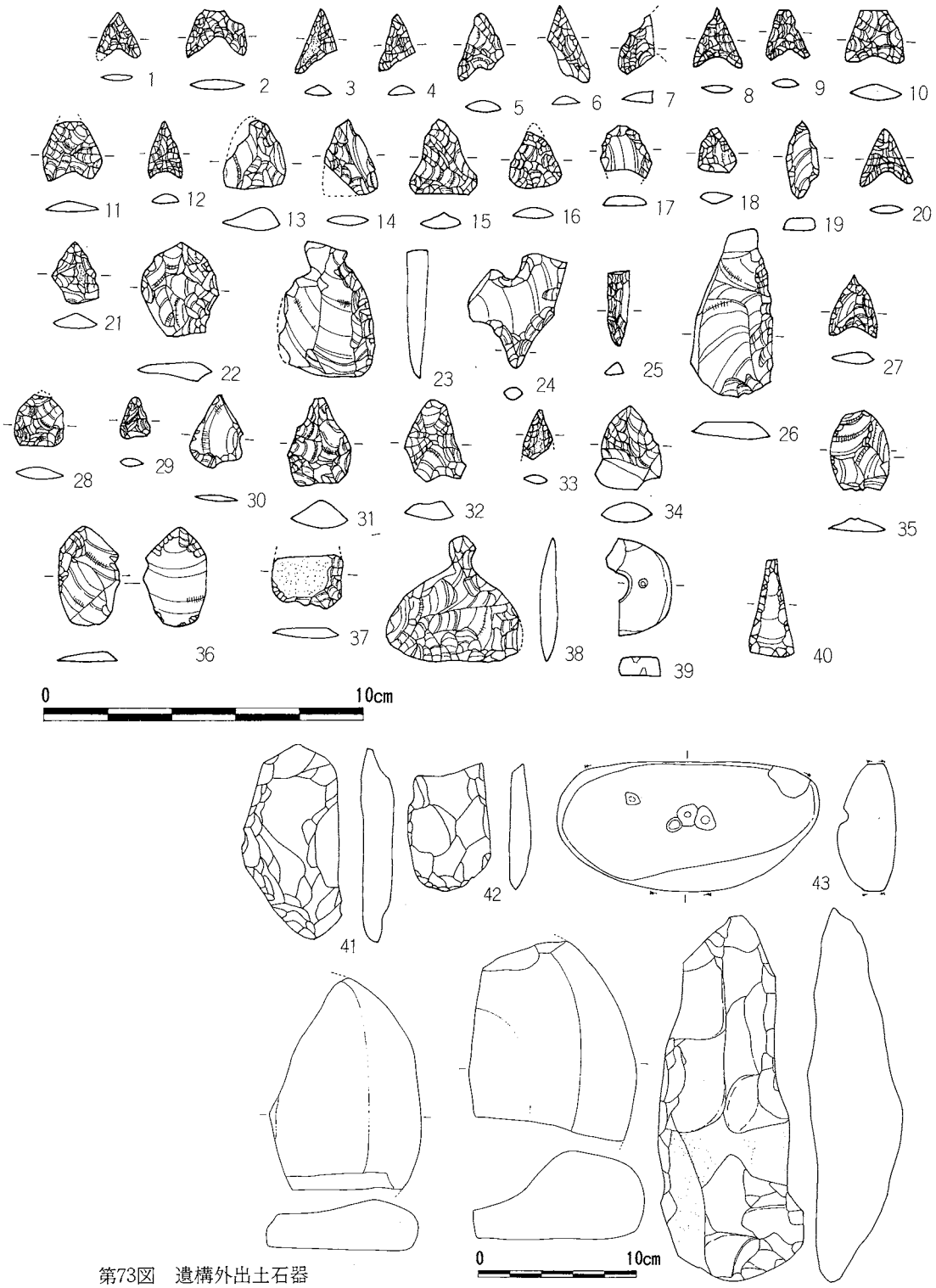
58は、ＬＲ縄文地に横位沈線をめぐらし、更に口縁部上部に竹篦状工具により、斜め刺突（キザミ）を附した隆帯をめぐらし、器形は朝顔状に大きく外反し、平担な口唇部直下内面に平行する二条の沈線が施文されている。研磨は内・外ともに丁寧に行なわれ、色調は茶褐色を呈し、胎土は精選生地であり、器厚は0.62cmを測る小形鉢形土器片と思われる。

Ｄ類　山形状突起を持つ波状口縁土器群（第72図59）

59は、山波状突起をつけた波状口縁土器の口縁部頂上部分を残す小片で、口唇部を竹篦状工具で斜めに山波状モチーフで作り出し、内彎ぎみに外反した口唇部を折り曲げている。酸化鉄土処理を両面に施こした小形土器と思われ、光沢があり、色調は明るい赤黄色を呈し、精選生地で、焼成は良好で器厚は0.72cmを測る。

Ｅ類　口縁部上部にキザキ隆帯をめぐらした土器群（第72図60～62）

60は、小形土器の口縁部片で、口縁部上部に竹篦状工具による斜め刺突（キザミ）を附した隆帯をめぐらしてい、頸部から胴部にかけては無文と思われる。外反した口縁部、平担な口唇部直下内面には一条の沈線が施こされて、色調は赤褐色を呈し、焼成は固く焼き締まり、胎土は精選生地である。器厚は0.4cmを測る。62は、断面三角形の縦位のキザミ隆帯が施こされ、研磨は外面は縦方向、内面は横方向で行なわれている。61は、大きく朝顔状に開く器形で、逆くの字状に括れると思われる口唇を欠く頸部片で、二条の平行するキザミ隆帯がめぐらされ、更にその隆帯上に橋状にかゝった８の字文が貼付されている。色調は明るい赤褐色を呈し、胎土は精選されていて焼成は良好であるが若干の細片雲母が見える。



第73図　遺構外出土石器

F類　口縁部に円形刺突（列点文）が施こされた土器群（第72図63）

63は、口縁部上部に円形刺突（列点文）が施こされて、ゆるやかなカーブを描きながら外反する浅鉢形土器の口縁部片で、口唇部直下に一条のナゾリのある沈線がめぐらされて、やゝ雑な成形で、研磨は施こされてはいるものゝ胎土に砂粒を含み、焼成がやゝ不良の為、内面壁は若干ザラザラしている。色調は茶褐色を呈し、器厚はやゝ厚く0.82cmを測る。

G類　無文粗製土器群（第72図64・65）

64・65は、口縁部が大きく外反し、朝顔状に開く深鉢形土器の口縁部片で、64は口唇部は内側に折り曲げ、65は外反する口縁にやゝ垂直に口唇部を丸く立ち上がらせて、口縁部上端に一条の稜を形づくりながらも内側に折り曲げている。64・65ともに波状口縁を有するものと思われ、色調は茶褐色を呈するが煤煙痕が残り、黒ずんでいる。焼成は良好で、胎土は精選生地であるが65は細片の雲母を含む。研磨は内・外面ともに丁寧に行なわれ、器厚は64は0.7cm、65は0.65cmを測る。半精製土器ではないかと思われる。

第V群土器　条痕文土器と思われるもの（第72図66）

貝殻により斜めに施文された条痕文と思われるが、ハケ状工具によって斜め充塡施文が行なわれたとも思えるが形土器の口縁部資料である。他の土器に比して異質な様相を具備している為、第V群土器66として別格扱いとした。内面にも横方向のナデが見える。口縁部は外反し、口唇平担に仕上げられているが、指頭による成形痕が残っている。色調は褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。器厚は0.65cmを測った。　（三村　肇）

石器（第73図）　遺構外からは石鏃7、尖頭状石器4、石匙1、玦状耳飾1、打製石斧3、凹石1、石皿2が出土した。石鏃、尖頭状石器等は調査地域北側、つまり前期の遺構が集中的に検出された地区からそのほとんどが出土し、逆に石皿、打製石斧は調査区南側、主として第5号、10号住居址周辺から出土した。

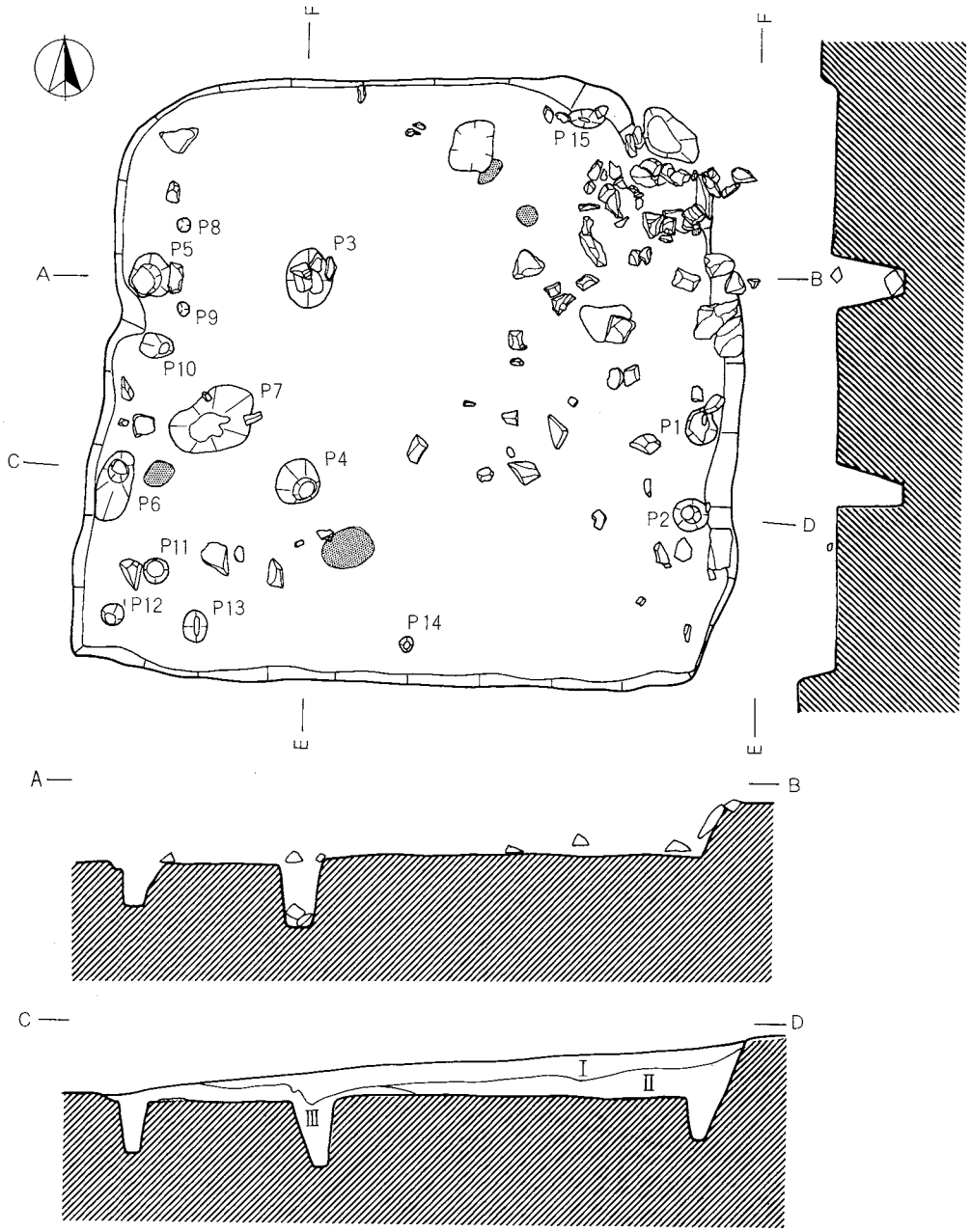
石鏃27～33は、部厚く、不整形のものが多い。尖頭状石器34～37は他地区から出土する同種のものより薄手である。しかし尖頭部を作出するためにのみ簡単単な加工を施している点に共通点が見い出せる。玦状耳飾39は第1号住居址北側から出土したもので、直径2.9cm、厚さ5mmの薄手である。使用中に欠損したらしく、再利用すべく両面から孔を穿っているが貫通するまでには至っていない。打製石斧41・42は部厚い素材を用いた加工の粗雑なもの。46は断面三角形を呈し、重量感のある石斧で、前・中期には余り類例を知らないものである。石皿44は第5号住居址脇から出土し、磨面は大きな凹みを示す中期に普遍的に伴出するものである。45は第5号、10号住居址の中間から出土したもので、44に比較し磨面の凹みは顕著でない。　（小林康男）

第2節　平安時代

（1）　第5号住居址

調査経過　本址は調査区の南東隅寄りに位置する。調査区南半部に展開する平安時代住居址群の東端にあたり、標高も最も高い。分布調査の際には、付近で十数点の縄文土器片と黒曜石を採集したにすぎなかったが、重機による表土剝ぎの時、ローム層への黒色土の落ち込みが明瞭に確認できた。さらに表面検出により方形を呈す単一の遺構であることが判明した。堀り下げ開始直後に鉄製紡錘車と灰釉陶器片の出土をみ、平安時代の住居址であろうとの感を抱いた。壁の掘り込みはしっかりしており、土層の堆積にも乱れはみられなかったが、上層から下層にわたり拳大から人頭大の礫が散在していた。床はローム面を使っており、中央部に非常に堅緻な部分があってそれを追うかたちで検出・精査した。

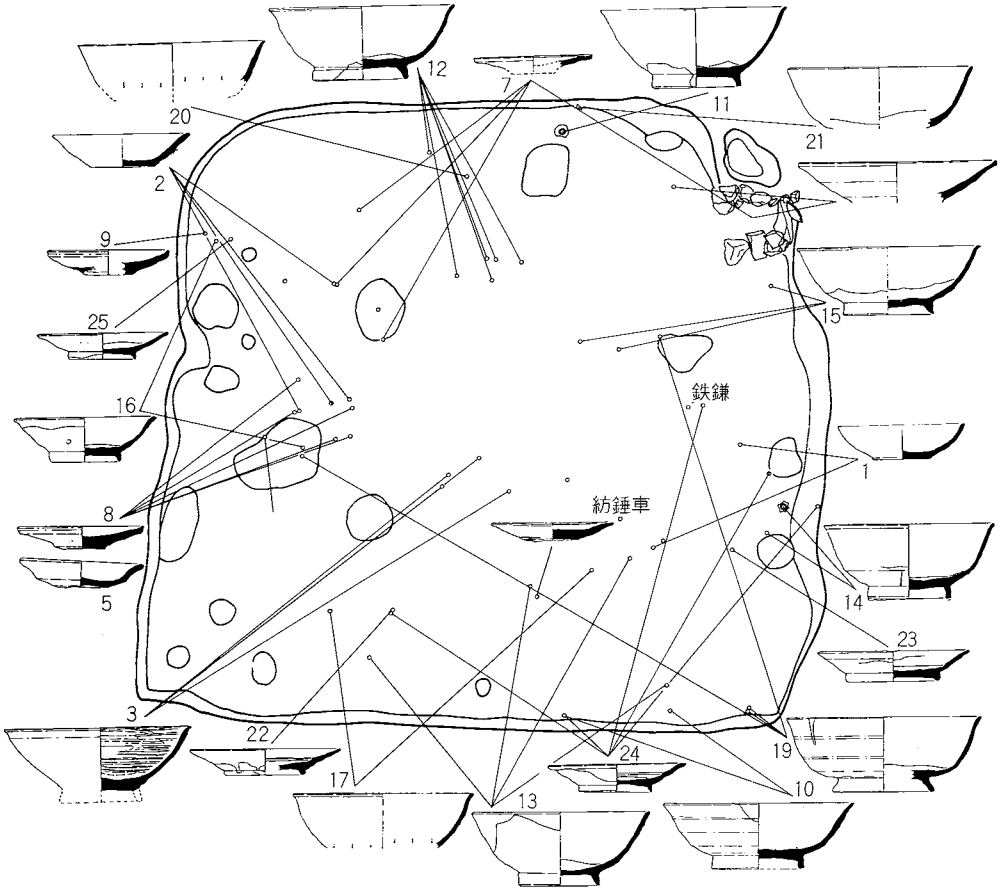
遺構（第74図）　一辺4.9～5.2mのやや歪んだ方形を呈し、主軸はほぼ北または東を指す。壁はローム層を掘り込んでおり、垂直よりいくぶん傾斜を減じている。西への緩傾地に占地しているため、壁高は東壁が50cmを測るが、北・南壁は5～45cmと西へ寄るほど低くなり、西壁は5～10cm程度である。床はロームの面をそのまま用いており、中央部から東・西壁下にむけてわずかな傾斜をもって、周辺部にも広く浅い窪みが各所にみられ平担とは言い難い。P_1・P_3・P_4を結んだ線で囲まれる一帯にタタキ状の非常に堅緻な部分があり、他も比較的堅く良好であった。ピットは床面上にP_1からP_{15}まで確認されたが、この他にも広く浅い窪みが4ヶ所ある。配置は、東壁際中央南寄りに約80cmの間隔をおきP_1(36×26　−16cm)・P_2(26×30　−34)、南北軸より約1m西に1.7mの間隔をおいてP_3(49×39　−38)・P_4(38×36　−55)、西壁際にやや不規則な配列ではあるが、北からP_8(12×12　−9)・P_5(36×37　−32)・P_9(12×10　−5)・P_{10}(20×28　−9)・P_7(56×69　−23)・P_6(57×30　−41)・P_{11}(20×20　−11)・P_{12}(17×20　−72)、南壁際にP_{13}(26×20　−61)・P_{14}(13×12　−7)、カマドのむかって左脇にP_{15}(16×30　−5)という不規則なものでいる。P_7・P_{10}以外は、掘り込みは直に近いが、P_4～P_6は段をもつ。また、真上から見通した時、下場のある程度の部分が隠れてしまう、傾いて掘り込まれたか或いはその様な状態になるべく使用されたと考えられるものにP_2(西北西へ)・P_4(東南東へ)・P_5(・P_5(西へ)・P_6(南へ)がある。P_3には径20cm近い礫が転落していた。本址に附随する施設としては、カマドがある。カマは東壁北隅に寄って、径5～20cmの礫を積んで構築されていたが、かなり崩れて天井部・煙道等は不明であった。内部に焼土・灰等の分布推積もなく、カマドに伴う焼土としては、背後の壁上のもの及びむかって右側の袖の外側のものが考えられるが、いづれもわずかな範囲のものにすぎない。カマドの左側外にピットがあるが、何かは不明である。床面上に4ヶ所、30×30cm位の焼けた部分が存在するが、いづれも地床炉的旋設或いは家屋焼失の痕跡等とは考えにくい。その他、周溝・張り出し部等は検出できなかった。

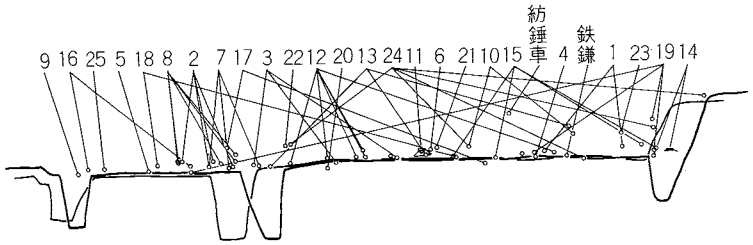


Ⅰ、黒色土
Ⅱ、褐色土
Ⅲ、暗褐色土（ローム混入）

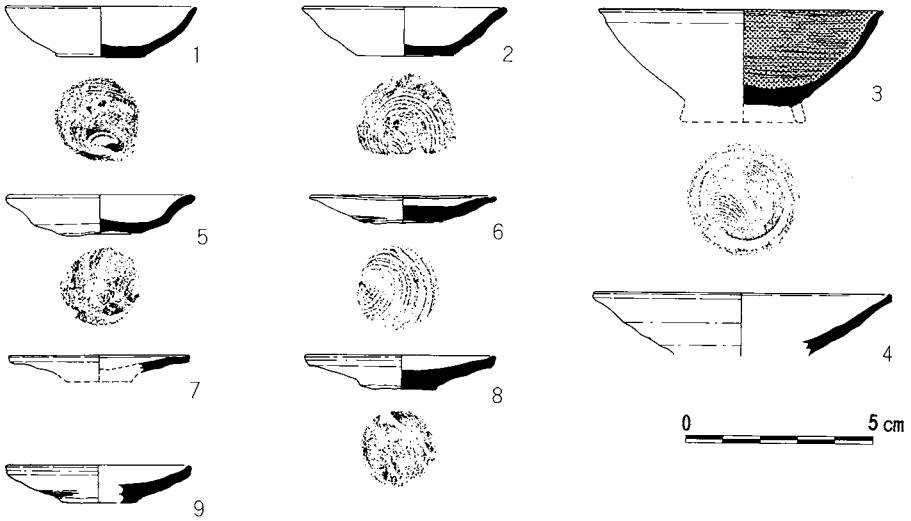
0　1　2m

第74図　第５号住居址





第75図　第５号住居址土器・鉄器出土状態



第76図　第５号住居址出土土器

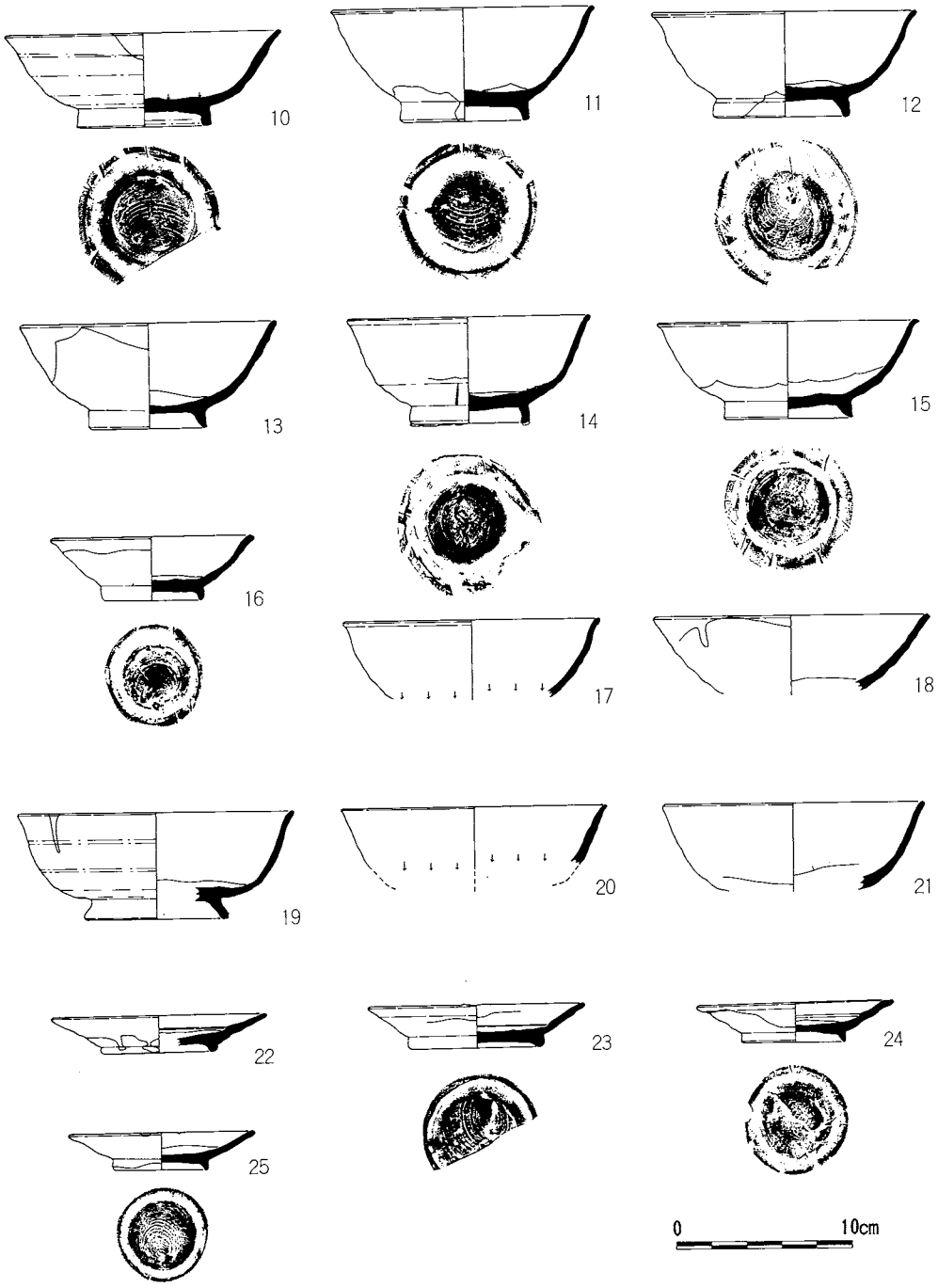
遺物　土器・鉄器・石製品がある。出土状況は、Ⅱ層下部及び床面近くから破片での出土が多く、床面に完形品に近いものがセットとして存在するという状態ではなかった。（第75図）

土器（第76・77図）　土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。出土量はさほど多くないが、灰釉陶器が半数以上をしめる。須恵器は甕の胴部と思われる小破片が２・３点あったのみである。図示した25点のうち１～９が土師器、10～25が灰釉陶器である。

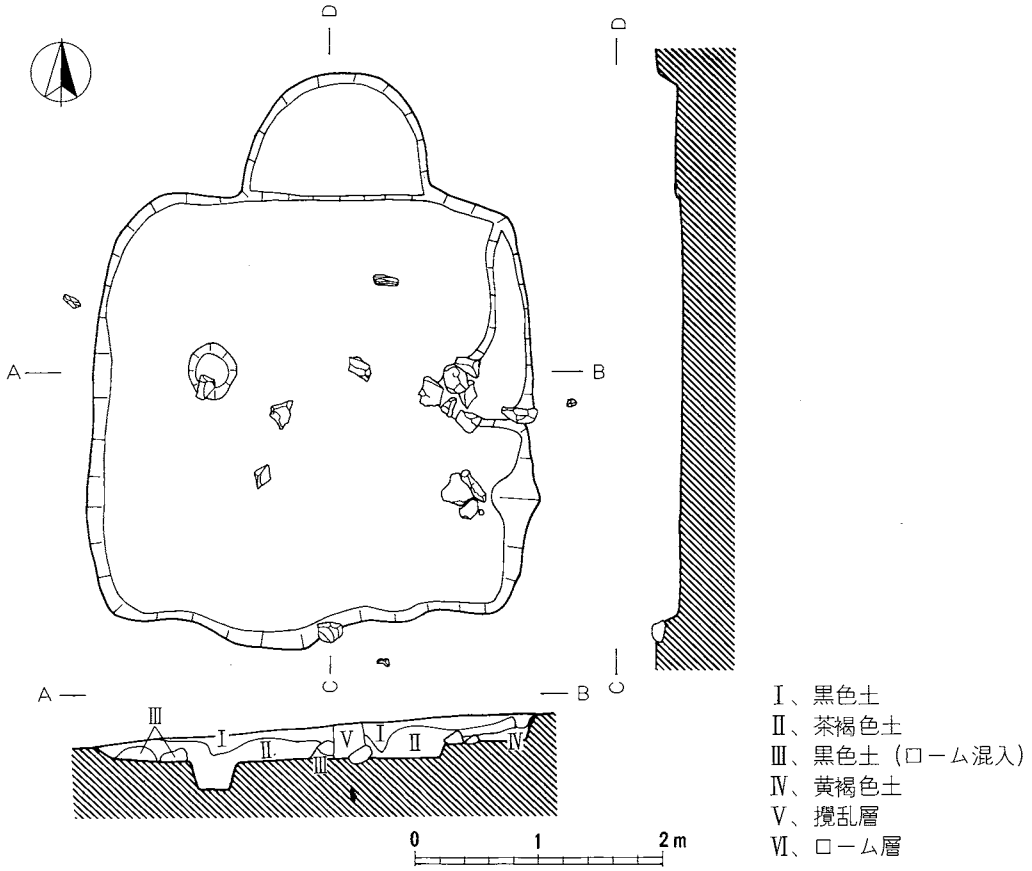
土師器には杯と皿がある。１～４は杯でロクロ成形され底部に回転糸切り痕を残す。３は、内面を横のヘラミガキ・黒色処理され、底部に高台が附された跡をもつ。このミガキの単位は画一的で長く、ロクロの回転を用いたものと推察している。５～９は皿で、やはりロクロ成形・回転糸切り痕をもつ。５以外は体部が直線的に外開する。６は口縁部内面に凹帯そっくり、７～９は口縁端部がつまみあげられ、立ち上がっている。

灰釉陶器は椀と皿類がある。10～21は墟で、ロクロナデされ底部に回転糸切り痕を残している。９のみ体部下半にわずかに回転ヘラケズリ痕が認められ、また14・15は底部をヘラにより調整される。16を除き、口径に比して器高が大きく、腰の張りの強い、深目な感じをうける時徴的な一群である。内面に重ね焼痕を残すものが多い。施釉の方法は漬け掛けによるものと思われる。12の高台付近の釉薬の至っていない外面は、墨状のものであまさず真黒になっている。９の口縁部外面の一部にも黒色の附着物がある。14は高台の先端に、焼成時、下に重ねられていた土器の器肉を多量に附着させており、内面重ね焼痕付近の釉に小さい泡立った様な激しい凹凸をもつ。22～24は内面に段をもつ段皿、25は皿である。ロクロ成形され、底部に回転糸切り痕を明瞭に残している。23・25は残存する口縁部にわずかなつまみ出しを持ち、或いは輪花皿なのかもしれない。

鉄器（第96図）　２点出土している。１は中央東寄りの床面直上から出土した鏃と推定される



第77図　第５号住居址出土土器



第78図　第６号住居址

鉄器である。茎の一部を欠いている。２は覆土Ⅰ層から出土した紡錘車である。軸の大部分を失っている。高いレベルからの出土で、本址に直接附随するものかどうか疑問である。　（直井雅尚）

（２）　第６号住居址

遺構　第６号住居址は、第７号住居址の南、第８号、第９号住居址の東に近く所在した。方形プランの竪穴を示し、北壁中央部に壁から約１ｍ北へのびる半円形の張出し部が附随する。規模は東西方向の上面径が353cm、下面径が330cm。南北方向は北部の張り出し部まで含めると、その長軸が上面径450cm、下面径が425cmとなる。検出面での壁高は、北壁が約25cm、東壁が13cm、南壁が20cm、西壁が15cmとなり、比較的浅い竪穴であることがわかる。床面は平担なつくりであり、址の西壁寄りに近く、柱穴と思われるピットが１箇所検出された。このピットは上面径が40×45cm、下面径が25×30cm、深さは25cmであった。この柱穴縁に12×20cmの割石が１個あった。竈は東壁の中央部に位置したものと考えられ、原形をとどめていないが、竈の素材として使用さ

れたと思われる石が、東壁中央部辺に集中して露現する。これらの石は10×23～25×28cm程度のものが10個程数えられ、近くの床面上にも13×25cm程度のもの数個を認める。いずれも割石であった。おそらく石組粘土竈であったものと推考される。この竈と思われる箇所の北面に近く、床面上に焼土の分布を認める。規模は15×22cmの小楕円状を呈していた。

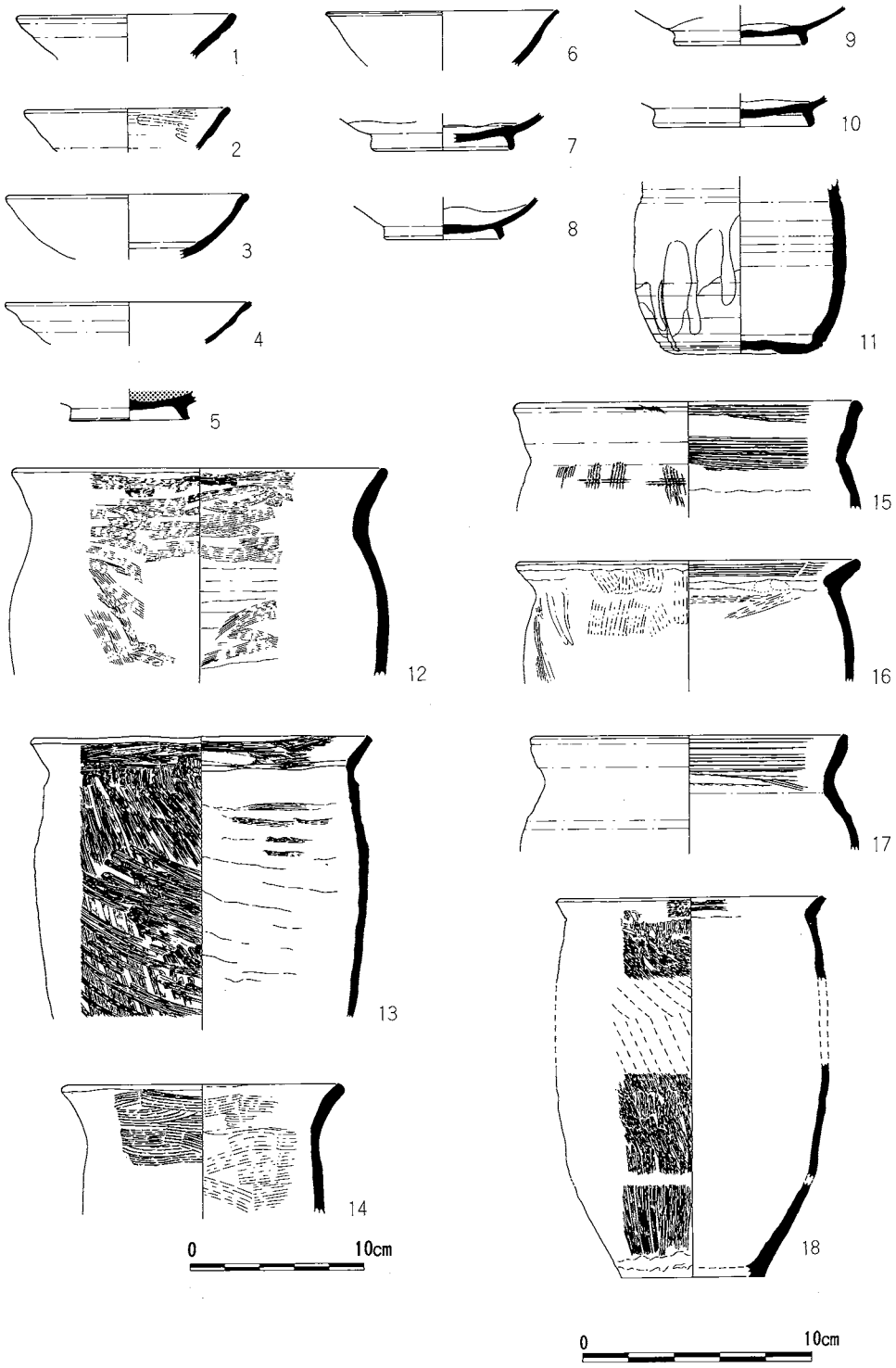
址内の出土遺物としては、土師器の甕・坏・須恵器の甕・灰紬陶器の椀・瓶・皿・他等の破片が得られ。又、刀子の欠損品と鎌及至は火打金具と思われる鉄製品の欠損品も出土する。

（大久保知已）

遺物　（第79図１～18・第96図３・４）第６号住居址の床面上及び覆土中よりの出土遺物は、土器類と鉄製品に限られており、比較的活用資料には恵まれた。完形品はなく、いずれも破片ではあるが、主なるものとして土師器の甕・坏類・須恵器の甕・灰紬陶器の椀・皿・瓶等があげられる。これらの遺物はその種別に分類し、１連番号を付し、以下記述して報告にかえたい。

土師器　土師器に含まれるものとしては、１～５・12～18までがあげられる。この中、甕形を示すものが１～７、杯形を示すものが８～12となる。

甕形土器　図上復元により、全体の器形を察知し得るものは、僅かに６のみであった。然し、口縁部の比較的大形の残欠が多く、資料的に活用できたのはさいわいであった。12は焼成良好で、内外面黄褐色を呈する。胎土に砂粒小石を含む。成形は巻き上げによるものであり、調整の刷毛は荒く壁面調整はあまりよくない。胎土の砂粒を引きずった跡がある。内外壁面とも概して横方向の、ナデ及び刷毛による整形痕をのこしている。器厚は0.6～１cm、口径は21.8cmを示し、頸部でしまり口縁が軽く外反するが、口縁より胴部の方がやや大きい形を示している。14は黄褐色となるものの、焼成はやや悪い。胎土に砂粒小石粒を多量に含む。内外壁面調整は雑で凹凸が激しい。又、内外に刷毛状工具による横位の整形痕が残るが、特に口縁部の外面には１単位が１cm巾６歯となる整形痕が、やや整然さをかきながら残される。器厚は0.5～0.7cmとなり、口径は約16.3cmの小形甕を想像させるが、僅かに口縁部が外反するものの、頸部以下は胴に張りがなく、そのまま底部へさがる器形となる。13は焼成良好で、内面褐色、外面暗褐色となる。胎土に僅か小砂粒を含んでおり、成形は巻き上げによる。内外壁面は刷毛による調整痕を顕著に残しているが、特に外面には最初縦方向の、後に横方向の強い調整痕を残す。調整用具の刷毛は、先端がやや丸味を帯びた、巾0.5～0.6cm内に７本歯となる細い板状工具が使用されている。器形は14と同様器形を示すが、口唇に面取りをもつ特徴がある。器厚0.4～0.5cmとうすく、口径は19.6cmである。15は焼成よく、外面黄褐色、内面暗褐色を呈する。胎土に僅かに小砂粒を含む。成形は巻き上げによるもので、外面に縦方向の、内面に横方向の刷毛目痕を残す。尖端部が５本歯の板状工具を使用しているものと思われる。器厚0.4～0.6cmとなり、口縁20cmを記録する。口縁の外反度、頸部のくびれは少く、口径と胴部径がほぼ同じ数値を示す甕と思われる。16は焼成よく、内外面茶褐色となる。胎土にやや荒い砂粒を含む。内外に板状工具による広い整形痕を残すが、口唇内側の壁を頸部の曲折部まで巾広くとり、その壁面上には横走するカキ目痕を残している。



第79図　第６号住居址出土土器

器厚0.5～1cm、口径19.8cmで、胴径より口径が大きい。18は図上復元により、ほぼその全体像を知ることのできるものである。長胴径を示す甕で、焼成よく内外面とも赤褐色から暗褐色を部分的にとる。胎土に荒い砂粒を僅か含む。内外壁面に原体の巾が0.5cm程度の刷毛による調整痕を残すが、胴より下半部は縦方向の、胴より上半部は斜行する工具の走行を残している。器厚は0.5cm内外で、口径は約23.5cm、高さ約33cm、底径約12.5cmを記す。僅かに外反する口縁の、口唇上に面取りがある。14・13・16と器形を同じくする。17は竈内出土で、焼成よく黄褐色となるが、2次焼成を受けて部分的に黒色化している。胎土に砂粒を含み、くの字形に屈曲する口縁部の内壁に、横走するカキ目痕を残している。器厚0.5cm、口径は18.3cmであるが、胴部の張り出しをやや強くしている。

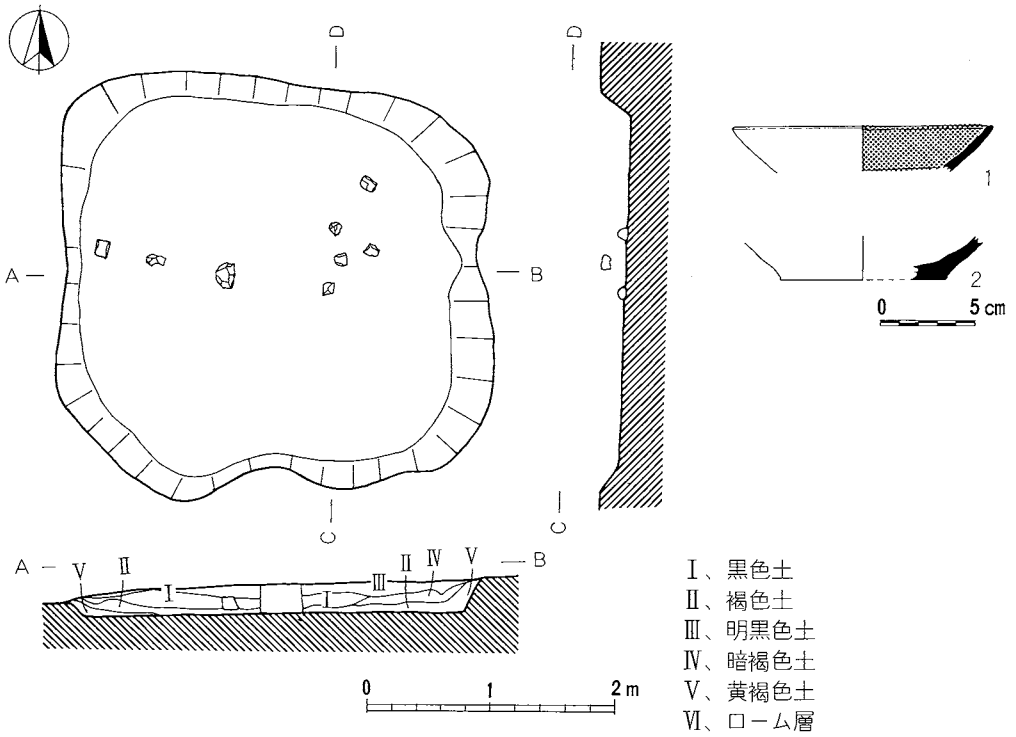
杯形土器　杯形土器は計5例を数える。いずれも焼成よく、胎土に荒い砂粒を含む。4は内外黄褐色を呈し堅緻となる。器厚0.3cmとうすく、口径14.2cmで外器面にロクロ整形痕を残す。3は外面黒褐色、内面暗褐色となり、器厚0.4cm、口径14cmとなり、内外面に巾広のロクロ整形痕を残す。胴部に僅かにふくらみがある。2は内外黄褐色系をとり、器厚0.3cm、口径11.9cmとなり、外面に11と共に細かなロクロ整形痕を残す。11は黄褐色となり、器厚0.4cm、口径12.6cmを記す。以上8・10・11は、いずれも底部より口縁に向い、器が直行する形を示す。5は底部破片で、外面は黄褐色、内面は黒色処理となり、篦磨されている。つけ高台の脚部が、外へふんばる形を示し、その底径は7cmとなる。

灰釉陶器　灰釉陶器活用資料のうち、11は瓶形となり、6～10は椀形を示す。

瓶形土器　11が該当し、内外にロクロ整形痕を顕著に残す。底部は別につくって、器の立ち上がり部で接着した跡をのこしている。器厚0.6cm前後となり、平底の底径9.5cmを記している。胎土精選となり、外面に乳白色から黒灰色、一部茶色となる紬がかかる。内面は暗灰色を呈している。

椀形土器　6は口縁破片で、内外灰白色を呈し、胎土精良である。内外にロクロ成形痕を残し、器厚0.4cm前後を示し、口径13.5cmとなる。8は内外白色を呈し、小砂粒を含む。底部外面には回転篦削り後、つけ高台を付加しているが、外へふんばる脚部の外端を、斜めに回転篦削りしている。器厚0.3cm、底径は7cmである。紬は内面に漬がけとなり、外面にはない。7は内外灰白色となり、小砂粒を含む。ロクロ整形痕を外面に残すが、黄乳色の塗りかけらしい釉がかかる。つけ高台が直におりるが、脚部の外周を回転篦削りしている。器厚0.4cm、底径は8.2cmとなる。9は内外共うすい灰色となり、胎土に砂粒を含む。器厚0.3cmとうすく、底径は7.7cmを記録する。器壁にロクロ整形痕がのこり、底部は回転篦削り後のつけ高台となり、その脚部は7よりも尚外周を削って、その端部断面は内彎しながら尖る。外面にうすい透明に近い釉が、内面に淡緑の釉がそれぞれかかる。10は内外とも灰白色を呈し、胎土は良好である。やはり底部は回転篦削り後、つけ高台となるが、その様相は9と同様である。底部面に釉が部分的に残る。器厚0.3cm、底径9.3cmを記す。

（大久保知已）



第80図　第７号住居址および出土土器

(3)　第７号住居址

調査経過　本址は第６号住居址の北方４ｍにあり、黒褐色土中に掘り込まれていた住居であったが、掘り込みがしっかりしていたこともあり検出は比較的容易であった。

遺構（第80図）　本址の規模は、東西径350cm、南北径30cm 、掘り込み面からの深さは非常になだらかな壁体で、24.5cm・5.5cmを測り、やゝ不定形な方形を呈する竪穴住居址である。

床面はハードロームであったが、攪乱され、多量の黒土がまじる処もあり、比較的にやわらかい。更に床直上からも縄文土器が発見され、相当に攪乱されているものと思われる。本址からはカマド、焼土、及びピットの検出を見ない。遺物は、覆土、床面より縄文中期初頭～後期及び本址に関連する土師器が総数30余点が検出されたが、資料として掲載出来るものは土師器甕形土器１点、杯形土器１点の２点のみであった。

本址の時期は関連出土土器によって国分期（11世紀）に属するものと思われる。本址は、房戸と云うより、郷戸内に於る特殊な機能を有する住居址として把握したい。

遺物　土器（第80図）　前項第７号住居址で前述した通り、本址床面及び覆土より、縄文中期初頭～後期土器を含めて土師器甕形土器の胴部小破片10教点が検出されたが、個体的な規定は

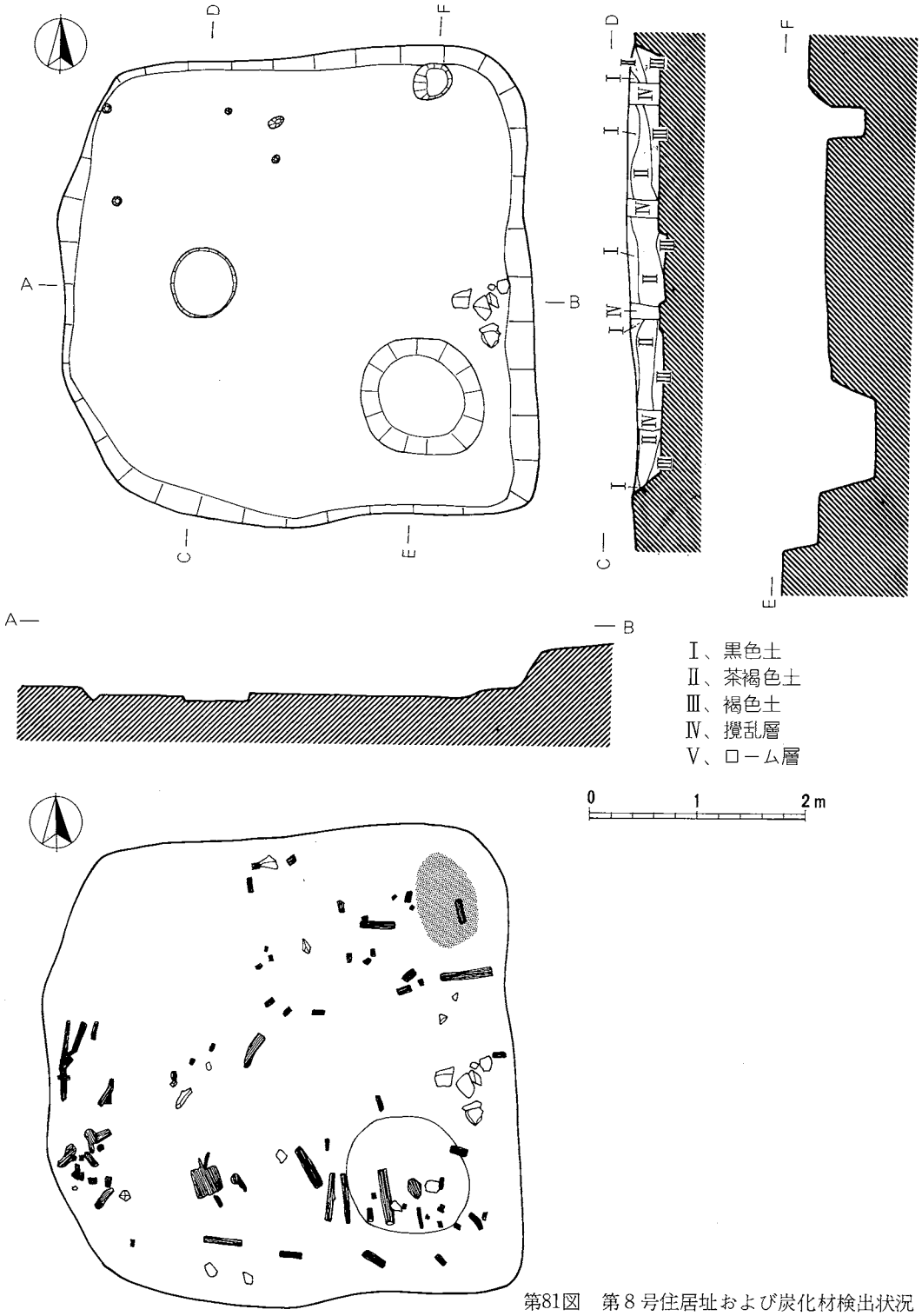
不可能な状態であった為、縄文土器を含めてカットし、本址と関連すると思われる土師器甕形土器１点、杯形土器１点の２点を本址の出土土器として取り上げ記述したい。

１は、小形甕形土器の底部片と思われる。床面出土土器で、底部径8.9cmを測り、底部立ち上がりより大きく開く形態から小形甕と思われる。内・外面ともロクロナデが施こされ、底部は回転糸切りである。色調は内・外面ともに黄褐色を呈し、胎土に僅かに小砂粒を含み、焼成はやゝ良である。２は、内面を黒色処理される土師器壕の口縁部片で、残存部1/10程度と思われるが、不明瞭である。胴部より口縁部へ向ってほゞ直線的に開く形態をなし、成形はロクロ１本びきで、内面にヘラミガキが丁寧に施されている。色調は外面は赤褐色を呈し、胎土には小砂粒・小石を含み、焼成ややゝ良である。（三村　肇）

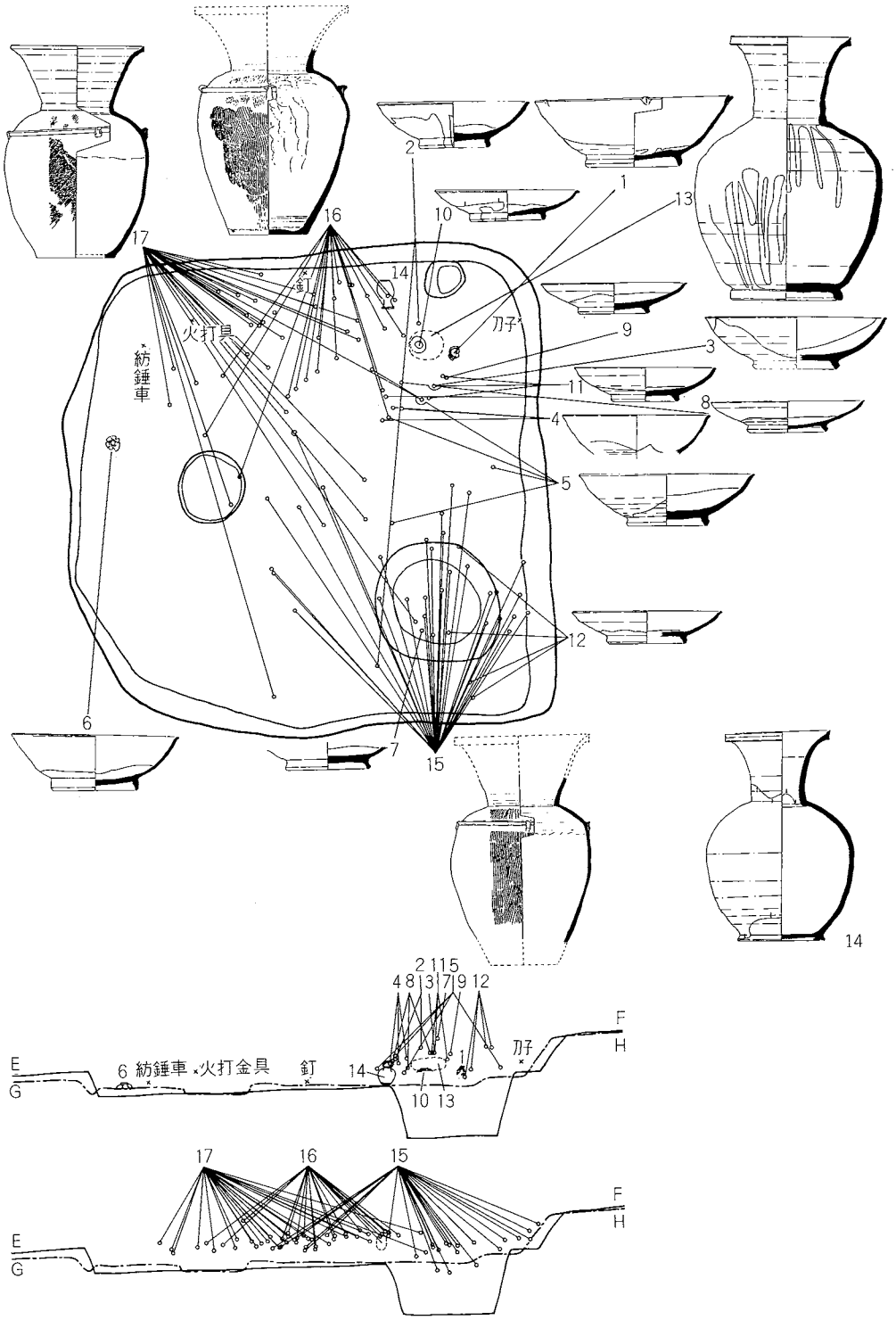
(4)　第８号住居址

調査経過（第81図）　本址は西側に傾斜する発掘区の西端に立地し、第９号住居址のすぐ南側に確認された。発見された住居址中、最も標高が低い。本址は重複もなく、覆土が非常に黒かったため、検出は容易であった。また炭化物もかなり認められ、当初から焼失住居ではないかと見られていた。十字にベルトを残して掘り進めると、上部からも土器及び炭化物が多量に出土し始め、北東区域の北壁ぎわで、第Ⅱ層と第Ⅲ層にかけて完形に近い長頸瓶が発見された。またその付近から、ほぼ同レベルで大形の須恵器甕、灰釉陶器の皿及び炭化材等が多量に出土した。土器及び炭化材は、全体的傾向として床面から10cm～15cm上の第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上部にかけて集中的に出土した。しかし、木材が倒れ落ちたため、床面直上で炭化材の下になって割れた状態の灰釉陶器も認められた。また炭化材については、主柱とみられる比較的太いものが発見されず、確認された炭化材もそれほど長くないため、全体としての方向性などは判然としないが、壁付近よりも、中央部のものの方が若干低い傾向があると思われる。焼土も、遺物や炭化材に混って散在的にではあるがかなり見られ、北東隈のP_1の付近には５cm程堆積していた。平面の全体的な遺物の傾向を見ると、南西部分には極めて少なく、他部に集中する。７点の鉄器（第96図）が第Ⅲ層の床面近くから、散在して出土し、また、西壁近辺の中央部から、赤色顔料と面取りをした木器２点が、南西区域の中央から板状の炭化材が発見されている。貯蔵穴と思われるP_2のすぐ西側の床面直上から、先端部を欠いた磨製石斧が出土したが、これは、当時の人間が、先人の遺した石器を偶然発見し、持ち帰ったとも考えられる。

遺構（第81図）　プランは、隅丸方形であるが、東南隅がやや外に張り出し、南西隅が比較的丸くなる。東西約４ｍ40cm、南北約４ｍ30cmを計る。壁は、東、北、西で鋭く、南で鈍くローム層を掘り込んでいるが、状態は全体的に軟弱である。壁高は、東30cm、西10cm、南25cm、北20cmであり、東から西に低くなっている。周溝は、西壁下中央部に長さ１ｍ、幅８cm、深さ５cm前後の底が堅く浅いものがあるが、その他には確認されなかった。柱穴と思われるピットは、北壁に接し、北西の隅に１ケ所のみ確認された。30×40cmの楕円形で深さ34cmである。底及び壁は堅く良好であり、垂直であるが、西側はやや斜めに掘り込まれている。床面は起伏が著しく、多量の



第81図　第８号住居址および炭化材検出状況

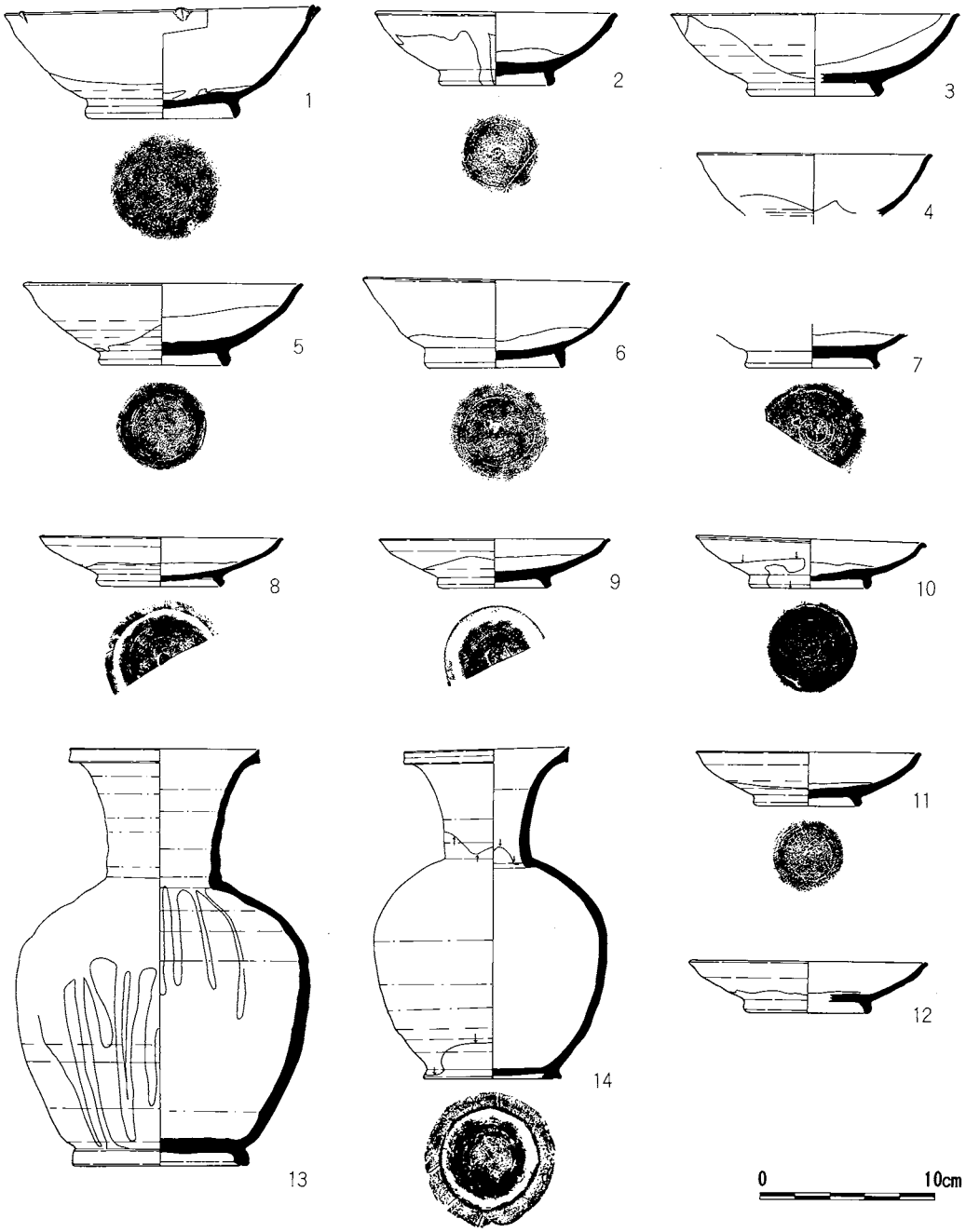


第82図　第８号住居址土器出土状態

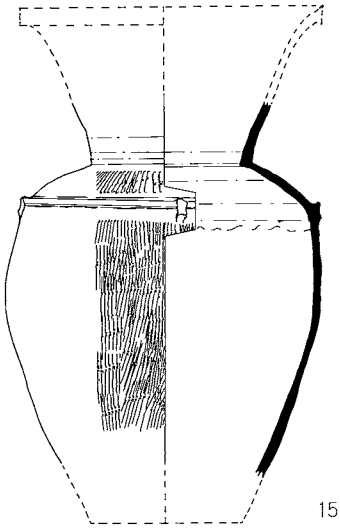
炭化物が一面に見られた。南側の約３分の１の部分は、他部より５～８cm低く、高い部分の床面は非常に堅く良好であるが、低い部分は軟弱である。双方とも東から西へやや傾斜している。カマドは東壁のほぼ中央に設けられている。大小７個の石を用いた石組みで、焼土を検出したが、耕作による攪乱もあり、崩れてほとんど原型をとどめていない。カマドの南側、東南隅の貯蔵穴と思われる大きなピット（P_2）は、120×110cm、底で80×70cmのほぼ円形で、深さは50cmであり、垂直に掘り込まれている。底及び壁は堅い。このピット中に、南側から倒れ込むように大きな炭化材が多量に検出された。この炭化材は、ピットの上面から20cm前後までの範囲で確認できるが、以下底までの30cmの部分には認められず、焼失時には内部に何かが存在した可能性もある。中央から約１ｍ程西によった場所に、60×65cmのほぼ円形で、深さ５cm程落ち込んだ部分がある。その壁は垂直で堅く、底も周囲の床面と同様に凹凸は激しいが、堅く締っている。その中央部は壁付近よりも２cm程高い。この部分は、住居の構築時又はそれに近い時期に、意図的に掘り込まれ、何物かを置いていたのではないかと思われる。（込山秀一）

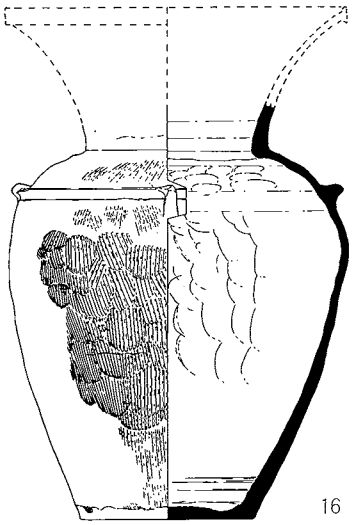
遺物・土器（第83・84図）　土師器・須恵器・灰釉陶器がある。主に覆土第Ⅱ層からⅢ層にかけて多量に出土したが、土師器はほとんどが小破片でさほど多くなく、灰釉陶器・須恵器が主体をなす。図示できなかったものには、土師器杯（内面を黒色処理されたものが大部分をしめる）・甕が60片、須恵器の四耳壺・甕の破片が２個体分、灰釉陶器の椀・皿が10数片程ある。図示できた土器は17点、１～14が灰釉陶器、15～17が須恵器である。

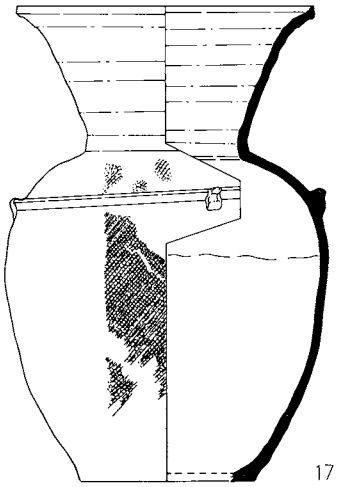
灰釉陶器には椀・皿・長頸瓶がある。１は輪花椀である。口縁部の５ケ所をわずかに内側へつまみ上げて、外側にできた窪みに縦の沈線を刻んでいる。内面底部には沈線で正円が描かれている。ロクロナデされ、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ痕をもつ。２～７は椀である。ロクロナデの後、体部下半及び底面全面に回転ヘラケズリが施されている。口径が13cm台のものと15cm以上のものの２種類に分けられるようである。いづれも覆土下部からの出土の中で、６のみは床面直上からほぼ原形で潰れて出土した。このすぐ上には長さ20cm位の炭化材がのっており、あたかもその材の落下の衝撃で割れたかのようであった。（第82図）８～12は皿である。いづれも器形がかなり類似しており、体部上半にわずかな稜をもっている。ロクロナデされたのち、体部から底部全面に回転ヘラケズリが施される。９は、底部付近の釉のかかっていない部分全面に、墨状のものが附着して真黒になっている。13・14は長頸瓶である。13は本址北東隅寄りの第Ⅱ層中から、正位の状態にあったものが潰れた如きかたちで一括出土した。器高24cmを測る大形なもので、胴の一部を欠いている。外面の釉はもともと淡緑色を呈していたと思われるが、本址火災の影響であろうか、黒みを帯びて脆くなり剝げ落ち易くなっている。内面も二次焼成の熱の為か、荒れて凹凸が激しい。口頸部・胴部上半にロクロ痕を残し、胴部下半は回転ヘラケズリされている。底部の調整は特にみられない。14はやはり本址北東隅寄りから出土したもので、口縁部をわずかに欠くのみで、割れてもいなかった。口頸部、胴部の上から¾位までロクロ痕を残し、それ以下から底部全面が回転ヘラケズリを施されている。器形の特徴として、肩があまり張らず腰も



第83図　第８号住居址出土土器







第84図　第８号住居址出土土器

ゆるやかにおさまって、胴部が全体的に丸味をもっている。釉は胴部を中心に施されて、淡緑から緑色を示しているが、13と同様に熱をうけて脆くなっている。

須恵器は15～17の３点で、すべて四耳壺である。15は口縁部及び底部一帯を欠くが、胴部は比較的多くの破片が揃っている。16はやはり口縁部が失われているが、それ以下はほぼ完存しており、17は口縁部と底部の一部分を欠くのみで、ほぼ完形といえる。しかし、第82図で示すようにこれらの出土状況は特異で、決して一括遺物としてまとまっていた訳ではなく、覆土の広い範囲にわたって破片で散らばっていた。いづれも巻き上げにより完形され、口頸部はロクロ、胴部はタタキを行った後、凸帯と耳部をはりつけたものと思われる。16・17は、黒色の上に白い斑点がとぶ自然釉が著しい。

鉄器（第96図）　７点出土したが、３点は微小で錆び・破損が激しく、図示し得なかった。７は火打ち金具である。木片に固定して用いたもので、上部の３孔は固定のためのものと考えられる。８は刀子である。ほぼ完存しているが、茎が途中で折れている。９は紡錘車で、ほぼ完形と思われるが錆びつきが激しく、軸端部の欠損はよく観察できない。錆の中に、部分的に炭化物が取り込まれている。10は釘と思われる鉄器である。錆びついて先端部の形状はよくわからない。これら４点のうち、７は床よりやや浮いていたが、他は床面に近いレベルからの出土である。　（直井雅尚）

（５）第９号住居址

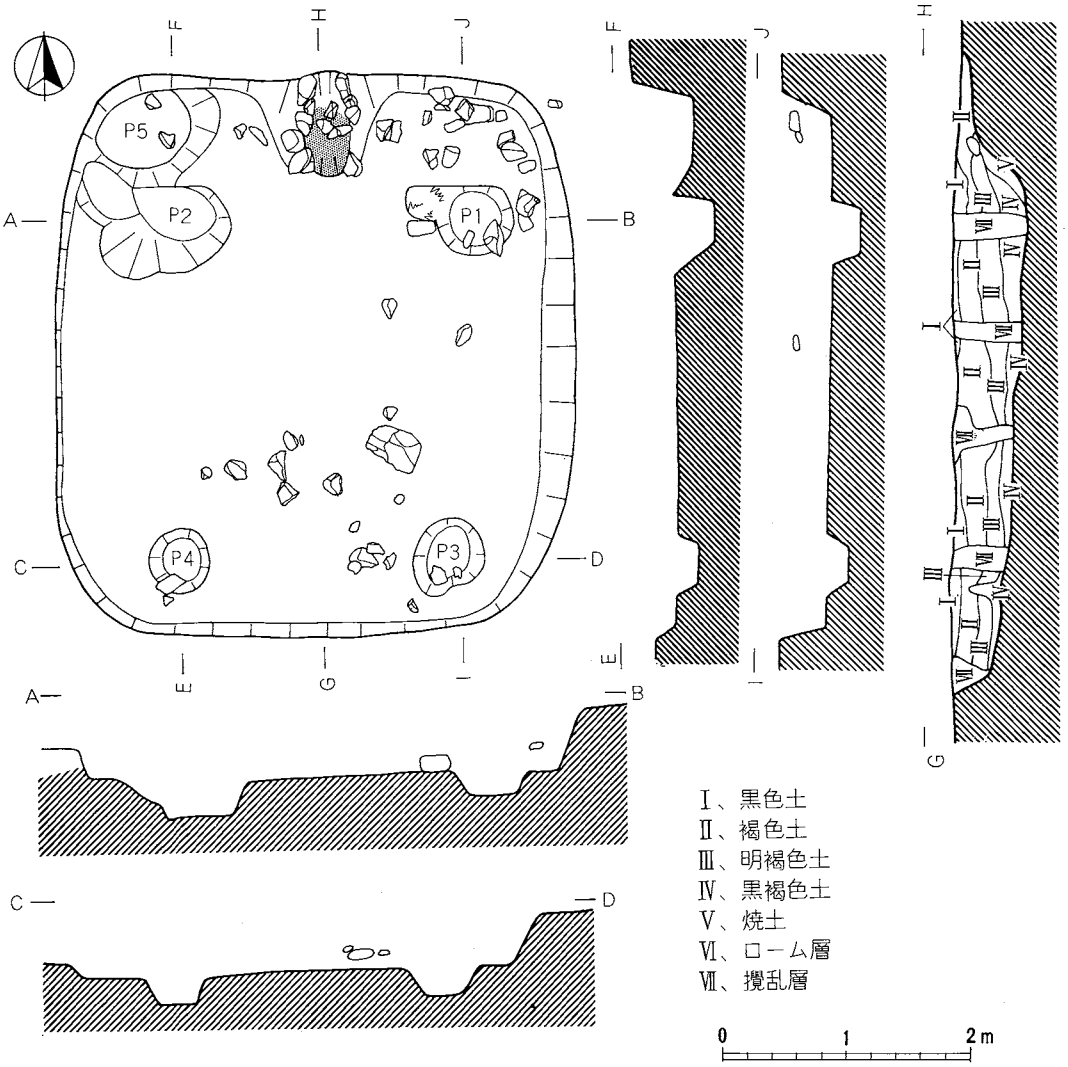
調査経過　第９号住居址は、調査地域の最西端、即ち、最も低所に位置し、舌状台地の中央付近に存在する。第８号住居址は南方３ｍの至近距離にあり、ほとんど軒を接する場所に構築されている。

本址は表土層削平時にローム層面に褐色土の落ち込みが明瞭に認められ、また土師器片の出土もあり、住居址の存在が予想されていた。本址はローム層を深く掘り込んで構築されており、しかも覆土の状態も良好であったため床・壁の検出は容易であった。カマドは北壁に保存が極めて良い状態で発見され、カマド右側の床面上および南側床面上に礫がまとまって検出された。柱穴は西側の２本は検出は容易であったが、北側のものは掘り込みが軟弱であったため困難であった。本址は、今回調査された住居址中、最も遺存状態の良い住居址の一つであった。

遺構（第85図）　プランは東西4.20ｍ、南北4.50ｍのやや南北に長い隅丸方形を呈する。主軸はほぼ南北線上に一致する。

壁は全周囲にわたって非常に良好に遺存する。壁の掘り込みは各壁とも垂直に近く、きれいに掘られている。壁高は東壁50cm、西壁24cmと東壁が26cmほど高い。南、北壁は自然地形の傾斜に沿って西に向かって50cmから24cmへと漸減している。

床面は起伏がみられる部分もあるが、全体的には水平で平担である。床の状態は余り堅緻ではない。カマドの焚口前面は一段低くなっている。床面の施設としてはカマド東側に20～30cm前後の礫を半円状に配列したものおよび中央やや東寄りに30×40cmの大きな礫が据えられていた。前者の礫は上面平担で、カマドにも近いことから厨房に関する何らかの用途が与えられていたもの



第85図　第９号住居址

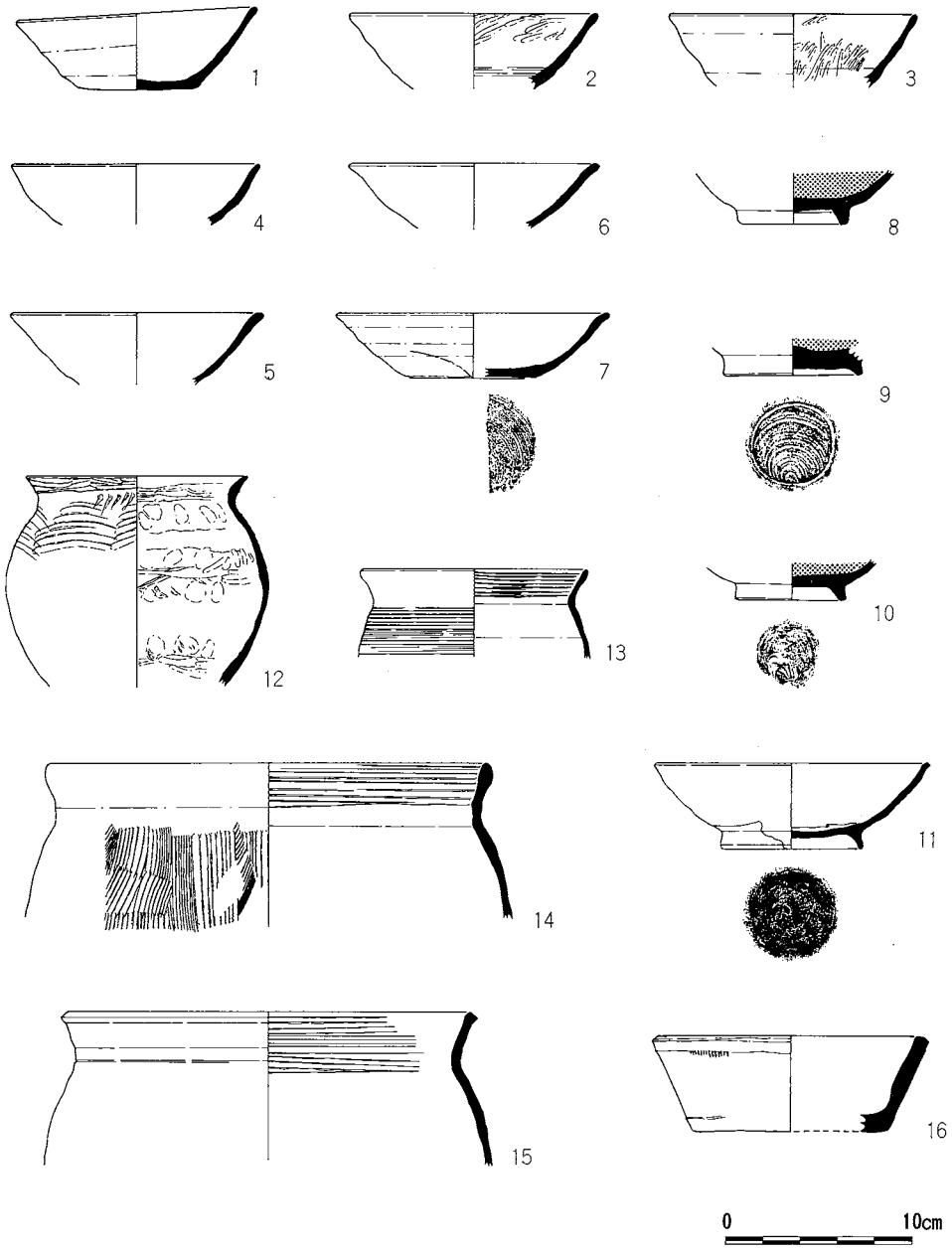
と思われる。後者は上面の凹凸が著しく作業台とも異なるようである。

主柱穴は、P_1(－22)、P_2(－34)、P_3(－18)、P_4(－20)の４本で、いずれも擂鉢状に浅くゆるやかに掘り込まれている。カマドは石組み粘土カマドで北壁中央に壁をわずかに抉り込んで設けられている。保存状態は非常に良かった。規模は間口60cm、奥行80cmで、石組の石は内側をきれいに揃して組まれている。カマド内部、特に焚口付近には焼土の堆積が著しい。

貯蔵穴は北西隅に１ケ所あり、80×110cm、深さ20cmの楕円形を呈する擂鉢状である。

本址は出土土器の様相から11世紀代の住居址と推定される。　（小林康男）

遺物・土器（第86図）　土器のみである。種別としては土師器・須恵器・灰釉陶器がある。



第86図　第９号住居址出土土器

ほとんど覆土中からの出土で、量は非常に多いがすべて小破片であり、図示できたものは16点にすぎない。

まず図示できなかったものについて概観したい。器種別の破片数は、土師器が最も多く総数280片あまりで、坏片と思われるもの50片（内面黒色処理されるもの24片）、甕の胴部破片で縦のハケメをもつもの約50片・ナデ等の整形のもの100片（これらには羽釜・甑が含まれている可能性もある）、甕の底部片23（回転糸切り痕６・網代１）、さらに破片が小さすぎて器種の推定が不能なもの約50片、羽釜の鍔片が１点である。須恵器は30片程で、すべて大形の甕の破片である。このうち半数以上は、白っぽい胎土をもち、同一個体のものと推定できる。灰釉陶器は数片で、椀・皿と思われる。

次に図示できたものであるが、６・７が須恵器、11が灰釉陶器の他はすべて土師器である。１～５はロクロ成形される土師器坏で、１の底部には回転糸切り痕が残り、２・３は内面をヘラミガキされている。６・７はロクロ成形される須恵器坏で、７は底部に回転糸切り痕をもつ。６は焼成が不良で、軟質、灰白色を呈す。７は橙色であるが硬い。８～10は内面を黒色処理されて、高台をもつ土師器坏である。内面に雑なヘラミガキが施されている。12・13は土師器の小形甕であるが、13がロクロを用いて整形される本址の時期に一般的なものであるのに対し、12はヘラや指のオサエによって整形されてきる点、特徴的な遺物である。14・15は甕の上半部である。いづれも口縁部内面をロクロの回転を用いた横位のハケメで整形しているが、14が同一の工具を縦に使用して外面を整形しているのに対し、15は外面にハケメがなく、ロクロを用いたと思われる整形痕をもつ。また15は、口唇部を強く面取りしている。16は、鉢形土器と表現してよいか疑問であるが、本址の時期に伴う土器の中では特殊な器形をとるものである。口唇部の何段かになる面取り状の部分は、整形時につくられとみるにはやや違和感が残る。また口縁外面にハケメの下端らしいものがみられる。このため、16は、ハケメをもつ長胴形の甕の胴部下半を切りとった、転用品と考えられる。

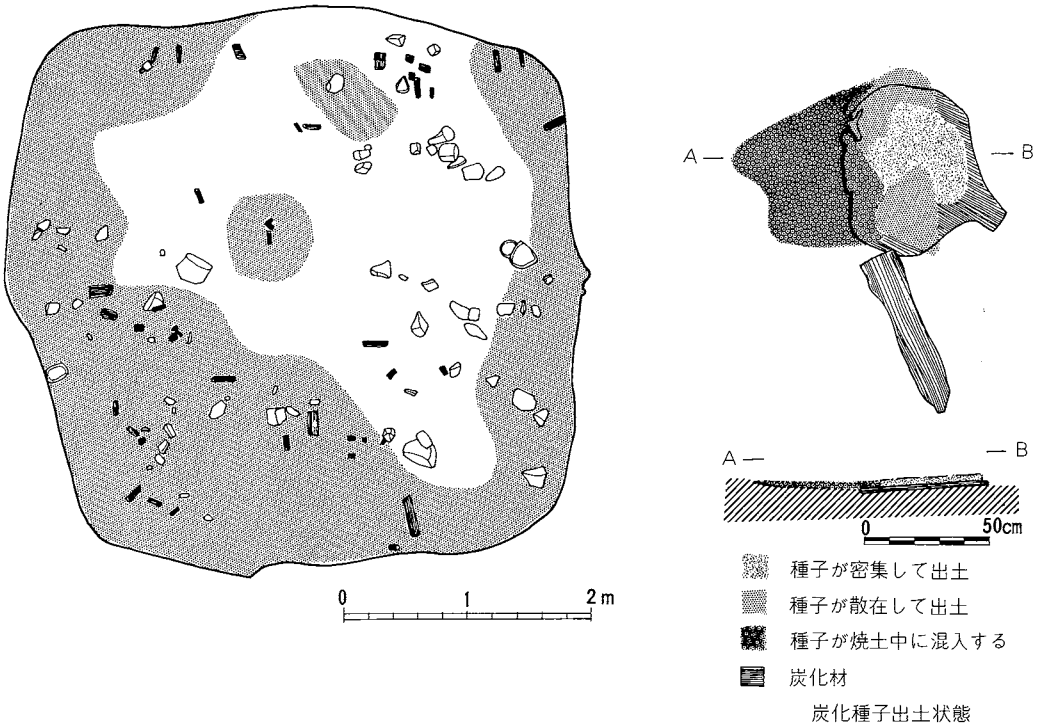
（直井雅尚）

(6) 第10号住居址

調査経過　本址は調査地区内の南西端の地域に存在し、第８号・９号住居址とともに調査地区では最も低い場所に位置する。本址の20ｍほど南から地形は急傾斜で松葉沢川に落ち込んでいる。同じ火災住居である第８号住居址は北方13ｍに、また第５号住居址は15ｍ東に位置している。他の平安時代の住居址が比較的接近したまとまりのある状態を示している中で、本址は住居址群から若干隔った地域にあるといえる。

本址も他の平安時代の住居址と同様に表土削平時に明瞭な落ち込みが認められた。しかも検出面には炭化物の散布がみられたことから火災住居の可能性もあるとして早くから注目されていた住居であった。覆土を掘り下げを開始すると壁際を主体として激しい量の焼土と炭化材が部厚く堆積し、住居中央部になるに従い焼土の堆積は薄くなり、また炭化材の遺存も少量となった（第88図）。炭化材は焼土中に遺存するものは少なく、むしろ焼土上に乗るような状態で発見される

第87図　第10号住居址

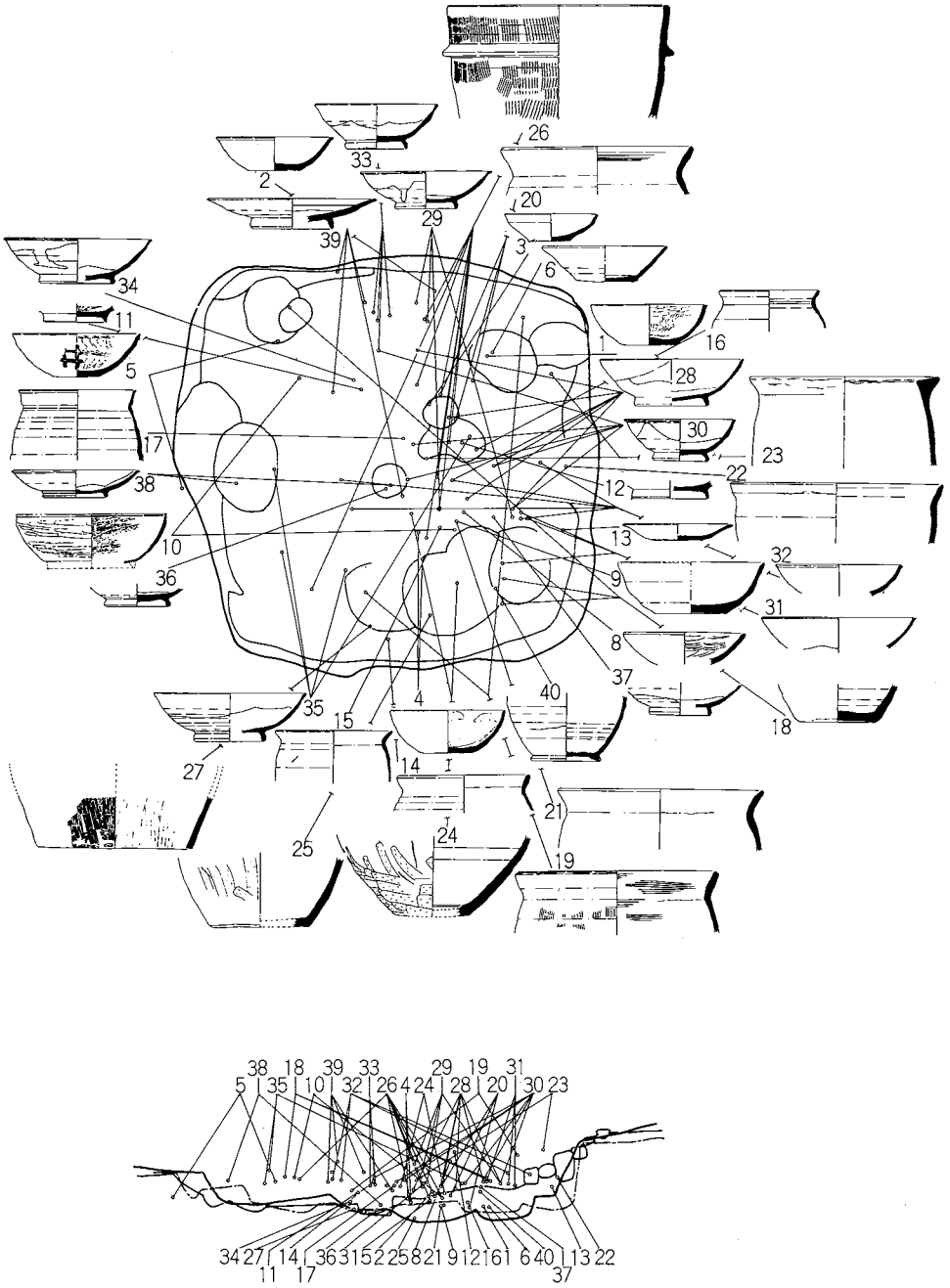


第88図　第10号住居址焼土・炭化材検出状況

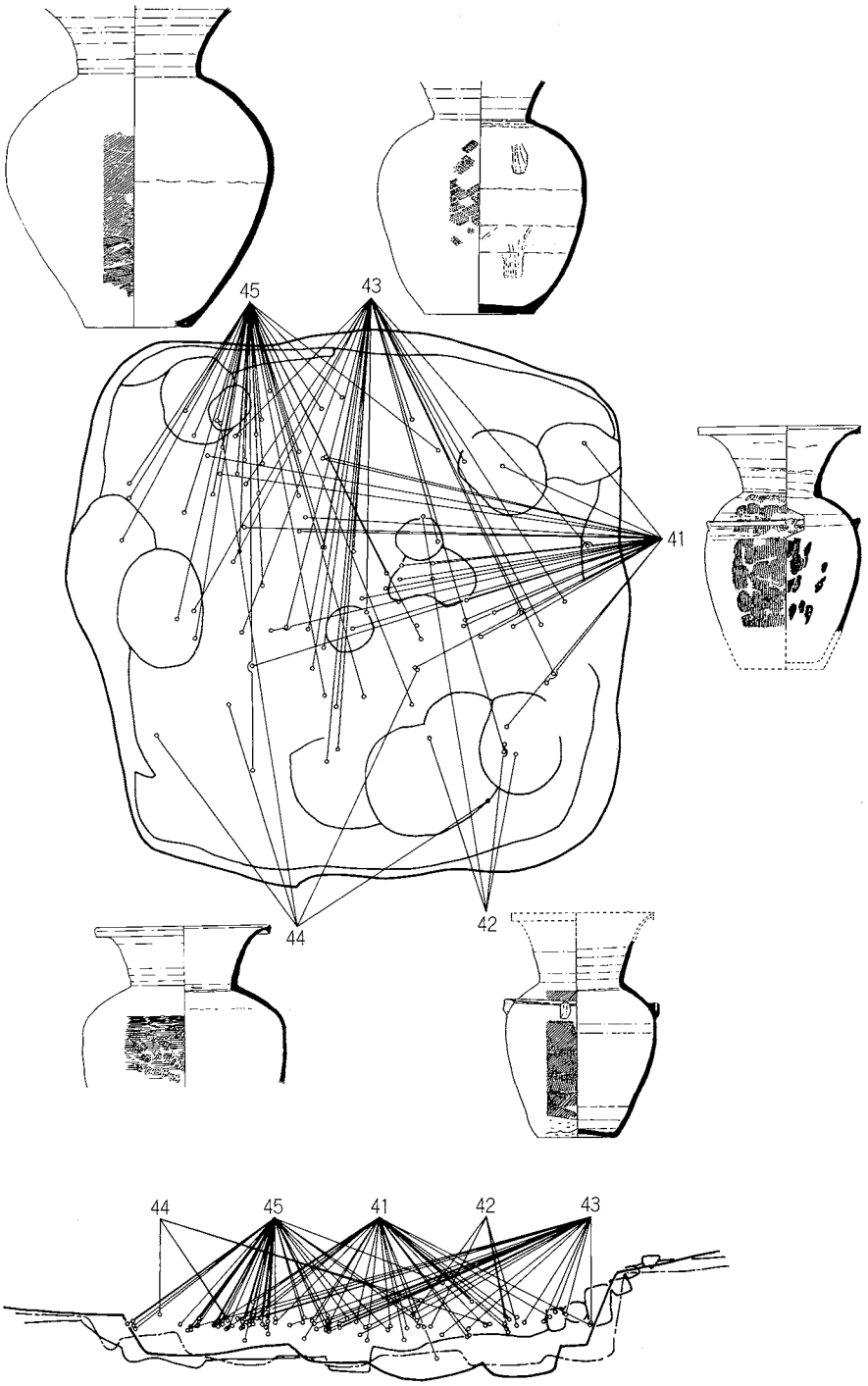
ものが多く、また堆積していた焼土は床面上まで堆積しているのではなく、焼土下には再び褐色土が堆積し、この褐色土下に床面が構築されていた。更に注目すべきは炭化種子の出土状態であろう。炭化種子は南東隅の壁際、床面上10cmの高さで、やや中央に向かって斜めに傾いて発見された。炭化種子は曲物の底板と思われる炭化材の上に密集して遺存し、一部西側にも散布している。それはあたかも種子の入った曲物を火災を起こしている住居内に投げ入れたような状況であった。また土器の出土状態も第89・90図に示す如く、完形に近く復元された土器の破片が住居址内の各所に、しかも床面よりかなり上面からバラバラと散らばって発見された。以上のように発掘経過からみる限り、本址は住居廃絶後、褐色土の堆積がなされ、しかる後に何らかの理由による火災が起きたのではないかと推定される。

遺構（第87図）　本址は4.50m、南北4.60mのほぼ正方形を呈する隅丸方形である。主軸はほぼ東西線上に一致する。

壁は全周囲ともよく残り、掘り込みは垂直に近い。壁高は、傾斜地に構築されているため東壁は60cmと高いが西に向かうに従い漸次低くなり、西壁は30cmを計る。南・北壁も西に向かって傾斜を示している。床面に西側の一部を除き、大きなピットが全面を覆い極めて起伏の激しい床となっている。ピット上には貼床と思われるものは検出できなかった。これら大きなピットの中か



第89図　第10号住居址土器出土状態（１）



第90図　第10号住居址土器出土状態(２)

ら第91図１・３・６の土師器が出土している。

主柱穴は本来４本と思われるが、P_1、P_2、P_3 のみで、南東隅は床面の荒れが著しく明確にしえなかった。

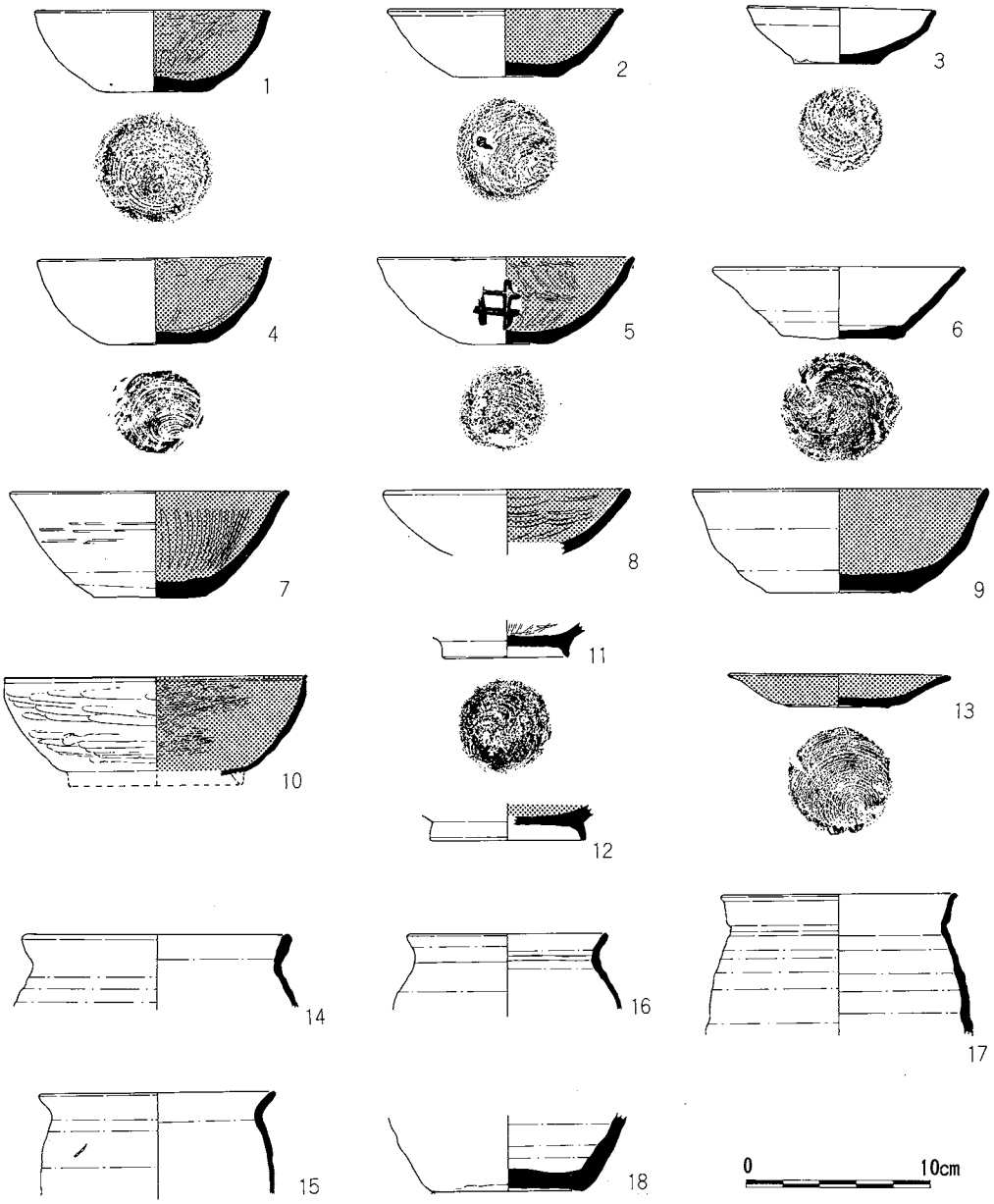
カマドは石組み粘土カマドが東壁中央部に設けられている。間口22cm、全長80cmで、カマド内中央部に三角柱状の支脚石が埋め込まれている。焼土は焚口を中心に散布し、一部カマド右袖にも及んでいる。（小林康男）

遺物　土器・鉄器があり、土器は出土数量が夥しい。出土状況は、覆土上層黒褐色土・焼土層・褐色土・床面ピット状遺構中等のほぼ住居址全層全域から出土があり、ピット状の部分から出土した坏３点を除きすべて破片で、一括となって遺存したものも無い。

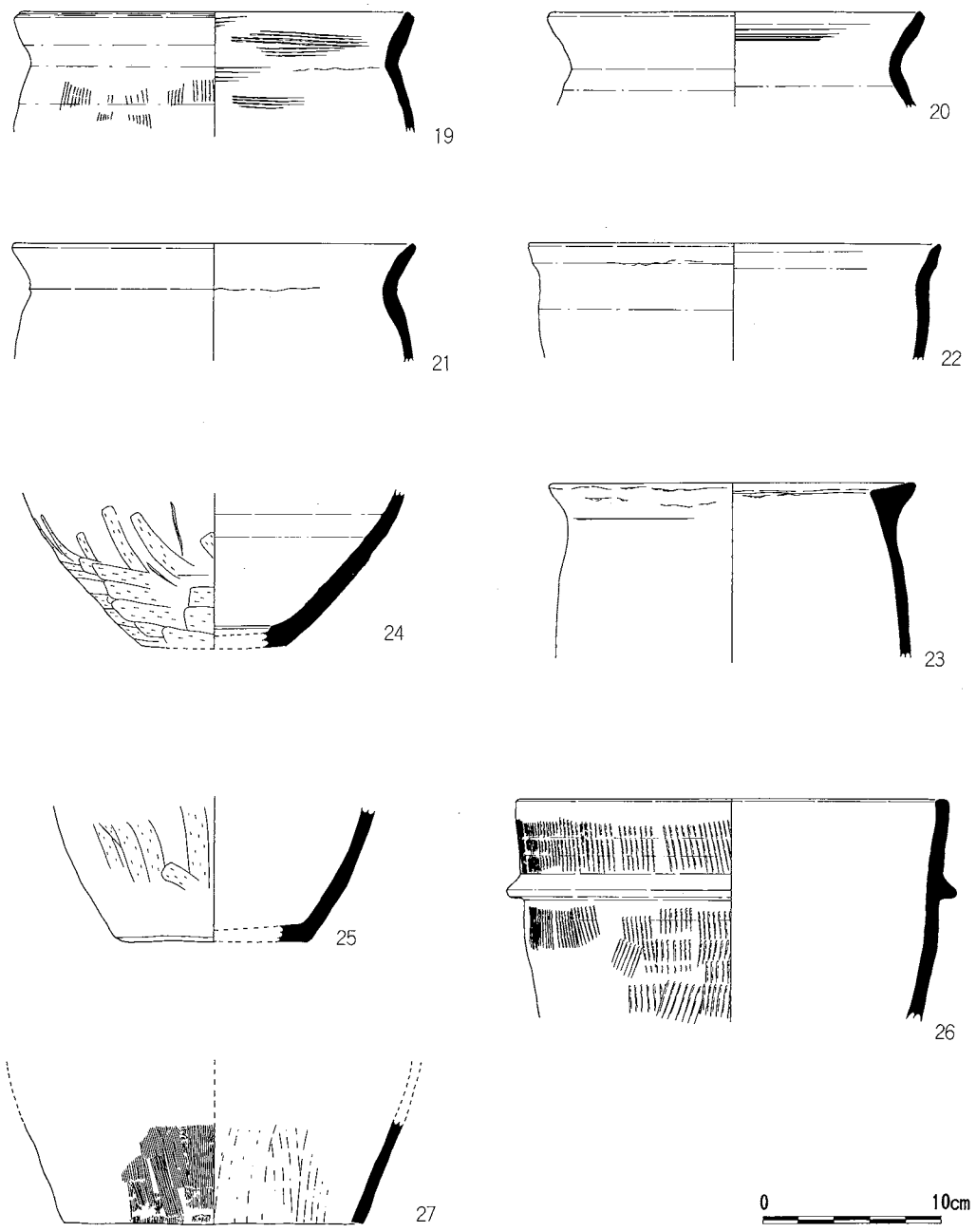
土器（第91・92・93・94図）　土師器・須恵器・灰釉陶器がある。破片総数500点以上あり、図示できたもの45点と多量であるが、１割にも満たない。

まず図示できなかったものを概観したい。土師器坏片と思われるものは約80片あり、そのうち50片が内面黒色処理したものである。土師器の甕片と思われるものは総数で250片程ある。整形・器形で分類すると、幅１mm以下の細かい縦のハケメをもち長胴形になると思われるものが約60片、１～２mmの同様のハケメのもの約20片、それより大きいハケメ約20片、ハケメをもたずやや胴の張るもの約20片で、その他は小さすぎて知り得ない。これらの中に羽釜・甑であるものが含まれる可能性もある。土師器の小形甕破片と思われるものは20片以上あり、胴部外面にロクロの回転を利用した横位のハケメをもつものが大部分をしめる。須恵器は出土量自体は多いが、接合復元図示できなかったものは数片にすぎない。すべて大形の甕の破片である。灰釉陶器は20片ほどあり、すべて椀・皿になると思われる。

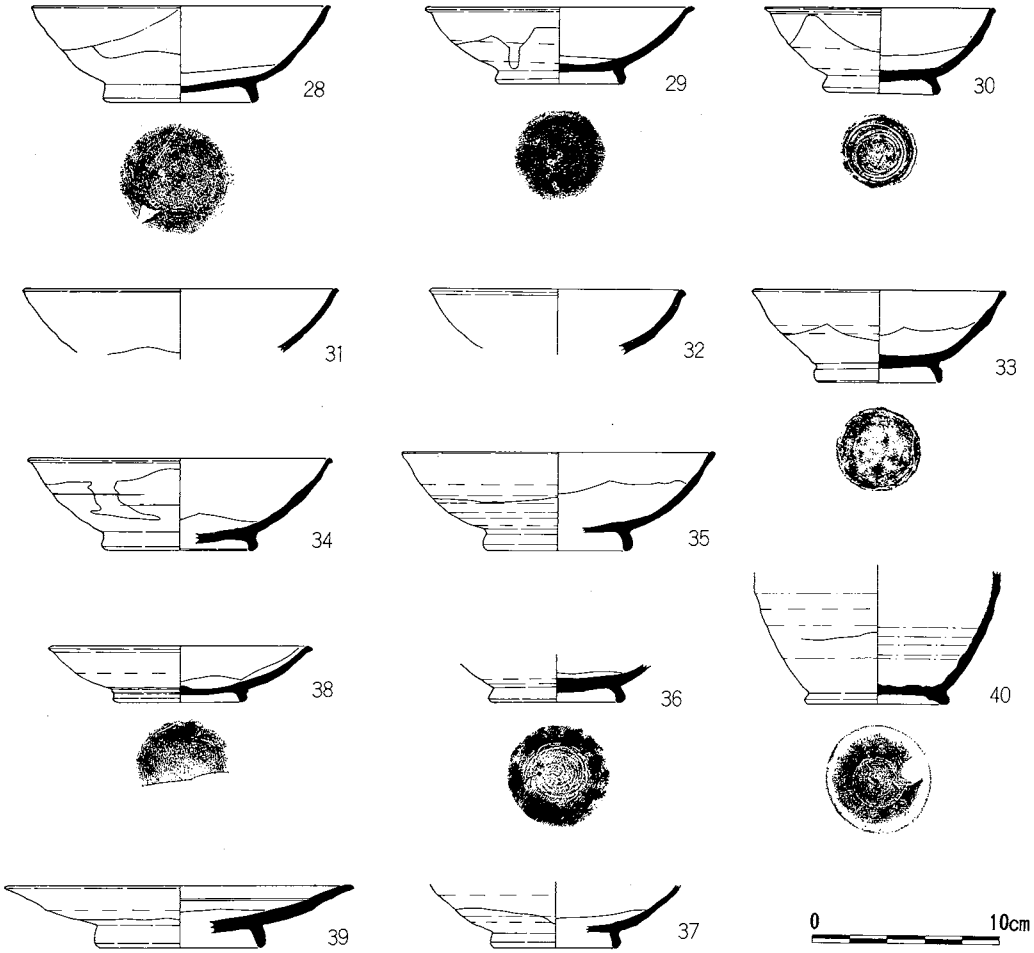
図示できた土器は、１～５・７～27が土師器、６・41～45が須恵器、28～40が灰釉陶器である。破片からの回転復元実測のものが多い。１～12は、土師器・須恵器の坏である。すべてロクロ成形され、残存する底部には回転糸切り痕をもつ。１・２・４・５・７～10・12は内面をヘラミガキ・黒色処理され、４・７は暗文が施される。６は薄手で黒灰色を呈し、成形痕が顕著なので須恵器と考えたが、疑問も残る。10は高台付の坏になると思われるが、非常に薄手で、外面を横位のヘラミガキ、内面を細いハケ状工具により整形され、内面に口縁部に平行して一条の沈線を巡らすという、他に例のないものである。５は$\frac{1}{3}$程欠損してしまっているが、外面に「井」の字と思われる墨書と、更にその上に陰刻を重ねたものがある。13は、全面が黒色を呈す土師器の皿である。ロクロ成形され、底部に回転糸切り痕をもつ。以上の坏・皿類の中で、１・６・13は床面ピット状遺構及びその付近の低いレベルから出土したもので、１と13は完形品である。14～17は土師器小形甕である。いづれも明瞭なロクロ痕を残している。18～25は土師器甕の上半及び底部である。ロクロを利用して器面を平滑にするもの(22)、口縁部内面にロクロを用いたと思われる横位のハケメをもつもの(20)、同様のものにさらに外面に縦のハケメをもつもの(19)等に上半部は分類できる。底部付近には、ロクロ痕の残るもの(18)、さらにヘラケズリをされるもの(24)



第91図　第10号住居址出土土器

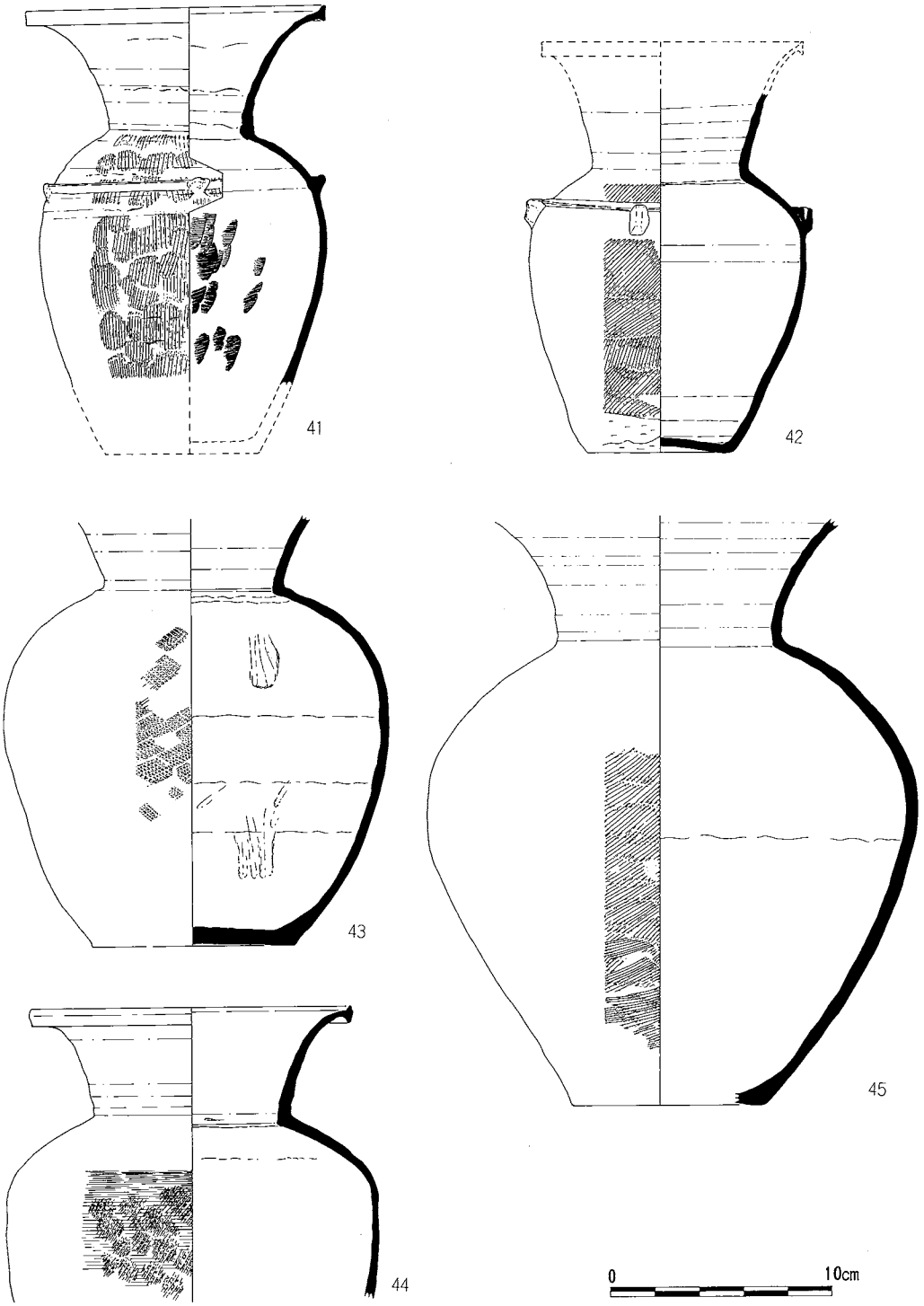


第92図　第10号住居址出土土器



第93図　第10号住居址出土土器

ヘラケズリだけのもの(25)等がある。26はハケメの後、ロクロで調整されている羽釜である。鍔は小ぶりで下がり気味に附されている。27は甑の底部付近である。外面を細かいハケメにより、また内面もなめらかな縦の凹凸の列を残す調整を施されている。復元回転実測のため、底径が若干大きい感がする。28～37は灰釉陶器の椀である。ロクロナデされ、体部下半及び底面全てに回転ヘラケズリ痕を残す。口径により大小2種類に分類できそうである。30・33はほぼ完形であるが、出土状態は破片で、分散していた。38・39は灰釉陶器のⅢ及び段Ⅲである。いづれも体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ痕が観察できる。39の段Ⅲは口径17.5cmを測る大きなもので、内外面に段をもっている。40は灰釉陶器の長頸瓶と思われるものの胴部下半である。胴部及び底部に回転ヘラケズリ痕を残す。41～45は須恵器の四耳壺・甕等大形品である。いづれも小破片と



第94図　第10号住居址出土土器

となって覆土中に広範に散乱し、一括出土という状況ではなかった。41は底部、42は口縁部を欠く四耳壺である。いづれも口頸部はロクロ・胴部はタタキにより整形され、肩部に凸帯を巡らした上に四ケの耳を貼りつけている。42の耳には上方から一孔が穿たれている。43～45は甕で、胴部全面をタタキ目が覆っている。44は、胴部上半に細かく浅いカキ目が施されている。44・45には自然釉がかかっているが、特に45の自然釉は厚く濃緑で光沢を帯び見事なものである。

鉄器　（第96図）　覆土中より２点出土した。11は刀子と思われる鉄器である。身・茎の端部を欠いている。12は断面が四角ばった細い棒状の鉄器で、紡錘車の軸と推定している。

（直井雅尚）

(7)　第12号住居址

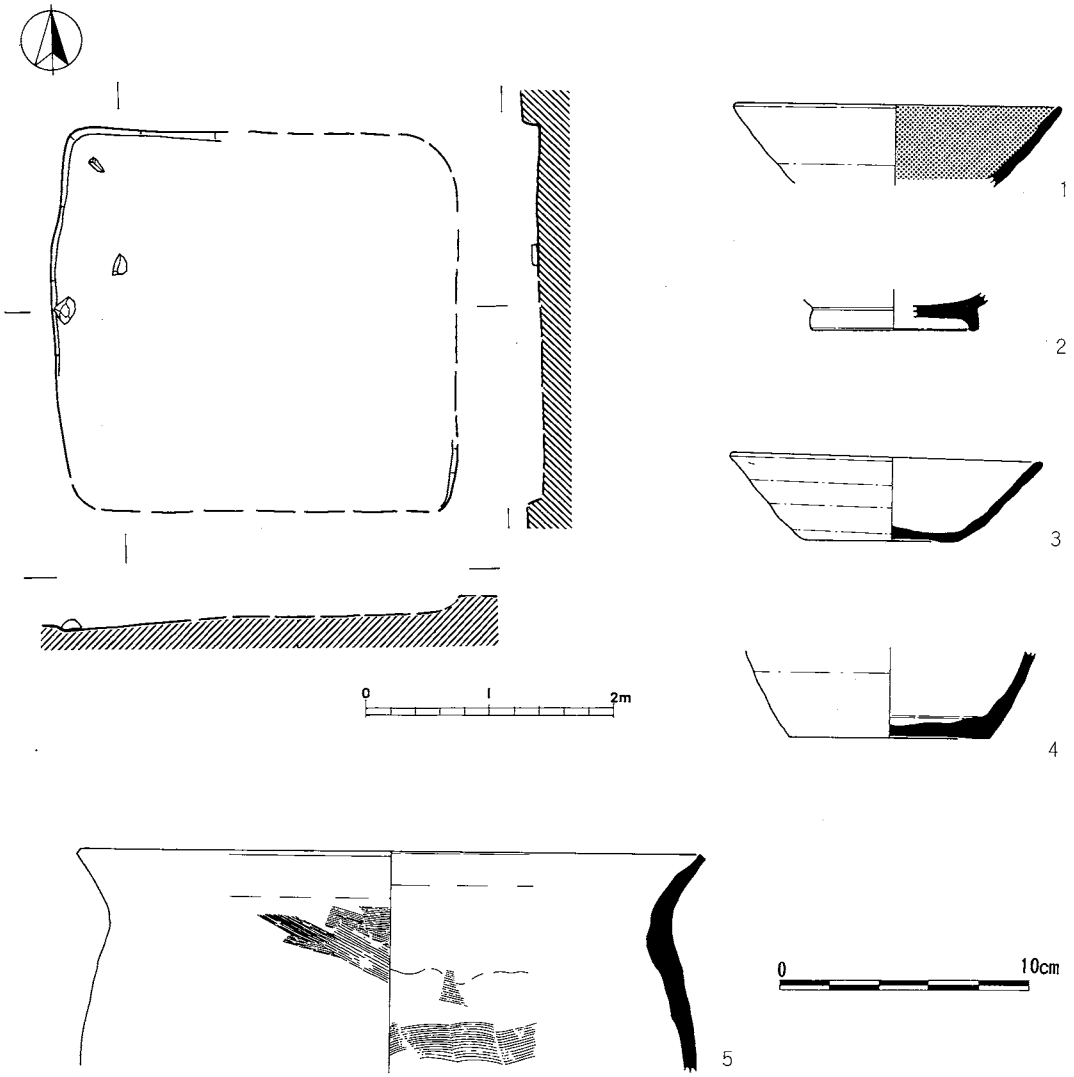
調査経過　本址は平安時代住居址群の中で最も北に位置し、レベル的には第５号住居址とともに最も高い場所にある。全体的に攪乱を受けているため、遺構の保存の状態は極めて悪く、南側の壁体はほとんど遺存していなかったが、僅かに西北隅部に西側 190 cm、北側 116 cm、東南隅部に、東側56cmが検出され、竪穴の形状はほゞ推定する事が出来た。

遺構（第95図）　規模は東西径324cm、南北径300cm、掘り込みの面からの深さは11cmを測り、ほゞ方形を呈する竪穴住居址である。床面は北西と南東壁とを結ぶ対角線状にしっかりとした(固く踏み固められた）床が残っていた。カマドは攪乱を受けた為、西側壁中央部に残っていたカマド用石材と考えられる24×16cm、16×８cmの２箇の石と、同周辺に拡がっていた焼土ブロック及び焼土内、更に附近覆土より検出された遺物(土器)によって推測し、西側中央部よりやゝ南寄りに構築されていたものと思われるが、貯蔵穴も検出されず、煙道の遺存もなく、明確ではない。床面でのピット（柱穴）も発見出来なかった。出土遺物は、カマド址と思われる西側壁周辺にまとまって発見されている。出土遺物は土師器片、須恵器片で、総数10点の検出を見たが、資料として掲載出来るものは、土師器甕形土器、２点、坏形土器、２点、須恵器は坏形土器のみであった。本址の時期は、本址に関連する出土土器により、国分期（11世紀）に属するものと思われる。

遺物（第95図）　第12号址の出土土器は西側壁附近、カマド址規定地点及び覆土より出土したもので、土師器が主体で、須恵器を含めて総数10余点であった。内訳は甕形土器６点、坏形土器4点、灰釉陶器椀（Ⅲ)1 点である。内資料として取り上げたものは、復元土器１点を含めて5点である。土師器、須恵器の二群に分けて記述したい。

１は、土師器杯の口縁部片で、残存部不明瞭で、口径18.7cmを測る。恐らく底部から口縁部へむかってほゞ直線的に開く形態と思われ、器壁は薄く、成形はロクロ１本びき手法で、内面は炭素被膜処理・ヘラミガキが施される。色調は外面は、灰から赤褐色を呈し、胎土に小石・砂粒を含み、焼成はやゝ良。２は、カマド内出土の土師器杯の高台部分片で、工程及び手法は３と同類と思われる。やゝ垂直ぎみの立ち上がりを示す附け高台で、接着部分に沈線状の附け高台特有の附け傷痕が見える。底部は回転糸切りである。

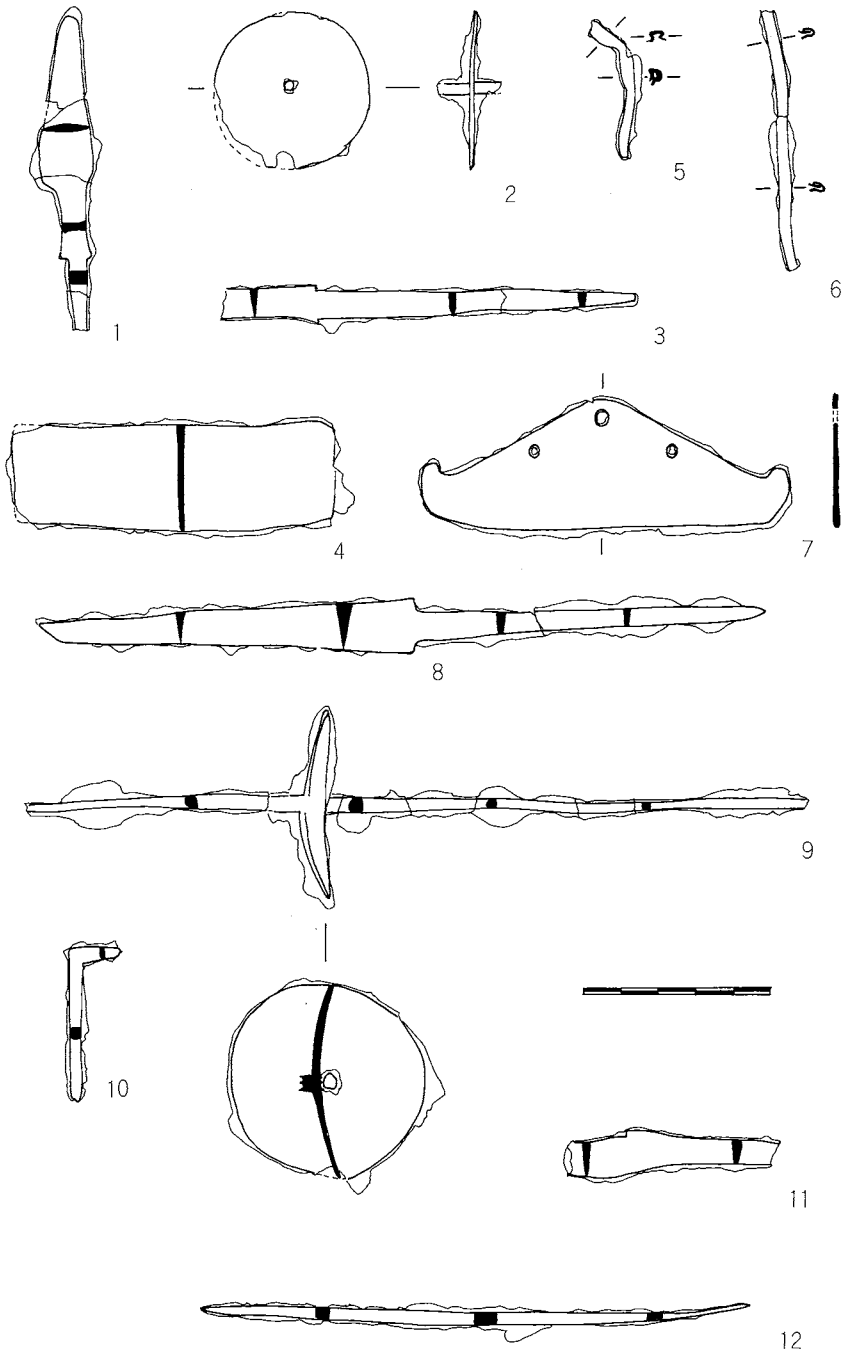
３は、須恵器坏の復元土器であり、残存部½であった。形態は須恵器編年Ⅳ～Ⅴ式に属するも



第95図　第12号住居址および出土土器

ので、土師器３と同形態である。色調は青灰色から灰白色を呈し、胎土に小砂粒を含み、焼成は還元不足の為、やゝ不良である。出土層位は覆土であった。

５は、カマド附近の覆土より検出された土師器甕の口縁部片で、残存部⅝程度と思われる。推定口径25cmを測り、器形はやゝ弱い肩張りに、頸部はゆるやかな括れを描きながら立ちあがり口縁部にかけて外反する形態をとる。出土した地点から推測して煮炊用器具と思われる。成形は巻き上げによるものと思われ、内面に指頭痕が顕著で、頸部より口唇部にかけてヘラ削り、ヘラナデ、胴部のみハケナデが施され、外面は、頸部括れ部のみハケナデ、他はヘラ横ナデが行なわれている。内・外面ともに整形が荒くデコボコしている。４は、小形甕形土器の底部片で、ロクロ



第96図　平安時代住居址出土鉄器
（1，2：5号住　3，4：6号住　5，6：7号住
7～10：8号住　11，12：10号住）

1本びき成形で、内面にはロクロ目が明瞭に残っている。立ち上がりは内彎ぎみに外反している。色調は、外面暗褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土に小砂粒・小石を含む、焼成は良好で、外面に僅かに炭化物が附着している。（三村　肇）

(8)　平安時代住居址内出土石器（第97図）

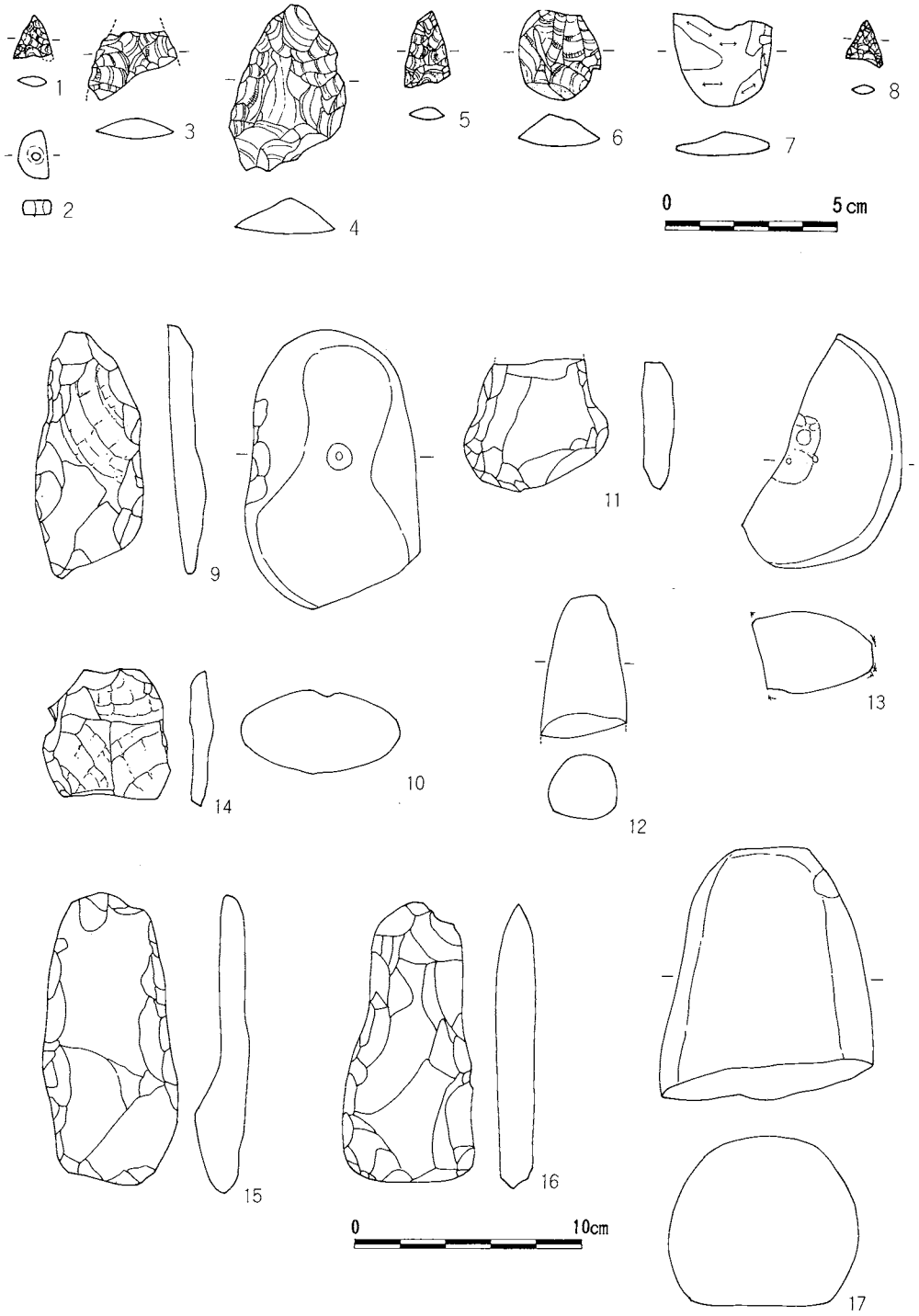
平安時代の住居址からも石器が少量出土している。その大部分が住居址覆土から出土しており、2・3の特別な例を除いて縄文時代に属する石器が混入したものと思われる。

第5号住居址からは石鏃1、打製石斧2、凹石1、装身具1の計5点が出土している。石鏃1は抉りの浅い小形品である。打製石斧9・10は短冊形を呈する刃部欠損品。凹石10は表面に1孔を有するものである。装身具2は遺構検出面からの出土で、長さ1.4cm、幅0.8cmの小さなものである。縄文・平安両時期に類例が求められるため伴出時期を明確にしえない。

第6号住居址からは乳棒状磨製石斧の頭部12が1個出土している。前期の遺構が多数検出された割合には、この種磨製石斧が僅少で、この第6号住居址出土例が唯一のものである。第7号住居址からは尖頭状石器3の欠損品が出土している。

第8号住居址では尖頭状石器4が得られた。部厚い大形品で、尖頭状石器の中でも最も大きなものの1つである。この他に第8号住居址からは半欠の凹石兼磨石13と整理途中に紛失した磨製石斧とがある。この磨製石斧は住居址床面から出土したもので、刃部は欠いていたが、その全面に灰素が付着し、第8号住居址が火災になった時、既にこの住居の床面に置かれていたのではないかと推定された。

第9号住居址では石鏃5が1個出土した。第10号住居址では、石鏃1、スクレイパー1、磨製石斧1、打製石斧2、石棒1の計6点の石器が出土した。石鏃8は小形の完形品。スクレイパーは円形を呈し、磨製石斧は刃部のみでその大部を失なっている。刃部はやはり横の研磨によって作出されている。打製石斧15、16はともに短冊形の完形品で整った形状を呈している。15は第10号住居址の火災の折りに焼かれたものか全面に炭素が付着している。第8号住居址出土の磨製石斧同様、火災時に既にこの平安時代の住居中にあったと推定され、興味深い。石棒17は北壁寄りの覆土中から出土したもので、無頭石棒の頭部で断面円形、研磨は丁寧に行なわれている。本址出土の石器は、中期的色彩の強い打製石斧、石棒および周辺に中期の土器片が散布していることから中期に属するものではないかと考えられる。（小林康男）



第97図　平安時代住居址出土石器

第Ⅴ章　調査のまとめ

第1節　縄文時代の遺構と遺物

(1) 集落

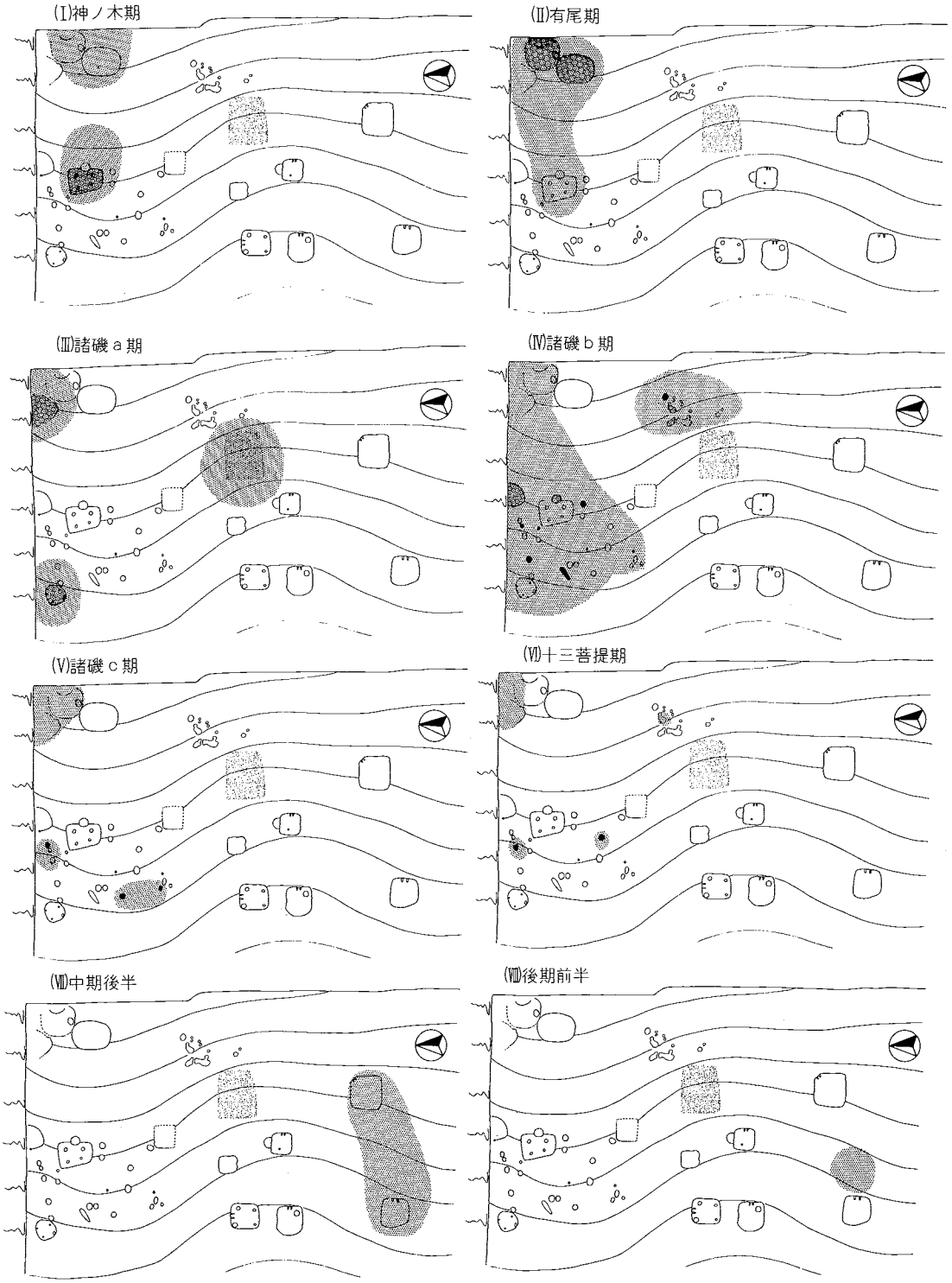
ある時代の集落を復元するには、集落全体の調査ないしはその集落規模を推定させ得るだけの範囲の調査が前提となろう。こうした広範囲の調査からみると今回の舅屋敷遺跡では舌状台地の一角を調査し得たにすぎず、昭和39年に行なわれた深志高校地歴会の発掘成果を加えても集落の在り方を考えるには資料的に不満足なものである。しかし、検出された遺構・遺物の分布状況から各時期毎の小舌状台地の占地・使用の仕方をある程度追うことができる（第98図)。

中越期　舅屋敷遺跡の初源期で、深志高校によって第2号住居地東側に住居址が1軒検出されている（位置・内容の詳細は不明)。しかし、該期の遺物の散布は他地域にはほとんどみられず、極めて小範囲で痕跡的なものであったと思われる。

神ノ木期　北側の小尾根状の微高地に第2号住居址が、またその周辺および第1号、11号住居址を中心とする地域に遺物の散布が顕著に認められる。おそらく第1号・11号住居址東側の調査区域外にも居住区が伸びていたものと考えられる。また調査地区南側の松葉沢川に面した斜面にも深志高校の調査によって少量の遺物の散布が確認されている。いずれにしても北側の微高地を中心に小規模な集落が営なまれ、この北側微高地は以後縄文時代中期になるまで主要居住地域として踏襲されることになる。この時期の住居址は前期初頭以来の特色とされる方形系統に属する4本柱の隅丸長方形で、整然としたものである。

有尾期　この時期には第1号・11号住居址が発見されているが、神ノ木期の居住地域を引き継ぎつつも遺物散布地域は拡大し、明らかに居住区域が拡大したことがうかがわれる。しかし、その地区はあくまでも北側の微高地上に限られ、内奥部への進出は認められない。住居は隅丸長方形から楕円形へと変化し、本遺跡においてはこの頃住居の形態変化が起ったことが分かる。神ノ木期の方形から有尾期の楕円形を介して諸磯a期の円形へと住居の形態はスムーズに推移し、諸磯a期以後円形主体の住居が構築されることになる。

諸磯a期　この時期には第4号、13号住居址および集石遺構が発見されている。この時期の最も大きな変化は中央内奥地域への進出が行なわれた点である。居住地区は神ノ木期以来の北側微高地上を中心とするが、集石が台地中央部に造られ、集石という特異性もさることながら諸磯a期に至って集落はより広範囲に、また多様化し、集落構造上一段と飛躍がなされたものと思われる。また第4号住居址の覆土からは角礫が多量に検出され、集石の構造とともにこの時期は礫を重視する何らかの慣習が存在したことも考えられる。これは本遺跡のみの現象ではなく阿久遺跡において特に顕著にみとめられ、他の遺跡においてもかなり一般的に認められるところである。



第98図　縄文時代変遷図

諸磯ｂ期　本遺跡において最も盛えた時期である。今回の調査では住居は第３号住居址の一軒のみであったが、深志高校により南側斜面で一軒住居址が発見されている。この時期になり、北側微高地以外にも主要な居住地区が展開することになる。またそれまでなかった小竪穴が住居址に付随する形で取り囲み、一部は中央内奥部にも進出している。小竪穴が貯蔵穴だと仮定すればこの時期は長期にわたるかなり安定した集落が営まれたことが推察できる。それによって台地をかなり広範囲にわたって使用することが可能となったのであろう。

諸磯ｃ・十三菩提期　諸磯ｂ期の繁栄から一転して衰退化現象を示し、わずかに小竪穴の一部および第１号、13号住居址覆土中に遺物の散布がみられるのみとなり、極部的にその存在が知られる程度となる。従来から言われているように集落立地上の変化により、集落の核が移動してしまったことが原因といえようか。

以上のように前期の集落は台地北側の小尾根状部分と南側の一部を中心にして営まれ、平安時代の遺構が発見された中央低地にはその痕跡すら認められない。しかし、若干の時間的空白をおいて中期後半曽利期になるとその低地の一角に遺物が散在し、わずかに生活の跡が残されている。また、片丘地区には中期の大集落址が筑摩山地山麓の舌状台地上には必ずといってよいほど存在しているのに反し、本遺跡のみは住居址は勿論、遺物においても痕跡的にしか見い出されない。こうした状況は本遺跡だけの特殊なものであるのかは他の前期遺跡を検討する必要があるが、いずれにしても前期的な立地と中期的な立地との差をそこに見い出すことができる。更に後続する後期初頭称名寺期から堀ノ内期に至ってもこの低地地域に遺物が散布し、この部分を占地することに変化はない。こうして本遺跡はこの後期初頭をもって縄文時代における台地占地は終わりを告げ、次の平安時代まで空白の時を向かえる。

以上のように発見された遺構は少数であったが、それらの台地占拠の在り方から本遺跡は縄文時代前期に関する限り、発生（木島、神ノ木期）――発展（有尾、諸磯ａ・ｂ期）――衰退（諸磯ｃ、十三菩提期）という系譜をたどることが可能であり、縄文時代前期中・後葉にかけて継続して営まれた集落であったといえる。そして第Ⅱ章歴史的環境において述べたように、現在のところ本遺跡周辺の片丘地区には大規模な前期遺跡の発見がないことから、舅屋敷遺跡はこの地域における該期の中核的集落であったということができるのではないかと思う。　（小林康男）

(2)　土器

本遺跡からは縄文時代前期中・後葉を主体に、他に若干の中期・後期に属する土器が出土した。ここでは資料的に最もまとまって出土した第11号住居址の土器群について触れておきたい。

第11号住居址出土の土器は混入と思われる少数の神ノ木式を除き、その大半が有尾式土器であり、また有尾式に伴出すると考えられる関西系の土器であった。有尾式土器は型式設定が行なわれて以来、内容的にほとんど検討が加えられずに今日に至っている。今調査において第11号住居址からかなり良好な資料が検出されたためその観察結果を概述したい。

(1) 器形

器種は深鉢形を唯一に、他に台付および手づくね形のミニチュア形土器があるにすぎたい。有尾遺跡等では甕形、浅鉢形があるというが、本遺跡においては認められなかった。深鉢形は、①底部から胴部に向かって脹らみをもち、更に口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がるもの（第41図１、第42図５・７、以下第11号住居址土器番号)、②口縁部がやや内弯気味になるもの（６、８)、③頸部で強く外反するもの（48)、④胴部にゆるいくびれを有するもの（66）の４種類が認められる。復元された資料が少く、器形の分類は不充分なものであり、今後の課題としたい。

口縁部形態は、平縁と波状に大別される。平縁口縁は①起伏のないもの（１、５～９）と、②ゆるい起伏をもつもの（３）とがある。波状口縁は、①ゆるい山形をなすもの(37、38、41～44)が多いが、他に②山形口縁にえぐりを加え、口縁頂部に凹状の装飾を施したもの(２)、更に③突起を付すもの（43）などがある。有尾遺跡で出土した山形小突起をもつものは出土していない。口縁部形態は量的には起伏のない平縁が最も多く、ゆるく大きな波状を呈するものがこれに次ぎ、前代より波状を呈するものの増加がうかがえる。

口辺部形態は、①有段口縁状を呈するもの(28・31・35)、②口唇部が平坦であるもの(１、32～34)、③口唇部が丸味をもつもの（８・９・71・77)、④先細りで先端に向かい薄くなるもの(78・79)、⑤口唇内面がややふくらむもの（37・38・41・42）の５種類がある。①は神ノ木式の影響をもったので、量的には少ない。②③が口辺部の主体を占め、④⑤は余り多くない。

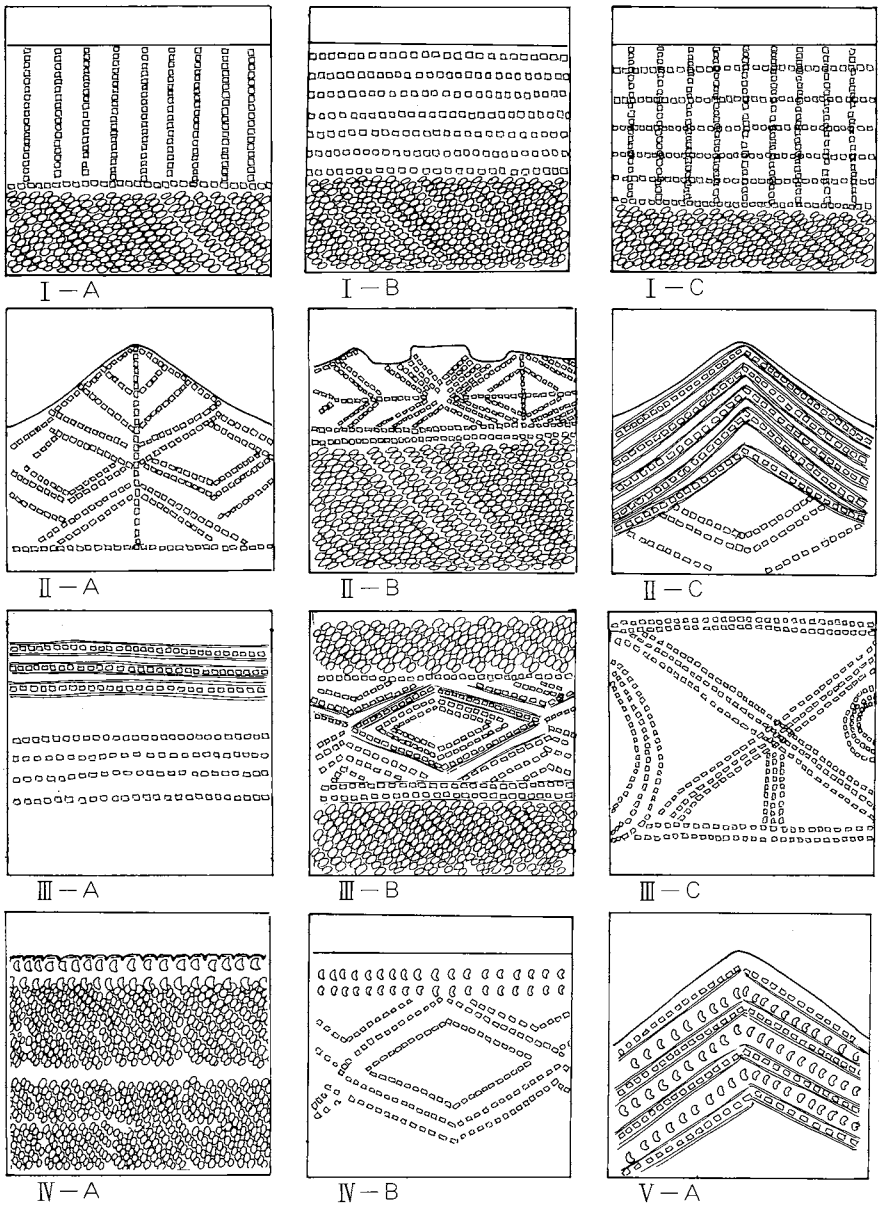
底部は、全形が復元された１ではやや張り出し気味で、10は胴部にかけて直線状に開く２種類がある。底部の資料はこの２例のみであったのでその詳細は不明確である。

(2) 文様

施文工具　文様は列点状刺突文、半截竹管による刺突文、爪形文、沈線文および縄文に分類できる。中でも最も特徴的なものは列点状刺突文で、縄文施文の土器に次いで多く出土する。列点状刺突文は櫛歯状工具を横にずらせながら繰り返し刺突することによって得られる。工具は３×３mm～４×４mmまでの櫛歯を１～２mmの間隔で７本前後そろしたものを一単位としている。櫛歯の形態は四角いもの(37、40他最も多い)、やや丸味をおびるもの(28)、長方形を呈するもの(29)などの種類がある。櫛歯状工具の長さは2.1～2.6cmで、2.5cm前後のものを一般としている。有明山社遺跡では0.8mmの歯を24個備え、長さ3.5cmの微細な櫛歯状工具が使用されているものもあるが、今回の舅屋敷では発見されていない。

施文にあたっては、施文具を器面に直角に刺突するため、描出された文様は形がくずれず、櫛歯が変形されることなく器面に印されている。神ノ木式の櫛歯状連続刺突文が、櫛歯状工具を器面に斜めに当て、やや横にずらせ気味に刺突されるのとは大きな違相がみられる。そして有尾式は横位に繰り返し刺突されることが多いのに対し、神ノ木式は縦位施文を主としている。

文様構成（第99図）　主文様帯が口縁部にあるものと胴部上半にあたるものとに２大別される。口縁部にあるものは、更に口縁部形態によって平縁、波状に２細分される。



第99図　有尾式土器文様模式図

①口縁部文様帯

列点状刺突文を有するもの：

Ⅰ、平縁口縁

Ⅰ－A、縦位に施文し、頸部に1条横位に施文するもので、密接に施すもの（34）、疎らなもの（35）とその中間的なもの（32・33）とがある。

Ⅰ－B、口縁に平行し横位に施文されるもの（1、28～31）。3条から7条までの種類がある

が、6～7条が最も一般的である。

Ⅰ－C、A・Bの併用されたもので、作出された文様は方形を呈する（36）。

平縁口縁の文様帯の幅は、Aは2～4㎝、Bは2～6㎝、Cは4㎝で、4㎝前後が普遍的である。神ノ木式が3㎝前後を一般的とするのに対し、有尾式の口縁部文様帯はやや拡大の方向にある。また、Aは神ノ木式の縦位施文を踏襲しているものと考えられ、Bよりやや先行するものと思われる。

Ⅱ、波状口縁

Ⅱ－A、ゆるい山形口縁で、山形の頂部から縦に1条ないしは数条施文し、その両脇に菱形、三角形を基本的モチーフとした文様が描出されるもの（37～40）。

Ⅱ－B、装飾性の強い特異な山形口縁を呈し、横位に三角形、菱形の文様が配されるもの（2、43）。

Ⅱ－C、山形口縁に沿って平行に文様を重畳し、下位は菱形を構成するもの（41～44）で、A、Bより文様構成は粗雑で、文様の単位も大まかである。

波状口縁の文様帯はその口縁部形態に大きく左右されることが多い。最も一般的なものはAで、Cがこれに次ぎ、Bは余り多くない。またⅠ－A～C、Ⅱ－A、Bには平行沈線文と列点状刺突文との併用が余り認められないが、Ⅱ－Cには顕著であり注意される。

刺突文（爪形文）を有するもの：

Ⅵ、平縁口縁

Ⅵ－A、口縁に平行して2条の爪形文を施文するもの（5、74）。口唇部に刻みを加えるものもある（5）。

Ⅵ－B、爪形文はAと類似するが、以下に列点状刺突文を併用するもの（71）。

Ⅴ、波状口縁

Ⅴ－A、波状口縁に沿って、爪形文と列点状刺突文とを交互に施文するもので、更にそれらの間に沈線文を加えたもの（73）。

爪形文施文の土器は量的には極めて僅少で、客体的存在といえる。

②胴部文様帯

胴部に主文様帯が配されるもので、その上下を縄文施文されるものが多い。

Ⅲ－A、列点状刺突文が平行して施文されるもので、沈線文を併用するもの（45～47）と、併用しないもの（48）とがあり、更に低い隆帯上に施文されるもの（67）もわずかではあるが存在する。これらは後述する三角形、菱形の文様の一部と考えられるものも含んでいる可能性があり注意される。

Ⅲ－B、文様帯の上下を横走する列点状刺突文によって画し、内部を菱形、三角形の文様によってうめるもの（3、49～63）。3の例から文様単位は4～5単位ほどと思われる。

Ⅲ－C、列点状刺突文による三角形、菱形文の間に、渦巻状の曲線を描くもの（4、64、65）。

小破片のため文様構成に不明確さを欠く。

胴部文様帯は列点状刺突文によるものが主体を占め、他に72にみられる刺突文がわずかにある。

③底部付近の文様

極く少数であるが、底部付近に文様帯を有するものがある。口縁部に施文した列点状刺突文と同一工具によって斜位に刺突を施すものがある（１）。

以上のように本遺跡出土の有尾式土器には文様構成上幾種類かの分類が可能であるが、他遺跡で出土している平行沈線による菱形・三角形・波状文等の資料は出土していない。Ⅰ～Ⅲの列点状刺突文は、神ノ木式の櫛歯状連続刺突文からの転換として登場してくると指摘されているが、地方色の強いその文様施文が継承発展させられたことがうかがえ、両型式が長野県を中心となる小範囲の中で独特の発展をとげ、極めて近似した継続性のあるものであったことが分かる。一方、Ⅳ・Ⅴにみられる半截竹管による爪形文は、それ以前には顕著には認められないものである。関東の黒浜式の粗雑な爪形文の影響を受けたものと考えられる。

これらの文様の他に、全面に縄文を施文したものが多量にある。未だ充分な整理・分析が行なわれていないので明確さを欠くが、第11号住居址の縄文施文土器の説明で述べたように、ＬＲの斜縄文、ＲＬ＋ＬＲの羽状縄文が多いことが指摘できる。

(3) 胎土・色調・焼成

胎土には従来から言われているように繊維が含まれるものは非常に少ないが、極く一部には含むものもある。長石・石英を含むものは多く、雲母を混入しているものも少量みとめられる。色調は、列点状刺突文を有するものは赤褐色ないし茶褐色を呈するものが一般的であるのに対し、縄文および刺突文施文土器はやや黒ずんだ茶褐色を示すものが多い。焼成は、いずれの土器も非常によく、堅緻である。

(4) 伴出土器

第11号住居址では第39図に示すごとく、かなり良好な状態で関西系統の土器が出土している。数量的には極めて微々たるものであるが、有尾式土器とセットで検出された意義は大きい。出土した土器は、北白川下層Ⅰ式に属する大形土器と清水ノ上Ⅱ式とされる小形土器とがある。有尾式が北白川下層Ⅰ式と併行関係にあることは既に指摘されている所であるが、ほぼ器形が推定される大破片が住居址の中で他の多数の有尾式と伴出したことは、両者の共伴関係が確実なものと確認されるとともに、関西系土器の流入、使用度という点においても好資料となるものである。清水ノ上Ⅱ式に関しては、時期的にやや逆るものとされ、神ノ木式に併行するといわれている。第11号住居址においても神ノ木式が少量混入していたことから、この清水ノ上Ⅱ式もこれらの土器に付随したものと考えられる。

(5) まとめ

有尾式土器は神ノ木式の強い影響下で出現してくる地方色の強い型式である。その変遷過程は戸田・大矢氏の論考（戸田・大矢1979）に詳しいが、鼻屋敷遺跡出土の有尾式土器について若干

まとめておきたい。

まず器形であるが、神ノ木式では平縁口縁ないしは小突起を付した比較的平垣な口縁をもつものが多く、単純な深鉢形が主体を占めている。これに対し、本遺跡出土の有尾式土器は、口縁形態が判明したものをみると平縁が60%、波状が40%で、波状口縁を呈するものがかなり増加している。しかし、こうした波状口縁形態土器の増加は、あくまでも列点状刺突文および爪形文などが施文されたものに限られた傾向で、縄文施文のものは依然として平縁が多く、それほど顕著な変化は認められない。また神ノ木式に多い有段口縁は、本遺跡では数点出土したのみで急激に減少している。このような器形の微妙な変化は、文様構成に大きな影響を与えている。すなわち波状口縁を単位として文様構成することが多くなり、文様の単位は相対的に大きくなり、しかも文様単位が波状口縁を中心として施文されるため固定化する傾向が認められる。更に有段口縁上を中心として施文されていた文様帯は、有段口縁が減少あるいは消滅したことによって口縁部に幅狭く集約化されていたものが口縁部のみでなく、胴部、底部にまで拡大することになる。この文様帯拡大化の傾向は、諸磯ａ式を経てｂ式に至り一応の定着化をみる。

施文文様は、神ノ木式の櫛歯状刺突文を踏襲する列点状刺突文を主体とするが、施文は神ノ木式は縦位に、有尾式は横位になされる。文様のモチーフは三角形および三角形を組み合せた菱形を基本とし、神ノ木式のモチーフの色彩が強く踏襲されている。しかし、コンパス文・小さな渦巻文など曲線的なものが少く、直線的なものが主体となる。縦位施文から横位施文への推移は、よせの台遺跡23図－１（鵜飼1978)、男女倉C_2遺跡46図－76（笹沢1975）が口縁部縦位施文で口縁下は横位施文され、舅屋敷遺跡Ｉ－Ｃでは横位・縦位双方が施文され、その両方が併用されていることから神ノ木式から有尾式への移行過程を示す資料とも考えられる。また本遺跡Ⅲ－Ｃのように大きな渦巻文が配されるものがあるが、男女倉C_2遺跡74～75は多量に繊維を含み、大きな渦文を描くもので、これらの発展形態として把えられる。なお、菱形を描く列点状刺突文には沈線文を加えたものも多く、この文様が諸磯ａ式の助骨文あるいは格子目文等に継承発展させられていくものと考えられる。

粗大な爪形文は、黒浜式ないしは清水ノ上Ⅱ式と関連がありそうな神ノ木式の口縁部爪形刺突文（舅屋敷22～27）の影響下から成立してくるものであろう。巾田遺跡（森嶋、笹沢1966）２類Ｃでは繊維を多量に含む類例があり、一方繊維を含まない或は微量に含むよせの台遺跡、男女倉C_2遺跡、舅屋敷遺跡出土例がある。それが時間差を示すものか、地域差を表わすものかは今少し資料の増加を待ちたい。これら粗大な爪形文とは別に、他遺跡では平行沈線文内に爪形文を密に加えるものがある。両者の区分はまだはっきりしないが、今後その出自系統および継続性を含めて注意したい。これら有尾式に伴う爪形文施文の土器は量的には少量であるが、かなり安定した在り方を示しており、有尾式を構成するものかどうかは別として有尾式期の重要な要素となっていることは確かである。

（小林康男）

参考文献
1957、樋口昇一他「上原」長野県教育委員会、1966、森嶋・笹沢「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告」（信濃18－６）、1975、笹沢浩「男女倉遺跡Ｃ地点」（男女倉）、宮沢恒之「千鹿頭社遺跡」（中央道報告書、諏訪市その３）、1976　伴信夫「大石遺跡」（中央道報告書、茅野市原村その１富士見町その２）　樋口昇一「十二ノ后遺跡」（同前、諏訪市その４）　1978　鵜飼幸雄「よせの台遺跡」茅野市教育委員会、1979、戸田・大矢「神ノ木式、有尾式土器の研究（前）」（長野県考古学会誌34）

(3)　彩色土器

彩色土器とは赤色および黒色塗料を塗っている土器のことを言う。塗料については未だ分析が行なわれていないので明確にはし難いが、福井県鳥浜貝塚（森川、1979）の分析結果を参照すると、漆とベンガラ（酸化鉄）が用いられたものと考えられる。漆でも黒漆は漆そのままを使用し、赤漆は漆にベンガラを混入したものと思われ、やや黒味がかった色合いの部分も認められる。

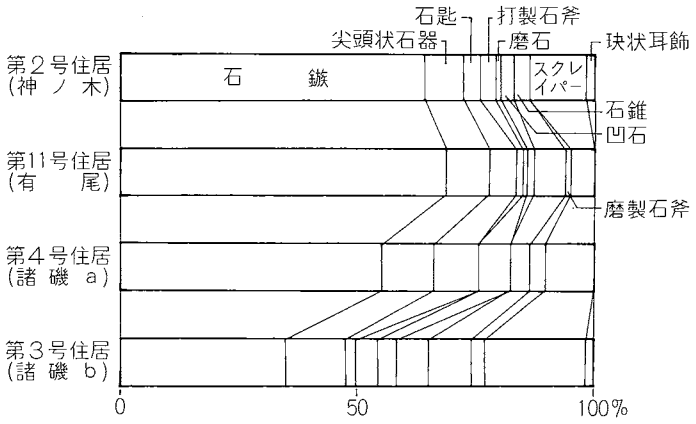
舅屋敷遺跡からは、第13号住居址、第４号住居址および集石遺構から計３点が出土している。第13号住居址から出土した第53図４は、諸磯ｂ式期の浅鉢形土器で、ベンガラを塗布した痕跡を残している。第４号住居址出土例（小片のため図示不能）は、諸磯ｂ式期の北白川下層Ⅱ式系の浅鉢形土器で、ベンガラを半截竹管状工具による平行状線文に沿って塗っている。集石出土の69図は諸磯ａ式期の浅鉢形土器で、内外面の下地に黒漆を塗り、その上に赤漆で文様を描いている。これらの彩色土器には、ススや炭化物の付着が認められないことから煮沸形態的な土器ではなく、特殊な貯蔵形態ないしは祭祀供膳的な用途をもった土器と考えられる。縄文時代前期の漆塗り土器で文様を描いているものは、鳥浜貝塚、長野県内では原村阿久遺跡、富士見町日向遺跡にその出土例が知られている。まだ類例は少ないが、特異な土器として今後注目される資料であろう。

（島田哲男）

参考文献
1966　武藤雄六「八ヶ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡」信濃18－４
1973　金子浩昌他「古和田台遺跡」船橋市教育委員会
1975　土肥孝他「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会
1979　森川昌和他「鳥浜貝塚」福井県教育委員会

(4)　石器

石器組成　本遺跡から出土した石器は、総数461点の多きに達する。その内訳は第２表にまとめてあるが、遺構外出土の一部を除き、ほぼ縄文時代前期後半の時期に属するものと考えてよいであろう。出土した石器は石鏃、尖頭状石器、石匙の狩猟具を主体に、他に若干の打製石斧、磨石、凹石、磨製石斧、石錐等が付随し、中部高地における該期石器組成の典型的な在り方を示している。また、従来、この時期における石器の出土量はそれ程多いとはいえない状態であったが、最近報告された十二ノ后遺跡、阿久遺跡等では多量の石器が出土し、本遺跡での多量性とともに石器使用量に対する考え方を改める必要がありそうである。

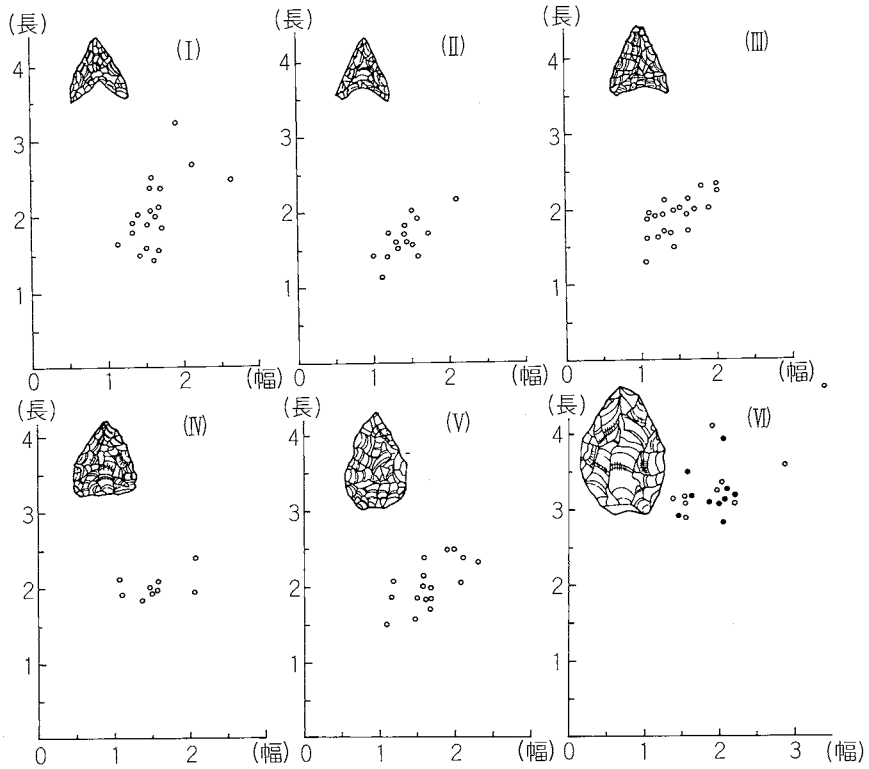


第100図　住居址石器組成

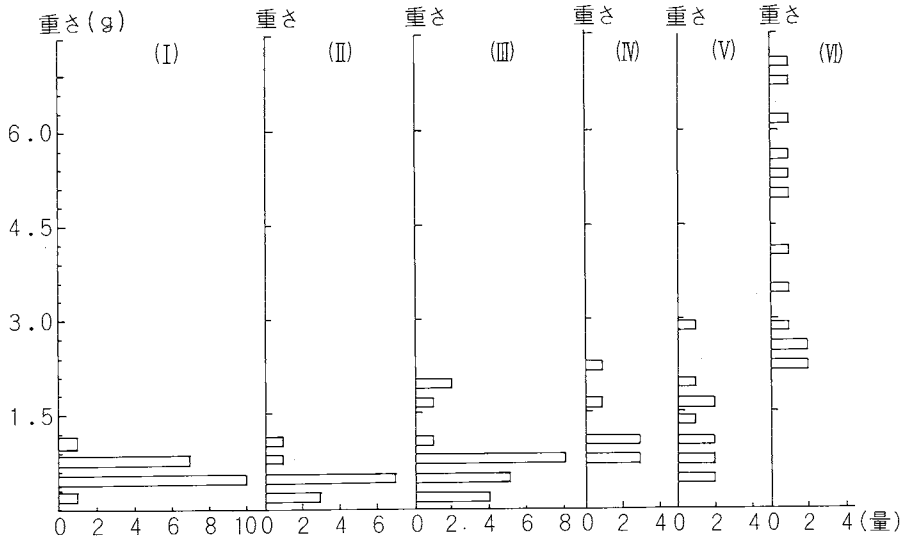
本遺跡では神ノ木期から諸磯b期にかけての住居址が発見されており、そこより検出された石器の様相から石器組成の時期的推移を知ることができる（第100図）。神ノ木期(第2号住居)～有尾期（第11号住居）においては、石鏃が全出土石器中の60～70%と圧倒的な比率を占め、更に尖頭状石器、石匙が10～15%と狩猟具が全石器の80%を占めている。これに対し、諸磯a期（第4号住居）になると狩猟具の比率は低下しはじめ、諸磯b期（第3号住居）に至って石鏃35%、尖頭状石器・石匙が15%と全石器の半数を割るまでに狩猟具の位置は低下する。これに対し、打製石斧、磨石は徐々に増加傾向となってくる。特に諸磯a期からb期にかけての変動は大きく、a期まで徐々に進行していた組成の変化が、b期以降急激に行なわれ、狩猟具主体の前期的石器組成は打製石斧・磨石・凹石等の植物採集用具中心の中期的石器組成へと急速に変換されていったことが読み取れる。諸磯b期は石器組成面からみると前期的性格と中期的性格との画期点ともいえる時期であり、諸磯b期の様相をより詳細に分析することによって中期的石器組成形成の経緯の一端を知ることが可能となるものと思われる。

石鏃・尖頭状石器　本遺跡では石鏃、尖頭状石器が最重要の石器であった。石鏃はⅠ深い凹基のもの、Ⅱ浅い凹基のもの、Ⅲ痕跡的な凹基のもの、Ⅳ平基のもの、Ⅴ円基のもの、の5分類が可能である（第101図）。これらの石鏃の長さと幅（底辺）を観察すると、幅はいずれの石鏃も1～2cmの中にその大半が納まってしまい、幅に関してはある程度の限定があったことが分かる。一方、長さはⅠ～Ⅲの凹基状を示す部類は1～2cmを主体に、わずかに2.5cmと大きなものがあるのに対し、Ⅳ・Ⅴの抉り込みを有さないものは2cm前後ないし、それ以上の長さのものが大半で、Ⅰ～Ⅲに比較しやや長めであった。しかし、これとても3cmを越えるものは皆無といってよく、本遺跡出土の石鏃は長さ1～2.5cm、幅1～2cmに納まる大きさであった。形態的にこれ位の大きさのものが機能的に最も有効性を発揮し得たものと思われる。このような形態上の特徴に対し、重量をみると、Ⅰ～Ⅲは0.6～0.9gに分布の中心がみられるが、Ⅳ・Ⅴは資料的な僅少性によるものかⅠ～Ⅲにみられたような集中化傾向は認められず、0.6～2.7gの間に満遍無く分布し、全般的にやや重い。殺傷力という点では後者の方が勝っていたとも考えられる（第102図）。

こうした石鏃の他に本遺跡では尖頭状石器と名づけた石器が多数出土している。その特徴は、



第101図　石鏃，尖頭状石器の長さと幅の比率



第102図　石鏃，尖頭状石器の重量

部厚い剝片を使用し、簡単な加工を施すことによって尖頭部を作出し、他の部位には余り加工を施していないもので、柳葉形を呈するものが多い。従来、スクレイパー類の一種、あるいは石鏃の大形品として処理されていたものである。尖頭状石器は、長さ3㎝以上、最大のものは4.7㎝に達し、幅は1.5～3㎝、重さ3～7ｇに分布し、大きさにおいても、重量においても石鏃とは画然と区別されるものである。石槍とするにはやや小形すぎるし、石鏃には大形であり、ちょうど両者の中間的形状を呈するものである。弓矢、槍両方の機能を想定することが可能であるが、いずれにしても刺突の用途をもった狩猟用具の一種と考えられる。縄文時代早期以降、石槍は石器組成中から急速に姿を消して行くとされているが、こうした粗雑な刺突具を今後もう一度見直すことによって当時の狩猟具の実態をより正確に解明することになるものと考えられる。

（小林康男）

(5) 舅屋敷遺跡出土の石材

今回の調査では、遺構面に大量の礫を確認することができた。それらの中には地形環境上、たとえば、洪水や山崩れなどによってもたらされたものも決して少なくないはずである。しかしカマドに用いられた礫、あるいは縄文期の4号址のように明らかに人為的に住居址の中に投入（敷詰）された礫群、さらには中央東よりの集石など、当時の人々が意をもって運び込んだと考えられる礫も数しれない。本項ではこのような礫を、出土した石器と共に石質分類し、母材の起源について若干検討していこうと思う。

1）遺構に伴なう礫

住居址、ピットおよび集石に伴なう礫の石質分類を第3表に示す。第II章の自然環境で述べたように、この付近の基盤をなす古生層の硬砂岩、頁岩、第三系の砂岩、凝灰岩、および閃緑岩類、第四系の安山岩が主体をなしている。とりわけ硬砂岩と安山岩が卓越しているが、これはすぐ横を流下している松葉沢川の後背地の岩相に起因しており、河床の礫種の割合とほぼ一致している。

閃緑岩類は、本遺跡から北東へ約3㎞ほどの欠ノ湯付近から、松本市の薄川上流付近までの山麓部に分布する貫入岩体である。地形上、明らかに本遺跡への自然混入は不可能であり、おそらく人為的な運搬力によってもたらされたものと考えてよい。

2）石器の母材

器種別の石質についてみると、石鏃、石錐、石匙、尖頭状石器、スクレイパーなどの剝片石器には、堅緻で割れ口が鋭利な黒曜石、チャートが選択されている。特に石匙、石錐に限っては、チャートの頻度が極めて高く、単に加工の容易さに加えて、用途に応じた選択性を考えてみる必要がありそうである。

また打製石斧、磨石、凹石など、特に母材を選択する必要が少ないものについては、次に述べるA)起源の礫、すなわち遺跡の脇を流れる小河川の河床で容易に採取される礫が用いられている。

一方、磨製石斧および装飾品については、若干の例外はあるが特定の母材に限定されており、磨製石斧については蛇紋岩、装飾品についてはヒスイ、滑石が用いられている。これらが原地加

工か、あるいは製品搬入（交易製品）かは明らかにし難いが、どちらにしても交易ルートによって製品もしくは母材が搬入されてきたことには間違いないだろう。

3）礫の起源

このような礫種の観察から、その起源をまとめると大きく次のように分けられる。

A）隣接河床から運び上げられた礫

これには遺跡の背後に迫る高ボッチ山塊に分布し、本丘陵を開折流下する各小河川によって遺跡付近にもたらされた硬砂岩、頁岩、砂岩、礫岩、凝灰岩、安山岩がある。遺構および石器に用いられた礫は、ほとんどこれに該当する。

B）近隣地域から搬入された礫

ここでいう近隣地域とは数kmの範囲内である。石英閃緑岩・花崗閃緑岩といった閃緑岩類は前述したように、その分布場所から河川によって遺跡へもたらされたものとは考えにくく、ある意をもって人為的に搬入されたものであることには間違いないだろう。しかし用途から、この石に対して極端な重要性はいだいていなかったと推測される。

次に約2km離れた、丘陵直下を流れる田川からの運び上げであるが、この礫を識別することは極めて難しい。というのは、田川上流の後背地も（中島遺跡、1980）に示されているように古生層および塩嶺累層の安山岩から構成されているために、A)起源の礫とほとんど同種だからである。ただ田川後背地に独自の産状を示すものがある。石灰岩とチャートである。しかし石灰岩は、本遺跡では1点も確認されず、またチャートも石器に多少確認されたのみで、田川河床礫起源とは判断し難い。以上のことから、特に田川起源と断定される礫もなく、距離にすれば遺跡からわずか2kmしか離れていない田川も、比高差90mという条件下においては、礫材採取の範囲外といえようか。

C）他地域から搬入された礫

A)およびB)起源に結び付かない礫種として、黒曜石、蛇紋岩、ヒスイおよび滑石がある。

黒曜石製石器は、縄文前期の遺跡に多産するが、本遺跡も例外ではない。おそらくこれを供給する相当量の物資が、交易形態で運搬され、本遺跡へ搬入されたことだろう。

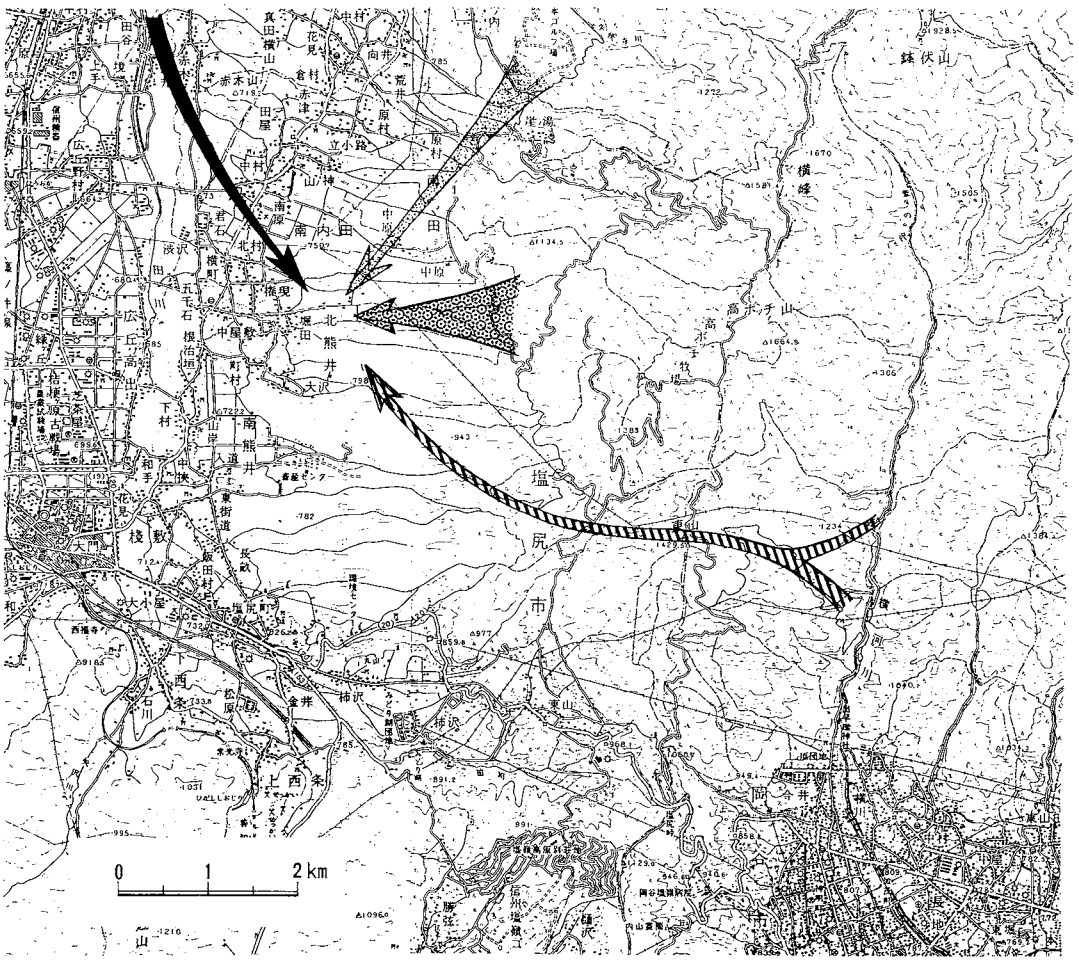
谷筋に山を越えると岡谷市の横河川上流へ下りる。この荷直峠は、現在の塩尻峠が開ける以前に利用されていた古道であり、松本平と諏訪盆地を結ぶ重要な交易路であったと推測される。横河川を下ると谷筋から岡谷側の平野部へ移行する扇頂部には、本遺跡とほぼ同時代に集落を営んでいた上向、扇平、梨久保などの各遺跡が立地しており、また横川山中にも、これらのキャンプ地的な遺跡が点在している（上条重利他、「岡谷市長地・横川山地に点在する縄文時代遺跡の調査」長野県考古学会誌No.41、1981）。

前期の遺跡分布からみて、和田峠起源の黒曜石が、このルートを越えて松本平へ持ち込まれていた可能性は充分考えられ、しかも磨製石斧に用いられた蛇紋岩が、この横河川上流に産するのである。舅屋敷が洪水、山崩れなどの危険性を大いにはらみ、自然環境としては、むしろ悪条件

第3表　住居址・ピットおよび集石に伴なう礫の石質分類

（個数）

地層	礫種	住居址No. 縄文 1	縄文 4	縄文 11	縄文 13	土師 5	土師 8	土師 6	土師 9	土師 10	ピットNo. 3	ピット 4	ピット 10	ピット 11	ピット 12	ピット 14	ピット 19	ピット 20	集石
第四系	安山岩	5	12	3	2	3		2	3	4	2				1	3			13
第三系	砂岩	2			1				2			1	1						
	礫岩	3	1	2	1			1											1
	凝灰岩		1				1												
	石英閃緑岩		2			2	1		2	1									6
	花崗閃緑岩																1		2
古生層	硬砂岩	8	10	11	5	12	4	4	4	8	1	3	1	2		3	4	2	23
	頁岩	3	5	0	2	2								1	1				1



A（硬砂岩，頁岩，砂岩，凝灰岩，安山岩）

B（閃緑岩類）

C（黒曜石，蛇紋岩）

D（ヒスイ，滑石）

第103図　舅屋敷遺跡出土の礫の搬入経路

が重なっているにもかかわらず、丘陵上に古代人の形跡が長期間残っていたという事実は、あるいはここが諏訪・岡谷方面から松本平への下り口として、交易上重要な位置を占めていたという社会環境上の利便によるものともとれないだろうか。

ただここで黒曜石に対する代りの物資が何であったかが問題となる。具体的な把握にはまだ資料不足であるが、1つの推測として考えられることは、諏訪の黒曜石に値する松本平の特産物は、姫川流域に産するヒスイ、滑石に他ならないということである。しかも前期にはこのヒスイ、滑石製装飾品の交易が幅広く及んでいる。黒曜石とヒスイ、滑石の交換が盛んであった集落の1つとして、本遺跡は位置的にその可能性は充分にあり、また出土遺物の中にも現にその傾向を伺うことができる。

今1つ同様の観点から注目すべきものとして、黒曜石貯蔵例（黒曜石塊の集積）がある。これは塩尻市では、一昨年の中島遺跡(中期)に次いで2番目の出土例である。長崎元広「黒曜石貯蔵例と交易」山麓考古No.12、1980では黒曜石貯蔵例が原産地周囲の中期集落にのみ多く、他の地域、他の時代、特に黒曜石需要の大きかった前期に見当たらないのは、これが自己消費にとどまらず近隣あるいは遠方集落への供給といった交易、流通を意味しているものだと想定している。この想定に基づいて考えてみると、本遺跡出土の黒曜石貯蔵例は、当地が交易ルートの取継集落的な存在になっていたことを示唆しているのではないだろうか。ただ諏訪地方でさえ皆無に近い前期出土という問題は残る。いずれにしても今後の資料の増加を待つ検討課題であろう。

以上、本遺跡から出土した石器の母岩および礫の起源について若干の検討をおこたってきたが、まとめると第103図のように示される。（鳥羽嘉彦）

第2節　平安時代

(1)　住居

遺物と遺構の章で第8号及び第10号住居址が火災をうけた所謂火災住居（焼失住居）と想定したが、この点を再びとりあげてみたい。

第8号住居址は、焼土の量はさほどではなかったが多量の炭化木材とそれに伴う炭灰層が床面近くまで顕著で、上屋の炎上崩落が考えられた。しかしこの火災が本址居住者の日常生活中に発生した不慮の災害であったかどうかは疑問である。その理由として、報告者も述べているように本址南東隅のP_1底部には既に僅かながら土層の堆積がみられたことと、遺物の出土状態があげられる。特に遺物の出土状態では、灰釉陶器の比較的大きい破片が多数出土したにもかかわらず完形に復元できたものが十点もなかったこと、須恵器四耳壺が3点出土したがこれらは細片となり住居址内に散乱していたこと、土師器の破片はすべて小破片で復元図示できるものは皆無だったこと、そしてこれらの土器片のうち確実に床面から出土したものは少く、II～III層中の出土が多かったこと、しかるに遺物の中には熱変化を受けているものや、炭化木材の下敷きになって割れた状況を呈するものが存在したこと等、問題が多い。出土遺物がすべてこの1軒の住居が日常に持

っていたものとは考え難いのである。また一軒の住居址から完形に近い灰釉の長頸瓶２点、須恵器の四耳壺３点という数も特異といえるだろう。以上のことから、本址の炎上（火災）は、１）日常生活中の不慮の事故・災害、２）住居としての機能・目的を放棄した後の人為的または事故による炎上、の２者が想定できる。これに対応させて遺物の面からは、１）の場合、一旦生活に使用していたものを搬出し――果たしてその様な時間的余裕があるものだろうか――その後に火中または鎮火直後に遺物を投じたことが予想され、２）の場合も、生活用品の搬出以外は同様であろう。

第10号住居址では、その検出状況を第８号住居址に較べると、炭化木材は概して小片であったが炭灰層も存在していた。著しい相違は大量の焼土の存在で、上面検出の段階から既に多量に認められ掘り下げを進めるに従って、壁際を中心に住居址中央部まで厚く堆積していた。また、この焼土層下に数cmの褐色土の堆積があり、一部床に至っていることは前述の通りである。遺物の出土状況は、第８号住居址と同様特異である。焼土層以上からの出土は大量かつ細片で住居址内に散乱しており、焼土下の褐色土層及びピット内からの出土は少かったが、比較的完形に近いものであった。これらの状況から次のことが推定できる。即ち、本址は廃棄され壁際に三角堆土が形成された以後、火災に遭ったものであり、それも文字通りの不慮の事故としての火災ではなく、人為的な焼却である可能性が強い。更に燃えた（燃やされた）ものは上屋であるかどうかとの疑問も伴う。また遺物も、火災・焼却時乃至その直後に多量に廃棄されたと考えるのが妥当であろう。

この様に第８・第10号住居址ともに、火災の発生は廃絶後であろうという推定ができ得ることは、単にそれら住居址内での問題だけではなく、舅屋敷遺跡平安時代集落の廃絶、出土土器の時期等に影響してくる問題である。火中への遺物の投入という行為の意味も問われてくる。これらを考えるにあたって平安時代の火災住居の類例をあげてみたい。第４表は平安時代住居址の火災例を、中信地区及び一連の中央道西宮線関係の調査から拾ってみたものである。炭化木材・焼土のあり方は様々で、各住居址で火災の認定基準が異なることがわかる。この点については、寺沢薫氏は復元住居の火災事故を現地観察し、焼土・炭化木材よりは、カヤを主体とした解体炭化物の存在が火災住居としての必須の条件と考えられ、床面上覆土の炭灰粒の頻度の考慮によるべきとしている（寺沢　1979)。この見解に従うと、第４表中では、詳しい記述に欠けて釈然としないものもあるが、８・９・11は再検討を要すると思われる。さて、疑しい例を除外し残ったものの中で、１・12・14・17は炭化木材が床面より浮いていたことを示し、12・13は厚い焼土層がみとめられており、ある程度、住居址内に土砂の堆積があったことをうかがわせる。一方、日常生活中の不慮の火災の結果と思われる、炭化木材及び遺物の出土状態を示すものは、３・16・18或いは２も含める程度であろう。さらに報告者により、火災は廃絶後、または土器の廃棄は火災後と考えられているものが、11・12・17である。住居址の廃絶・土器の廃棄に関して火災より後に行われた可能性をもつものが、合計して６例あり、$\frac{1}{3}$以上の火災住居は、日常の事故としての火災

第4表　平安時代の火災住居集成

番号	遺跡・住居址	所在地	炭化木材・焼土等の状態	遺物の出土状況
1	沢入口5号	辰野町	床より5～10cm浮いて炭化材・茅材、同レベルで、焼土20ヶ所。	「土師器と灰釉陶器、鉄製品の出土をみちが、覆土中からの出土が多い。」
2	樋口内城14号	〃	覆土下層から床面にかけて多量の炭化材・焼土。炭化材附近の床と覆土強く焼ける。	「床面に少なく、大半は覆土とカマドより出土した。」
3	堂地狐窪13号	箕輪町	床・壁全域にわたり焼土・炭化材・竹。	「多くの遺物が出土している。」図示26、大半床面、トイレットストーン9個集積。
4	堂地大原3号	〃	床から5～10cmの厚さで炭化材・焼土、カマドの石は抜きとられた痕跡。	「焼失した住居にしては遺物が少なく……」図示に、内覆土9。
5	月見松68号	伊那市	中心に向って焼け落ちた状態の多量の炭化材。	「火災にあった住居であるので遺物は比較的多く……」図上復元などで36個体。
6	庚甲原Ⅱ5号	松川町	床上に炭化材・カヤの炭化物・焼土。	図示4、砥石1。
7	滝沢井尻4号	飯田市	壁から中央に炭化材。	「遺物の出土は比較的多い」完形9、図示11、砥石。
8	上の金谷11号	〃	住居址内より木炭。	図示2。
9	足場6号	富士見町	軟弱な床全面に2～3cmの焼土。	「甕形土器と坏形土器のみである。」図示2
10	手洗沢1号	〃	中央部から北東壁寄りに焼土と炭化材。	完形4、図示7、鉄器。
11	居沢尾根29号	原村	床直上に薄い焼土層、「カマドの破壊からみて火災は後か？」	完形1、図示11、破片総計371「床面上10～30cm程浮いて出土した。」
12	〃 32号	〃	床より10～15cm浮いて炭化材、床全面と特に壁際15cmの厚さで焼土、炭化カヤ。	「種類・量ともに豊富である。」焼土以上での出土多く、火災倒壊後の廃棄の可能性あり。
13	頭殿沢1号	茅野市	焼土の厚さ10cm、その中に炭化材が中央に向かう。	「出土遺物は比較的多い。」図示24、内床上15、鉄器？。
14	判の木山東1号	〃	自然埋没の覆土のⅣ層に沿って凹レンズ状に炭化材の落ら込み、炭化材間にススキの炭化茎。	「出土遺物は決して豊富とはいえないが……」図示14、「カマド周辺の床面と考えて良いレダルブの出土土器が多い。」
15	判の木山西12号	〃	床直上に焼土・炭化物・ロームブロック混入の茶褐色土層、この層中に集中して炭化した部材。	「カマド周辺に多い」図示22。
16	新井南10号	岡谷市	覆土・床に炭化物、北半床から北壁にかけて炭化材、ススキの炭化物、「屋根か焼け落ちて北壁に貼りついた状態か？	カマド、北半床から出土、図示12、土錘29。
17	経塚2号	〃	炭化材・焼土すべて床より15cmういた黒色土層中「火災に遇って廃絶かその逆の経過」	「遺物の出土量は少なく、その出土状態も特定の部分に集中せず住居址全域にわたる。」
18	内田原1号	塩尻市	焼材・炭化物多く、特に中央北寄りに床面上20cmに堆積。	

だけでは理解できないものといえることになる。青沼博之氏は諏訪郡原村居沢尾根遺跡の報告で平安時代後期末の集落、「集落の中心としての32号住居址を火災で失ない、見捨てられたとの感を強くうける。」としながらも、その32号住居址（第4表12）では「（遺物は）本址が火災を受け倒壊した後に廃棄されている可能性も考えられる（青沼　1981）。」と含みのある表現をされており、居沢尾根平安時代集落における32号住居址の廃絶→火災→土器廃棄→集団の移動という視点に今後の検討の余地を残している。本遺跡の場合も、時期の近似した6～10・12号住居址が同時に存在していたと考えれば居沢尾根遺跡によく似た状況である。集落の中の比較的大形の住居の使用をやめ、それの事故乃至意図的な火災の際遺物を廃棄投入する、という状況がうかがえるのである。

本遺跡第8・10号住居址等を代表とするこれらの事例が何を意味するかは今のところ全く想像の域を出ないが、土器等の物・住居・使用していた人間或いは土地に対する忌避・実生活としては伝染病対策・不用材の器物の焼却等が考えられる。火災住居については今までこの様な視点をも備えた調査・報告は多いとはいえず、既出資料の再検討及び類例の増加を待ちたい。

（直井雅尚）

参考文献

寺沢薫　1979　「火災住居覚書＝大阪府観音寺山遺跡復元住居の火災によせて＝」　青陵40

青沼博之　1981　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　原村その４』

(2) 火災住居検出の炭化材・炭化種子

焼失した第８号・10号住居址から得られた多量の炭化材、炭化種子の鑑定を県立大町高等学校教諭森義直氏に依頼したところ、鑑定結果とともに以下のようなコメントをいただいた。

第８号住居址検出炭化材樹種

〈床面上〉　マカンバ、アキギレ、ナラ、クリ、トチ、ホリバ、トネリコ、トウヒ、スギ、モミ

〈ピット内〉　ナラ、クリ、ヤナギ、樹種不明の針葉樹

第10号住居址検出炭化材樹種

〈床面上〉　マカンバ、樹種不明の広葉樹、針葉樹

第８号・10号住居址とも落葉広葉樹、針葉樹の双方が認められる。広葉樹は、クリ、コナラ亜属が主体をなしている。柱材と思われるものには、マカンバ、アキギレ、ヤナギが多く、次にホリバ、トネリコが若干みられた。これらの炭化材は直径５cm前後の柱材で垂木等に使用されていたものと思われる。針葉樹では、スギ、モミがその大半を占め、他に樹種不明のものが若干みられた。針葉樹林中にはマツと断定できるものは検出できなかったことから、マツは焼畑後に育生する人為的な植物であるので、おそらく当時は原始性の強い植物相を保っていたものと推定される。この両住居址検出の広葉樹の在り方が当時の一般的な様相を反映しているものと仮定すれば、本遺跡周辺は現在よりも平均気温で２度あまり低い植物相が展開していたものと考えられる。こうした植物相を現在の植物分布にあてはめてみると、北安曇郡乳川上流付近に類似するものであったと推定される。

第８号・10号住居址検出炭化種子

第８号住居址の炭化材に混入する状態で出土した種子は「樹種は不明であるが、ウメ、モモではなく、可能性として、スモモないしはアンズの種子と考えられる」ものであった。また第10号住居址南壁下から多量に検出された種子は「農事試験場より提供されたアワとの対比鑑定の結果、明らかにアワと断定できるものであった。これ以上の詳細は判別不可能であった」とのことである。また、このアワの下からクヌギの種子の出土もあった。

なお、アワと思われる炭化種子が入れられていたと思われる曲物状容器の底板の板材は鑑定の結果、モミ材を使用していることが判明した。

これら第８号、10号住居址出土の炭化種子は平安時代の食糧を考えるうえでの好資料を提供するものであるといえよう。

御多忙中のところ御教示いただいた森先生には記して感謝申し上げます。　（小林康男）

(3) 土器

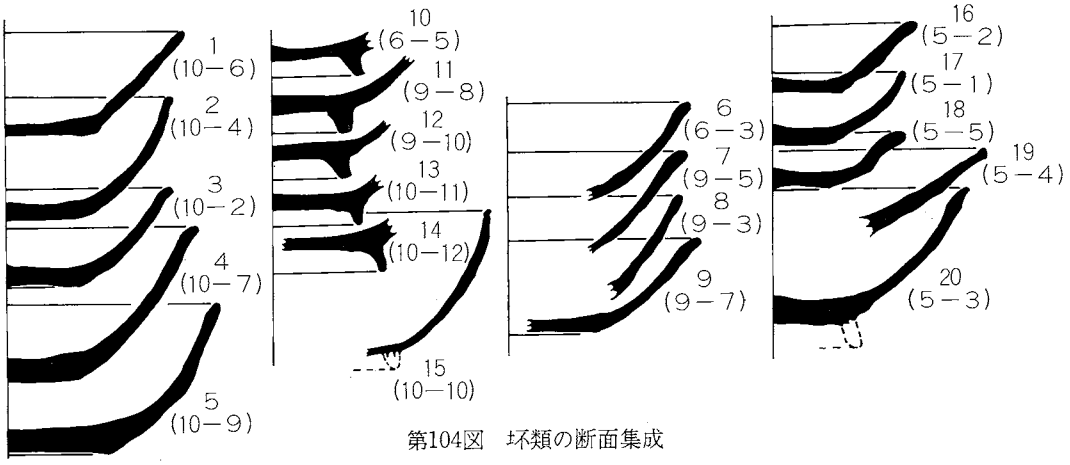
目的

平安時代の土器生産・分布等の様相にかなりの地域性があることが近年の研究成果により明らかになるなかで、長野県内においても千曲川水系・天竜川流域での該期土器を含めた編年研究が進められ、各地域の該期土器の様相が捉えられつつある。この様な動きの中で、松本平では、古く塩尻市平出遺跡の成果以後、塩尻市内田原遺跡・「東筑摩郡・松本・塩尻市誌」での分類、岡田正彦氏の編年研究等が行われてきたが、当地域を中心とした土器の様相の把握は今一歩という感が拭いきれない。そこで、今回調査出土の土器を、土師器を中心に分類・検討することにより、松本平の該期土器の様相を捉えていくための資料の追加をはかりたい。

分類

今回の調査で得られた平安時代の土器は、種別に土師器・須恵器・灰釉陶器があり、器種としては、坏・埦・皿・甕・小形甕・甑・羽釜・瓶・長頸・四耳壺等がある。これらのうちで瓶・羽釜は1点づつであるので除き、また埦・瓶・長頸瓶・四耳壺の須恵器・灰釉陶器は別の機会に譲るとして、本稿では専ら土師器類について触れたい。

①坏土師器・須恵器を一括した。須恵器は坏類が僅少で、かつ焼成不良により灰黒色や橙褐色を呈すものは、器形の点でも土師器との識別が困難だったものが大部分だったためである。



第104図　坏類の断面集成

主に器形及び法量の相違に着目し分類を行った（第104図）

A類　ロクロ痕を顕著に残す薄手の体部が直線的に広く外開し、底部の角に厚みをもつもの(1)底部には荒い回転糸切り痕をもつ。黒色処理されたものはない。

B類　A類より急な傾きをもち直線的に外反する体部に、外面は著しいロクロ痕を残しながら内面はヘラミガキされるもの（8）。黒色処理されるものはない。

C類　体部がほぼ直線的に外開し、口縁端部が厚みをもって外反する傾向のあるもの(7・9)。

色調が橙褐色系を呈しながらかなり堅緻という、須恵器か土師器かの判別に迷うものばかりである。体部外面のロクロ痕は顕著なものとそうでないものがある。黒色処理されるものは勿論ない。

D類　体部が内弯しながら開くもので、口縁端部がそのままおさまるもの（２）と、僅かに外反するもの（３・６）がある。内面をヘラミガキされ黒色処理を施されるものと、そうでないものがある。底部には回転糸切り痕を残す。

E類　深く大きめのもの（４・５）を一括した。いづれも内面を黒色処理され、放射状の暗文をもつものがある。

F類　小形で器高の低いものを一括した。体部が直線的に開くもの（16）、内弯しながら開くもの（17）、一度、稜をつくった後大きく外反するもの（18）の三種がある。黒色処理されるものはなく、底部に荒い回転糸切り痕を残す。

G類　高台付きのものを一括した。11を除くすべてに内面黒色処理が施される。10～14の体部はB類に近いものになると推定している。

出土住居址別にみると、次の様である。A類：第９号住居址１（以下は住居址出土土器の図、番号）、第10号住居址６、B類：第６号住居址１・２、第９号住居址２・３、C類：第６号住居址４、第９号住居址５～７、D類：第６号住居址３、第９号住居址４、第10号住居址１・２・４・５、E類：第10号住居址４・５、F類：第５号住居址１・２・５、第10号住居址３、G類：第５号住居址３、第６号住居址５、第９号住居址８～10、第10号住居址11・12・15

②皿　出土数が少く図示したもの４点のみであるが、主に器形及び法量で分類される。

A類　第10号住居址13をあてる。今回調査で得られた土師器皿のうち最も大きい。腰に張りをもち、外反気味に端部へ至るものである。内外面を黒色処理される。

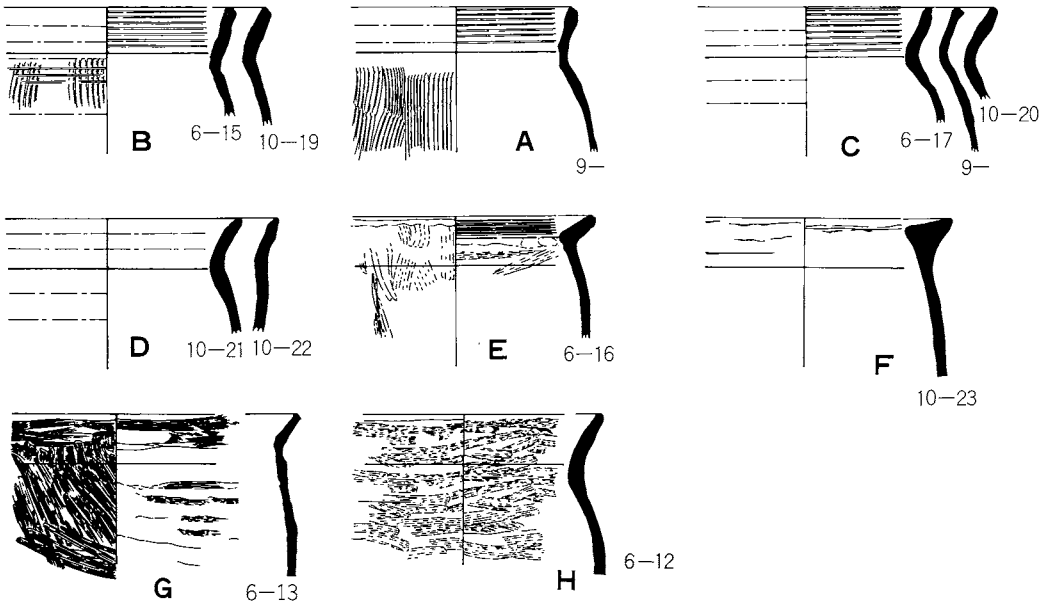
B類　第５号住居址６をあてる。体部が直線的に外開し、端部内面に凹帯を一周させている。

C類　第５号住居址７～９に相当し、口縁端部が小さく立ちあがるものである。B類とも共通して、成・整形は粗く、黒色処理されない。

A～C類とも底部に回転糸切り痕を残す・住居址別出土をみると、第６～10・12号住居址群では第10号住居址からA類が１点得られたのみ、第５号住居址では上述の４点の他、数個体部の破片が散見できる。

③小形甕　小形甕の分類の基準は、「球ないし卵形をなす胴部に短かく外反する口縁が附された器肉の薄い甕で、高あがりのない平底には糸切り痕が印され、器表面には細かい横走痕があって、轆轤による水引き技術で成形されている（1969　原・山田）。」・「口径20cm以下の甕を特に小形甕とした（1976　笹沢）。」等、基本的に述べられている。甕の単なる小形品ではなく、明らかに器肉を薄くし、ある一定の器形を意図して作られたものと理解したい。

A類　口頸部及び胴部にロクロ痕のみを残すもので、第10号住居址14～17が相当する。本遺跡出土の小形甕破片の半数をしめる。



第105図　土師器類胴上半の整形および断面模式図

B類　ロクロ痕及び、口縁内面と胴部外面にロクロの回転を利用した横位のハケメをもつものである。第９号住居址13を代表とする。本類とA類で本遺跡出土の小形甕破片[註1]の大部分をしめる。

C類　非常に薄手であるが、輪積み成形され、内面に指頭圧痕、外面にヘラによる調整痕をもつものである。出土数はごく僅かで、第９号住居址12が相当する。

④甕　今回の調査では、完形品や全体の器形の判明するものは殆どなかった為、ここでは主に口頸部付近の器形と整形に着目した。第105図はその模式図で、各図とも中央より左が外面、右が内面の整形を表わし、上半が口縁部、下半が胴部である。右横につけた土器の断面図は、各類に相当するものを示す。まず整形により８つに分類可能である。

A類　ロクロを用いて整形し、口縁部内面にロクロの回転を用いたと思われるものも含めた横位のハケメ、胴部外面の縦のハケメをもつもの。

B類　A類に似るが胴部外面の縦のハケメが少く、所々に横位のハケメが混じるもの。

C類　A・B類の胴部外面のハケメが全くないもの。

D類　ロクロを用いて整形しているが、内外面ともハケメを全くもたないもの。

E類　ロクロを用いたと思われる口縁内面の横位のハケメ、外面の浅いハケメ、ヘラナデ、ナデ等の雑多な整形をされるもの。

F類　ロクロを用いた痕跡はなく、主にナデ等で整形されるもの。

G類　口縁部内面及び外面全体に細く深いハケメをもつもの。

H類　内外面全体に浅く雑なハケメをもつもの。

次に、器形についても分類できる。

Ⅰ類　頸部がゆるやかな屈曲をもって外開し、口縁部はごく軽い内弯気味を呈すもので、頸部内面に僅かな稜を１乃至２ヶもつ。

Ⅱ類　Ⅰ類に似るが、口縁部はやや直線的で、口唇を強く面取りされるもの。

Ⅲ類　頸部が内面に大きな稜をもって著しく肥大し、短い口縁部をつくるもの。口縁部内面が半ら上向きになる。

Ⅳ類　Ⅰ～Ⅲ類以外のもの

以上の整形と器形の分類は組み合わせて用いるが、実際にみられる組み合わせの主なものは、Ａ～ＤとⅠ、Ｃ・ＧとⅡ、Ｅ・ＦとⅢ、Ｅ・ＨとⅣである。これらの全器形を推定復元すると、いづれも長胴形になると思われるが、Ａ～Ｄ－Ⅰ類、Ｃ－Ⅱ類の多くは最大径が胴部上半にあるものと推定されるのに対し、Ｅ・Ｆ－Ⅲ類は口縁端部にあると考えられる。またＥ・Ｈ－Ⅳ類は他よりいくぶん胴部に丸味があると思われる。

甕の底部破片も多量に出土したが、胴部との関連を図り得たのは１例のみ（第79図18・Ｇ－Ⅱ類）である。底部の際まで縦のハケメをもつもの、数センチ上方でハケメがきれるもの等のハケメにも大小、深浅があり、縦や斜め方向のヘラケズリがなされるものも観られる。また底径10cmに近いものにまで回転糸切り痕があり、いづれも何類の底部となるのかは、不明である。

時期的な特色

①遺構と遺物の項で述べた様に、平安時代の土器はすべて該期住居址出土ではあるが、当時の１軒の住居で使用されていた土器が床面近くに一括セットとして残されていたという状態ではなかった。しかし、各住居址内からかなりまとまった資料が得られていることも確かであり、これらの土器は各住居ごと、ほぼ同一乃至近接した時期内におけるバラエティーとして捉えてよいであろう。このため、土器の生産・使用された年代を推定する際、基本的には出土した住居址単位で行い得るものと考えている。

そこで、今回調査の平安時代遺構・遺物について、その大まかな（相対）年代を考えてみたい。まず全般に灰釉陶器がかなり伴うこと、供膳形態の須恵器がごく僅かしかないことから、平安時代の後葉に位置づけられる。またその中でも、第５号住居址出土のものは第６～10号住居址からのものより若干時期的に降るものと考えられる。その根拠としては、１）土師器坏類で内面を黒色処理されるものが、第５号住居址では少なくなること、２）灰釉陶器埦・皿類で第６～10号住居址出土のものは底面に回転ヘラケズリ痕をもつものが殆どであるのに対し、第５号住居址からのものは回転糸切り痕を残すものが圧倒的で、器形も深目なものになること、３）第５号住居址出土の土師器坏・皿類は小形で浅いもの（坏Ｆ類、皿Ｂ・Ｃ類）が多くを占めること、等があげられる。

②一応同時期に属すると捉えた各器種の中で、器形・整形の差違により年代的に僅かではあるが、前後の差が捉えられるであろうか。1968年に行われた塩尻市内田原遺跡の調査では、本遺跡

と同様平安時代後葉の集落が露呈されたが、その報告では出土した土師器坏類をA～F類の5つに分類し、中信地区及び伊那の遺跡における所見によりA－B－（C）－D－E・F形態という移行が一応窺えるとしている。内田原例は、供膳形態の須恵器の伴出状況及び、本遺跡で全くみられなかった足高の高台をもつ坏[註2]の存在から、本遺跡第6～10号住居址の土器群に較べて、上限はほぼ同時期乃至僅かに先行し、下限はやや降るもの[註3]と考えられるのでこの移行の順序を本遺跡出土の坏にあてはめてもよいと考える。すると、口縁部の外反が特徴とみられる内田原D・E類に対応するものに本遺跡C類及びD類の一部、埦状の体部をもつ内田原B類に本遺跡D類をあてることができ、本遺跡でもA・B－D－（F）－C・（D）という応用が考えられる。しかし、本遺跡A・B類には全く黒色処理がみられず、それらが本遺跡D類に先行するにしても、黒色処理されるものを伴うはずであろうし、本遺跡C類は須恵器質のものが多く、後出するというより本遺跡A・B・D類と併行関係で捉える方が妥当と思われる。この様に本遺跡での坏体部の、直線的外開→埦状外開→埦状の度合が減少し端部外反という内田原で意図した器形変化の系列は明確に成り立たない。これは、この系列自体が再検討を要するものであるのか、本遺跡第6～10号住居址が前に予想した以上に内田原に較べて短期間である為かの原因によるものと思われる。本遺跡独自では今のところ積極的に坏の変化の系列は設定できないといえよう。

地域的な特色

甕及び小形甕について検討してみたい。

松本平では、甕は、本遺跡A－Ⅰ類と同様なものが松本市七本松・同県ヶ丘・同あがた・塩尻市内田原等の平安時代の遺跡から、またB－Ⅰ類に類似するものも七本松で1例出土している。C－Ⅰ類の頸部下数cmのところから縦のハケメの存在が予想され、A～C－Ⅰ類は平安時代後葉に当地域で普遍的にみられるものといえる。E～F－Ⅲ類、G・H類については、松本平では特徴的な類例を知り得なかった。隣接地域でみると、岡谷・諏訪・上伊那地方でA類に類似したものがみられる。また、E・F－Ⅲ類等の類例としては、岡谷市新井北遺跡第1号住居址・新井南遺跡第10号住居址出土のものが、若干の相違を残しつつもあてられるだろう。

小形甕は、本遺跡ではA～C類に分類したが、松本平の報告例ではB類に含まれるものが殆どであり、A類は塩尻市平出遺跡に1例あるのみで、しかも伴出土器からみると本遺跡で小形甕を出土した第9・10号住居址より後出的な感を抱く。他地域をみると、天竜川流域ではA類は少ないとされ（笹沢　1976)、一方北信地方ではA類が代表的である。本遺跡での小形甕のあり方は、この中間的な様相を示し、小形甕の分布と類型追究の為に、松本平での同資料の再検討を促すものといえる。

（直井雅尚）

註1　土師器の小形甕や甕にみられるハケメは深いものがあり、呼称は各遺跡の報告者により異なる。櫛目状痕、櫛目文、カキ目等があったが、今回はすべてハケメに統一した。またロクロの回転を用いた横位のハケメについては、カキ目と表現されているものが多いが、外面のハケメと原体が類似するため、一応ハケメにし、カキ目は須恵器にのみ用いた。

註2　内田原の土師器坏の分類は次の通りである。A類：底部から直斜状に口縁がひらくもの。B類：（体部が）ふっくらと椀状にカーブしているもので、内面底部の渦巻きは時計廻り。C類：B類に断面三角形の付け高台があるもの、D類：口唇部がごく軽く外反し、腰部にやや張りを見せるもの。E類：口唇が外反したのみで、そのまま底部へ僅かな膨らみを見せつつ至るもの、内面炭素吸着例なし、F類：E類的の側線を持つ域部に丈高く外反気味な付け高台が付されたもの。

註3　他遺跡の成果から、本遺跡第5号住居址の土器群には伴ってもよいと考えられるのだが、不思議なことに破片すらみあたらなかった。

参考文献

1969　原　嘉藤・山田瑞穂　「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」　信濃Ⅲ－21－6

1977　岡田正彦　「平安時代土師器等の編年試論―特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として―」

1976　笹沢　浩　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市その4』のうち十二后遺跡

第Ⅳ章　結　　語

塩尻市の北方北熊井の、東山山麓地帯の丘陵上に立地する舅屋敷遺跡は、中信地方における縄文前期相当遺跡の中でも特筆されるものとして、かねてより識者間に注目されていた。昭和31年3月刊行をみた「信濃史料」第1巻にも、縄文前期全般を通じての、土器，石器類の出土が報ぜられており、在地の考古学に関心を寄せる者ならば、現地踏査の経験をもたない者がない程、その規模の広大さ、遺物の豊富さに魅力がもたれていた。この度、はからずも畑地帯の構造改善事業に伴ない、この由緒ある舅屋敷遺跡の緊急発掘調査が、期日、面積等限定される中で実施されたわけである。可能ならば、長期にわたる遺跡全体の学術調査が望まれるところであるが、諸種の事情下で限られた範囲の調査となったことは残念という他ない。

今度の調査によって明らかにされたことは、この遺跡が縄文前期のみの単純遺跡でなく、数量的にはすくないながら、遺物出土によって前期に続く縄文中期曽利Ⅳ式期、縄文後期の称名寺、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期相当の文化が所在したこと、更には年代下降して、平安後期の住居址群とこれに伴出する遺物が得られたことである。これらの複合は当初全く予測しなかったことだけに意外感を強くした。調査結果を通史的に整理して、その特筆される事項を述べるならば、先ず縄文前期相当の遺構として、竪穴住居址が六軒検出された。これらの住居址は、第2号住居址がいわゆる神ノ木式期相当のもので、規模が約4×5.6mの隅丸方形を呈し、柱穴4と地床炉をもち、床面及びその直上より、神ノ木式相当土器を中心として13分類可能の前期土器片を出土した。又匙形土製品、土製円盤各1の出土があり、破損品を含む石嗟が54、尖頭状石器7等の多出をみたことは異彩であった。1号住居址は1辺が約5m弱の隅丸方形プランを示し、11号住居址と共にいわゆる有尾式期相当のものであり、共に址内に地床炉をもつ。11号住はその規模が東西約4.5～5m、南北約5.4m、深さ30～65cmの楕円状を示し、それぞれ形状を異にするが、互いに隣接して発見される。いずれもその床面、覆土中を中心として有尾式相当土器が多量出土し、北白川下層1式土器が伴出する。又、11号住居址からは、ミニチュア土器が3個体、土製円盤1個が出土する。ミニチュア土器は有明山社遺跡からも出土事例がある。更に石鏃が117、尖頭状石器が15も検出されたことは前例を知らず、数量的に極めて注目されるところである。第4号住居址は発掘地の北西部に位置し、その径が約3.5m前後の円形プランを示す。柱穴3が検出され、覆土中に集石礫を伴う諸磯a式期相当の主体的土器出土を認める。又13号住居址は、1号住居址に西接し、北側約半分が立地条件を悪くして流失しており、推定円形プランを示している。地床炉をもち、出土土器から諸磯a式期住居と認められる。3号住居址は2号住居址の北に位置し、丘陵縁辺に立地のため址の北側半分を欠失していた。然し推定円形プランを示し、出土土器から諸磯b式期所属と判断される。中信地区所在の縄文前期遺跡で、過去に調査された中では住居址の検出事例が少くなく、その意味では遺物を含めて、貴重な資料提供となり得る。

本遺跡では小竪穴群が3箇所に検出される。その1群は2号住居址の西側に、南北の方形範囲に分布する22箇所であり、散在するかたちをとり、その2群は集石址に近い北東部に集中する18箇所で、部分的に複合状を呈し、これらの小竪穴はその形状、規模を同じくするものでなく、又、その配列も整然さをかき、いわゆる建物址を意味するものとは相異しており、遺構内に土器片、石器等の遺物やあるいは石礫を含むものと、含まないものなどあり、その性格は複雑である。遺構内遺物等から、その所属時期のわかるものとしては、諸磯b式期とみられるものが、1・2・5・7・11・16・21・22・23・28・30～33・39があげられ、諸磯b～c式期と考えられるものが6、諸磯c式期相当が15・12・20、諸磯a式～十三菩提式相当が42、諸磯c式～十三菩提式相当が25、十三菩提式3・14がそれぞれあげられる。これらの小竪穴が諸磯b式期の15件を最多として、十三菩提式期にいたるものまでが認められたことは、遺構を必要とした年次を追求する上で貴重である。

又、縄文前期住居址が集中して立地した北側尾根より、南側に隔った該期無遺構地域内に、集石が1箇所認められた。この集石は耕作や後世における崩れを受けているためか、必ずしも整然さをもつものでないが、人頭大からかなり重量感のある大きな石が集められており、その内部より諸磯a式期相当土器片を中心とする土器片や、石嗾、凹石等の出土をみた。ことに県内でもあまり出土例をみない、朱と黒の彩色土器が検出されたことは、性格を極める上で無視できないものがある。

遺物としては、北部地域に検出された縄文前期所属遺構やその周辺地帯に、前期初頭のいわゆる花積下層式あるいは木島式相当土器より、前期終末にいたる十三菩提相当土器まで、前期全般を通じての多量な土器資料に恵まれた。これらはそれぞれに細分類され、その特徴等詳述されており、中信平における前期全般を通じての、土器文化の様相や分析に、大きな資料提供になるものと思われる。

北部地域より遠くはなれた南部地域に検出された、平安期の5号と10号住居址の中間地帯に、縄文中期曽利Ⅳ式期相当の土器片20片位と、打製石斧、石棒、石皿等が出土し、更に縄文後期の称名寺、堀之内Ⅰ・Ⅱ式相当土器片が約70片程出土する。いずれもこれらに附属する住居址等遺構は確認できなかったが、発掘地の近くに所在するであろうことが想像された。

縄文期の土器と共に検出された石器類は、住居址等遺構内に伴なったものと、遺構外において得られたものの2つに集約できる。何等かの遺構内で検出されたものとしては、石鏃が244、尖頭状石器36、石匙23、石錐28、スクレイパー37、玦状耳飾2、装身具3、打製石斧15、磨製石斧7、磨石9、凹石11、石棒1、石皿2等であり、遺構外出土のものは、石鏃26、尖頭状石器7、石匙と石錐各2、スクレイパー1、玦状耳飾1、打製石斧3等があげられる。石鏃が群を抜いて圧倒的な数量を記録しており、又、これに類する尖頭状石器も多量に得られたことは、大きな驚きでもあった。遺跡の立地環境が、これらの石器の必要性を物語るものと考えられるが、広大な山腹、丘陵、台地を背景に狩猟主体による長期の生活がうかがえることでもある。石鏃は完形品

でみる限り、その大きさが（長さ）１～3.5cm内におさまるが、１～1.5cm内のもの14、1.6～1.9cm内のもの46、２～2.5cm内36、2.6～2.9cm内２、３～3.5cm内２という内訳で、1.6～2.5cm内のものが殆んどである。又、尖頭状石器はその長さが２～4.6cm内におさまるが、３～3.5cm内のものが多数をしめ、石鏃より肉厚で大形化する。玦状耳飾は３個と少く、翡翠１、滑石２の内訳であるが、姫川流域を中心とする北安曇郡、大町市内の縄文前期相当遺跡に多出をみる上から、やや稀少の感と分布圏の相違を覚える。

平安期相当の遺構としては、竪穴住居址が７軒検出された。主として丘陵上の中史部から南寄りに分布しており、第５～10号、12号住居址が含まれる。いずれも方形プランで、この５号と10号がややゆがんだ方形をとる。竈の位置は５号が東壁の北隅に片寄り、６・８・10各号は東壁中央、９号は北壁中央で、それぞれ崩れた形の石組粘土竈であった。７号、12号は明確にはつかみ得なかった。８号、10号は火災による焼失家屋であり、址内に上屋の焼け落ちた木材の炭化物が全面に推積し認められた。然し比較的良好な遺物が、そのまま放置されているところ等をみると、意識的な焼却とも思えるところがある。以上これらの住居址内からは、土師器の杯・甕・皿、灰釉陶器の椀・皿・段皿・長頸瓶等の出土が共通的にみられ、８号・10号各住居址より須恵器の四耳壺が、前者は３、後者は２と甕の破片が３、得られた。須恵器四耳壺は歿んど完形で、全体像をうかがい知る貴重な遺物であり、資料的にすぐれている。又、10号住居址からは羽釜、甑と共に刀子、紡錘車の軸などの出土があり、５号住居址より鉄鋼、紡錘車、６号住居址より刀子と不明鉄製品、８号住居址より火打金具、刀子、紡錘車、釘、７号住居址より不明鉄製品がそれぞれ出土している。紡錘車や刀子の出土が多い点は、これらの住居の性格を究める上で見逃せない資料である。又、火打金具は完存出土で、出土例をあまり知らない。中信地方としては珍らしい遺物である。

以上、平安期住居址の遺構、遺物等を通じて考察するとき、土器の組合せからみるならば、灰釉陶器の出土量が多く、これに土師器の杯・皿・甕等が混在するが、すでに須恵器の小形土器類は姿を消しており、大形土器類のみでその量もすくない。又、竈の位置、素材の在り方等から、６～10号・12号住居址は年代的には灰紬陶器の流入がこの地に顕著となる、11世紀後半代とみて大過なく思えるし、５号住居址は年代的にはあまり時間差をもたない、前者に続く時代のものと判断される。

なお、本調査が無事、初期の目的を達せられましたことは、市教育委員会ならびに山寺沢土地改良事業共同施工体委員長小松一志氏をはじめとする地元の方々の御協力の賜であります。ここに銘記し、厚く感謝申し上げる次第であります。

（大久保知已）

第5表 出土石器一覧表

（単位 cm，g）

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
14	1	1号住居	石鏃	3.4	1.9	0.3	1.1	完	黒色珪質頁岩	
	2	〃	〃	2.7	2.1	0.4	1.3	完	黒曜石	
	3	〃	〃	2.6	(1.6)	0.2	(0.8)	右脚	〃	
	4	〃	〃	(1.6)	2.3	0.3	(0.6)	頭	〃	
	5	〃	〃	1.6	(1.5)	0.3	(0.5)	左脚	〃	
	6	〃	〃	3.0	(1.7)	0.3	(1.1)	右脚	〃	
	7	〃	〃	1.7	1.2	0.4	0.5	完	〃	
	8	〃	〃	1.4	1.2	0.3	0.2	〃	〃	
	9	〃	〃	1.8	1.4	0.4	0.5	〃	〃	
	10	〃	〃	2.0	1.5	0.3	(0.6)	左脚	〃	
	11	〃	〃	2.2	2.0	0.4	0.9	完	〃	
	12	〃	〃	2.1	1.6	0.4	0.7	〃	〃	
	13	〃	〃	(1.6)	1.6	0.3	(0.7)	頭	〃	
	14	〃	〃	(1.4)	1.3	0.3	(0.6)	〃	チャート	
	15	〃	〃	(1.3)	(1.0)	(0.2)	(0.2)	脚	黒曜石	
	16	〃	〃	(1.6)	(1.2)	(0.3)	(0.4)	〃	〃	
	17	〃	尖頭状石器	3.1	(2.1)	0.5	(3.1)	〃	チャート	
	18	〃	石匙	2.9	3.3	0.6	6.5	完	〃	
	19	〃	〃	2.7	(4.1)	0.4	(4.5)	刃部	〃	
	20	〃	〃	(3.6)	(2.4)	(0.7)	(6.7)	〃	〃	
	21	〃	〃	(5.0)	3.1	0.9	14.3	完	〃	
	22	〃	石錐	4.1	0.7	0.6	4.2	〃	黒曜石	
	23	〃	〃	4.0	0.7	0.5	6.5	〃	チャート	
	24	〃	〃	3.2	0.4	0.2	0.9	〃	黒曜石	
	25	〃	〃	2.9	0.5	0.5	3.6	〃	〃	
	26	〃	〃	(2.2)	(0.4)	(0.4)	(2.1)	錐部	〃	
	27	〃	スクレッパー	3.4	1.8	0.5	3.0	完	チャート	
	28	〃	〃	3.0	2.0	0.7	4.7	〃	黒曜石	
	29	〃	玦状耳飾	4.5	(4.0)	1.0	(20.8)	欠	ヒスイ	
	30	〃	装身具	1.4	(1.2)	(1.0)	(1.3)	〃	滑石	
	31	〃	打製石斧	11.5	5.8	2.0	148.0	完	安山岩	
	32	〃	〃	11.1	3.7	0.5	(28.0)	刃部	頁岩	
	33	〃	磨石	14.9	8.8	4.6	912.0	完	安山岩	
	34	〃	〃	10.9	7.0	3.0	379.0	〃	砂岩	
	35	〃	〃	(8.7)	7.4	4.5	430.0	欠	安山岩	
25	1	2号住居	石鏃	1.4	1.6	0.3	0.4	完	黒曜石	
	2	〃	〃	1.6	(1.2)	0.4	(0.7)	右脚	〃	
	3	〃	〃	2.1	(1.9)	0.3	(0.7)	〃	〃	
	4	〃	〃	1.6	1.5	0.3	0.5	完	〃	
	5	〃	〃	1.5	1.4	0.2	0.4	〃	〃	
	6	〃	〃	1.5	(1.4)	0.2	(0.3)	右脚	〃	
	7	〃	〃	2.1	(1.2)	0.2	(0.4)	左脚	〃	
	8	〃	〃	2.6	(1.4)	0.4	(0.9)	〃	〃	
	9	〃	〃	2.3	1.7	0.3	0.9	完	〃	
	10	〃	〃	(1.6)	(1.4)	(0.2)	(0.5)	頭・左脚	〃	
	11	〃	〃	(1.4)	(1.1)	(0.2)	(0.4)	頭・脚	〃	
	12	〃	〃	(1.5)	(1.2)	(0.3)	(0.5)	〃	〃	
	13	〃	〃	1.6	1.4	0.4	0.7	完	〃	
	14	〃	〃	1.7	1.3	0.2	(0.4)	右脚	チャート	
	15	〃	〃	1.7	1.3	0.2	(0.4)	〃	〃	
	16	〃	〃	1.7	1.7	0.2	0.5	完	黒曜石	
	17	〃	〃	1.4	1.6	0.5	0.5	〃	〃	
	18	〃	〃	(1.2)	1.4	0.3	(0.4)	頭	〃	
	19	〃	〃	(1.3)	1.6	0.3	(0.5)	〃	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
25	20	2号住居	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.3	完	黒曜石	
	21	〃	〃	1.4	1.0	0.3	0.4	〃	〃	
	22	〃	〃	2.3	(1.1)	0.2	(0.8)	右脚	チャート	
	23	〃	〃	2.1	1.3)	0.2	0.9	完	黒曜石	
	24	〃	〃	1.9	(1.4)	0.6	(0.6)	脚	〃	
	25	〃	〃	1.7	1.6	0.3	0.8	完	〃	
	26	〃	〃	1.8	1.6	0.3	0.9	〃	〃	
	27	〃	〃	(1.2)	1.5	0.3	(0.5)	頭	〃	
	28	〃	〃	2.0	1.8	0.7	2.0	完	〃	
	29	〃	〃	2.0	1.4	0.6	1.1	〃	〃	
	30	〃	〃	1.9	(1.7)	0.2	(0.8)	右脚	〃	
	31	〃	〃	(1 8)	1.8	0.7	1.6	頭	〃	
	32	〃	〃	1.9	1.7	0.4	1.3	完	〃	
	33	〃	〃	1.8	(1.4)	0.3	(0.7)	左脚	チャート	
	34	〃	〃	1.9	1.5	0.3	1.1	完	黒曜石	
	35	〃	〃	1.9	1.6	0.4	(1.2)	〃	〃	
	36	〃	〃	2.4	2.1	0.6	2.2	〃	〃	
	37	〃	〃	1.4	(1.3)	0.4	(1.2)	石脚	〃	
	38	〃	〃	1.9	2.2	0.4	1.3	完	〃	
	39	〃	〃	2.2	2.1	0.4	1.2	〃	〃	
	40	〃	〃	1.8	1.7	0.5	1.2	〃	〃	
	41	〃	〃	2.0	1.6	0.6	1.7	〃	〃	
	42	〃	〃	2.2	1.6	0.4	1.3	〃	〃	
	43	〃	〃	1.9	(1.2)	0.5	(1.1)	左脚	〃	
	44	〃	〃	1.6	(1.3)	0.4	(0.7)	右脚	〃	
	45	〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.7	完	〃	
	46	〃	〃	2.2	1.4	0.4	1.0	〃	〃	
	47	〃	〃	1.8	(1.5)	0.4	(0.8)	右脚	〃	
	48	〃	〃	2.2	(1.8)	(0.7)	(1.9)	左脚	〃	
	49	〃	〃	2.3	(1.8)	(0.5)	(1.9)	右脚	〃	
	50	〃	〃	(2.0)	(1.2)	(0.3)	(0.4)	脚	〃	
	51	〃	〃	(1.7)	(1.6)	(0.2)	(0.5)	〃	〃	
	52	〃	〃	(1.4)	(1.5)	(0.4)	(0.9)	〃	〃	
	53	〃	〃	(1.6)	(1.8)	(0.4)	(0.9)	頭・脚	〃	
	54	〃	〃	(2.8)	(2.1)	(0.4)	(0.9)	脚	〃	
	55	〃	尖頭状石器	(2.8)	2.2	1.1	(6.5)	頭	〃	
	56	〃	〃	3.1	2.4	0.7	5.0	完	〃	
	57	〃	〃	3.4	2.0	0.4	2.6	〃	〃	
	58	〃	〃	(2.4)	(1.8)	(0.6)	(2.5)	欠	〃	
	59	〃	〃	(2.8)	(1.8)	(0.4)	(1.5)	〃	〃	
	60	〃	〃	3.2	1.6	0.6	2.6	完	〃	
	61	〃	〃	(2.4)	(1.7)	0.8	(3.1)	欠	〃	
	62	〃	石匙	(4.4)	(4.6)	(0.7)	(122)	刃	チャート	
	63	〃	〃	3.1	3.9	0.4	6.6	完	〃	
	64	〃	〃	(2.4)	(1.8)	(0.2)	(1.1)	刃	細粒凝灰岩	
	65	〃	石錐	5.3	0.7	0.4	15.4	完	チャート	
	66	〃	〃	3.9	0.6	0.4	6.5	〃	黒曜石	
	67	〃	〃	2.8	0.4	0.3	3.6	完	〃	
	68	〃	スクレパー	4.0	2.3	1.1	8.9	〃	〃	
	69	〃	〃	3.0	1.4	0.5	2.3	〃	〃	
26	70	〃	〃	2.4	2.4	1.1	5.8	〃	〃	
	71	〃	〃	2.5	1.8	0.8	4.7	〃	〃	
	72	〃	〃	2.8	2.2	0.8	6.2	〃	〃	
	73	〃	〃	2.7	2.6	0.8	6.1	〃	〃	
	74	〃	〃	2.5	1.4	0.5	1.8	〃	〃	
	75	〃	〃	1.9	1.7	0.5	2.0	〃	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
26	76	2号住居	スクレパー	2.5	2.6	0.5	2.5	完	黒曜石	
	77	〃	〃	3.9	2.2	1.1	6.9	〃	〃	
	78	〃	玦状耳飾	2.9	(3.2)	(0.6)	(7.9)	欠	滑石	
	79	〃	打製石斧	(2.8)	(3.3)	(0.7)	(6.9)	欠	硬砂岩	
	80	〃	〃	11.2	6.6	2.2	192	完	頁岩	
	81	〃	〃	(13.0)	(5.0)	(1.2)	(59)	欠	〃	
	82	〃	磨石	15.2	8.9	5.4	1,078	完	花崗閃緑岩	
	83	〃	凹石	14.2	6.4	5.2	709	〃	安山岩	磨石兼用
	84	〃	〃	(6.6)	(4.6)	(3.1)	(150)	欠	硬砂岩	
30	1	3号住居	石鏃	2.3	1.7	0.3	0.9	完	黒曜石	
	2	〃	〃	(1.7)	(1.6)	(0.3)	(0.5)	脚	〃	
	3	〃	〃	(2.4)	(1.4)	(0.2)	(0.6)	脚	チャート	
	4	〃	〃	2.3	1.6	0.4	0.6	完	黒曜石	
	5	〃	〃	(0.9)	(1.2)	(0.3)	(0.2)	脚	〃	
	6	〃	〃	2.4	1.6	0.3	0.8	完	〃	
	7	〃	〃	(1.8)	1.8	0.4	(1.1)	頭	チャート	
	8	〃	〃	2.2	2.2	0.4	1.1	完	黒曜石	
	9	〃	〃	(2.1)	2.6	0.4	1.2	頭	〃	
	10	〃	〃	(1.4)	1.6	0.4	(0.7)	〃	〃	
	11	〃	〃	1.5	1.3	0.3	0.4	完	〃	
	12	〃	〃	1.9	(1.6)	0.3	(0.7)	右脚	〃	
	13	〃	〃	2.4	1.4)	(0.4)	(0.9)	左脚	〃	
	14	〃	〃	(1.3)	1.6	0.4	(0.8)	頭	〃	
	15	〃	〃	1.9	1.2	0.4	0.8	完	〃	
	16	〃	〃	(1.8)	1.6	0.3	(0.6)	頭	〃	
	17	〃	〃	(2.2)	3.6	0.5	(2.2)	〃	〃	
	18	〃	尖頭状石器	4.7	2.3	0.9	16.5	完	チャート	
	19	〃	〃	(3.1)	2.2	0.6	(3.1)	脚	黒曜石	
	20	〃	〃	(3.2)	2.1	0.6	(2.8)	頭	〃	
	21	〃	〃	(2.6)	(1.6)	(0.4)	(1.8)	脚	〃	
	22	〃	〃	(1.9)	(2.4)	(0.4)	(1.5)	〃	〃	
	23	〃	〃	(2.0)	(1.6)	(0.6)	(2.4)	頭・脚	〃	
	24	〃	石匙	(2.1)	4.3	(0.7)	(5.8)	つまみ	〃	
	25	〃	石錐	2.4	0.4	0.3	2.1	完	〃	
	26	〃	〃	(2.6)	(0.3)	(0.2)	(2.4)	錐部	〃	
	27	〃	〃	2.5	0.3	0.3	0.9	完	〃	
	28	〃	〃	(2.6)	(1.2)	(0.8)	(5.2)	錐部	〃	
	29	〃	スクレパー	2.8	3.2	0.4	5.8	完	〃	
	30	〃	〃	2.9	3.0	1.4	9.2	〃	〃	
	31	〃	〃	2.8	2.6	0.3	1.7	〃	〃	
	32	〃	〃	1.7	1.6	0.4	1.1	〃	〃	
	33	〃	〃	2.6	1.7	0.4	1.9	〃	〃	
	34	〃	〃	1.4	2.1	0.3	0.9	〃	〃	
	35	〃	〃	1.9	1.8	0.3	0.9	〃	〃	
	36	〃	〃	2.6	1.6	0.3	1.3	〃	〃	
	37	〃	〃	3.3	2.4	0.9	5.0	〃	〃	
	38	〃	〃	4.2	2.2	1.0	8.4	〃	〃	
	39	〃	〃	3.3	2.8	0.8	6.9	〃	〃	
	40	〃	磨製石斧	(4.7)	(2.2)	(0.5)	(8.5)	刃部	硬砂岩	
	41	〃	装身具	(3.6)	(1.0)	(0.6)	(3.1)	欠	黒色珪質頁岩	
	42	〃	打製石斧	(7.6)	(5.2)	(1.0)	(40)	頭	頁岩	
	43	〃	〃	12.0	4.7	1.2	71	完	細粒凝灰岩	
	44	〃	磨石	10.0	7.7	5.0	590	〃	安山岩	
	45	〃	〃	8.2	7.3	3.4	310	〃	砂岩	
	46	〃	凹石	(9.4)	(5.4)	(2.9)	(252)	欠	安山岩	
	47	〃	〃	(7.2)	(5.9)	(4.2)	(230)	〃	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
31	48	3号住居	凹石	(6.4)	(6.9)	(2.5)	(185)	欠	安山岩	
36	1	4号住居	石鏃	1.7	1.8	0.3	0.7	完	チャート	
	2	〃	〃	2.1	1.6	0.4	0.8	〃	黒曜石	
	3	〃	〃	(2.1)	(1.8)	(0.3)	(0.7)	頭・脚	〃	
	4	〃	〃	(1.9)	(1.9)	(0.3)	(1.0)	〃	〃	
	5	〃	〃	(1.7)	(1.1)	(0.4)	(0.5)	右脚	〃	
	6	〃	〃	1.9	(1.9)	0.4	(0.8)	左脚	〃	
	7	〃	〃	(1.1)	1.3	0.2	(0.3)	頭	〃	
	8	〃	〃	2.1	(1.7)	(0.3)	(0.7)	左脚	〃	
	9	〃	〃	(1.6)	(1.5)	(0.4)	(0.5)	頭・脚	〃	
	10	〃	〃	1.6	1.1	0.2	0.6	完	〃	
	11	〃	〃	(1.2)	(1.4)	(0.3)	(0.6)	頭	〃	
	12	〃	〃	(2.1)	(1.0)	(0.4)	(0.7)	左半	〃	
	13	〃	〃	1.6	1.3	0.5	0.9	完	〃	
	14	〃	〃	(1.6)	(1.6)	(0.2)	(0.4)	脚	〃	
	15	〃	〃	(1.2)	(0.8)	(0.2)	(0.2)	〃	〃	
	16	〃	〃	(2.1)	(0.9)	(0.3)	(0.5)	右半	〃	
	17	〃	尖頭状石器	3.2	(1.9)	(0.4)	(2.3)	左脚	〃	
	18	〃	〃	(2.4)	2.1	0.5	(2.9)	脚	〃	
	19	〃	〃	(1.4)	(3.1)	(0.9)	(3.9)	頭・脚	〃	
	20	〃	石匙	5.0	(2.5)	(0.6)	(9.2)	欠	チャート	
	21	〃	〃	3.1	5.6	0.4	7.1	完	〃	
	22	〃	石錐	(2.8)	(0.9)	(0.5)	(9.7)	錐部	〃	
	23	〃	スクレパー	2.7	2.2	0.4	3.1	完	黒曜石	
	24	〃	ピエスエスキーユ	2.7	1.8	0.8	3.4	〃	〃	
	25	〃	スクレパー	1.6	1.7	0.3	0.9	〃	〃	
	26	〃	磨製石斧	(2.1)	(2.5)	(0.6)	(5.9)	頭	蛇紋岩	
	27	〃	石匙	6.8	(6.5)	(0.7)	(32)	欠	頁岩	
	28	〃	磨石	10.2	6.7	4.2	445	完	粗粒砂岩	
	29	〃	〃	16.7	5.5	7.4	870	〃	安山岩	
49	1	11号住居	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.4	〃	黒曜石	
	2	〃	〃	(1.7)	1.5	0.2	(0.3)	頭	〃	
	3	〃	〃	2.2	(1.2)	0.3	(0.4)	左脚	チャート	
	4	〃	〃	1.8	(1.2)	(0.3)	(0.5)	右脚	黒曜石	
	5	〃	〃	1.3	(1.2)	(0.3)	(0.3)	〃	〃	
	6	〃	〃	1.3	(1.3)	(0.2)	(0.3)	頭・脚	〃	
	7	〃	〃	1.4	(1.2)	(0.2)	(0.2)	左脚	硬砂岩	
	8	〃	〃	(1.1)	(1.9)	(0.3)	(0.4)	頭・脚	黒曜石	
	9	〃	〃	(1.5)	(1.2)	(0.3)	(0.4)	左半	〃	
	10	〃	〃	2.5	1.6	(0.3	0.7	完	〃	
	11	〃	〃	2.2	1.4	0.3	0.6	〃	〃	
	12	〃	〃	1.9	1.3	0.3	0.4	〃	〃	
	13	〃	〃	1.8	1.3	0.2	0.3	〃	〃	
	14	〃	〃	1.8	1.2	0.3	0.4	〃	〃	
	15	〃	〃	2.3	(1.4)	0.2)	(0.5)	左脚	〃	
	16	〃	〃	(1.7)	(1.3)	(0.3)	(0.5)	脚	〃	
	17	〃	〃	(1.8)	(1.2)	(0.3)	(0.4)	左脚	〃	
	18	〃	〃	(2.2)	1.8	0.3	(1.0)	頭	〃	
	19	〃	〃	1.1	1.2	0.2	0.2	完	〃	
	20	〃	〃	1.9	1.6	0.2	0.4	〃	〃	
	21	〃	〃	1.6	1.5	0.2	0.5	〃	〃	
	22	〃	〃	1.6	1.5	0.2	0.4	〃	〃	
	23	〃	〃	1.3	(1.7)	0.3	(0.6)	左脚	〃	
	24	〃	〃	1.3	1.5	0.3	(0.4)	頭	〃	
	25	〃	〃	1.6	1.3	0.3	0.5	完	〃	
	26	〃	〃	1.6	1.4	0.2	0.2	〃	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
49	27	11号住居	石鏃	1.6	(1.2)	0.3	(0.6)	右脚	黒曜石	
	28	〃	〃	1.7	(1.4)	0.3	(0.5)	左脚	〃	
	29	〃	〃	2.0	(1.5)	0.3	(0.8)	右脚	〃	
	30	〃	〃	2.0	(1.4)	(0.3)	(0.5)	〃	〃	
	31	〃	〃	2.2	(1.6)	0.3	(0.8)	〃	〃	
	32	〃	〃	1.6	1.1	0.4	0.3	完	〃	
	33	〃	〃	2.0	1.5	0.3	0.7	〃	〃	
	34	〃	〃	2.3	(1.5)	0.3	(1.1)	左脚	〃	
	35	〃	〃	2.2	(1.8)	0.4	(1.6)	右脚	〃	
	36	〃	〃	(1.4)	(1.0)	(0.3)	(0.3)	左半	〃	
	37	〃	〃	(0.7)	(1.3)	(0.2)	(0.2)	頭	〃	
	38	〃	〃	(2.1)	(1.8)	(0.3)	(0.6)	頭・脚	〃	
	39	〃	〃	(1.2)	(1.1)	(0.2)	(0.2)	脚	〃	
	40	〃	〃	(2.2)	(1.5)	(0.3)	(0.8)	〃	〃	
	41	〃	〃	(1.7)	(1.2)	(0.3)	(0.5)	〃	〃	
	42	〃	〃	(2.2)	(1.6)	(0.4)	(1.1)	〃	〃	
	43	〃	〃	1.8	1.2	0.2	0.3	完	〃	
	44	〃	〃	1.9	1.2	0.3	0.3	〃	〃	
	45	〃	〃	(1.3)	1.4	0.2	(0.4)	頭	〃	
	46	〃	〃	(1.5)	1.4	0.4	(0.8)	〃	〃	
	47	〃	〃	1.5	1.4	0.3	0.5	完	〃	
	48	〃	〃	1.5	1.2	0.2	(0.4)	右辺	〃	
	49	〃	〃	1.3	1.1	0.2	0.3	完	〃	
	50	〃	〃	(1.2)	1.1	0.2	(0.3)	頭	〃	
	51	〃	〃	1.5	(1.2)	0.3	(0.5)	左脚	〃	
	52	〃	〃	1.6	(1.2)	0.2	(0.4)	〃	〃	
	53	〃	〃	1.7	1.3	0.4	0.7	完	〃	
	54	〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.5	〃	〃	
	55	〃	〃	1.8	1.2	0.3	0.5	〃	〃	
	56	〃	〃	(1.3)	1.4	0.2	(0.7)	頭	〃	
	57	〃	〃	1.7	(1.1)	0.2	(0.3)	左脚	〃	
	58	〃	〃	1.8	(1.2)	0.3	(0.6)	〃	〃	
	59	〃	〃	1.9	1.3	0.4	0.7	完	〃	
	60	〃	〃	(1.4)	1.6	0.2	(0.6)	頭	〃	
	61	〃	〃	2.3	1.8	0.6	2.0	完	〃	
	62	〃	〃	1.7	(1.4)	0.3	(0.7)	左脚	〃	
	63	〃	〃	2.3	(1.3)	(0.3)	(0.9)	〃	〃	
	64	〃	〃	1.9	(1.1)	0.2	(0.4)	右脚	〃	
	65	〃	〃	1.7	1.6	0.3	0.7	完	〃	
	66	〃	〃	(1.6)	(1.9)	0.3	1.2)	頭	〃	
	67	〃	〃	2.0	1.7	0.6	1.7	完	〃	
	68	〃	〃	(2.0)	1.7	0.3	(1.0)	頭	〃	
	69	〃	〃	(2.0)	(1.3)	(0.3)	(0.8)	頭・右脚	〃	
	70	〃	〃	2.5	(1.4)	(0.3)	(0.6)	左脚	〃	
	71	〃	〃	(1.8)	2.0	0.5	(2.1)	頭	〃	
	72	〃	〃	(1.8)	2.0	0.3	(1.0)	〃	〃	
	73	〃	〃	2.3	2.0	0.7	3.0	完	〃	
	74	〃	〃	2.1	1.6	0.4	0.8	〃	〃	
	75	〃	〃	2.2	1.2	0.3	0.8	〃	〃	
	76	〃	〃	2.2	(1.2)	0.2	(0.8)	右半	〃	
	77	〃	〃	(1.5)	1.6	0.5	(1.2)	頭	〃	
	78	〃	〃	1.8	(1.8)	0.3	(1.0)	右脚	〃	
	79	〃	〃	1.9	1.2	0.3	0.8	完	〃	
	80	〃	〃	2.0	(1.5)	0.3	(0.7)	右脚	〃	
	81	〃	〃	2.4	(1.6)	0.3	(1.3)	左脚	〃	
	82	〃	〃	(1.5)	1.5	0.3	(0.8)	頭	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
49	83	11号住居	石鏃	(1.7)	1.7	0.3	(0.9)	頭	黒曜石	
	84	〃	〃	(2.1)	1.6	0.4	(1.4)	〃	〃	
	85	〃	〃	(1.4)	1.5	0.4	(0.9)	〃	〃	
	86	〃	〃	(1.5)	1.6	0.4	(1.0)	〃	〃	
	87	〃	〃	(1.7)	1.6	0.5	(1.7)	〃	〃	
	88	〃	〃	(1.4)	1.8	0.4	(0.8)	〃	〃	
50	89	〃	〃	(2.2)	(1.7)	(0.4)	(1.7)	右脚	〃	
	90	〃	〃	(2.2)	(1.6)	(0.5)	(1.2)	左脚	〃	
	91	〃	〃	1.8	1.2	0.2	0.4	完	〃	
	92	〃	〃	2.4	1.6	0.6	1.7	〃	〃	
	93	〃	〃	1.6	1.5	0.3	0.7	〃	〃	
	94	〃	〃	1.7	1.7	0.7	1.7	〃	〃	
	95	〃	〃	1.8	1.5	0.3	0.7	〃	〃	
	96	〃	〃	2.0	1.7	0.5	1.9	〃	〃	
	97	〃	〃	1.7	1.7	0.5	1.5	〃	〃	
	98	〃	〃	2.5	1.9	0.5	2.1	〃	〃	
	99	〃	〃	2.4	2.1	0.6	2.4	〃	〃	
	100	〃	〃	2.5	2.0	0.9	3.1	〃	〃	
	101	〃	〃	2.1	(1.6)	0.5	(1.9)	左脚	〃	
	102	〃	〃	2.4	2.3	0.4	1.7	完	〃	
	103	〃	〃	(2.5)	(1.9)	(0.4)	(1.6)	右脚	〃	
	104	〃	〃	(0.8)	(0.9)	(0.2)	(0.2)	脚	〃	
	105	〃	〃	(1.3)	(1.4)	(0.3)	(0.4)	〃	〃	
	106	〃	〃	(1.2)	(1.3)	(0.2)	(0.4)	〃	〃	
	107	〃	〃	(1.2)	(1.3)	(0.3)	(0.4)	〃	チャート	
	108	〃	〃	(1.2)	(1.2)	(0.2)	(0.3)	〃	黒曜石	
	109	〃	〃	(1.3)	(1.5)	(0.3)	(0.6)	〃	〃	
	110	〃	〃	(1.6)	(1.2)	(0.2)	(0.4)	〃	〃	
	111	〃	〃	(1.8)	(1.2)	(0.3)	(0.5)	〃	〃	
	112	〃	〃	(1.7)	(1.0)	(0.2)	(0.3)	〃	〃	
	113	〃	〃	(2.5)	(1.8)	(0.3)	(0.8)	頭	チャート	
	114	〃	〃	(1.6)	(1.7)	(0.4)	(1.1)	頭・脚	黒曜石	
	115	〃	〃	(1.1)	(1.1)	(0.2)	(0.4)	〃	〃	
	116	〃	〃	(1.2)	(0.6)	(0.2)	(0.1)	脚	〃	
	117	〃	〃	(1.5)	(1.1)	(0.3)	(0.5)	右半	頁岩	
	118	〃	尖頭状石器	3.3	2.2	0.6	4.9	完	黒曜石	
	119	〃	〃	3.1	2.0	0.7	4.7	〃	〃	
	120	〃	〃	4.1	1.9	0.9	5.4	〃	〃	
	121	〃	〃	2.9	1.6	0.5	2.2	〃	〃	
	122	〃	〃	3.6	2.9	0.5	6.8	〃	チャート	
	123	〃	〃	3.1	1.4	0.6	2.0	〃	黒曜石	
	124	〃	〃	3.3	1.2	0.3	1.9	〃	〃	
	125	〃	〃	3.5	1.6	0.7	3.7	〃	〃	
	126	〃	〃	2.9	(1.5)	0.6	(2.7)	左辺	〃	
	127	〃	〃	3.9	2.1	0.9	6.6	右辺	チャート	
	128	〃	〃	(2.5)	(1.7)	(0.8)	(3.7)	脚	黒曜石	
	129	〃	〃	(2.0)	(2.0)	(0.5)	(2.5)	〃	〃	
	130	〃	〃	(1.5)	(2.1)	(0.6)	(1.6)	〃	〃	
	131	〃	〃	(2.2)	(1.5)	(0.2)	(1.0)	頭	チャート	
	132	〃	〃	(3.0)	(2.3)	(0.7)	(5.4)	〃	〃	
	133	〃	石匙	5.6	3.5	0.8	18.8	完	〃	
	134	〃	〃	5.0	3.6	0.6	12.5	〃	〃	
	135	〃	〃	3.5	2.4	0.2	2.1	〃	〃	
	136	〃	〃	(2.9)	2.5	0.6	(4.2)	刃	黒曜石	
	137	〃	〃	(2.6)	(1.1)	(0.6)	(1.3)	〃	〃	
	138	〃	〃	4.0	5.6	0.7	10.7	完	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
50	139	11号住居	石匙	3.1	4.6	0.7	7.2	完	チャート	
	140	〃	〃	2.2	(3.7)	0.5	(3.6)	右辺	泥岩	
	141	〃	〃	2.5	4.5	0.4	5.2	完	チャート	
	142	〃	〃	2.2	4.1	0.5	3.9	〃	〃	
51	143	〃	石錐	3.8	0.4	0.3	5.5	〃	泥岩	
	144	〃	〃	3.2	0.5	0.4	4.4	〃	チャート	
	145	〃	〃	(4.1)	(0.6)	(0.3)	(10.4)	錐部	黒曜石	
	146	〃	〃	3.9	0.7	0.5	6.7	完	チャート	
	147	〃	〃	2.6	0.4	0.3	2.3	〃	〃	
	148	〃	〃	3.2	0.7	0.4	2.4	〃	黒曜石	
	149	〃	〃	2.7	0.6	0.3	1.5	〃	〃	
	150	〃	〃	(2.3)	(0.6)	(0.6)	(2.3)	錐部	〃	
	151	〃	〃	2.9	0.6	0.6	2.7	完	〃	
	152	〃	〃	(2.9)	(0.9)	(0.6)	(9.3)	錐部	〃	
	153	〃	〃	(1.4)	(0.4)	(0.4)	(1.6)	〃	〃	
	154	〃	〃	(1.8)	(0.4)	(0.3)	(1.0)	〃	〃	
	155	〃	スクレパー	4.7	1.6	0.7	4.7	完	〃	
	156	〃	〃	5.3	3.0	0.5	15.3	〃	〃	
	157	〃	〃	2.4	1.3	0.5	1.6	〃	〃	
	158	〃	〃	3.8	1.7	0.6	3.6	〃	〃	
	159	〃	〃	2.5	2.9	0.6	4.9	〃	〃	
	160	〃	〃	3.4	2.6	0.5	7.9	〃	〃	
	161	〃	〃	1.7	2.0	0.4	1.1	〃	〃	
	162	〃	〃	2.6	1.3	0.4	1.7	〃	〃	
	163	〃	〃	1.8	2.4	0.3	1.7	〃	〃	
	164	〃	打製石斧	(10.5)	(5.2)	(2.3)	(98)	刃部	〃	
	165	〃	〃	(4.5)	(6.5)	(1.7)	(64)	頭・刃	頁岩	
	166	〃	凹石	9.7	7.3	3.0	380	完	石英閃緑岩	
	167	〃	〃	(8.2)	(5.2)	(1.8)	(108)	欠	安山岩	
	168	〃	磨石	(7.4)	(6.1)	(3.5)	(280)	〃	砂岩	
	169	〃	磨製石斧	(7.2)	(4.6)	(1.9)	(120)	〃	細粒砂岩	
	170	〃	〃	(1.7)	(1.5)	(0.6)	(2.3)	刃部	蛇紋岩	
56	1	13号住居	石鏃	1.6	1.7	0.3	0.7	完	黒曜石	
	2	〃	〃	2.0	1.6	0.5	0.9	〃	チャート	
	3	〃	〃	2.4	2.6	0.6	2.5	〃	黒曜石	
	4	〃	〃	(1.7)	(1.4)	(0.3)	(0.7)	右脚	〃	
	5	〃	〃	2.2	(1.7)	(0.4)	(0.9)	左脚	〃	
	6	〃	〃	1.9	(1.6)	0.2	(0.6)	〃	〃	
	7	〃	〃	2.2	(1.6)	0.3	(0.8)	〃	〃	
	8	〃	〃	(1.6)	(1.4)	(0.3)	(0.5)	脚	〃	
	9	〃	〃	1.9	(1.4)	0.3	(0.7)	〃	〃	
	10	〃	〃	(1.5)	(1.7)	(0.3)	(1.6)	頭	〃	
	11	〃	〃	2.4	(1.4)	0.5	(1.3)	脚	〃	
	12	〃	〃	1.4	(1.0)	0.3	0.3	〃	〃	
	13	〃	〃	2.6	2.1	0.7	3.7	完	チャート	
	14	〃	〃	(1.7)	(1.4)	(0.2)	(0.6)	脚	黒曜石	
	15	〃	尖頭状石器	3.1	1.6	0.6	3.1	完	〃	
	16	〃	〃	3.1	(1.7)	0.4	1.8	欠	〃	
	17	〃	石匙	2.4	6.2	0.8	12.4	完	頁岩	
	18	〃	石錐	3.6	0.5	0.4	3.8	〃	チャート	
	19	〃	スクレパー	3.3	1.3	0.3	3.2	〃	黒曜石	
68	1	11号小竪穴	石鏃	3.2	2.0	0.4	3.1	〃	チャート	
	2	〃	石錐	(2.7)	(0.7)	(0.6)	(0.3)	錐部	黒曜石	
	3	16号小竪穴	石鏃	1.6	1.4	0.4	0.5	完	チャート	
	4	17号小竪穴	〃	(1.5)	(1.0)	(0.4)	(0.4)	右辺	黒曜石	
	5	22号小竪穴	〃	2.4	1.9	0.7	3.0	完	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
68	6	22号小竪穴	石匙	3.8	5.4	1.0	12.8	完	チャート	
	7	23号小竪穴	石鏃	2.3	1.4	0.3	1.0	〃	〃	
	8	〃	〃	(1.9)	(1.3)	(0.2)	(0.4)	左脚	黒曜石	
	9	34号小竪穴	石錐	2.7	0.5	0.4	1.5	完	ト 〃	
	10	〃	スクレパー	2.0	1.5	0.5	2.0	〃	〃	
	11	7号小竪穴	打製石斧	(7.2)	(5.2)	(1.4)	(66)	刃部	頁岩	
	12	14号小竪穴	凹石	12.6	6.4	4.1	512	完	熔結凝灰岩	
97	1	5号住居	石鏃	1.2	(1.1)	0.2	(0.3)	右脚	黒曜石	
	2	〃	装身具	1.4	0.8	0.4	0.8	完	滑石	
	3	7号住居	尖頭状石器	(1.9)	(2.4)	(0.6)	(2.2)	脚	黒曜石	
	4	8号住居	〃	4.8	3.2	1.1	15.4	完	〃	
	5	9号住居	石鏃	2.1	1.2	0.3	1.1	〃	〃	
	6	10号住居	スクレパー	2.5	2.3	0.9	5.6	〃	〃	
	7	〃	磨製石斧	(2.6)	(2.6)	(0.6)	(6.3)	頭	チャート	
	8	〃	石鏃	1.4	1.0	0.3	0.2	完	黒曜石	
	9	5号住居	打製石斧	10.8	4.7	1.3	70	〃	頁岩	
	10	〃	凹石	12.1	7.6	3.6	452	〃	砂岩	
	11	〃	打製石斧	(5.6)	(6.4)	(1.3)	(97)	頭	頁岩	
	12	6号住居	〃	(6.1)	(3.6)	(2.7)	(90)	刃	硬砂岩	
	13	8号住居	凹石	(10.1)	(6.2)	(3.5)	(350)	欠	砂岩	
	14	9号住居	打製石斧	(5.6)	(5.6)	(1.0)	(38)	〃	頁岩	
	15	10号住居	〃	12.8	6.0	2.4	167	完	硬砂岩	
	16	〃	〃	12.2	5.8	1.6	154	〃	安山岩	
	17	〃	石棒	(11.0)	(8.4)	(7.3)		欠		
		8号住居	磨製石斧							紡天
73	1	遺構外	石鏃	1.4	(1.4)	0.2	(0.3)	左脚	黒曜石	中央部
	2	〃	〃	(1.4)	(1.8)	0.3	(0.6)	頭	〃	〃
	3	〃	〃	2.1	(1.2)	0.3	(0.5)	右脚	〃	〃
	4	〃	〃	1.8	(1.1)	0.2	(0.4)	〃	〃	〃
	5	〃	〃	2.1	(1.2)	0.3	(0.7)	〃	〃	〃
	6	〃	〃	2.3	1.4	0.3	(0.4)	左脚	〃	〃
	7	〃	〃	(1.8)	(1.1)	(0.3)	(0.6)	右辺	〃	〃
	8	〃	〃	1.9	1.9	0.2	0.5	完	〃	〃
	9	〃	〃	(1.4)	1.2	0.2	(0.5)	頭	〃	〃
	10	〃	〃	(1.6)	1.8	0.5	(1.3)	〃	〃	〃
	11	〃	〃	(1.8)	1.8	0.3	(1.1)	〃	〃	〃
	12	〃	〃	1.6	1.1	0.3	0.5	完	〃	〃
	13	〃	〃	(2.0)	1.8	0.7	(2.5)	頭	〃	〃
	14	〃	〃	(2.2)	(1.6)	0.3	(0.9)	左脚	〃	〃
	15	〃	〃	1.4	2.1	0.5	1.7	完	〃	〃
	16	〃	〃	(1.7)	1.6	0.3	(0.6)	頭	〃	〃
	17	〃	〃	(1.8)	1.5	0.3	(0.8)	脚	〃	〃
	18	〃	〃	1.4	1.2	0.3	0.6	完	〃	
	19	〃	〃	2.4	(1.0)	0.4	(1.0)	右辺	〃	
	20	〃	〃	1.8	1.6	0.2	0.5	完	〃	
	21	〃	〃	1.8	(1.4)	0.5	(0.9)	左脚	〃	
	22	〃	尖頭状石器	2.9	2.3	0.6	3.5	完	〃	
	23	〃	石匙	4.2	(3.0)	0.6	(7.9)	左辺	チャート	
	24	〃	石錐	3.6	0.6	0.4	5.5	完	〃	
	25	〃	〃	2.3	0.6	0.4	0.9	欠	黒曜石	
	26	〃	スクレパー	5.1	2.6	0.5	9.5	完	チャート	
	27	〃	石鏃	1.9	1.6	0.4	0.8	〃	黒曜石	中央外地区
	28	〃	〃	(1.6)	1.5	0.4	(0.9)	頭	〃	〃
	29	〃	〃	1.2	0.8	0.2	0.3	完	〃	〃
	30	〃	〃	2.2	1.6	0.2	0.6	〃	〃	〃
	31	〃	尖頭状石器	2.3	1.9	0.8	3.7	〃	〃	〃

図版番号	No.	遺構名	種別	長さ	幅	厚	重量	欠損	石材	備考
73	32	遺構外	尖頭状石器	2.6	1.6	0.6	2.4	完	黒曜石	中央外地区
	33	〃	石鏃	(1.5)	(0.9)	(0.2)	(0.2)	脚	〃	〃
	34	〃	尖頭状石器	(2.5)	2.0	0.7	(3.9)	〃	〃	〃
	35	〃	〃	2.5	1.7	0.4	1.9	完	〃	〃
	36	〃	〃	3.1	1.9	0.3	2.4	〃	〃	〃
	37	〃	〃	1.5	2.1	0.3	1.6	欠	〃	〃
	38	〃	石匙	4.0	(4.0)	0.4	(8.7)	〃	チャート	〃
	39	〃	玦状耳飾	2.9	(1.5)	0.5	(5.1)	〃	滑石	〃
	40	集石	石鏃	(3.1)	1.2	0.2	(1.2)	頭	チャート	
	41	遺構外	打製石斧	12.1	6.2	1.7	172	完	頁岩	
	42	〃	〃	(8.0)	(5.1)	1.4	(56)	頭	〃	
	43	集石	凹石	16.5	8.1	3.6	648	完	安山岩	
	44	遺構外	石皿				1,920	欠	〃	
	45	〃	〃				1,230	〃	〃	
	46	〃	打製石斧				980	完	頁岩	

第7表　舅屋敷遺跡平安時代住居址出土鉄器一覧表

番号	出土遺構	鉄器名	遺存状態	現存計測数値(cm)(g)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
1	第5号住居址	鏃	茎の一部欠損	(8.3)	1.5 0.4	0.2 0.35	(10.82)	
2	〃	紡錘車	軸ほとんど欠損	(1.4)	3.9 0.3	0.1 0.3	(10.08)	
3	第6号住居址	刀子	身の半分程欠損	(10.9)	1.0	0.15	(8.53)	
4	〃			(8.5)	3.0	0.15	(27.02)	鏃の一部が、あるいは火打ち金具の一種か？
5	第7号住居址			(3.7)	0.3	微小	(1.70)	薄い金属板を折りたたみ細長くしたよう
6	〃		2分離	(6.8)	0.3	〃	(2.48)	〃
7	第8号住居址	火打ち金具	完存	9.7	3.5	0.15	38.11	3孔
8	〃	刀子	完存だが茎途中で折れる	19.2	1.4	0.35	27.81	
9	〃	紡錘車	軸端欠損、7分離	(20.7)	4.95 0.4	0.15 0.4	(47.42)	錆の中に炭化物がとりこまれている。
10	〃	釘	先端欠損か	(4.1)	0.3	0.3	(4.50)	
11	第10号住居址	刀子？	身、茎の両端欠損	(5.6)	1.05	0.2	(6.93)	刃部不明瞭
12	〃	紡錘車の軸	完存	14.6	0.35	0.55	15.19	

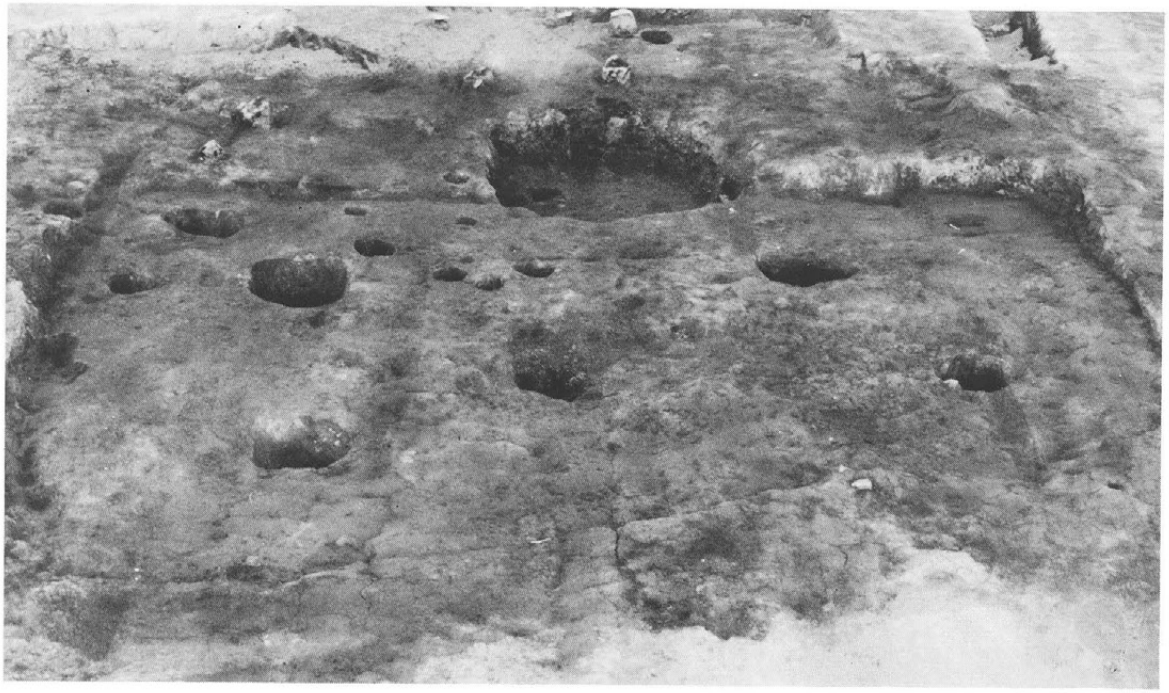
第6表　舅屋敷遺跡平安時代住居址出土土器一覧

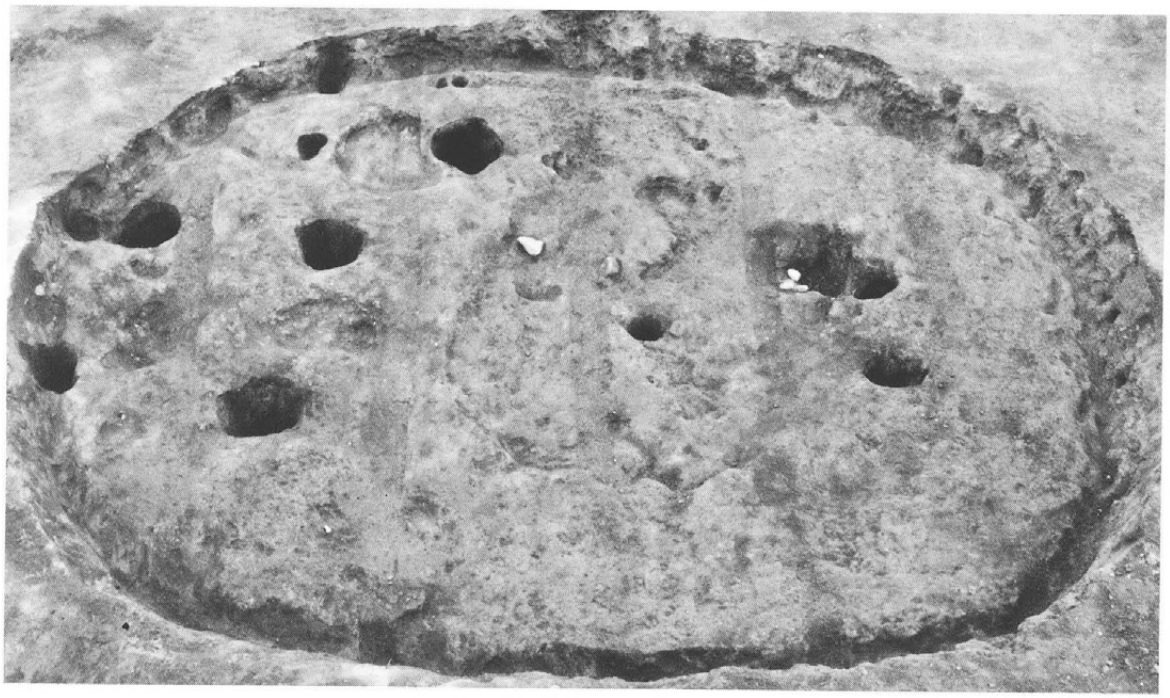
住居址図番号	番号	種別	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	口縁(底)部残存度合	色調 内面	色調 外面	成形・調整の特徴	備考
第5号住居址(第76・77図)	1	土師	坏	2.7	9.9	4.5	1/6	黄褐色	黄灰色	ロクロナデ・回転糸切り	
	2	〃	〃	2.6	10.6	5.0	3/4	橙褐色	橙褐色	〃・〃	
	3	〃	〃		14.9		1/2	黒色	橙褐色	〃・〃	内面黒色処理・高台欠損痕
	4	〃	〃		15.7		1/4	黄褐色	灰褐色	〃	
	5	〃	皿	2.1	9.6	4.1	1/6	灰褐色	灰黒色	〃・回転糸切り・内面ヘラミガキ	
	6	〃	〃	1.5	9.7	4.2	完	黄褐色	黄褐色	〃・〃	
	7	〃	〃		9.4		1/3	黄褐色	黄褐色	〃	
	8	〃	〃	1.8	9.9	4.1	完	橙色	赤褐色	〃・回転糸切り	
	9	〃	〃	2.0	9.5	3.9	1/2	黄白色	黄白色	〃・〃	
	10	灰釉	埦	5.3	15.5	6.6	1/3	黄灰白色	灰白色	〃・〃	外面ロクロ痕顕著
	11	〃	〃	6.4	14.5	6.6		乳白色	乳白色	〃・〃	口縁端部に黒色の附着物
	12	〃	〃	6.0	14.7	6.6	3/5	乳白色	乳白色	〃・〃	釉の及ばない部分に墨状附物
	13	〃	〃	6.0	14.4	6.3	1/3	乳白色	淡緑色	〃・〃	
	14	〃	〃	6.0	13.6	6.0	1/16	灰白色	淡緑色	〃	釉が泡立つように凹凸
	15	〃	〃	5.5	14.4	7.1	1/2	青灰白色	灰白色	〃	
	16	〃	〃	3.6	11.1	5.3	3/5	淡緑色	乳白色	〃・回転糸切り	
	17	〃	〃		14.1		1/4	灰白色	灰白色	〃	
	18	〃	〃		15.2			乳白色	乳白色	〃	ロクロ痕顕著
	19	〃	〃	6.0	15.6	7.6	1/3	黄灰色	灰白色	〃・体部下半回転ヘラケズリ	
	20	〃	〃		15.0		1/8	乳白色	乳白色	〃	ロクロ痕顕著
	21	〃	〃		14.6		1/4	乳白色	乳白色	〃	
	22	〃	段皿	2.1	12.0	5.9	3/5	淡緑色	淡緑色	〃	
	23	〃	〃	2.4	12.1	(7.1)	1/8	灰白色	灰白色	〃・回転糸切り	輪花皿か？
	24	〃	〃	2.2	10.9	5.7	3/5	灰白色	灰白色	〃・〃	
	25	〃	皿	2.1	10.2	5.1	1/2	灰白色	灰白色	〃・〃	輪花皿か？
第6号住居址(等79図)	1	土師	坏		12.2		1/8	橙白色	橙白色	〃	
	2	〃	〃		11.5		1/8	黒褐色	黄褐色	〃・内面ヘラミガキ	
	3	〃	〃		13.7		1/9	黄褐色	黒褐色	〃	
	4	〃	〃		13.8		1/6	橙白色	黄褐色	〃	
	5	〃	〃			6.5	1/4	黒色	黄褐色	〃・回転糸切り・内面ヘラミガキ	内面黒色処理・高台付
	6	灰釉	埦		13.2		1/8	灰白色	灰白色	〃	
	7	〃	〃			7.7	1/2	灰白色	灰白色	〃・底部回転ヘラケズリ	
	8	〃	〃			6.6		灰白色	灰白色	〃・〃	
	9	〃	〃(皿)			7.2	1/4	淡緑色	灰白色	〃 〃	
	10	〃	〃(皿)			8.7	1/4	淡緑色	灰黒色	〃 〃	
	11	〃	瓶			(7.7)		灰黒色	乳白色	ロクロ痕・胴下半回転ヘラケズリ	釉は茶から黒色、所によってコバルト色
	12	土師	甕		21.1		1/8	黄褐色	黄褐色	内外面ハケメ	
	13	〃	〃		19.1		1/6	茶褐色	黒褐色	外面ハケメ・内面ハケメのちナデ・口唇面取り	ハケメは強くケズリ様 18に類似
	14	〃	〃		15.7		1/6	黄褐色	赤黄褐色	〃・ナデ・内面軽いハケメ	
	15	〃	〃		19.3		1/4	赤褐色	黄褐色	ロクロ痕・外面ハケメ・口縁内面回転を用いたハケメ	
	16	〃	〃		19.3		1/4	黄褐色	黄褐色	外面ハケメ・ヘラナデ・〃・指頭痕	
	17	〃	〃		17.8		1/4	橙褐色	橙褐色	ロクロ痕・口縁内面回転を用いたハケメ	
	18	〃	〃		22.8	12.4	1/8(1/4)	赤褐色	黄褐色	外面ハケメ・口縁内面ハケメのちナデ・口唇面取り	13に類似
第7号住居址(第80図)	1	土師	坏		13.6		1/10	黒色	赤褐色	ロクロナデ・内面ヘラミガキ	内面黒色処理
	2	〃	甕(小形甕)			8.8	1/4	黄褐色	黄褐色	ロクロ痕・回転糸切り	
第8号住居址(第83・84図)	1	灰釉	埦	6.2	17.7	8.2	2/3	乳白色	白緑色	ロクロナデ・体部下半、底部回転ヘラケズリ	輪花坂
	2	〃	〃	4.2	13.5	6.0		灰白色	灰白色	〃・〃	
	3	〃	〃	4.7	16.3	7.4	1/2	黄灰色	黄灰色	〃・〃	
	4	〃	〃		13.1		1/3	灰白色	淡緑色	〃	
	5	〃	〃	4.7	15.6	7.2	略完	灰白色	灰白色	〃・体部下半、底部回転ヘラケズリ	
	6	〃	〃	5.0	14.9	7.5		灰白色	灰白色	〃・〃	
	7	〃	〃			7.2	1/2	乳白色	乳白色	〃	
	8	〃	皿	2.8	13.7	6.6	1/2	白緑色	白緑色	〃・体部下半、底部回転ヘラケズリ	
	9	〃	〃	2.8	13.2	5.8		黄灰色	黄灰色	〃・〃	外面黒色附着物

住居址図番号	番号	種別	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	口縁(底)部残存度合	色調 内面	色調 外面	成形・調整の特徴	備考
	10	灰釉	皿	2.8	12.8	6.8		灰白色	灰白色	ロクロナデ・体部下半、底部回転ヘラケズリ	
	11	〃	〃	3.1	12.8	5.6		黄灰色	黄灰色	〃・〃	
	12	〃	〃	2.9	13.3	6.6	⅓	灰白色	灰白色	〃・〃	
	13	〃	長頸瓶	23.7	10.5	9.8	胴一部欠	灰白色	暗緑色	ロクロ痕・胴部下半回転ヘラケズリ	熱をうけて器面荒れている
	14	〃	〃	18.8	9.2	7.7	略完	灰白色	淡緑色	〃・胴部下半、底部回転ヘラケズリ	
	15	須恵	四耳壺				口縁欠	青灰色	青灰色	口頸部ロクロ痕・外面タタキメ・凸帯張りつけ	
	16	〃	〃			13.8	口縁欠	灰黒色	茶灰色	〃・〃・〃	黒色光沢の自然釉
	17	〃	〃	38.2	23.8	14.1		灰黒色	灰黒色	〃・〃・〃	〃
第9号住居址(第86図)	1	土師	坏	4.1	12.7	5.9	½	灰褐色	暗赤褐色	ロクロナデ・回転糸切り	
	2	〃	〃		13.0		¼	灰褐色	黄褐色	〃・内面ヘラミガキ	
	3	〃	〃		13.0		⅙	灰褐色	黄褐色	〃・〃	
	4	〃	〃		13.1		⅛	黄褐色	赤褐色	〃	
	5	〃	〃		13.2		⅕	黄褐色	黄褐色	〃	
	6	須恵?	〃		13.0		1/10	灰黒色	灰白色	〃	
	7	〃?	〃	3.5	14.3	6.7	⅓	白橙色	白橙色	〃・回転糸切り	
	8	土師	〃			5.4	(¾)	黒色	暗赤褐色	〃・〃	高台付・内面黒色処理
	9	〃	〃			7.0	(完)	黒色	暗赤褐色	〃・〃	〃・〃
	10	〃	〃			5.3		黒色	黄褐色	〃・〃	〃・〃
	11	灰釉	埦	4.6	14.4	7.3	⅓	黄灰色	乳白色	〃・回転ヘラケズリ	胎土は橙色で軟質
	12	土師	小形甕		11.7		⅓	黒褐色	黒褐色	ヘラナデ・指頭痕	
	13	〃	〃		12.0		⅙	灰褐色	灰褐色	ロクロ痕・内外面回転を用いたハケメ	
	14	〃	甕		23.4		⅓	赤褐色	赤褐色	ロクロ痕・外面ハケメ・内面回転を用いたハケメ	
	15	〃	〃		21.6		⅛	黄褐色	赤褐色	〃・内面回転を用いたハケメ・口唇面取り	
	16	〃	(鉢)	5.1	13.6	10.4	¼	赤褐色	赤褐色	ハケメ・けずった様な面取り	長胴甕底部の転用品か?
第10号住居址(第91・92・93・94図)	1	土師	坏	4.4	12.5	5.3	完	黒色	黄褐色	ロクロナデ・回転糸切り・内面ヘラミガキ	外面黒色のに附着物・内面黒色処理
	2	〃	〃	3.7	12.5	5.6	⅓	黒色	黄褐色	〃・〃・〃	〃 〃
	3	〃	〃	3.0	10.0	4.6	½	暗赤褐色	黒褐色	〃・〃	
	4	〃	〃	4.7	12.4	5.5	⅓	黒色	黄褐色	〃・〃・暗文	内面黒色処理
	5	〃	〃	4.7	13.6	4.2	⅔	黒色	黄褐色	〃・〃・内面ヘラミガキ	墨書刻字・内面黒色処理
	6	須恵?	〃	3.9	13.3	6.3	⅔	灰黒色	灰黒色	〃・〃	
	7	土師	〃	5.7	14.7	6.1	⅛	黒色	茶褐色	〃・底部ヘラ整形・放射状暗文	内面黒色処理
	8	〃	〃		13.0		⅛	黒色	黄褐色	〃・内面ヘラミガキ	〃
	9	〃	〃	5.6	15.8	7.6	⅙	黒色	灰褐色	〃・回転糸切り	
	10	〃	〃		16.2		⅙	黒色	茶褐色	外面ヘラミガキ・内面細かいハケ状の整形	非常に薄手・高台欠損痕あり・内面黒色処理
	11	〃	〃			6.5	(完)	暗黄褐色	赤褐色	ロクロナデ・回転糸切り・内面ヘラミガキ	
	12	〃	〃			8.2	(⅓)	黒色	黄褐色	〃・〃・〃	内面黒色処理
	13	〃	皿	1.8	11.6	5.5	完	黒色	黒色	〃・〃	内外面黒色処理
	14	〃	小形甕		14.2		⅛	黄褐色	黄褐色	ロクロ痕	
	15	〃	〃		12.6		⅕	灰褐色	灰褐色	〃	
	16	〃	〃		10.5		⅙	灰褐色	赤褐色	〃	
	17	〃	〃		12.6		⅐	暗黄褐色	暗黄褐色	〃	
	18	〃	甕			8.2	(完)	灰黒色	灰黒色	〃・回転糸切り	
	19	〃	〃		21.4		⅙	赤褐色	赤褐色	〃・ハケメ・内面回転を用いたハケメ	
	20	〃	〃		20.6		⅙	赤褐色	赤褐色	〃・内面回転を用いたハケメ	
	21	〃	〃		22.1		1/10	暗黄褐色	黒褐色	ナデ	
	22	〃	〃		22.7		⅛	灰褐色	暗黄褐色	ロクロ痕	
	23	〃	〃		20.0		⅛	黄褐色	赤褐色	ナデ	
	24	〃	〃			8.2	(⅕)	灰褐色	灰黒色	ロクロ痕・下半ヘラケズリ	
	25	〃	〃			10.4	(¼)	暗黄褐色	暗黄褐色	ヘラナデ・ヘラケズリ	
	26	〃	羽釜		23.6			赤褐色	暗赤褐色	ハケメ?のちロクロ調整	
	27	〃	甑			16.8	(⅛)	灰褐色	黄褐色	外面ハケメ・内面縦方向に凹凸残る	
	28	灰釉	埦	5.1	15.4	7.4	⅓	乳白色	乳白色	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
	29	〃	〃	4.1	14.3	6.5	完	黄白色	黄白色	〃・体部下半、底部回転ヘラケズリ	
	30	〃	〃	4.6	12.2	5.7	略完	黄灰色	黄灰色	〃・〃	
	31	〃	〃		16.4		½	淡緑色	淡緑色	〃	
	32	〃	〃		13.1			灰白色	灰白色	〃・体部下半回転ヘラケズリ	

住居址図番号	番号	種別	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	口縁(底)部残存度合	色調 内面	色調 外面	成形・調整の特徴	備考
	33	灰釉	塊	4.9	13.1	6.3	略完	黄白色	黄白色	ロクナナデ・体部下半、底部回転ヘラケズリのちナデ	
	34	〃	〃	4.9	15.8	7.5	1/6	乳白色	乳白色	〃 ・ナデ	
	35	〃	〃	5.2	16.4	7.2	1/3	淡緑色	淡緑色	〃 ・体部下半回転ヘラケズリ	
	36	〃	〃			6.5	(完)	淡緑色	灰白色	〃 ・ 〃	
	37	〃	〃			6.4	(1/3	黄白色	淡緑色	〃 ・ 〃	
	38	〃	皿	3.0	14.0	6.4		灰白色	灰白色	〃 ・ 〃	
	39	〃	段皿	3.3	17.4	8.6		淡緑色	灰白色	〃 ・ 〃	
	40	〃	長頸瓶			7.4	(完)	灰白色	淡緑色	ロクロ痕・回転ヘラケズリ	
	41	須恵	四耳壺		21.5		底欠	暗茶灰色	暗茶灰色	外面タタキメ・口頸部ロクロ痕	輪積み痕が残る
	42	〃	〃			12.7	口縁欠	青灰色	青灰色	〃 ・ 〃 ・ヘラケズリ	耳部に上方から穿孔
	43	〃	甕			18.1	口縁欠	灰黒色	灰黒色	〃 ・ 〃	
	44	〃	〃		28.3		胴下半欠	灰黒色	灰黒色	〃 ・ ・カキ目	黄白色の自然釉の斑点
	45	〃	〃			17.3	口縁欠	灰白色	灰黒色	〃 ・ 〃	全面に濃い光沢をもつち緑の自然釉
第12号住居址(第95図)	1	土師	坏		12.8		1/8	黒色	暗赤褐色	ロクロナデ・内面ヘラミガキ	内面黒色処理
	2	〃	〃			6.4	(1/3)	黒色	黄褐色	〃 ・ 〃 ・回転糸切り	〃
	3	須恵	〃	3.4	12.3	6.1	1/2	青灰色	灰白色	〃 ・回転糸切り	
	4	土師	(小形甕)			8.0	(完)	赤褐色	灰褐色	ロクロ痕・ 〃	
	5	〃	甕		25		1/16	橙褐色	橙褐色	ハケメ・指頭痕・口唇面取り	

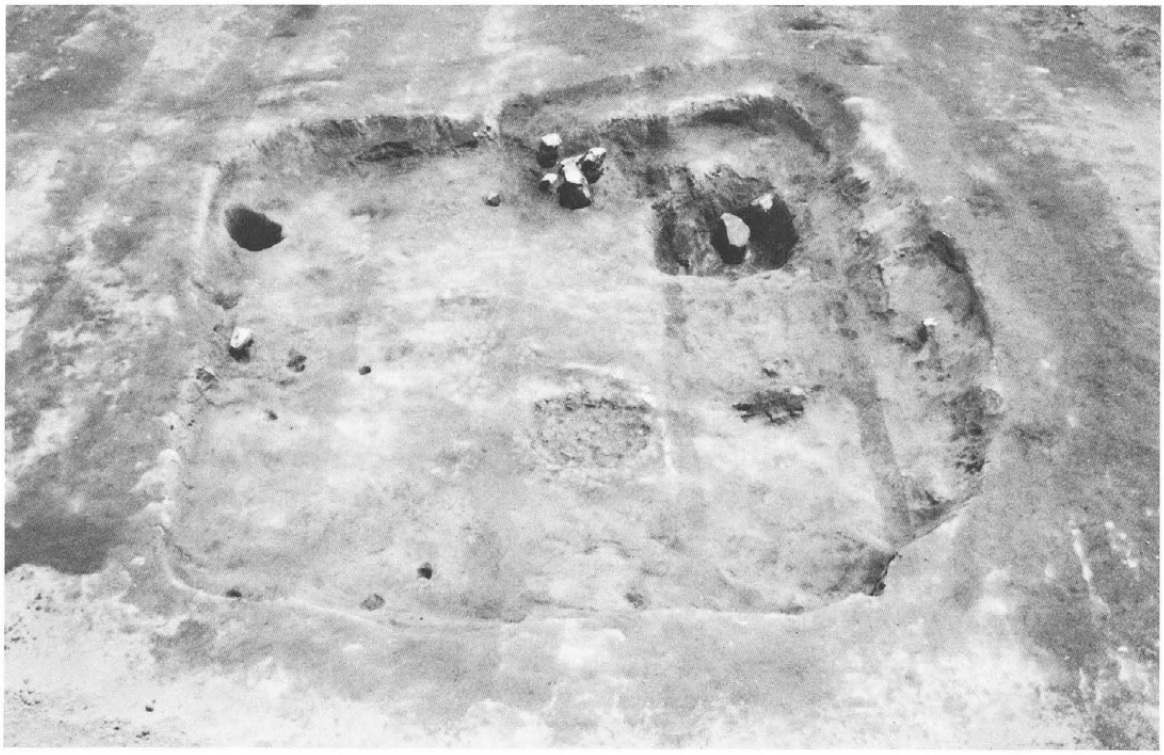
図　　版





上：第２号住居址　下：第11号住居址

上：第4号住居址　下：第5号住居址



上：第8号住居址　下：第8号住居址炭化材検出状態

第四図版

上：第９号住居址　下：第８号住居址(手前)と第９号住居址

上：第10号住居址　下：第10号住居址 焼土・炭化材検出状態

第六図版

1

4

2

5

3

縄文時代遺構出土土器（1：第2号住居址、2・3：第11号住居址、4：第13号住居址、5：第3号小竪穴）

上：平安時代遺構出土土器、中：第２号住居址 黒曜石集積、下：第10号住居址出土木器(曲物？)底

舅　屋　敷

——長野県塩尻市舅屋敷遺跡発掘調査報告書——

昭和57年３月20日　印刷
昭和57年３月23日　発行
編集　舅屋敷遺跡発掘調査団
発行　塩尻市教育委員会
印刷　鬼灯書籍株式会社